

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第205集

大岡元長窪線関連遺跡Ⅲ

平成18～20年度（主）大岡元長窪線新東名アクセス道路
整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

野台南遺跡

柏窪 A 遺跡

2009

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第205集

大岡元長窪線関連遺跡Ⅲ

平成18～20年度（主）大岡元長窪線新東名アクセス道路
整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

野台南遺跡

柏窪 A 遺跡

2009

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

大岡元長宿線に関連する遺跡群は、昭和40年代に「上長宿遺跡群」として調査が行われた地域にあります。その当時は豊かな畑作地帯で、今日のような大規模な開発が行われ、大きく地域が変貌をとげることを誰が想像したのでしょうか。

旧石器時代から弥生時代にかけての遺跡が集中する愛鷹山南麓は、近年の開発によって発掘調査が進められ、旧石器時代、縄文時代を中心に多くの成果があげられています。これまでに、新東名高速道路長泉インターチェンジへのアクセス道路整備工事に伴う発掘調査としては、静岡県沼津土木事務所の委託を受けて平成11年から13年度に1次調査が、平成16年度に2次調査が行われています。今回の調査はこれに続く3次調査となります。

調査対象地周辺は、戦前から多くの遺跡の存在が確認されており、これまでも部分的に調査が行われてきました。その成果から、尾根上のほぼ全域にわたって旧石器時代から縄文時代の遺跡が分布するであろうことが推定されています。

野台南遺跡は新たに旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡であることが確認されました。旧石器時代において確認された5枚の文化層は、それぞれの規模は大きくはないものの、累々と続く旧石器時代人の活動を示すものです。使用する石材の移り変わりや狩猟具が変化していく様子が現れています。縄文時代については、中期後半に位置づけられる2軒の住居跡が目立ちます。近接して見つかった類似した構造をもつ住居は、同時期に営まれた可能性が高く、当該期の集団の単位を示しているとも思われます。

最後になりましたが、大岡元長宿線関連遺跡の現地調査ならびに本書の作成にあたって、静岡県沼津土木事務所をはじめ、多くの関係機関の援助、協力を得たことについて、厚く御礼申し上げます。また、この場をお借りして、現地調査、資料整理にあたった調査員、そして多くの作業員の皆様方の労をねぎらいたいと思います。

平成21年6月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 天野 忍

例 言

- 1 本書は静岡県駿東郡長泉町元長窪、上長窪に所在する野台南遺跡、柏窪A遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 現地調査は「平成18・19年度（主）大岡元長窪線新東名アクセス道路整備事業に伴う埋藏文化財発掘調査業務委託」として、静岡県沼津土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋藏文化財調査研究所が行った。野台南遺跡の調査は平成19年1月より3月までと平成19年6月より12月まで実施した。柏窪A遺跡の調査は平成19年2月に実施した。
- 3 資料整理は平成20年8月より平成21年6月まで財団法人静岡県埋藏文化財調査研究所が行った。
- 4 調査の体制は次のとおりである。

平成18年度（現地調査）

所長 齋藤 忠 常務理事兼総務部長 平松公夫
総務部次長兼総務課長 鈴木大二郎 調査研究部長 石川素久
調査研究部次長 稲葉保幸・佐野五十三 調査部次長兼調査課長 及川 司
事務担当 主事 望月高史 調査担当 東部地区係長 中鉢賢治 調査研究員 木崎道昭

平成19年度（現地調査）

所長 齋藤 忠 常務理事兼事務局長 清水 哲 事務局次長兼総務課長 大橋正夫
事務局次長 稲葉保幸・佐野五十三 事務局次長兼調査課長 及川 司
事務担当 主事 望月高史 調査担当 東部地区係長 中鉢賢治 調査研究員 日吉高幸

平成20年度（資料整理）

常務理事兼所長 清水 哲 次長兼総務課長 大橋正夫 次長兼調査課長 及川 司
次長兼事業係長 稲葉保幸 事務担当 主事 青井拓司
調査担当 東部総括係長 中鉢賢治 東部調査係長 笹原千賀子 常勤嘱託員 三好元樹

平成21年度（資料整理）

常務理事兼所長 天野 忍 次長兼総務課長 松村 亨 次長兼調査課長 及川 司
次長兼事業係長 稲葉保幸 事務担当 主事 青井拓司
調査担当 次長兼東部総括係長 中鉢賢治 東部調査係長 笹原千賀子
常勤嘱託員 三好元樹

- 5 平成18年度の現地調査は、作業員による人力掘削を岡山田組に委託し、基準杭設置及び測量・実測を幹シン技術コンサルに委託した。
- 6 空中写真撮影は幹デジックに委託した。
- 7 黒曜石の蛍光X線分析は望月明彦氏（独立行政法人沼津工業高等専門学校教授）に委託した。その分析結果は附表に収録した。
- 8 炭化物と炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定は幹加速器分析研究所に委託した。樹種同定については協力会社・バリノ・サーヴェイ協にて実施した。分析結果は第V章に収録した。
- 9 石製石材の同定は、当研究所技術員森島富士夫が行った。
- 10 本書の編集は三好が行った。執筆分担は以下の通りである。なお、第I章、第III章第1節1、第IV章第1節1については佐野、笹原の文章をもとに三好がまとめた。

三好：第III章第1節4・5・第2～4節、第IV章第1節4・5・第2節、第VI章

佐野：第II章、第IV章第1節2・3

- 11 現地調査と資料整理では以下の方々にご指導、ご助言を賜った。厚くお礼申し上げます。
金子直行、小崎晋、芝森次郎、毒島正章
- 12 発掘調査資料は、静岡県教育委員会が保管している。

凡例

- 野台南遺跡における現地での測量は、平面直角座標Ⅷ系を用いた世界測地系の座標を使用した。調査区内には、一辺10mのグリッド(方眼)を設定した。調査区の方眼設定は、(X, Y) = (-94180.0, 33480.0)上を原点(A, 1)とし、X軸(南北)方向にA、B、Cとアルファベット、Y軸(東西)方向に1、2、3とアラビア数字を付した。また、南西角の交点をもってそのグリッドの名称とした。方位は、平面直角座標Ⅷによる方位(座標北)を基準として表示している。
- 出土遺物には4桁の遺物番号を付けた。接合番号は、石器はs、礫はrの後に2桁の番号を付けた。
- 石器実測は第三角投影図法に拠った。石器計測にあたっては、製品は基軸、剥片類は剥離軸方向を長さとした。幅と厚さはそれぞれ長さに対して直行する最大値とした。
- 本文や観察表に用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修2003年版)を使用した。
- 土層名は第5図に示した記号を使用する。
- 分布图中的「○-×」は第○図の×であることを示す。「s△」は石器接合番号△を示す。
- 土層断面は、基本的に手実測による図を利用したが、一部に標高データから復元したものを利用した箇所がある。
- 本文中の記載に関する記号・略号は以下のとおりである。

TP：試掘坑 RF：加工痕ある剥片 UF：使用痕ある剥片

遺構

JA1000007500000	土層断面位置		礫 赤化部位50%以上		礫 赤化部位50%以下
K	激振剥離痕の範囲		敲打痕		敲打痕の範囲
	発掘時の欠損		層面		腐りの範囲

図解石層地一覽

略号	産地	略号	産地	略号	産地
WDTY	和和徳山群	SWHD	諏訪層ヶ台群	HNHJ	天城層群
WDTN	和和上濃群	TSTY	夢浪山群	AGST	天城山群
WDHY	和和東部山群	HNHJ	新徳山群	FZOB	狩野山群

「産地」とは別図法によって決定された産地を示す

石材一覧

和名	英名	標準資料略号	和名	英名	標準資料略号
玄武岩	basalt	Ba	備後層状岩	fine-grained tuff	FT
多孔質玄武岩	vesicular basalt	Vba	柱状凝灰岩	silicified tuff	STv
ガラス質黒色安山岩	glassy black andesite	GAs	硬質細粒凝灰岩	hard fine-grained tuff	HFT
顕粒安山岩	fine-grained andesite	FAn	火山凝灰岩	lapilli tuff	LT
輝石安山岩	pyroxene andesite	An(Py)	緑色凝灰岩	green tuff	GT
多孔質安山岩	vesicular andesite	VAn	頁岩	shale	Sh
ゴキタイト	gacite	Ga	珸質頁岩	siliceous shale	SSh
黒曜石	obsidian	Ob	珸質砂岩	siliceous siltstone	SSi
スゴリア	secoria	Se	細粒砂岩	fine-grained sandstone	FSS
花崗岩	granite	Gc	粗粒砂岩	coarse-grained sandstone	CSS
細粒灰岩	fine-grained gabbro	FG	硬質砂岩	hard sandstone	hSS
珸質岩	siliceous rock	SR	粗粒岩	granite conglomerate	GC
メノウ(瑠璃)	agate	Ag	チャート	chert	Ch
赤玉石(碧玉)	red jasper	RJa	チャート(赤色)	red chert	Ch(Rc)
ホルンフェルス	hornfels	Hof			

目次

序・例言・凡例

第I章 大岡元長窪線関連遺跡の調査

1. この事業に関わるこれまでの調査と報告…………… 1
2. 野台南遺跡・柏窪A遺跡の調査…………… 1
3. その後の確認調査と今後の予定…………… 1

第II章 遺跡の位置と環境

- 第1節 地理的環境…………… 3
- 第2節 歴史的環境…………… 3

第III章 野台南遺跡

第1節 調査の概要

1. 調査に至る経過…………… 6
2. 調査の経過…………… 6
3. 調査の方法…………… 7
4. 基本土層…………… 8
5. 整理作業…………… 8

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

1. 概要…………… 12
2. 第I文化層…………… 13
3. 第II文化層…………… 27
4. 第III文化層…………… 35
5. 第IV文化層…………… 49
6. 第V文化層…………… 59

第3節 縄文時代の遺構と遺物

1. 概要…………… 72
2. 遺構と遺構内出土の遺物…………… 72
3. 遺構外出土の土器…………… 95
4. 遺構外出土の石器…………… 119

第4節 古代以降の遺物…………… 135

第IV章 柏窪A遺跡

第1節 調査の概要

1. 調査に至る経過…………… 136
2. 調査の経過…………… 136
3. 調査の方法…………… 137
4. 基本土層…………… 137

5. 整理作業	137
第2節 縄文時代の遺構	138
第V章 自然科学分析	
第1節 野台南遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)	143
第2節 野台南遺跡出土炭化材の種類	149
第VI章 まとめ	
1. 野台南遺跡	154
2. 柏窪A遺跡	156
附表	
1. 石器観察表	157
2. 礫観察表	172
3. 黒曜石産地推定結果表	177
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 この事業に関わる調査範囲	2	第18図 第II文化層 遺物分布	28
第2図 野台南・柏窪A遺跡と周辺の遺跡	5	第19図 第II文化層 礫群1	29
第3図 グリッドと調査範囲	9	第20図 第II文化層 礫群2	30
第4図 土層の推定状況	10	第21図 第II文化層 石器器種別分布	31
第5図 TP11南壁の土層模式図	11	第22図 第II文化層 石器石材別分布	32
第6図 第I文化層 遺物分布	15	第23図 第II文化層 石器(1)	33
第7図 第I文化層 遺物出土状況	16	第24図 第II文化層 石器(2)	34
第8図 第I文化層 石器器種別分布	17	第25図 第III文化層 遺物分布	36
第9図 第I文化層 石材別分布(1)	18	第26図 第III文化層 礫群3	37
第10図 第I文化層 石材別分布(2)	19	第27図 第III文化層 礫群4	37
第11図 第I文化層 石器(1)	20	第28図 第III文化層 石器器種別分布(1)	38
第12図 第I文化層 石器(2)	21	第29図 第III文化層 石器石材別分布(1)	39
第13図 第I文化層 石器(3)	22	第30図 第III文化層 石器器種別分布(2)	40
第14図 第I文化層 石器(4)	23	第31図 第III文化層 石器石材別分布(2)	40
第15図 第I文化層 石器(5)	24		
第16図 第I文化層 石器(6)	25		
第17図 第I文化層 石器(7)	26		

第32図	第Ⅲ文化層	ブロック9	43	第59図	縄文時代	土坑4～9	87
第33図	第Ⅲ文化層	ブロック13	43	第70図	縄文時代	土坑10・11・ ピット1～3	88
第34図	第Ⅲ文化層	石器(1)	44	第71図	土坑出土の遺物		89
第35図	第Ⅲ文化層	石器(2)	45	第72図	縄文時代	集石1～3	92
第36図	第Ⅲ文化層	石器(3)	46	第73図	縄文時代	集石4～6	93
第37図	第Ⅲ文化層	石器(4)	47	第74図	縄文時代	集石7～9	94
第38図	第Ⅲ文化層	石器(5)	48	第75図	土器分類別分布(1)		96
第39図	第Ⅳ文化層	遺物分布	50	第76図	土器分類別分布(2)		97
第40図	第Ⅳ文化層	礫石材別分布	51	第77図	遺構外出土の石器(1)		98
第41図	第Ⅳ文化層	礫群5	52	第78図	遺構外出土の石器(2)		100
第42図	第Ⅳ文化層	礫群6	53	第79図	遺構外出土の石器(3)		102
第43図	第Ⅳ文化層	石器器種別分布	54	第80図	遺構外出土の石器(4)		103
第44図	第Ⅳ文化層	石器石材別分布	55	第81図	遺構外出土の石器(5)		104
第45図	第Ⅳ文化層	石器(1)	56	第82図	遺構外出土の石器(6)		106
第46図	第Ⅳ文化層	石器(2)	57	第83図	遺構外出土の石器(7)		107
第47図	第Ⅳ文化層	石器(3)	58	第84図	遺構外出土の石器(8)		109
第48図	第Ⅴ文化層	遺構・遺物分布	60	第85図	遺構外出土の石器(9)		111
第49図	第Ⅴ文化層	土坑1～3	61	第86図	遺構外出土の石器(10)		112
第50図	第Ⅴ文化層	礫石材別分布	62	第87図	遺構外出土の石器(11)		113
第51図	第Ⅴ文化層	礫群7・8	63	第88図	縄文時代	石器器種別分布	120
第52図	第Ⅴ文化層	礫群9・10	64	第89図	縄文時代	石器石材別分布	121
第53図	第Ⅴ文化層	礫群11・12	65	第90図	遺構外出土の石器(1)		124
第54図	第Ⅴ文化層	石器器種別分布	68	第91図	遺構外出土の石器(2)		126
第55図	第Ⅴ文化層	石器石材別分布	69	第92図	遺構外出土の石器(3)		127
第56図	第Ⅴ文化層	石器(1)	70	第93図	遺構外出土の石器(4)		128
第57図	第Ⅴ文化層	石器(2)	71	第94図	遺構外出土の石器(5)		130
第58図	縄文時代	遺構分布	73	第95図	遺構外出土の石器(6)		131
第59図	住居跡1	土器分布	74	第96図	遺構外出土の石器(7)		132
第60図	住居跡1	石器器種別分布	75	第97図	遺構外出土の石器(8)		133
第61図	住居跡1	石罌・埋甕	77	第98図	遺構外出土の石器(9)		134
第62図	住居跡1	出土の土器(1)	78	第99図	古代の須恵器		135
第63図	住居跡1	出土の土器(2)	79	第100図	調査範囲と遺構分布		139
第64図	住居跡1	出土の石器	80	第101図	土坑1～6		140
第65図	住居跡2	土器分布	82	第102図	土坑10～13		141
第66図	住居跡2	石器器種別分布	83	第103図	土坑7～9・14		142
第67図	住居跡2	石罌・埋甕	84				
第68図	住居跡2	出土の遺物	85				

挿 表 目 次

第1表	第I文化層	器種組成表	13	第11表	住居跡1	石囲炉・埋壺土坑計測表	
第2表	第I文化層	石材組成表	13				77
第3表	第II文化層	器種組成表	31	第12表	住居跡2	石囲炉・埋壺土坑計測表	
第4表	第II文化層	石材組成表	31				84
第5表	第III文化層	器種組成表	35	第13表	土坑・ピット計測表		85
第6表	第III文化層	石材組成表	35	第14表	遺構外出土器類観察表		90
第7表	第IV文化層	器種組成表	49	第15表	遺構外出土器類観察表		114
第8表	第IV文化層	石材組成表	49	第16表	縄文時代 器種組成表		122
第9表	第V文化層	土坑計測表	61	第17表	須臾器類観察表		135
第10表	第V文化層	器種組成表	66	第18表	土坑計測表		142

写 真 図 版 目 次

図版1	調査区遠景		土坑10
	TP11南壁の土層		土坑11
図版2	住居跡1・2 出土遺物		ピット1
図版3	第IV文化層 接合した線	図版8	ピット3
	第IV文化層 貫鉄鉋の遺物		集石1
図版4	住居跡1・2		集石2
	住居跡1		集石3
図版5	住居跡2		集石4
	住居跡1 柱穴		集石5
	住居跡2 柱穴	図版9	集石6
	住居跡1 埋壺出土状況		集石7
	住居跡2 埋壺出土状況		集石8
図版6	住居跡1 石囲炉		集石9
	住居跡2 石囲炉		石甌出土状況
	住居跡1 石囲炉の土層		第V文化層 礫群8
	住居跡2 石囲炉の土層	図版10	第V文化層 礫群9
	住居跡1 柱穴と土器		第V文化層 礫群10
	住居跡2 柱穴と土器・礫		第V文化層 礫群11
図版7	住居跡1 土器出土状況		第V文化層 礫群12
	土坑4		第IV文化層 礫群5・6
	土坑6・7		第IV文化層 礫群5(1)
	土坑8	図版11	第IV文化層 礫群5(2)
	土坑9		第IV文化層 礫群5(3)

	第Ⅲ文化層	礫群 3・ ブロック 9・10・11	図版23	8類土器 9類土器 10・11類土器
	第Ⅲ文化層	礫群 3・ブロック 11		
	第Ⅲ文化層	ブロック 9・10	図版24	12類土器(1) 12類土器(2) 12類土器(3)
図版12	第Ⅱ文化層	礫群 1・2・ブロック 8		
	第Ⅱ文化層	礫群 1		
	第Ⅱ文化層	礫群 2	図版25	12類土器(4) 14類土器
	第Ⅱ文化層	ブロック 8		
	第Ⅰ文化層	全景	図版26	13類土器(1)
図版13	第Ⅰ文化層	ブロック 1・3	図版27	15類土器 13類土器(2) 16類土器 16・17類土器
	第Ⅰ文化層	ブロック 2		
	第Ⅰ文化層	ブロック 3		
	第Ⅰ文化層	ブロック 4		
	第Ⅰ文化層	ブロック 5	図版28	18類土器 19類土器
	第Ⅰ文化層	ブロック 4と配石		
図版14	第Ⅰ文化層	剥片石器	図版29	20類土器 縄文時代 石器(1)
	第Ⅰ文化層	輝石安山岩の接合資料		
図版15	第Ⅰ文化層	敲石	図版30	縄文時代 石器(2)
	第Ⅱ文化層	石器	図版31	縄文時代 石器(3)
図版16	第Ⅲ文化層	石器	図版32	縄文時代 礫器 縄文時代 石皿(1) 縄文時代 石皿(2)
図版17	第Ⅳ文化層	石器		
	第Ⅳ・Ⅴ文化層	敲石	図版33	調査区全景 土坑 1～6
図版18	第Ⅴ文化層	石器		
図版19	住居跡 1	埋壺	図版34	土坑 2 土坑 5 土坑 6 土坑 7～9 土坑 7 土坑 8
	住居跡 2	埋壺		
	住居跡 1・2	土器		
図版20	住居跡 1	土器(1)		
	住居跡 1	土器(2)	図版35	土坑 9 土坑 14 土坑 10～13 土坑 11～13
		1・2・3・4類土器		
図版21		5類土器(1)		
		5類土器(2)		
		5類土器(3)		
		6類土器		
図版22		7類土器		

第1章 大岡元長窪線関連遺跡の調査

1. この事業に関わるこれまでの調査と報告

静岡県東部に位置する沼津市から駿東郡長泉町の東名高速道路沼津インターチェンジとその周辺は、中日本高速道路株式会社の新東名高速道路建設、国土交通省による東駿河湾環状道路建設、さらには静岡県による新東名アクセス道路建設により大きく変貌を遂げている。遺跡の調査原因となった主要地方道大岡元長窪線は、長泉町内を經由して沼津市街地と新東名高速道路を結ぶ道路である。新東名高速道路のアクセス道路として、加えて慢性的な浸灌を緩和するために静岡県が計画したものである。

計画路線内は、古くから旧石器時代から縄文時代の遺跡が多く残る地域として知られており、未調査・未踏査の地区も多い。そこで、平成10年度に静岡県教育委員会文化課（以下、文化課）、静岡県沼津土木事務所、長泉町、沼津市で協議を行い、長泉町部分の埋蔵文化財調査を財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下、研究所）が、沼津市部分を沼津市教育委員会が行うこととなった。これを受けて同年に長泉町側の踏査が行われ、確認調査の必要な区域として約50,000㎡が提示された。

平成12・13年には確認調査が行われ、その結果を踏まえて同年、中峯遺跡、椋畑上遺跡、柏窪B遺跡の本調査が行われた。調査では、縄文時代中期から旧石器時代までの良好な資料が検出されており、この結果は「大岡元長窪線関連遺跡Ⅰ」にまとめられている。その後、用地買収の進捗に合わせて、平成16年に中峯遺跡、椋畑上遺跡の追加本調査と柏窪B遺跡の確認調査が行われ、既に「大岡元長窪線関連遺跡Ⅱ」で報告されている。

2. 野台南遺跡・柏窪A遺跡の調査

平成16年以降も、大岡元長窪線新東名アクセス道路整備事業に関わる用地買収は継続して行われ、これに伴う確認調査が文化課によって実施された。平成17年度には中峯遺跡の東名高速道路以北部分の確認調査が行われた。中峯遺跡では既に遺物包含層が削平され、遺跡は失われていたため、文化課による慎重工事の指示の上、工事に着手した。

平成18・19年に行われた野台南遺跡・柏窪A遺跡の調査について本書で報告する。調査の経過についてはそれぞれ、第Ⅲ章と第Ⅳ章の第1節で詳述する。

3. その後の確認調査と今後の予定

柏窪B遺跡では、平成19・20年に工事工程に合わせて文化課による確認調査が行われた。この調査においても土抗が検出されたため、周囲に拡張して調査を行ったが、遺物やその他の遺構は認められなかった。未だ確認調査に至っていない範囲もあり、今後事業の進捗状況にあわせて調査を進めていく予定である。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

野台南遺跡は、静岡県駿東郡長泉町元長窪に、柏窪A遺跡は同町上長窪に所在する。野台南遺跡は、畑地帯総合改良事業に伴い、昭和61年に長泉町教育委員会により発掘調査が行われた野台南遺跡から南東約300mに位置する。標高は137～140mである。ここは、東名高速道路沼津インターチェンジの北東約700mの地点にあたる。柏窪A遺跡は野台南遺跡と同じ台地上の標高約90mに位置する。東名高速道路沼津インターチェンジの南東約1,200mの地点にあたる。

愛鷹山は標高1,187mで、小富士や新期富士といった火山より古い噴火によって形成された火山である。その西麓は富士市で富士山南東麓に接する。東は裾野市にあたり、貫瀬川が流れている。南は富士市と沼津市の平野部で、現在は水田が広がる穀倉地帯であるが、かつては浮島沼が存在した。愛鷹山麓が最も平野部に張り出すのが沼津市岡一色周辺で、愛鷹ロームが最も厚く堆積している。愛鷹山麓と平野部が接するのは標高20～30m付近である。

旧石器時代から縄文時代の遺跡が濃密に分布するのは、国指定史跡・休場遺跡の東に位置する高山（標高391m）を扇頂とし、南に向かって形成された扇状の緩やかな台地である。この扇頂は、西は浮島沼に注ぐ高橋川、東は貫瀬川の支流である新沢川に挟まれた範囲で、沼津市から長泉町にかけて約8kmの広がりをもっている。中小河川が形成した谷が発達し、広い平坦面をもつ台地上では、茶・果樹・野菜の生産や牧畜が行われている。

野台南遺跡は、長泉町長窪地区を流れる桃沢川の西側台地上に立地している。ここから沼津市島谷地区の間は、愛鷹山の山体崩落の際に形成された扇状の地形に富士山の火山灰が厚く堆積し、緩やかな斜面となっている。野台南遺跡は、山体崩落地形の東端にあたり、南東方向に張り出す瘦せた台地上の先端に立地している。この台地西側の小さい谷は通常は水のない枯れた沢であり、谷底は浅く、幅も狭い。

第2節 歴史的環境

愛鷹山麓の人々の活動痕跡は3万年以上前にさかのぼる。旧石器時代の人々は、愛鷹山や富士山の火山活動休止期に、活発に展開しており、この地域では大きく5つの時期に分けられている。また、縄文時代の遺跡も多く発見されている。

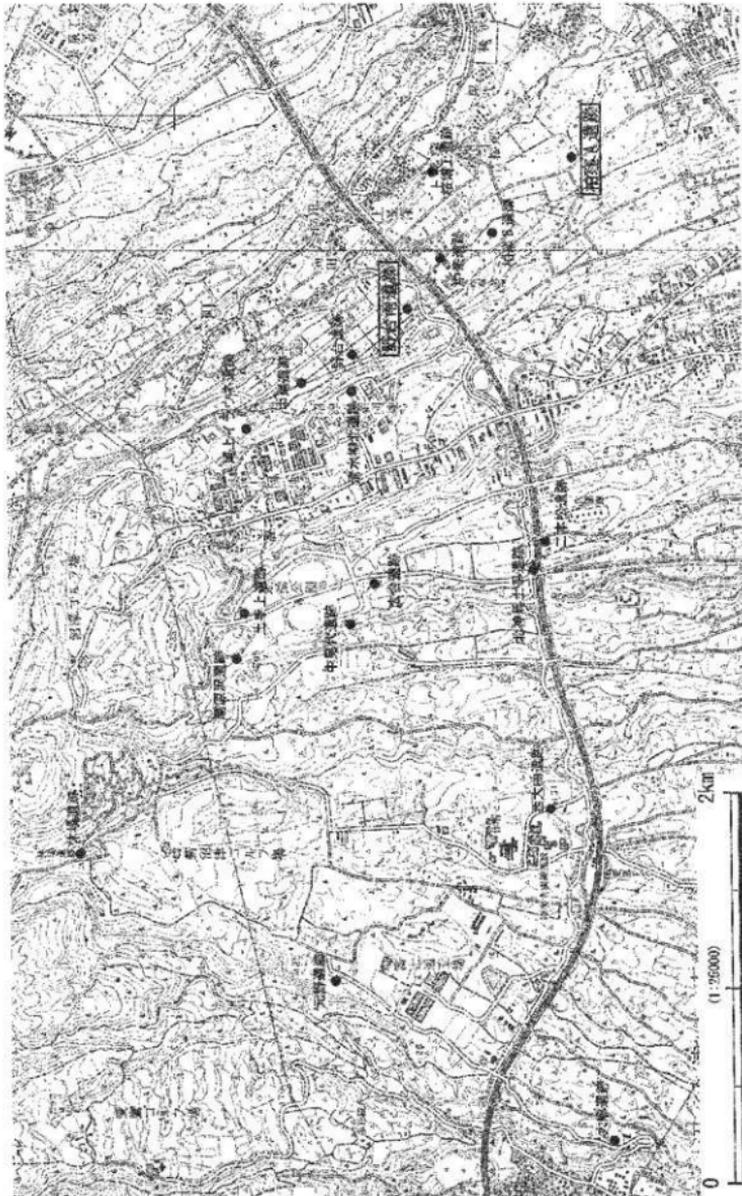
この地域の遺跡は、中小河川によって削られた平坦な台地上に立地している。愛鷹山南東麓の台地は大きく、西・中・東の3つの地域に区分される。

西の台地は最も緩やかで幅が広く、富士通・静岡厚生年金休暇センター・東名愛鷹PAが所在している。遺跡としては、扇頂部に細石刃石器群が出土した国指定史跡の休場遺跡、富士通の北西にBBVIから石器が出土した元野遺跡、休場センター東南にナイフ形石器が出土した西大曲遺跡が立地している。さらに、東名高速道路より南側には弥生時代末から古墳時代前期の二重口縁大型甕を出土した大塚遺跡が所在している。遺跡分布は、3つの台地のなかでは散在的な様子を示している。

中の台地は扇状地の扇端が最も南に張り出した部分で、最も緩い傾斜となっている。ここは東部運転免許試験場や愛鷹運動公園が所在し、東西幅は1.5km程で小規模な浅い谷が多く形成されている。遺跡

は標高280m付近から、人家が営まれる扇端まで、広範囲に濃密な分布を示している。主要な遺跡としては、標高が高い場所に、縄文時代創草期の住居跡が検出された葛原沢遺跡、YL～BBⅢの間で石器集中が顕著な中見代遺跡、YLで石器集中が認められ、尖頭器やナイフ形石器・掻器が出土した広合遺跡や土手上遺跡等がある。これらの遺跡より低い位置には、より新しい時代の遺跡も営まれている。標高80～100m、東名高速道路を挟んだ上下に、静岡県東部地域の弥生時代末～古墳時代前期の代表的な集落である北神馬土手遺跡が立地する。なお、ここでは浅い谷底から畑の畝が検出されている。また、東名高速道路工事とともに調査された二本松遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓が検出されている。さらに平野部と接する扇端部には長塚古墳や中沢田円丸遺跡が立地している。

東の台地は東名沼津インターから長泉町桃沢川の間、東西幅1.5kmの範囲で、谷は浅く小規模で未発達な地形である。沼津市の清水柳北遺跡ではBBⅤ～YLの石器が出土した。長泉町の尾上イラウネ遺跡ではBBⅠ～BBⅢの間で礫群や石器集中がみられ、同じく中尾遺跡や野台遺跡ではYLにおいて、礫群や石器集中がみついている。また桜畑上遺跡では、東駿河湾環状道路建設に伴う調査で、縄文時代中期の住居とともに配石や土坑が検出されている。柏窪遺跡は、縄文中期前半の柏窪式土器を出土した遺跡として知られる。今回報告する野台南遺跡と柏窪A遺跡はこの東の台地に位置する（第2図）。



第2圖 野台前・桂屋A連絡と周辺の連絡

第三章 野台南遺跡

第1節 調査の概要

1. 調査に至る経過

大元元長途緑線東名アクセス道路整備事業に関わる用地買収に伴い、平成18年度に野台南遺跡周辺地の確認調査が行われた。野台南遺跡に相当する範囲の確認調査は、平成18年10月25日・26日と19年1月19日の3日間、文化課により行われた。確認調査は試掘坑を8ヶ所設定した。試掘坑によって、中部ロームまで掘削が及ぶものや安全確保のため掘削途中で中止したものもあったが、次のような所見が得られた。

①旧石器時代の黄褐色土層（YL相当層）から微群が検出されたことで、旧石器時代の遺構の存在が確実となった。

②縄文時代の土器は出土するが、包含層は消滅しているようである。

文化課は長泉町教育委員会、沼津土木事務所と協議を行い、この新発見の遺跡を「野台南遺跡」として遺跡包蔵地に登録し、開発の及ぶ範囲を記録保存することとした。調査指導を文化課、現地調査を研究所が行う体制で、調査を実施することとなった。なお、年度末の調査という期間の制約から、諸準備を短期間で行う必要が生じ、人力による現地掘削と測量・実測を外部委託した。

なお、この委託事業の一環として、野台南遺跡調査と並行して、柏塚A遺跡の調査も行った。この経過は次章で記述する。

2. 調査の経過

現地調査は平成18・19年度の2ヶ年にわたって行われた。以下、年度ごとに調査経過を記す。

平成18年度

平成19年1月9日から19日にかけて沼津土木事務所によって調査範囲内の樹木の伐採が行われた。1月22日から現地駐車場用地の整地作業、調査範囲境へのフェンスの設置、ベルトコンベアーの搬入、調査員棟、作業員棟の設置作業等の準備作業を行った。

2月5日に重機による表土除去を開始した。当初存在しないとされていた縄文時代の遺物包含層が確認されたため、6日から表土除去と並行して、人力掘削作業を行った。年度末であったため人力掘削は3月中旬で一旦終了し、ベルトコンベアー、重機なども撤収した。

平成19年度

平成19年度調査は、前年度に使用した調査員棟・作業員棟・フェンス等の施設や、備品を引き続いて使用した。従って、現地での設備・備品等の準備は、ベルトコンベアーの搬入と、その動力線配線工事以外はほとんど行っていない。しかし、平成18年度と異なり、掘削・測量を直営で行うこととなったため、4月11日と12日に作業員の面接を行い、雇用手続きを行った。

現地調査は、6月5日に草刈りなどの諸作業を行い、11日にベルトコンベアー・排土用塩機・ダンプの搬入、12日に動力線工事等の諸準備を実施した。本格的な人力による発掘調査は11日から開始した。人力掘削作業は、前年度調査の続きである縄文時代遺物包含層を対象に行い、土坑や集石、住居跡2基

を調査した。実測・写真撮影も並行して行い、3月中旬に縄文時代層の調査は終了した。

今年度の調査では、9ラインで調査範囲を東西に二分割し、西側部分を常に先行して調査するという方法をとった。これは調査範囲が東西に約110mと細長いためである。9ライン以西の縄文時代遺物包含層掘削は7月末に終了したため、9ライン以西において旧石器時代の層である黄褐色土層（YL相当層）の人力掘削を行った。また、7月中旬、調査範囲西側約68㎡の部分において縄文時代遺物包含層掘削後に亀裂が入った。そのため、沼津土木事務所・文化課・研究所の3者による協議の結果、その部分の安全対策を講ずると共に、旧石器時代層の調査対象から外すことになった。

8月1日には、3者による9ライン以西の縄文時代遺物包含層掘削終了の確認が行われた。また、8月16日に9ライン以東の縄文時代遺物包含層掘削が終了したため、3者による現地立会い確認を実施した。これ以降、全面的に旧石器時代の調査に入った。

旧石器時代の層である黄褐色土層（YL相当層）は全面掘削した。黄褐色土層では、礫群が検出され、石器も出土した。9月12日に、9ライン以西の黄褐色土層の調査終了に伴い、3者による現地立会い確認が行われた。この日以降、9ライン以西において、試掘坑の設定、人力掘削を開始した。9ライン以東の黄褐色土層は9月19日をもって掘削が終了し、26日に3者による立ち会い確認が行われた。

3m×3mの試掘坑を各グリッドに1ヶ所を目安に24ヶ所設定した。掘削終了後は北壁と東壁の土層断面の写真撮影、実測作業などの保存作業を行った。試掘坑掘削時に、礫や石器が出土した場合には、周囲に掘削範囲を拡張した。拡張する範囲の取り扱いについて、3者の共通理解を得るため、9月26日に協議を行った。

試掘坑掘削の結果、24箇所中、8箇所において拡張の必要が生じた。特に、平地面から斜面部に移行するTP8において、約400㎡にわたって拡張して掘削することとなった。掘削がTP8とその拡張区のみとなった11月12日には、調査終了に伴う片付け、事務的作業の工程等の打合せのために、3者協議を実施した。これ以後、周囲の片付け、ベルトコンベアーの撤去などを開始し、11月14日にラジコンヘリによる旧石器時代調査面の空中写真撮影を行った。また、TP8拡張部の無遺物層除去を11月16日に重機によって行った。そして、TP8関係の掘削・実測等、人力による現地調査は11月26日に全てを終了した。その後、安全対策として重機により試掘坑を埋め戻した。出土遺物や断面写真等の記録簿の撤出、現地プレハブや周囲のフェンス撤去も12月7日までに行い、全ての現地調査は終了した。

3. 調査の方法

野台南遺跡の調査面積は3,310㎡であった。調査は、重機による表土除去と並行して、調査範囲内に設定したトレンチを人力掘削し、堆積している土層を確認した後、本格的な人力掘削を行った。

縄文時代の遺物包含層および、旧石器時代層である黄褐色土層（YL相当層）は全面掘削を行って調査した。SC1以下については、3×3mのTPを24ヶ所設定し、深さ2mまで掘削し、調査した。試掘坑掘削途中に石器や礫などの遺物が出た場合には掘削範囲を広げて調査した（第3図）。また、重機による無遺物層除去を1回行った。

遺物の取り上げ、地形測量等については光波測定器を用い、衛星技術コンサルの「遺跡管理システム」上でデジタルデータとして保存した。また、土層図、個別遺構図は、上記システムに加えて、縮尺1/20を基本とし、詳細な図については1/10の大きさで手実測で図化した。

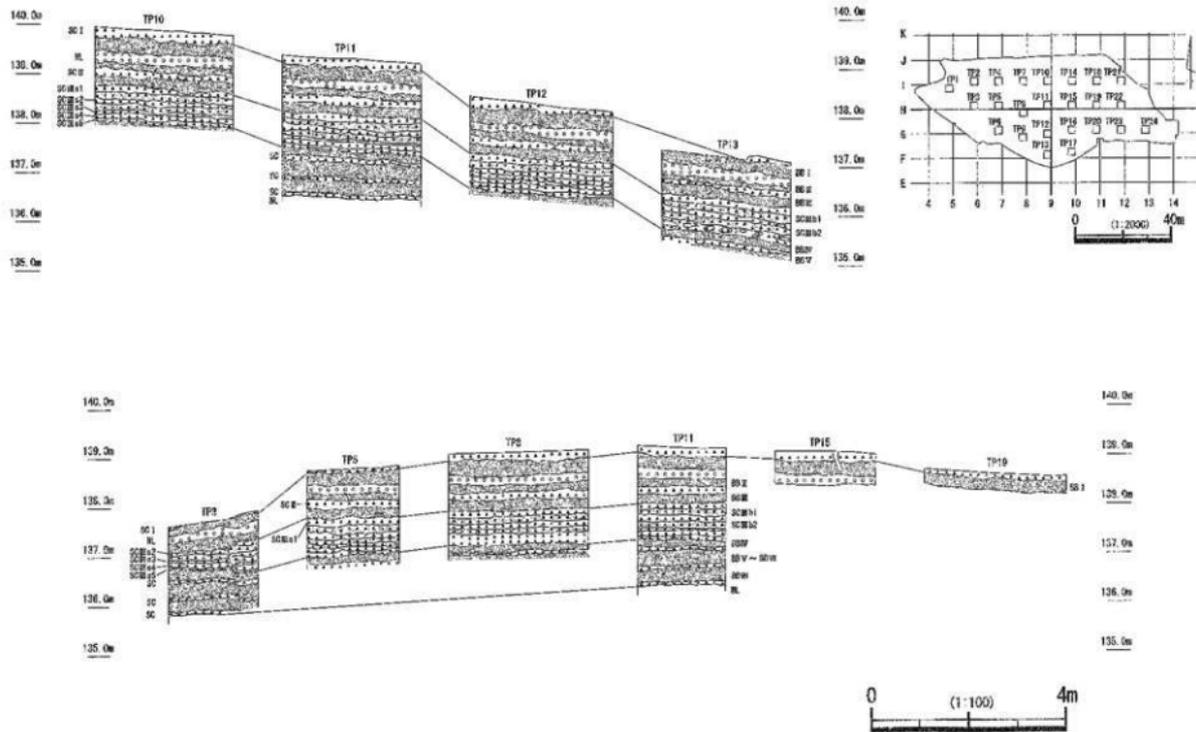
写真撮影は、35mmカラーネガ、リバーサル、モノクロネガを主体として、選定6×7判モノクロ、リバーサルを使用して撮影した。高所撮影にはローリングタワーを使用し、全体写真については、ラジコンヘリコプターを使用して空中写真撮影を行った。

4. 基本土層

野台南遺跡は愛鷹・箱根基本層序の縄文時代包含層の大部分が認められず、表土直下にKUおよびFBが認められた。FBの上層にあたるKUは残存している部分と失われている部分とがあった。FB下には、YL以下旧石器時代の包含層が約3mにわたって良好に堆積している状況が確認された（第4図）。各層の詳細については第5図に示している。

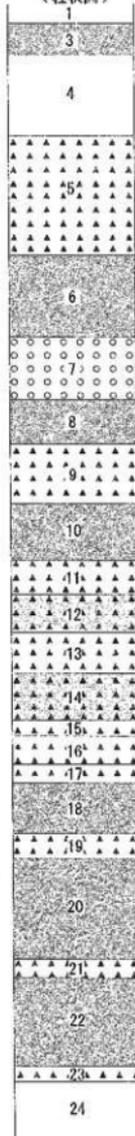
5. 整理作業

平成20年8月から平成21年6月まで整理作業を行った。石器の接合作業は石材、黒曜石産地別に行った。ホルンフェルスについては量が多いため、所属する層および上下数層との接合作業に止めたが、その他の石材については出土した全層のものを合わせて行った。礫の接合作業は、輝石安山岩が大多数を占めることから石材で分けず、全層のものを合わせて行った。遺構図面については現地で作成された図面の矛盾を修正した。文化層の設定は水平・垂直分布の検討をもとに行い、第2節1で紹介したように分けた。



第4図 土層の推機状況

柱状図



層号	層形	色調記号	粘性	硬り	地盤・地味基本層形と記号	含有物
1	黄土					
2	暗褐色土	7.5YR4/6	有	やや有	栗色土層	KU カリゴ平バミス少量含む。赤褐色スコリアを顕著含む。
3	暗褐色土	7.5YR3/4	有	やや有	黄土層上層	SB 赤褐色スコリアを顕著含む。
4	黄褐色土	7.5YR5/3	有	有	休積層	YL 褐色スコリアを含む。
5	暗褐色土	7.5YR3/4	やや有	有	第Ⅰスコリア層	SCⅠ 径5mm程度の赤褐色スコリア、径2mm程度の黄色スコリア、径6~8mm程度の赤褐色スコリアをブロック状に含む。
6	黒褐色土	7.5YR3/1	有	有	第Ⅰ黒色帯	BBⅠ 褐色はよい。径2~5mm程度の赤褐色スコリアを含む。
7	黄褐色土	10YR5/6	有	有	ニセローム層	NL ATを含む。上部に径2mm程度の赤褐色スコリアを多く含む。径2~5mm程度の黒褐色スコリア、径2mm程度の黄色スコリアを含む。
8	黒褐色土	10YR3/2	有	有	第Ⅱ黒色帯	BBⅡ 褐色はよい。径2~8mm程度の赤褐色スコリアを含む。
9	黒褐色土	10YR3/2	有	有	第Ⅱスコリア層	SCⅡ 径2~8mm程度の赤褐色スコリアを非常に多く含む。
10	黒褐色土	10YR3/1	有	有	第Ⅲ黒色帯	BBⅢ 褐色はよい。径5~5mm程度の赤褐色スコリアを少量含む。
11	暗褐色土	7.5YR3/5	有	強い(硬い)	第Ⅲスコリア帯スコリア1	SCⅢa5 径2~8mm程度の赤褐色スコリアを非常に多く含む。径1mm程度の黄色スコリアを含む。
12	黒褐色土	7.5YR2/2	有	有	第Ⅲスコリア帯黒色帯1	SCⅢb1 褐色はややよい。径2~5mm程度の赤褐色スコリアを多く含む。
13	暗褐色土	7.5YR3/4	有	強い(硬い)	第Ⅲスコリア帯スコリア2	SCⅢa2 径2~5mm程度の赤褐色スコリアを非常に多く含む。径2mm程度の黄色スコリアを含む。
14	黒褐色土	7.5YR3/1	有	有	第Ⅲスコリア帯黒色帯2	SCⅢb2 褐色b1に比べると弱い。径5~8mm程度の赤褐色スコリアを非常に多く含む。径1mm程度の灰色スコリアを含む。
15	暗褐色土	7.5YR3/4	有	強い(硬い)	Ⅲスコリア帯スコリア2	SCⅢa3 径2~5mm程度の赤褐色スコリアを非常に多く含む。径1mm程度の黄色スコリアを含む。
16	暗褐色土	7.5YR3/4	有	強い(非常に硬い)	第Ⅳスコリア帯スコリア4	SCⅣa4 径1mm程度の黄色スコリア、径3mm程度の赤褐色スコリアをブロック状に多く含む。径5mm程度の灰色スコリアを含む。
17	暗褐色土	7.5YR3/4	有	強い(硬い)	第Ⅳスコリア帯スコリア5	SCⅣa5 径2mm程度の赤褐色スコリアを非常に多く含む。径1mm程度の黄色スコリア、径5mm程度の灰色スコリアを含む。
18	黒褐色土	10YR3/1	有	有	第Ⅳ黒色帯	BBⅣ 褐色はよい。径2~5mm程度の赤褐色スコリアを多く含む。
19	黒褐色土	7.5YR3/1	有	有	スコリア層	SC 径2~5mm程度の赤褐色スコリアを非常に多く含む。径2mm程度の黄色スコリアを含む。
20	黒褐色土	7.5YR3/1	有	有	第Ⅴ~Ⅵ黒色帯	BBⅤ~Ⅵ 径5mm程度の赤褐色スコリアを多く含む。径1mm程度の黄色スコリアを含む。
21	黒褐色土	7.5YR3/1	有	有	スコリア層	SC 径6~8mm程度の赤褐色スコリアを非常に多く含む。
22	黒褐色土	10YR3/2	有	有	第Ⅴ黒色帯	BBⅤ 褐色はよい。径2~5mm程度の赤褐色スコリアを含む。
23	褐色土	10YR4/6	有	有	スコリア層	SC 径2~5mm程度の赤褐色スコリアを多く含む。
24	褐色土	10Y2/4	有	有	中部ローム	径2~5mm程度の赤褐色スコリアを含む。

第5図 TP11南壁の土層模式図

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

1. 概要

旧石器時代に属する石器および礫について、その出土層位、接合関係をもとにⅠ～Ⅴの5枚の文化層を設定した。Ⅰ～Ⅴの文化層については以下のように設定している。

第Ⅰ文化層

SCⅢs1～SCⅢb2出土の遺物である。SCⅢs2とSCⅢb2に遺物出土のピークがあり、約82%の遺物が2つの層から出土している。SCⅢb1、s1と上層ほど遺物量は減じる。もともとはSCⅢb2の上位に帰属するものと考えられる。

第Ⅱ文化層

BBⅢ出土の遺物である。ただし、接合したBBⅡ出土の石器1点を含む。BBⅢ中位に位置づけられる。

第Ⅲ文化層

NL～SCⅡ出土の遺物である。ただし、BBⅢ出土の石器と接合したBBⅡ出土の石器1点を第Ⅱ文化層とした。約94%がBBⅡ、約4%がSCⅡ、約2%がNLの遺物として取り上げられている。ただし、遺物の出土層位についてはSCⅡ出土の遺物についてもBBⅡの遺物として取り上げている部分がある。土層断面との対比から、第Ⅲ文化層はSCⅡ～BBⅡ下位に位置づけられる。

第Ⅳ文化層

BBⅠ～SCⅠ出土の遺物である。ただし、接合したYL出土の遺物11点を含む。また、YLに垂直分布の中心がある礫と接合した礫1点を第Ⅴ文化層とした。SCⅠに遺物出土のピークがあり、約95%の遺物が含まれる。礫の垂直分布はSCⅠ上面に集中しており、SCⅠ上面に位置づけられる文化層である。

第Ⅴ文化層

YL出土の遺物である。ただし、接合したKU出土の石器1点、SCⅠ出土の礫1点、およびFB出土の石器のうち旧石器時代に属することが明らかなナイフ形石器5点、細石刃2点を含む。また、SCⅠに垂直分布の中心がある遺物と接合した遺物11点を第Ⅳ文化層、縄文時代に属することが明らかな石鏃3点、打痕石斧1点、土器1点を縄文時代の遺物とした。

第Ⅴ文化層については縄文時代の遺物と混ざり合っていることが想定されたが、分別が困難であったため基本的には遺物の出土層位にしたがって分けている。

なお、中部ローム中から火山礫1点が出土しているが、人為的なものである可能性は極めて低いため、文化層としては設定していない。

また、礫群については現地調査において礫群として認識され図化されたものに加えて、同一文化層に属する礫のうち、平面分布が図化された礫群の範囲の中に位置するものを言っている。

2. 第I文化層

第I文化層はSCIIIb2上位に位置づけられる。ブロック5蓋を含む(第6図)。石器213点、礫12点が出土した。ただし、輝石安山岩の利用は石器と礫とに共通しており、RF・UF・礫器・石核・剥片・砕片・藪石・礫にそれぞれ分類されたものについて、石質に差異はない。当時の人々にとっては石器と礫とに区別されていなかったものと考えられる。

G-7・G-8・H-7・H-8グリッドに遺物の分布が集中する。礫も石器と同様、調査範囲の中央に集中して出土するが、分布が散漫であるため礫群とはしなかった。ブロック1~4の間にはホルンフェルスの剥片と大型の礫が散在する。ブロック2・4・5には炭化物の出土が認められた。また、この遺物の集中範囲以外に、約26m東でも2点の石器が出土している。

各ブロックは数個の大型の礫が配される点で共通する。垂角礫が主体で、台石のような役割をになった可能性があるが、確かではない。ブロック1~4の間の遺物の分布がまばらな範囲にも大型の垂角礫の配置が認められ、その性格は不明である(第7図)。

①炭化物集中(第9・10図)

ブロック2・4・5と重複して、炭化物が出土した。このうちブロック5と重複する炭化物のうち2点について放射性炭素年代測定を、その2点を含む3点について樹種同定を行った。分析結果については第V章に記載している。放射性炭素年代測定の結果は 29000 ± 150 yrBPと 28860 ± 160 yrBPであった。樹種同定の結果は、3点ともモクレン属であるとのことである。近接して出土しており、同一個体が分裂したのかもしれない。

②ブロック(第8~10図、第1・2表)

G-7・G-8・H-8グリッドにかけてブロック1~4が四角形状に位置し、中央には遺物の分布がまばらな範囲がある。その北西にブロック5がある。

第1表 第I文化層 石器組成表

	RF	UF	礫器	石核	剥片	砕片	藪石	計
ブロック1		1			11			12
ブロック2	1		1	4	51	10		67
ブロック3		2		2	38	4		46
ブロック4		1			57	5	6	69
ブロック5				1	9			10
ブロック外		1		1	6		1	9
計	1	5	1	8	172	19	7	213

第2表 第I文化層 石材組成表

	Ob		Hor	An(Py)	SSh	Ba	計
	WDTY	AGKT					
ブロック1			11		1		12
ブロック2			51	16			67
ブロック3			46				46
ブロック4			53	4		2	69
ブロック5			5	5			10
ブロック外	1	1	6	1			9
計	1	1	182	25	1	2	213

ブロック1 (第11図1)

ホルンフェルスの剥片を主体とし、遺物分布はまばらである。珪質頁岩のUFを含む。

1は灰色の珪質頁岩のUFである。平坦な打面を加撃して得られた鋭利な末端部を有する剥片を素材としている。末端部に微細剥離痕が認められる。外形は台形石器に似ており、台形石器と同様の用いられ方をした可能性がある。

ブロック2 (第11図2、第12図3)

ホルンフェルスが主体であるが、いずれも剥片・砕片である。輝石安山岩を用いた剥片剥離も行われている。ホルンフェルスの大型縦長剥片の折れ接合で、ブロック3と接合関係を有する。

2は輝石安山岩の角礫を素材に剥片剥離を行っている。接合状態に加えて、一部のものについては個別に実測図を掲載した。素材は板状の角礫で周縁部分には断続的に、剥離を行った痕跡が残される。その角礫を折断するように分割し、分割されたものの一部については更に剥離が行われる。4307は分割面を打面として、4348-1は分割面を作業面として、小口部を利用した縦長剥片の剥離が企図されるが、剥離は階段状になり、有効な剥片剥離には至っていない。2-1と4306は同時に剥離され、2つに折れたものであるが、2-1については比較的鋭い縁辺を有する部分の腹面側に剥離痕が認められる。また、2-1には分割面にも剥離の痕跡が認められる。2-2は分割後に4307から剥離された剥片である。2-3は背腹両面に調整加工が行われており、礫器である可能性がある。この接合資料においては、きめが粗い石材であることも要因であったかもしれないが、有効と考えられる剥片の剥離に乏しい。小口を作業面とした剥離は階段状剥離になり、2ヶ所とも失敗に終わっている。製作者の技量を考えると必ずしも高いとはいえ、非熟達者による剥片剥離の結果とも見て取れる。また、輝石安山岩を利用した剥片剥離はブロック5においても行われており、必ずしも良質とはいえぬ石材を用いた石器製作が一定量行われていた可能性を示している。一見、要と判断されかねないものであり、今後慎重に石器と礫の判別を行う必要がある。

3は連続して剥離されたホルンフェルスの縦長剥片2点が接合している。石核の稜状になった部分を狙って連続して剥離を行っているが、接合した2点の剥片は両者とも下半部が大きく折れてしまっている。

ブロック3 (第12図4～6、第13図7)

ホルンフェルスのみで構成されるブロックで、多くの剥片とともにUFと石核が含まれる。大形縦長剥片の折れ接合で、ブロック2と接合関係を有する。

4・5はUFである。4は背面に多方向からの剥離面をもつ大型の剥片を素材とする。上部は折れている。末端部に微細剥離痕が並ぶ。5も背面に多方向からの剥離面をもつ剥片を素材とする。下端部に、剥片剥離後になされた剥離が認められる。

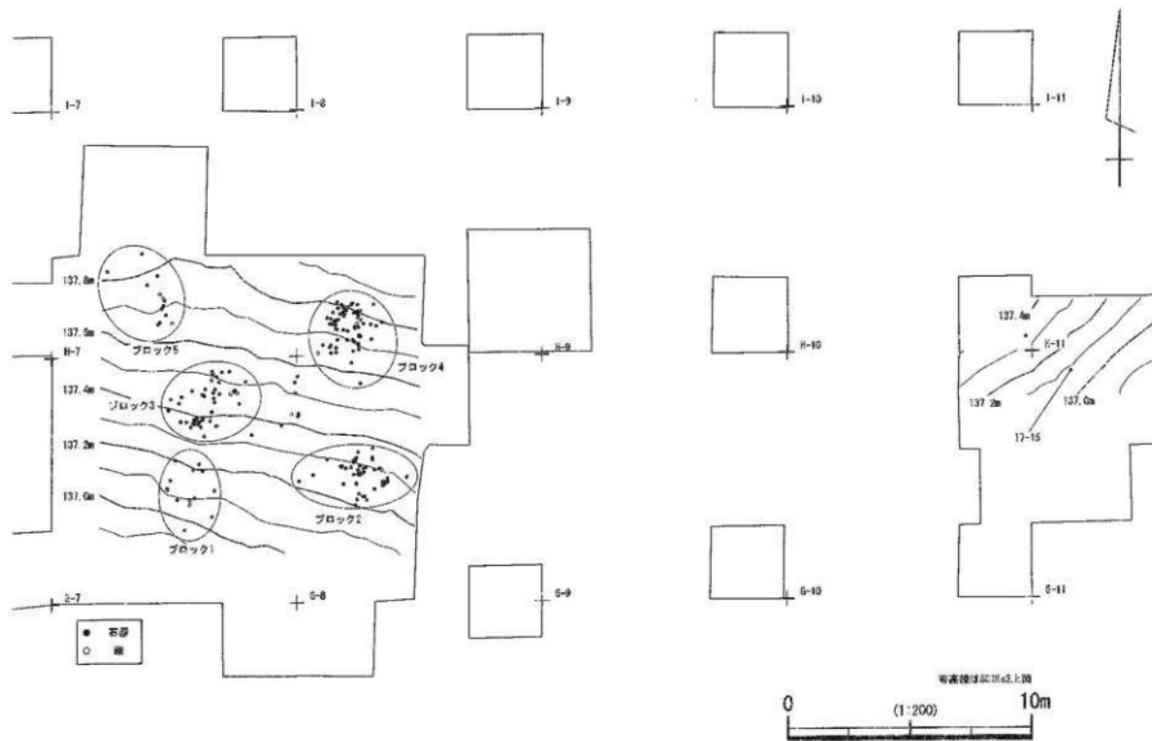
6は石核である。厚い剥片を素材とし、右下端に背面と腹面にそれぞれ1枚ずつ剥片剥離を行っている。

7は石核と剥片の接合資料である。表面には広く自然面が残存し、剥片剥離は主に裏面で行われている。裏面において、上方向から剥片剥離が行われた後、裏面右側縁で表裏に剥片剥離が行われている。接合している剥片は表面への剥離で得られた幅広のもので、この石核における剥片剥離の最終段階に剥離されたものである。

ブロック4 (第14図8・9、第15図10～13)

第I文化層出土の敲石はこのブロックに集中しており、ブロック1～4の中央の分布がまばらな範囲の敲石の破片と接合する。敲石を除くと石材は全てホルンフェルスで、製品の数は少ない。

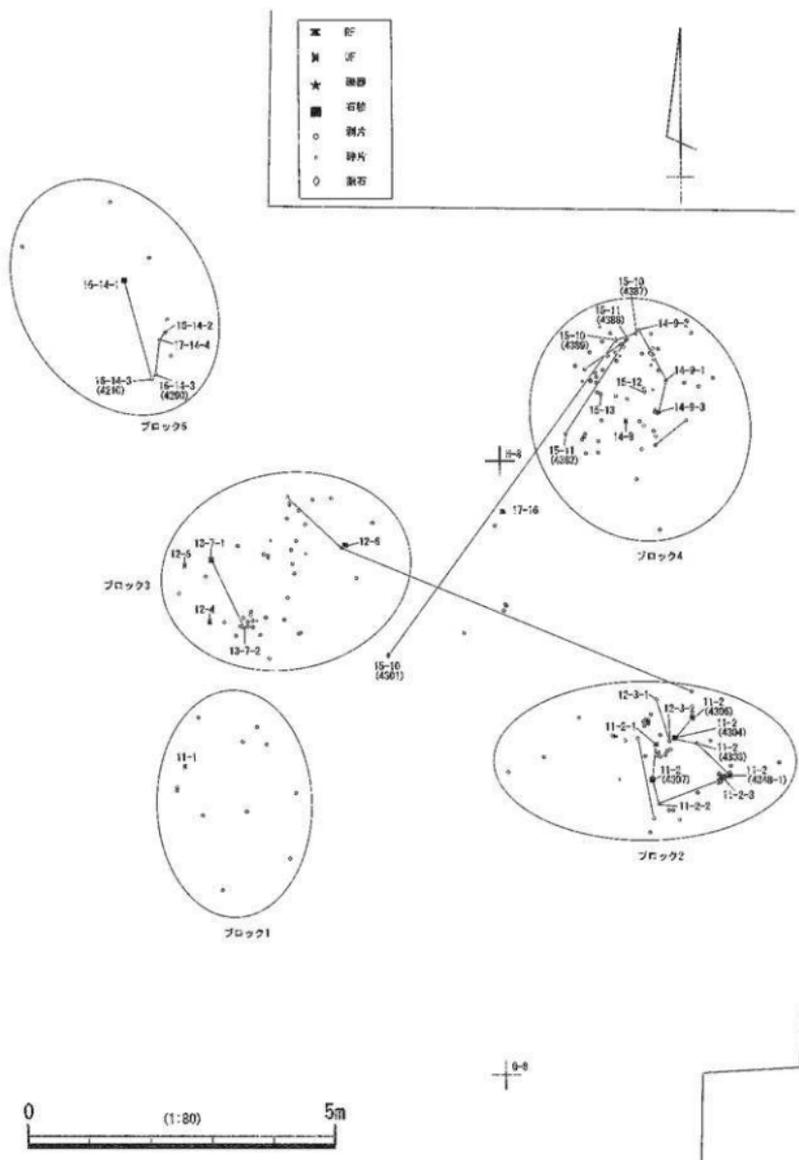
8はUFで、不定形剥片を使用する。鋭い縁辺をもつ右側縁に微細剥離痕が認められる。素材背面には



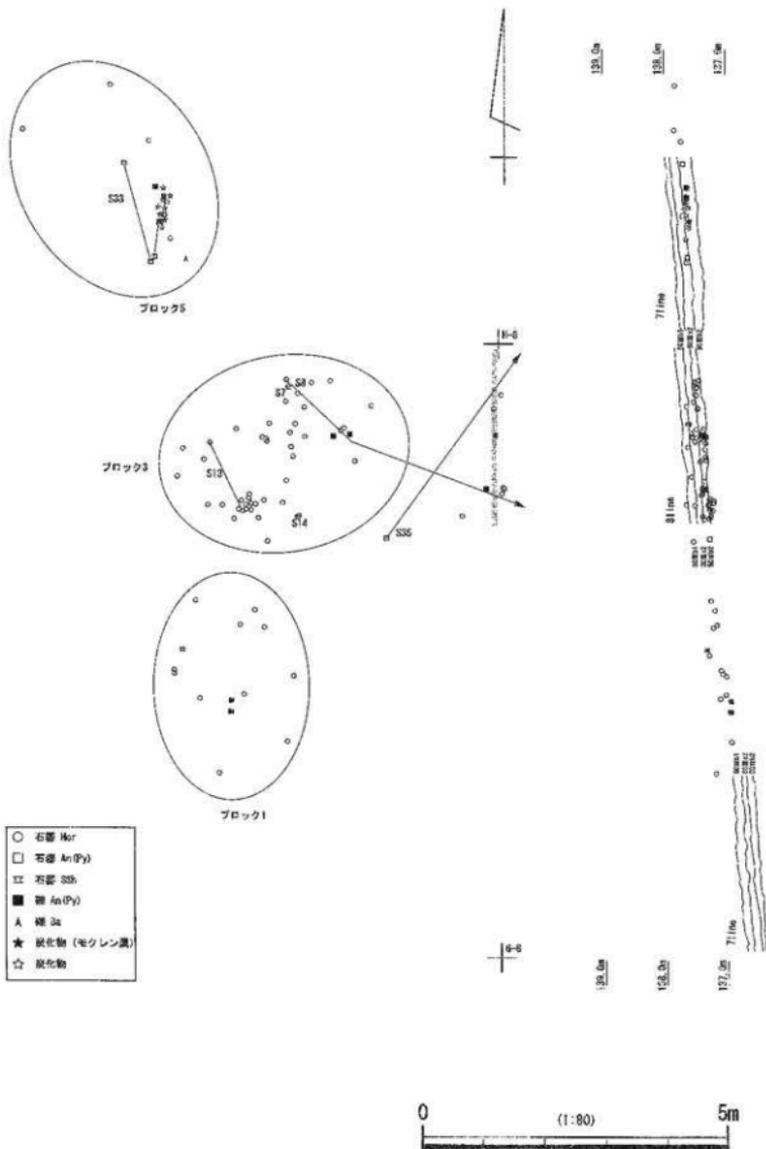
第6図 第1文化層 遺物分布



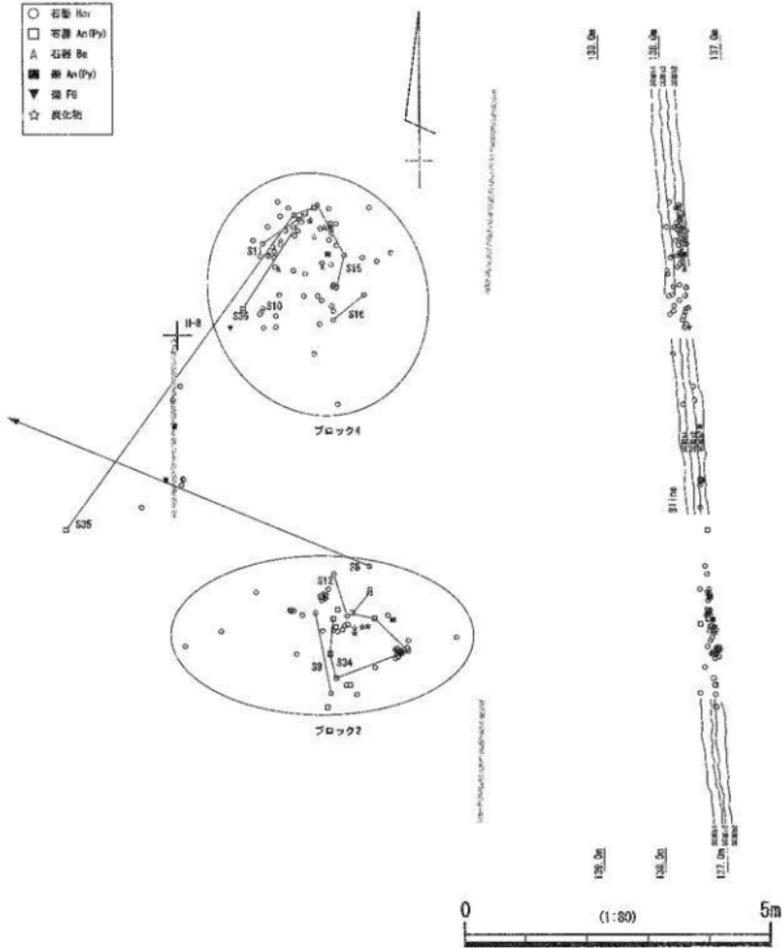
第7図 第1文化層 遺物出土状況



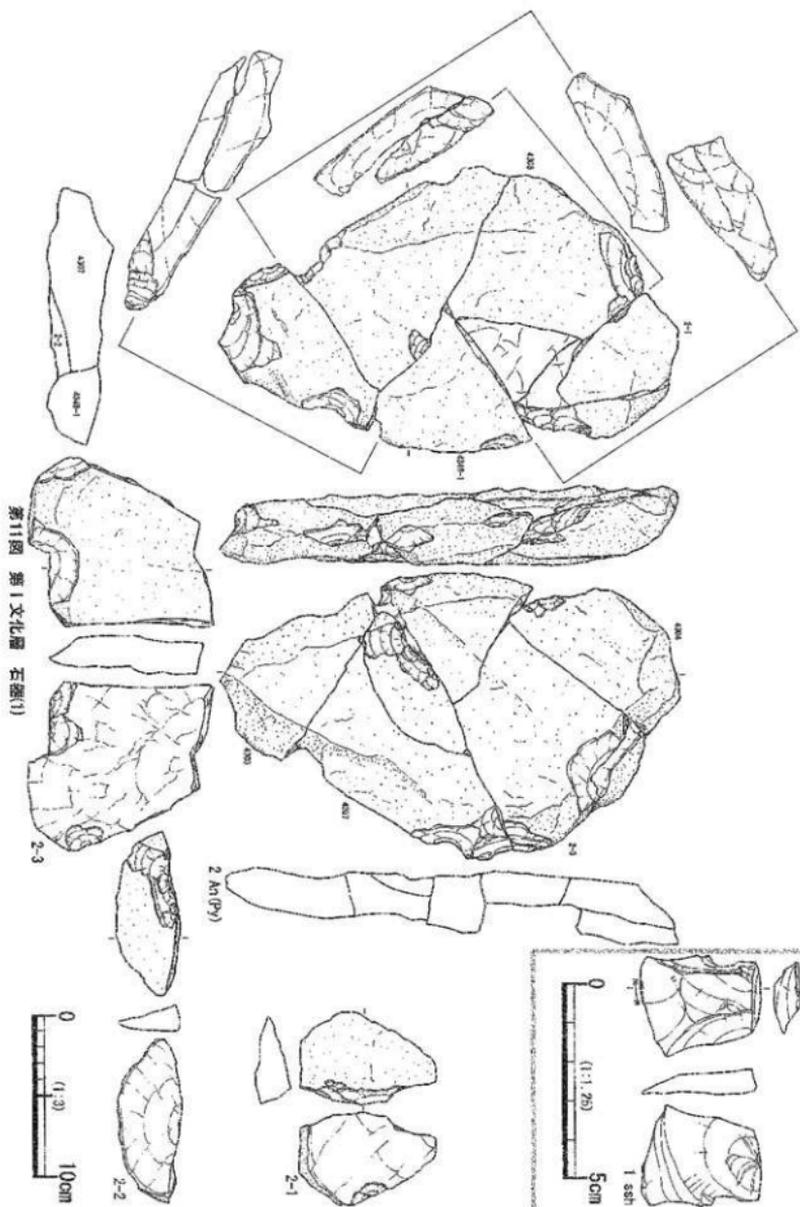
第8図 第1文化層 石器種類別分布



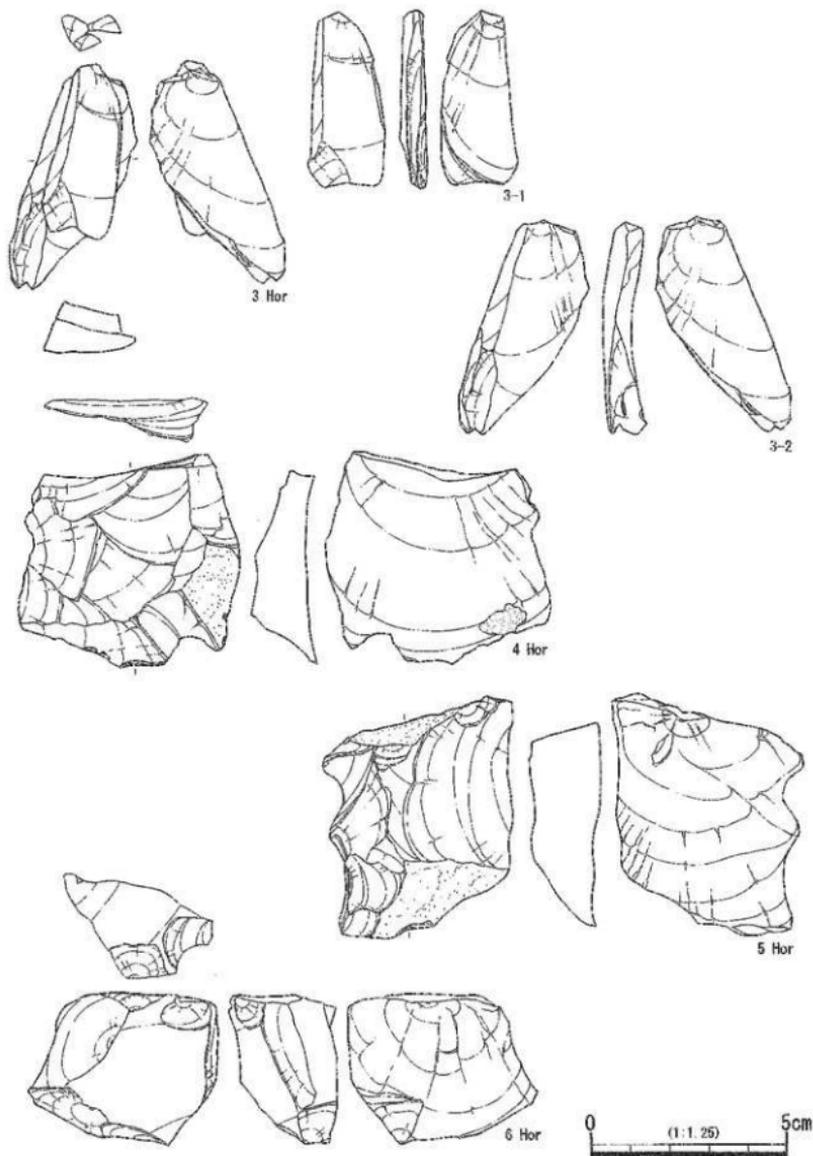
第9図 第1文化層 石材別分布(1)



第10図 第1文化層 石材別分布(2)

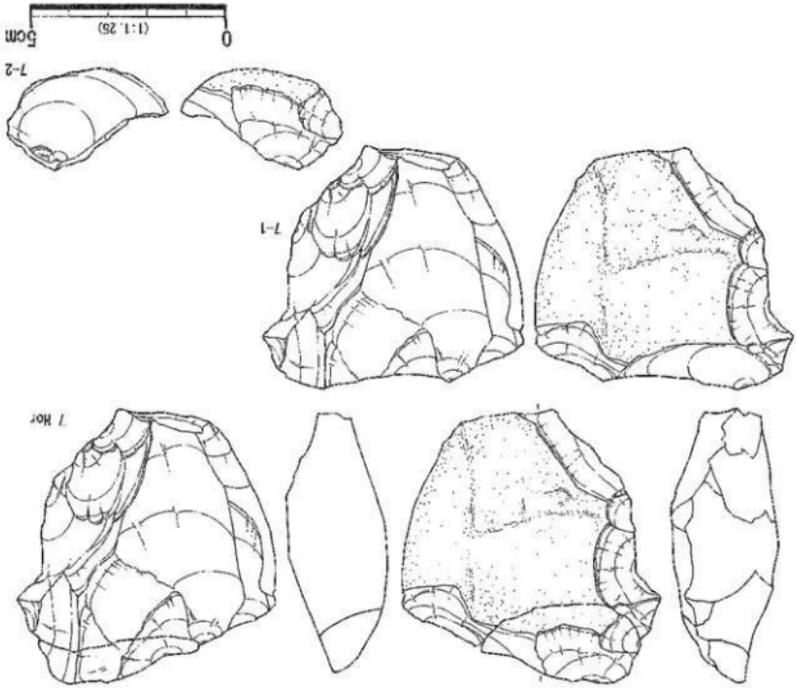


第11图 第1文化層 石器(1)



第12圖 第1文化層 石器(2)

第13図 第1文化層 石器(3)



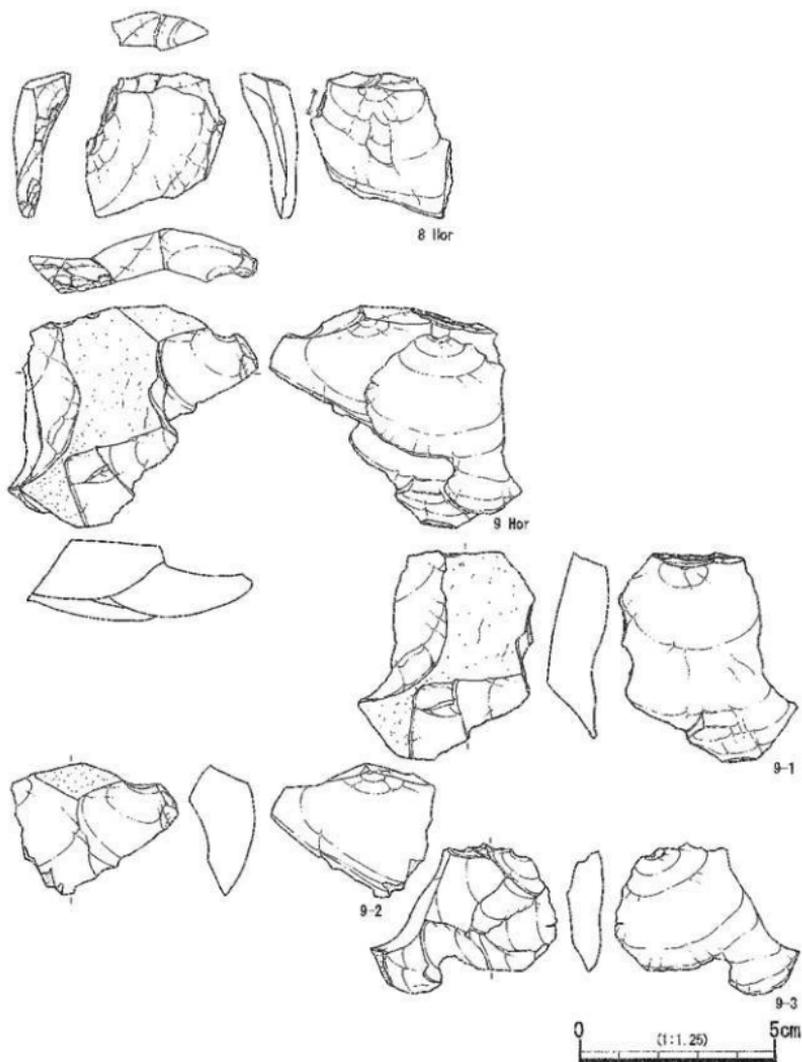
比較的薄い部分で剥片割離を行う。14.2の割離を含む、上面へむけての割離がまず行われる。この面で14は輝石安山岩の接合原料である。一方にむかって薄くなっていく挾状の亜角礫を素材とする。輝石フェルスは剥片のみである。

少量の輝石安山岩とホルンフェルスが含まれる。輝石安山岩の剥片と石核は全く接合する。ホルンフェルスは (第16図14、第17図14-4)

打痕が認められる。13は他のものに比べて小さく、一端に打痕が認められる。石安山岩であり、石質は剥片や石核の接合原料である。第11図2や第15図14と同質である。12は両端に打痕が認められる。11は細長く、両端に打痕が認められる。途中で折れる。なお、10・11は打痕をもち、そのほとんどに打痕が認められる。破損した3点が接合しているが、その剥片の1点は交角をもち、いずれも裏面割離を利用する。第V文化層のものに比べて大きい。10は各所に痕や

10〜13は敲石で、いずれも裏面割離の間に数枚の剥片割離が介在する。ているが、9-2と9-3の割離の間に数枚の剥片割離が介在する。9-1のみに打面調整と考えられ、割離が認められる。9-1と9-2は連続して割離され、9-1のみに打面調整と考えられ、割離が認められる。一定程度剥片割離が進行していたことが自然面が残存するが、3回の先行する割離も認められ、一定程度剥片割離が進行していたことが9-1の背

多方向の割離が認められる。



第14図 第1文化層 石器(4)

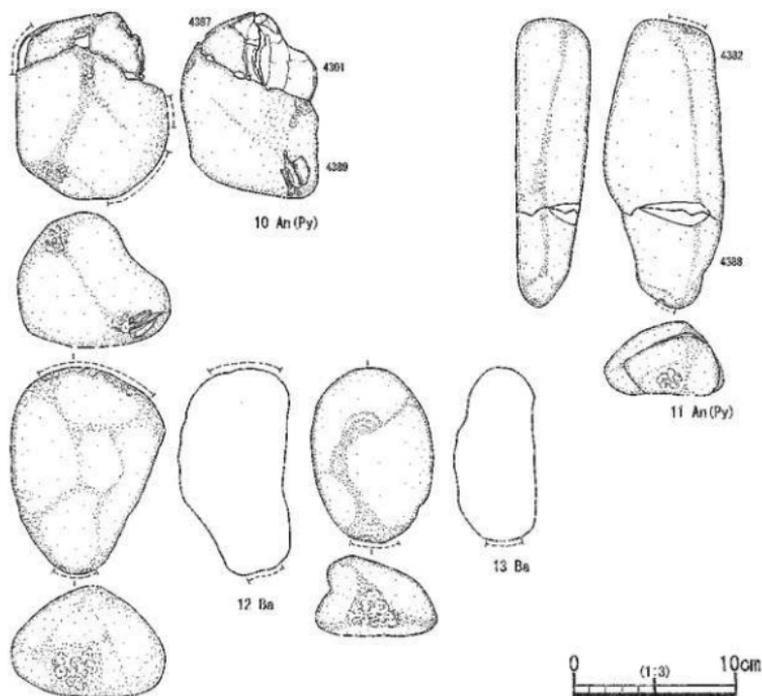
の剥離は大きい剥片の剥離には至っていない。以上の先行する剥離が行われた面を打面にして、下面にむけて数回の剥離が行われるが、その中で剥離されたのが14-3、14-4である。両者とも平坦な自然面を末端部に取り込む楕円の剥片である。14-3は打点部から2つに折れる。下面での剥離で比較的大きい剥片を剥離していることから、14-2を含む上面へむけての剥離が打面調整であった可能性はあるが、確かではない。輝石安山岩を用いた剥片剥離はブロック2でも行われているが、ブロック5における剥離の方が有効な剥片を得ることができている。

③ブロック外出土の石器 (第17図15・16)

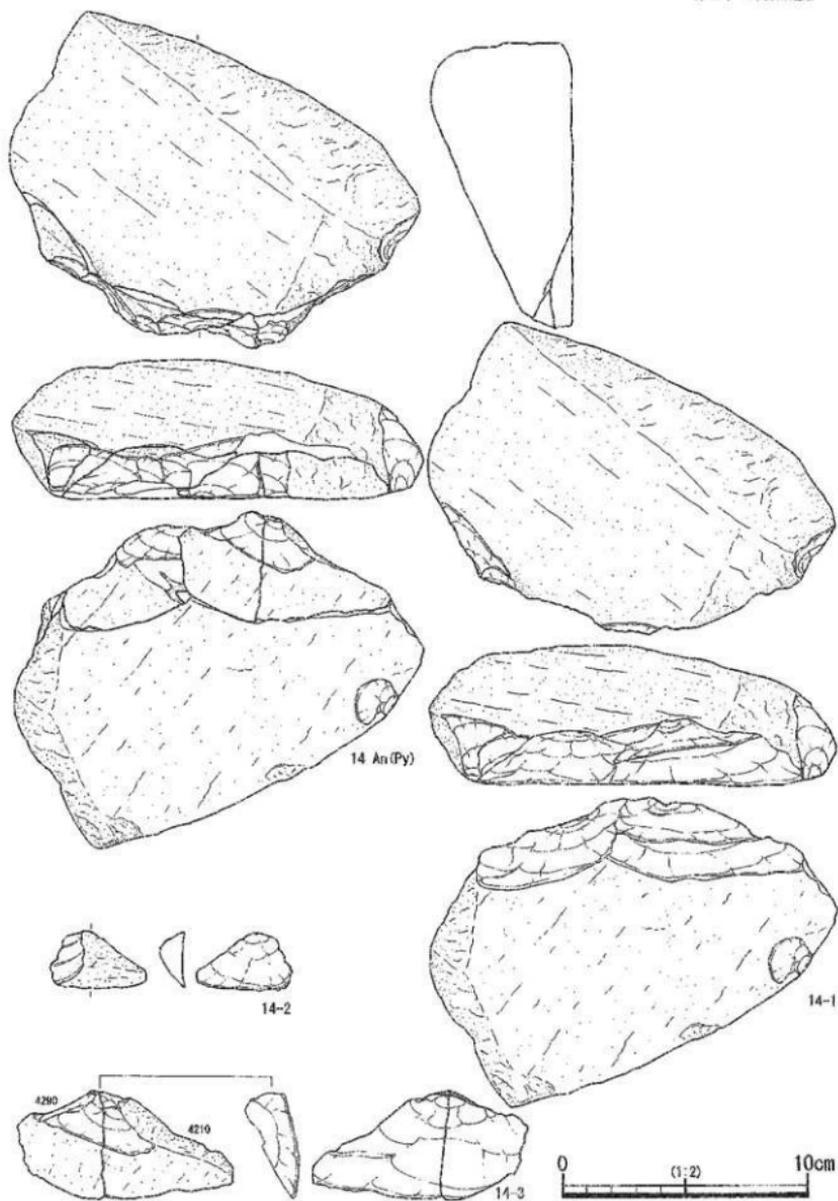
ブロック1～4の中央の遺物の分布がまばらな範囲とブロック1～5から約26m東で遺物が出土した。東に外れて出土したのは和田麓山産黒曜石のUFと天城柏峠産黒曜石の剥片であり、ブロック1～5には含まれない石材であるため、ブロック1～5と同時期に残されたものである可能性は低い。

15は和田麓山産黒曜石のUFである。末端部が折れた厚みのある縦長剥片のほぼ全周に微細剥離痕が認められる。

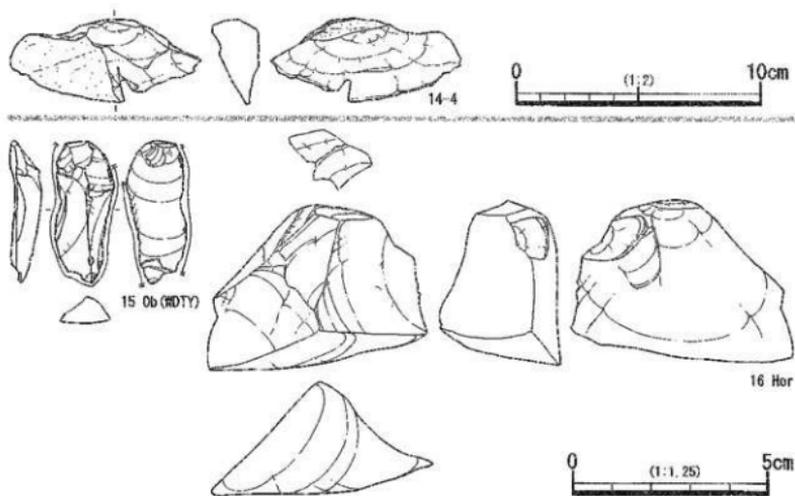
16はホルンフェルスの石核である。下半が折れた厚い剥片を素材にして、腹面の打点寄りで小剥片を1枚剥離している。



第15図 第1文化層 石器(5)



第16圖 第I文化層 石器(6)



第17图 第I文化層 石器(7)

3. 第Ⅱ文化層

第Ⅱ文化層はBBⅢ中位に位置づけられる。礫群2基とブロック3基を含む(第18図)。石器87点、礫132点が出土した。G-7グリッドとH-7グリッドの境界付近に遺物分布が集中する。礫群1にはブロック6が、礫群2にはブロック7が重複する。礫群1の北には小さい礫が集中して分布しており、ブロック8と重複する。遺物が集中する範囲以外にも遺物の分布は認められるがまばらである。

①礫群

G-7グリッド北端付近で2基の礫群が検出された。いずれもブロックと重複する。数点の大型の礫と小礫で構成される。

礫群1(第19図)

G-7グリッドの北半に位置し、その北には小礫が集中して分布する。炭化物集中およびブロック6と重複する。詳細は不明だが、BBⅢ中位に位置づけられると考えられる。72点の礫で構成される。6,500gの礫と、接合して1,410gになる礫の2つの大型の礫以外は100g以下である。接合する大型の礫には赤化が認められるが、6,500gの礫をはじめ赤化が認められないものがほとんどである。

礫群2(第20図)

G-7グリッドとG-8グリッドの境界北端に位置する。ブロック8と重複する。BBⅢ中位に位置づけられる。28点の礫で構成される。4,890g、2,570g、730gの比較的大きい3点の礫以外は、50g以下の小さい礫である。赤化が認められる礫の数は多くはないが、比較的大きい3点の礫にはいずれも赤化が認められる。

②炭化物集中(第18図)

礫群1と重複して炭化物が集中して見つかった。平面・垂直分布から礫群1と同時期に残されたものと考えられる。回収した12点のうち、2点について放射性炭素年代測定を、全点について樹種同定を行った。分析結果については第Ⅴ章に記載している。放射性炭素年代測定の結果は、 $28500 \pm 170\text{yrBP}$ と $28380 \pm 150\text{yrBP}$ であった。矛盾のない値であり、この文化層の年代を示すものと考えられる。樹種同定の結果、広葉樹が主体であるものの、針葉樹も一定量含まれていることがわかった。

③ブロック(第21・22図)

G-7グリッドとH-7グリッドの境界付近に3基のブロックが集中する。箱根燐産黒曜石を多く含む点で共通しており、同時期に残された可能性が高い。

ブロック6

礫群1と平面分布、垂直分布ともに重なり、詳細は不明だが、BBⅢ中位に位置づけられると考えられる。G-7グリッドの北端に位置する。

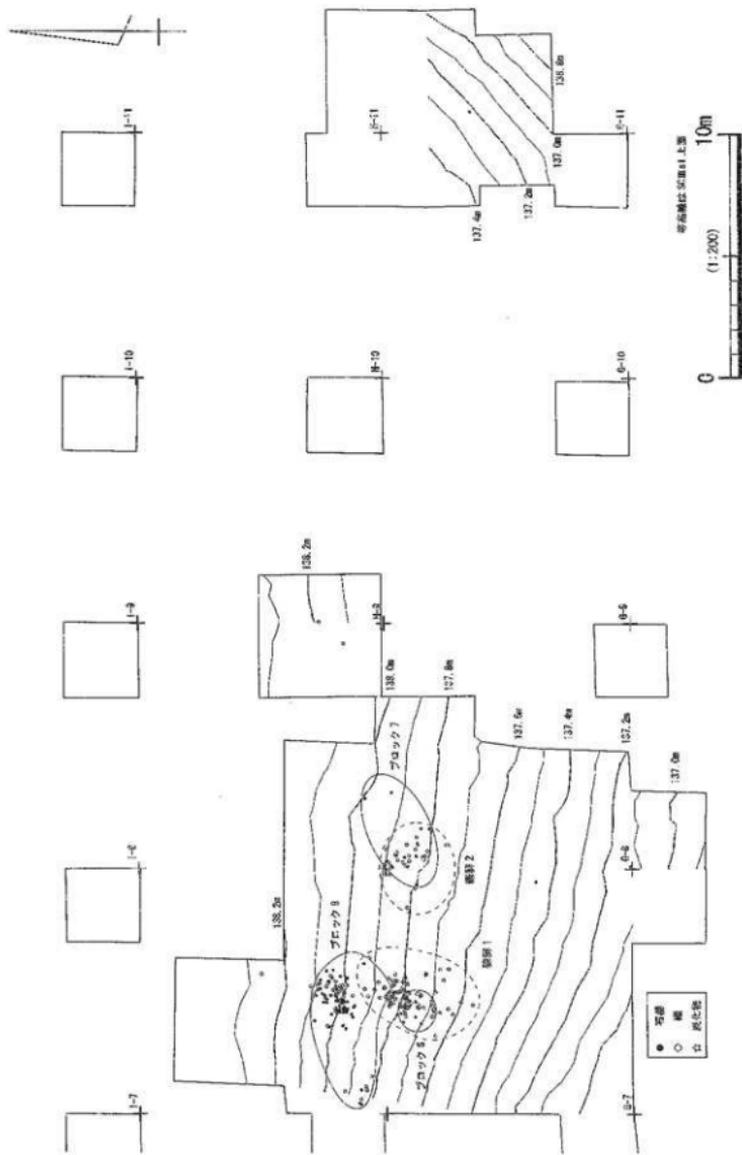
箱根燐産黒曜石を主体にガラス質黒色安山岩を含む。いずれも剥片と碎片である。

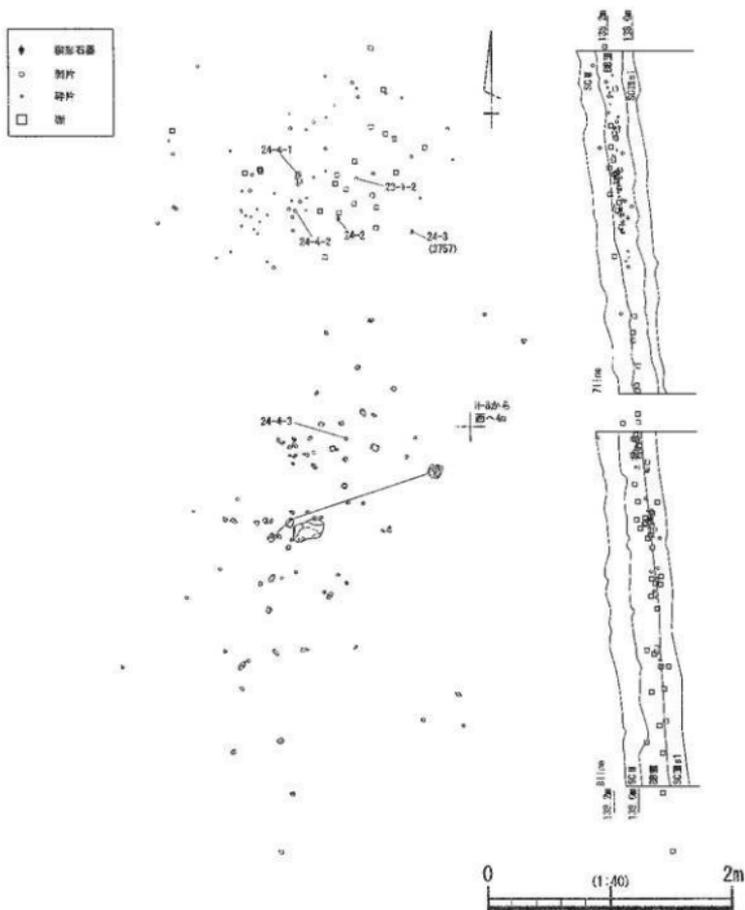
ブロック7(第23図1-1、第24図1-3)

礫群2と平面分布、垂直分布ともに重なり、BBⅢ中位に位置づけられる。G-8グリッド北西隅に位置する。

多様な石材で構成されるが、石核が1点含まれる以外は全て剥片・碎片である。デイサイトの石核を含む接合で、ブロック8と接合関係を有する。

1はデイサイトの石核と剥片2点の接合資料である。自然面を1端に残置しつつ、打面と作業面を顔





第19圖 第II文化層 裸群1

繁に転移させながら剥片剥離を進行させている。1-2の剥離の後は1回以上の剥片剥離が行われている。1-1の剥離の後に剥片剥離が行われたかは不明である。剥離された剥片はいずれも不定形のものであったと考えられる。1-2はブロック8に属する。

ブロック8 (第23図1-2、第24図2~4)

群1の北に位置する小隼集中と平面分布、垂直分布ともに重なり、詳細は不明だが、BBⅢ中位に位置づけられると考えられる。H-7グリッド南西に位置する。デイスサイトの剥片(第23図1-2)がブロック7の石核と接合する。

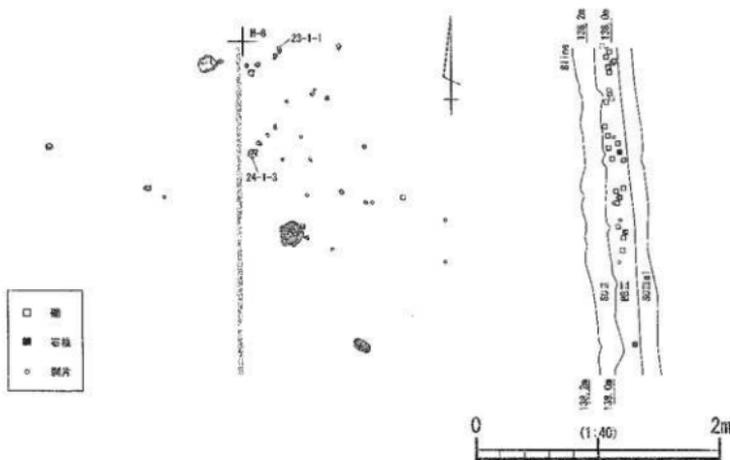
第Ⅱ文化層最大のブロックで箱根畑宿産黒曜石が組成の大部分を占める。産地分析の結果が得られていない黒曜石についてもその大部分が箱根畑宿産と考えて間違いないだろう。フリーレイキングによる剥離の他に両極打法による剥離が一定程度行われている。楔形石器以外は剥片と碎片で、特に碎片が多く含まれる。

2・3は楔形石器である。2は下端部が、階段状剥離が生じて潰れているのに対して、上部には潰れが認められない。右側面には夾雑物から生じた折れが認められる。3は平坦打面をもつ剥片を素材に両極打法による剥離を行っている。3757の腹面下端に認められる2枚の剥離には潰れが認められないことから、もともとは掻器のようなものであり転用された可能性がある。両極打法の結果、最終的に三分しており、左の比較的小さい2点はブロックの中心部から西に外れて出土している。

4は剥片4点の接合資料である。打面を固定して、打点を右にずらしながら、順に剥片剥離が行われたことが分かる。4-1は主剥離と同時に背面にも剥離が生じている。

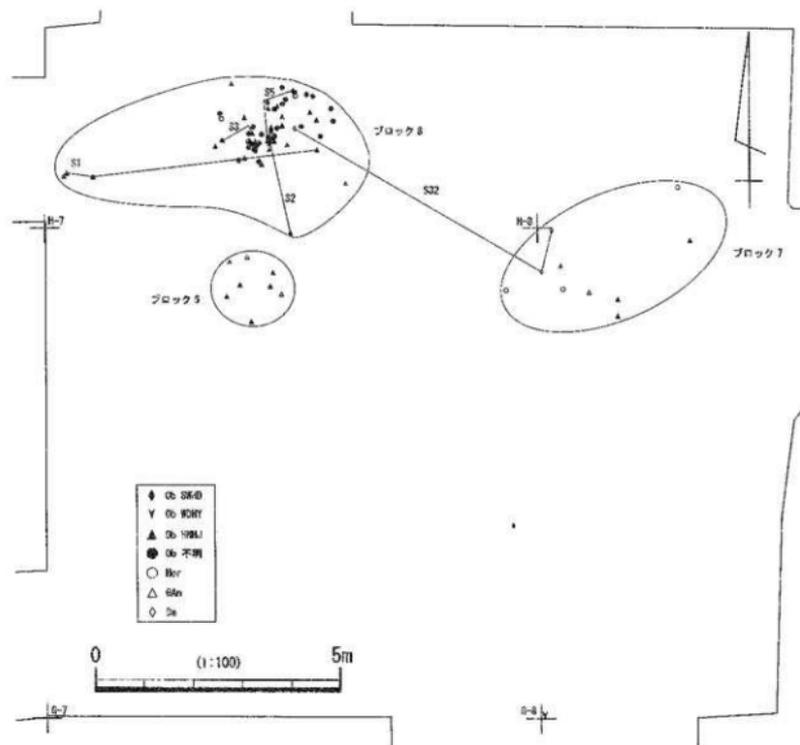
③ブロック外出土の石器 (第24図5)

ブロック外からは3点の石器が出土しているが、いずれもブロック内には認められない信州産黒曜石であり、ブロック6~8と同時に残されたと考えるのは難しい。

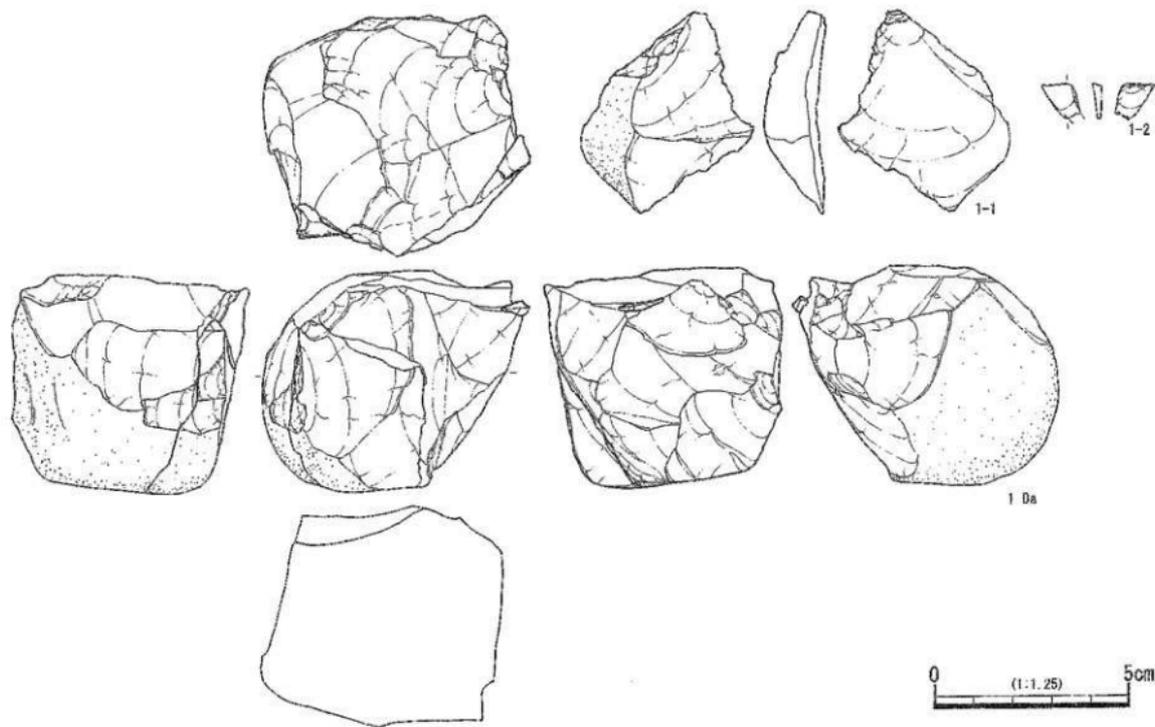


第20図 第Ⅱ文化層 群1

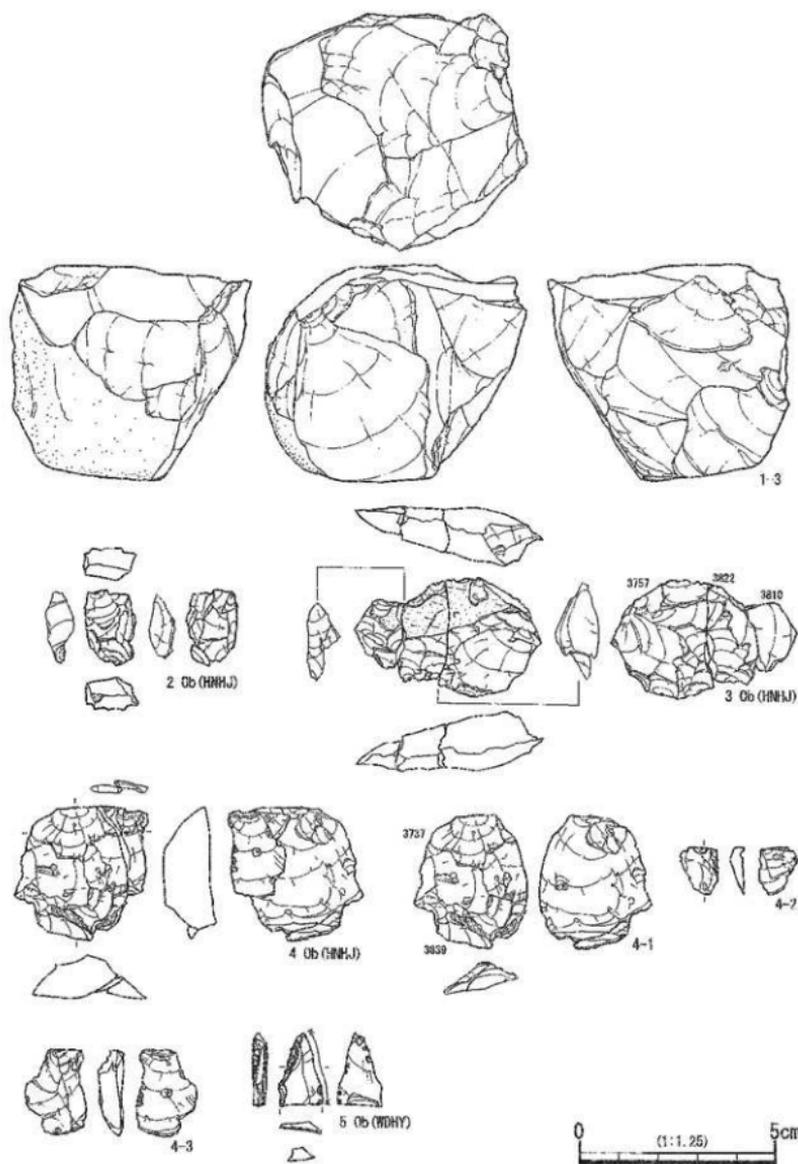
5は和田芙蓉ライト産黒曜石を用いたナイフ形石器である。石刃の打点側を先端部に据え、左側縁に形成剥離を行っている。先端部のみが残存しているため詳細は不明だが、二側縁加工のナイフ形石器であった可能性がある。腹面先端部には衝撃剥離と考えられる剥離が認められる。



第22図 第II文化層 石器石材別分布



第23图 第II文化层 石器(1)



第24圖 第11文化層 石器(2)

4. 第Ⅲ文化層

第Ⅲ文化層はSCⅡ～BBⅡ下位に位置づけられる。礫群2基とブロック5基を含む(第25図)。石筥319点、礫19点が出土した。大部分の遺物は調査範囲東端からの出土である。G-7・G-8・H-7・H-8グリッドにも石器・礫の散漫な分布が認められ、I-7グリッド南東部にはブロック13が位置する。礫群3にはブロック11が、礫群4にはブロック12が重複する。調査範囲東端は他の時期の遺物が乏しく、その他の時期には遺物の分布が認められない場所であり、ブロック9～12についてはブロック間の接合資料は乏しいものの、同時期に残された可能性が高い。

①礫群

礫群2基が調査範囲東端で検出された。いずれもブロックと重複する小規模なものである。

礫群3(第26図)

F-13グリッドとG-13グリッドの境界東半に位置する。ブロック11と重複する。5点の礫で構成される。6,000g、3,665g、2,740gの大型の礫3点以外は、小礫2点がみられるだけである。いずれの礫にも赤化は認められず、火処としての礫群ではないと考えられる。もっとも大きい6,000gの礫に近接して折れた石筥(第37図21)が出土しており、半径0.8mの範囲内に敲石2点(第38図23・24)も見られる。これらの礫が台石のように用いられた可能性があるが、確かではない。

礫群4(第27図)

G-13グリッドとG-14グリッドの境界南半に位置する。ブロック12と重複する。5点の礫で構成される。3,355gの大型礫1点と、140gあるいはそれ以下の重さの礫が含まれる。大型礫に赤化が認められる。

②ブロック(第28～33図)

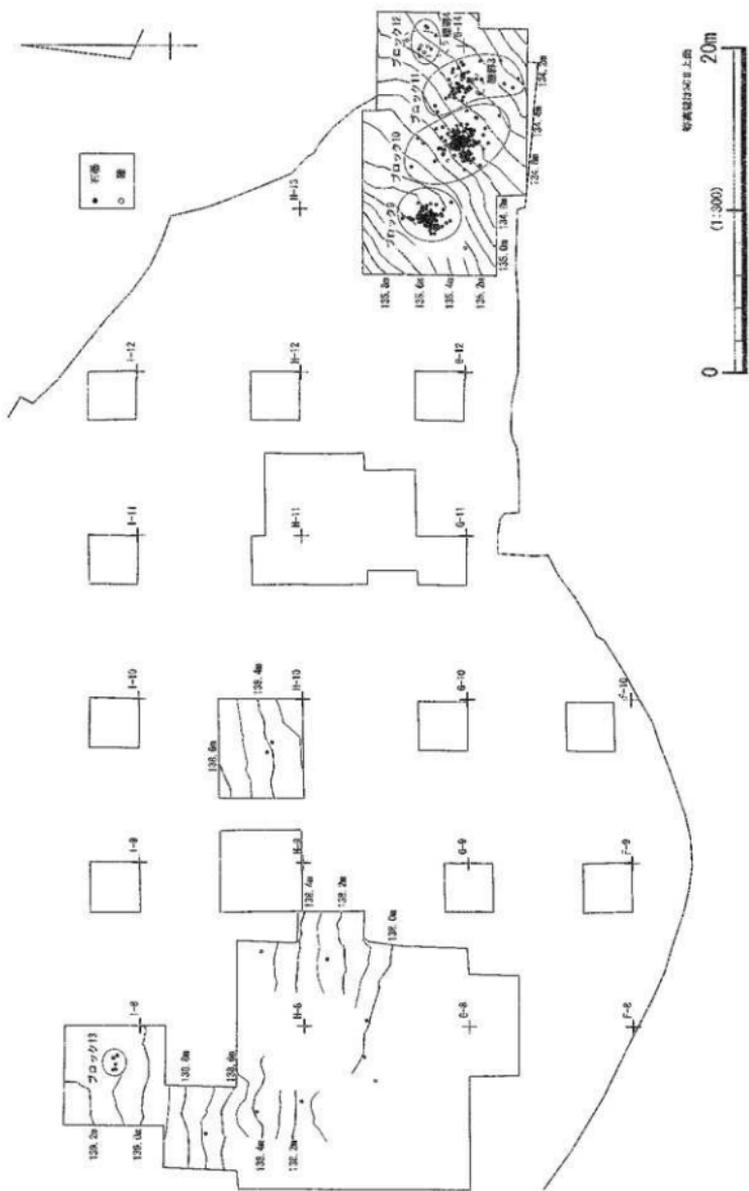
谷に向かう斜面である調査範囲東端に遺物の分布が集中し、4基のブロックが認められる。また、調査範囲中央西寄りにも遺物が散在し、I-7グリッド南東部にはブロック13がある。ブロック9は垂直分

第5表 第Ⅲ文化層 器種組成表

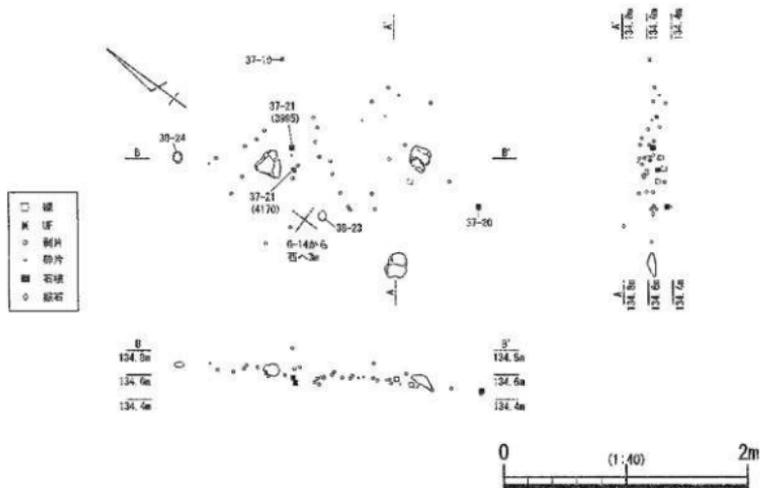
	スタレイバー	ノッチ	RF	UF	複形石器	石筥	剥片	砕片	敲石	計
ブロック9				1	1	1	66	27		96
ブロック10	1	1	8	1		4	92	34		141
ブロック11				2		6	39	12	2	59
ブロック12							6			6
ブロック13							8	1		9
ブロック外							8			8
計	1	1	8	4	1	9	219	74	2	319

第6表 第Ⅲ文化層 石材組成表

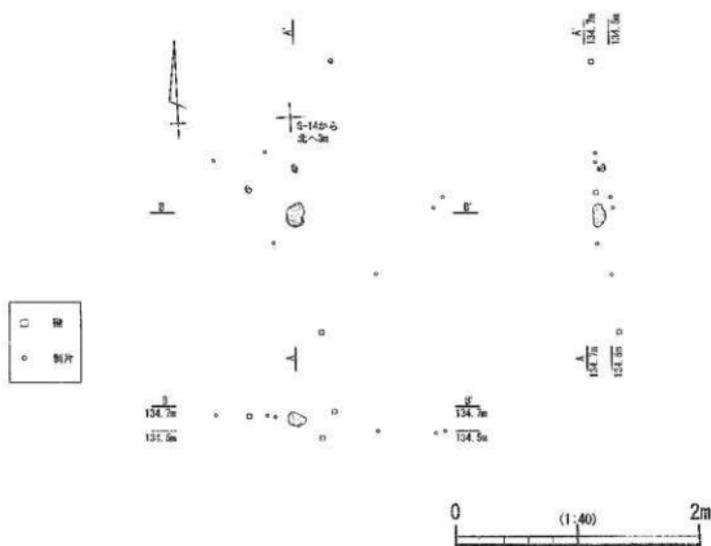
	Ob			Hor	GAn	Da	FT	FAn	CSS	An(Py)	計
	WD-Y	HNHJ	推定不可								
ブロック9				77	18			1			96
ブロック10				157	2			2			141
ブロック11	1			52	3		1		1	1	59
ブロック12				6							6
ブロック13				9							9
ブロック外		2	1	4		1					8
計	1	2	1	286	23	1	1	3	1	1	319



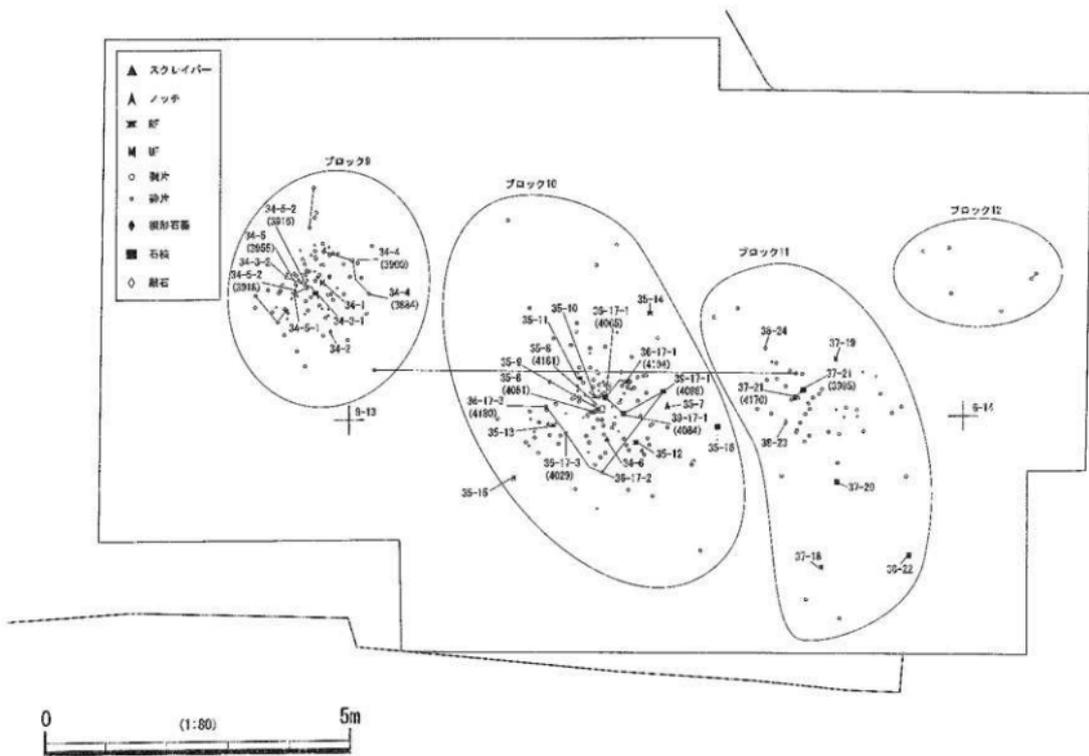
第25図 第III文化層 遺物分布



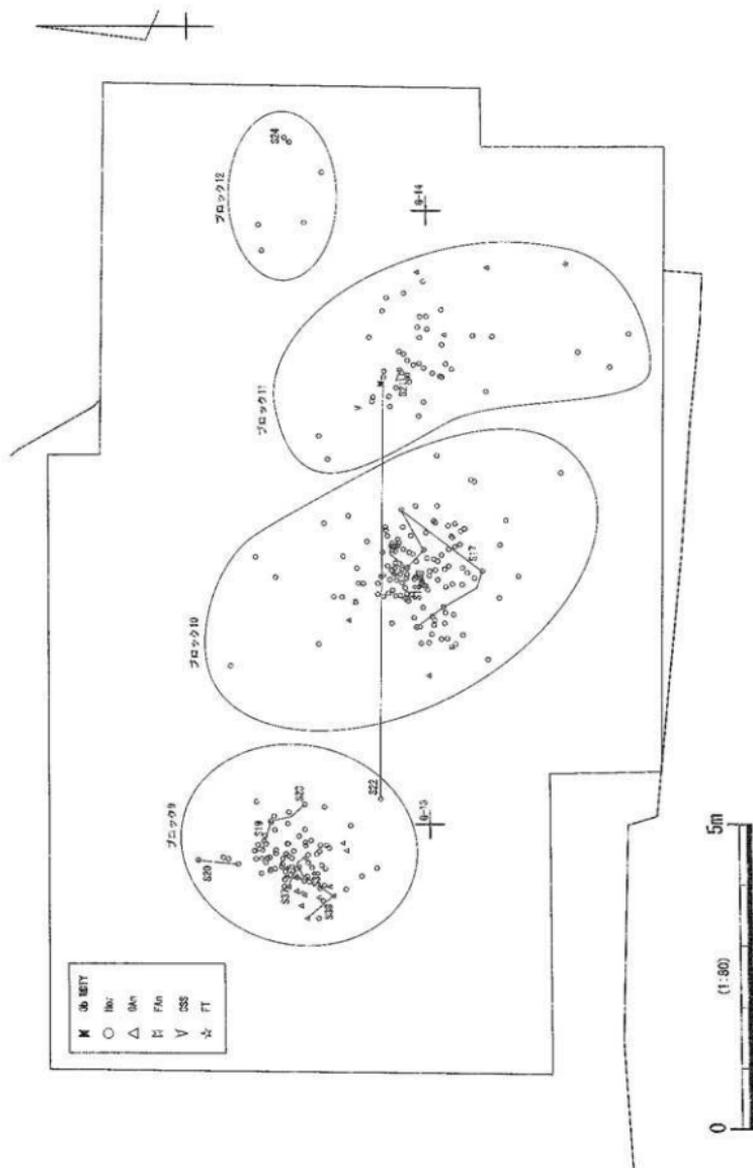
第26図 第Ⅲ文化層 竈群3



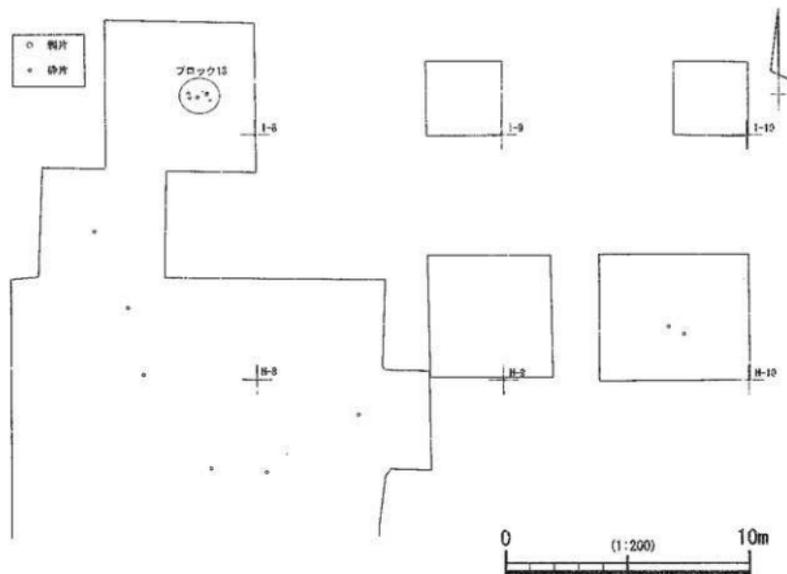
第27図 第Ⅲ文化層 竈群4



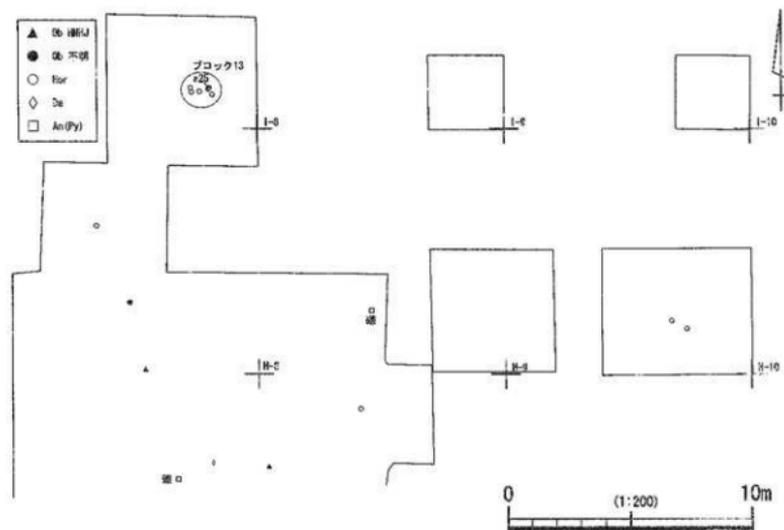
第28図 第III文化層 石器器種別分布(1)



第29回 第三文化層 石種石材別分布(1)



第30図 第III文化層 石器器種別分布(2)



第31図 第III文化層 石器石材別分布(2)

布からSCⅡ～BBⅡ下位に帰属するブロックであるといえる。他の時期には遺物の分布がみられない調査範囲東端に立地しており、ブロック9～12についてはブロック間の接合資料は乏しいものの、同時期に残された可能性が高いといえる。

ブロック9 (第34図1～5)

G-12グリッドとG-13グリッドの境界南半に位置する。

ホルンフェルスが主体であるが、ガラス質黒色安山岩を利用した剥片剥離も一定量行われる。

1はホルンフェルスのUFである。末端部に自然面を取り込む剥片の背面末端部に二次的な剥離が認められる。

2はガラス質黒色安山岩の楔形石器である。自然面が2ヶ所に残されている。下端は表裏への剥離による稜が存在するが、上端は左右からの剥離による剥離面が残されている。

3はガラス質黒色安山岩の石核と剥片の接合資料である。3-2が剥離される以前に剥片剥離はかなり進行している。3-2は平坦な剥離面を打面に、稜を狙った連続した剥離で剥離されたものである。

4・5は剥片の接合資料である。両者とも大型の剥片を素材にして、小型の剥片を剥離する点で共通する。4はホルンフェルスの剥片を素材としており、その腹面を加撃して不定形な剥片を剥離している。先に剥離された3900は打点から半載している。5はガラス質黒色安山岩の右側縁に自然面を残す剥片を素材とする。5-1、5-2の剥離以前に素材剥片の末端部は折れており、その折片が3956である。先行する剥離面と自然面の境界の稜を狙って、5-1、5-2の順番で剥片が剥離されている。

ブロック10 (第34図6、第35・36図)

F-13グリッドとG-13グリッドの境界に位置する。

野台南遺跡最大のブロックである。ホルンフェルスが組成の大多数を占め、ガラス質黒色安山岩と編流安山岩の剥片・砕片をそれぞれ2点ずつ含むのみである。製品が多く含まれる。

6はスクレイパーである。上下が折れた剥片を素材として、その背面左側縁に急角度の刃部を作出する。加工は背面側になされるが、刃部左端の剥離のみ腹面側への剥離である。

7はノッチである。厚みのある剥片を素材とする。抉りの作出は主に1回の剥離で行われ、補助的にもう1度剥離が加えられたらしい。抉りの両端は鋭く突出しており、鏃として機能した可能性もある。抉りの反対の側縁の左半にも二次加工が加えられていることから、複合的な機能を有する石器であった可能性がある。

8～14はRFである。8は背面に自然面を有する剥片の腹面の打点右側に連続した二次加工が認められる。9は厚みのある剥片に両側縁から二次加工を加えたものらしいが、風化が激しく詳細は不明である。10は厚みのある剥片の1側縁に二次加工を加えている。風化が激しく詳細は不明であるが、加工のあり方はナイフ形石器に類するかもしれない。11は鋭い縁をもつ剥片に対して数ヶ所に二次加工を加える。ナイフ形石器と考えることもできるが、加工が乏しく、不定形のためRFとした。基部左側縁に大きな剥離があり、その剥離から間隔をあけて小さい剥離が認められる。基部右側縁は腹面に小さい剥離痕が残されるのみである。12は折れた剥片を素材としている。背腹両面への加工で刃部を作り出している。右側面の折れは二次加工に先行するもので、左側縁の折れは二次加工より後に生じたものである。よって、折れる前の状態では更に二次加工が施されていた可能性があり、スクレイパーであった可能性がある。13は分厚い、寸詰まりの剥片を素材とする。腹面や底面に二次的な剥離が認められる。剥離は意図不明であり、石核の可能性もあるが、剥離がいずれも小さいため、RFとした。14は腹面下部を中心に二次加工が加えられている。二次加工の後に折れている。

15はUFである。背面の大部分が自然面に覆われた横長の剥片を素材とする。縁のところどころに小さい剥離が認められる。

16は石核である。剥片を素材とし、その小口で縦長の剥片を剥離している。打面は折面と考えられる平坦な面である。小口部に設定された作業面の反対側では、不定形の剥片が剥離されており、鋭い形状になっている。

17はRF、石核、剥片の接合資料である。もとは平坦な剥離面を加撃して得られた、背面に自然面を残す縦長剥片である。折れた下半部である4194は末端部の背面に加工がなされるRFである。折れた上半部である4065と4084+4088は石核として利用される。17-2と17-3は両者とも背面からの加撃で剥離される。これらの剥離に明確に先行する剥片剥離は行われておらず、最初期の剥片剥離によって得られた剥片と考えていだろう。左側縁では17-3の剥離の後、背腹両面で剥片剥離が行われる。4084と4088は剥片剥離後に生じた節理面での折れの接合である。

ブロック11 (第37・38図)

礫群3と平面分布、垂直分布ともに重なる。F-13グリッドとG-13グリッドの境界東半に位置する。

ホルンフェルスが大多数を占めるが、その他に様々な石材を含む。石核を多く組成し、敲石も含まれる。

18・19はホルンフェルスのUFである。両者とも大型で鋭い縁をもつ、ツインバルブの剥片を使用している。18は腹面右下隅に比較的急傾度の1度の剥離が、19は腹面左側縁に平坦な数度の剥離が認められる。

20-22は石核である。20・21はホルンフェルス、22は細粒凝灰岩を用いる。20は様々な方向から剥片剥離を行う。最終段階には上面の平坦面を打面にした剥離が目立つ。21は分厚い剥片を素材とし、側縁から背腹両面に剥片剥離を行っている。中央の折れは加撃によって生じた可能性がある。22は、様々な方向の剥離痕が残されているが、最終段階では正面に主に残されている上下端からの剥片剥離が行われている。上端では平坦面を打面に正面、左側面、裏面で剥片剥離を行っている。下端部では裏面に向けて剥離を行った後、打面と作業面を入れ替えて、正面で剥片剥離を行う。風化しやすい石材であり、たとえ剥片剥離がこの場で行われたとしても、剥片は消失している可能性がある。

23・24は敲石である。両者とも比較的小さい円礫を用いる。23は最も鋭い1端に敲打痕が集中する。24は周縁にも部分的に敲打痕が認められるが、平坦な部分にも敲打痕が認められる。平坦な部分の敲打痕は線状を呈しており、両極打法に用いられたような痕跡を残す。

ブロック12

礫群4と平面分布、垂直分布ともに重なる。H-13グリッドとH-14グリッドの境界南半に位置する。

ホルンフェルスの剥片が散漫に分布する。大きいものが多い。

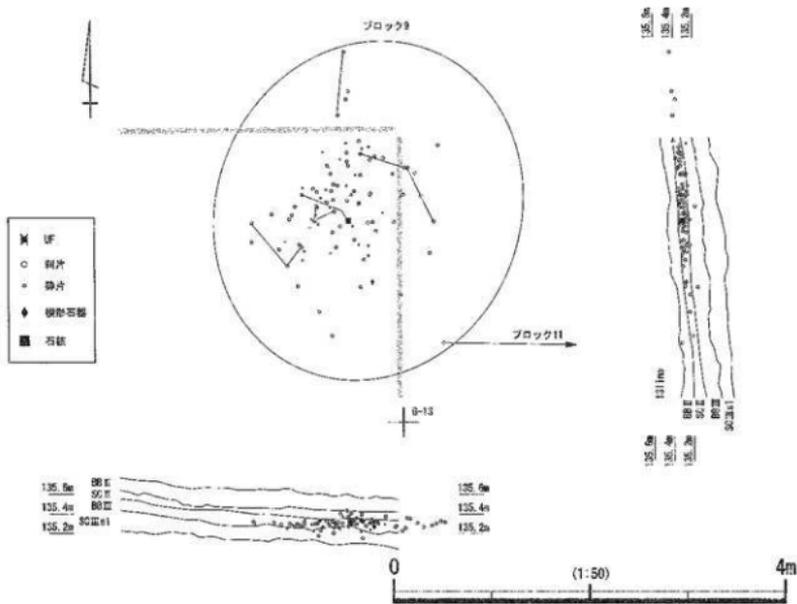
ブロック13

1-7グリッドの南東部に位置する。

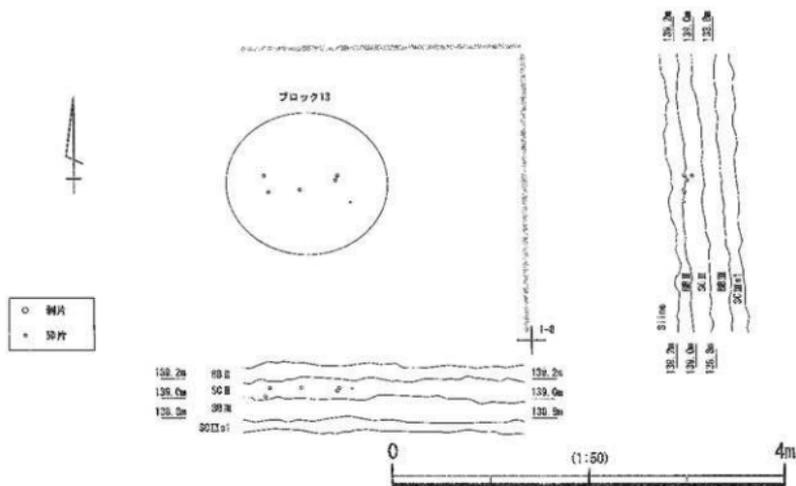
ホルンフェルスの剥片・碎片のみで構成される。大型の剥片を含むが小さいものも含む。その他のブロックから隔たっており、その共時性については不明である。

③ブロック外出土の石器

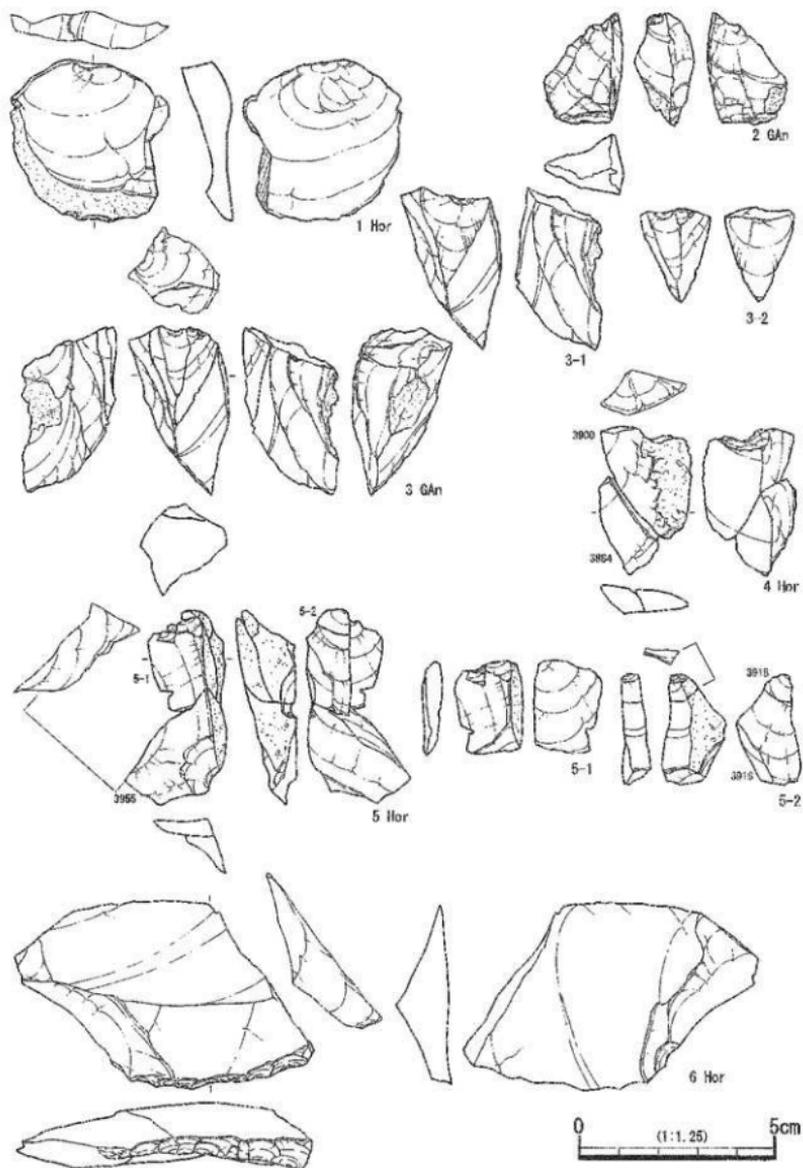
ホルンフェルスに加えて箱根畑宿産黒曜石などが出土している。いずれも剥片である。箱根畑宿産黒曜石は第Ⅲ文化層のブロック中には含まれておらず、ブロックと同時に残されたものである可能性は低い。ホルンフェルスには大型の剥片が含まれている。



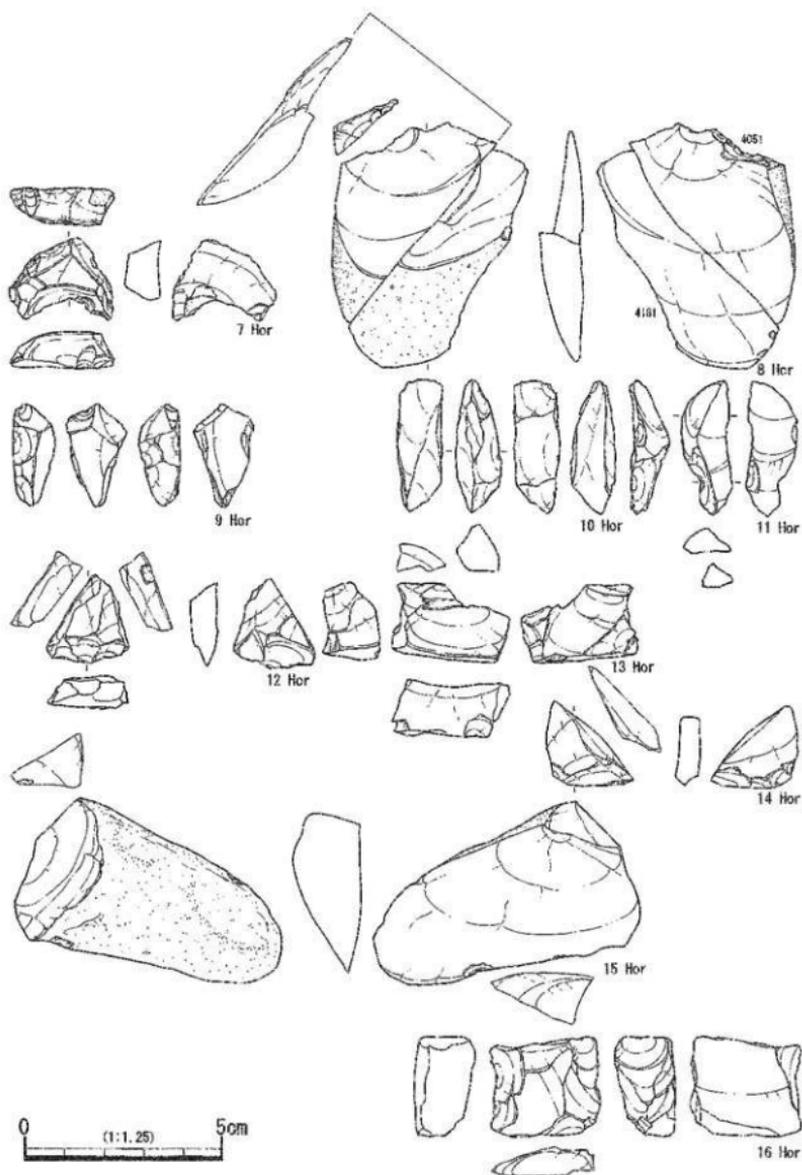
第32図 第Ⅲ文化層 ブロック9



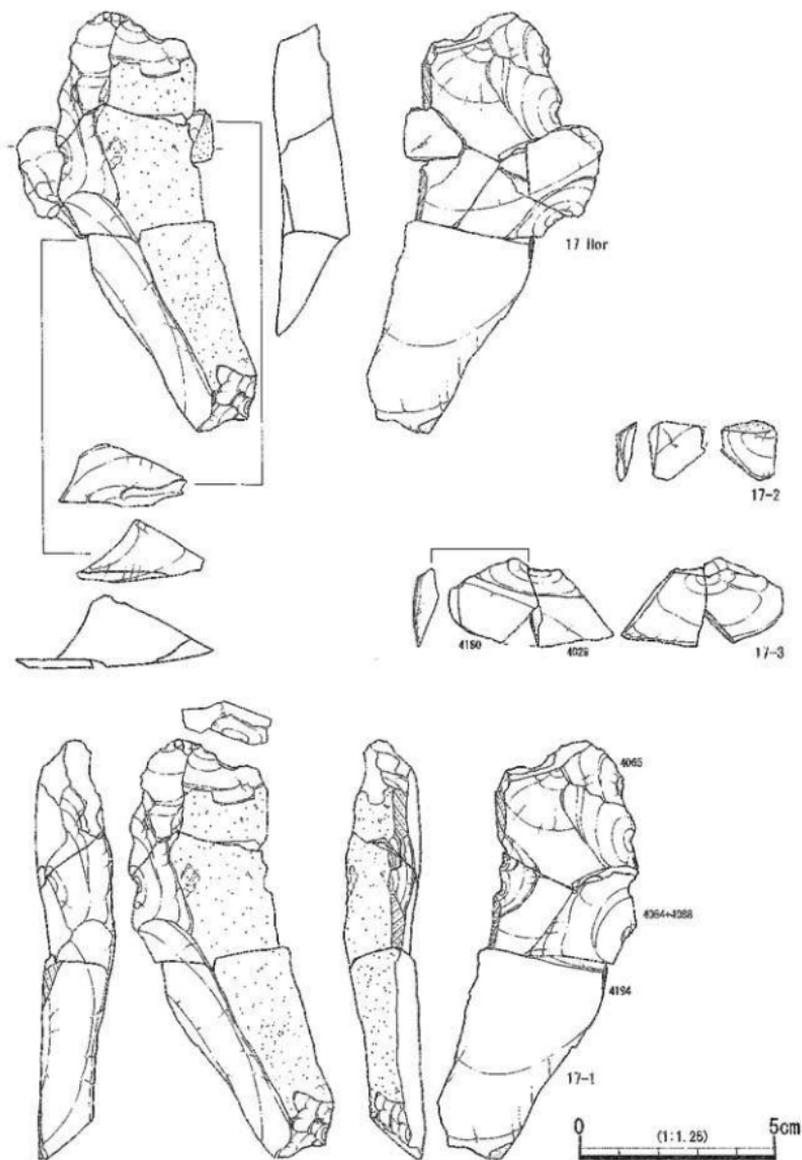
第33図 第Ⅲ文化層 ブロック13



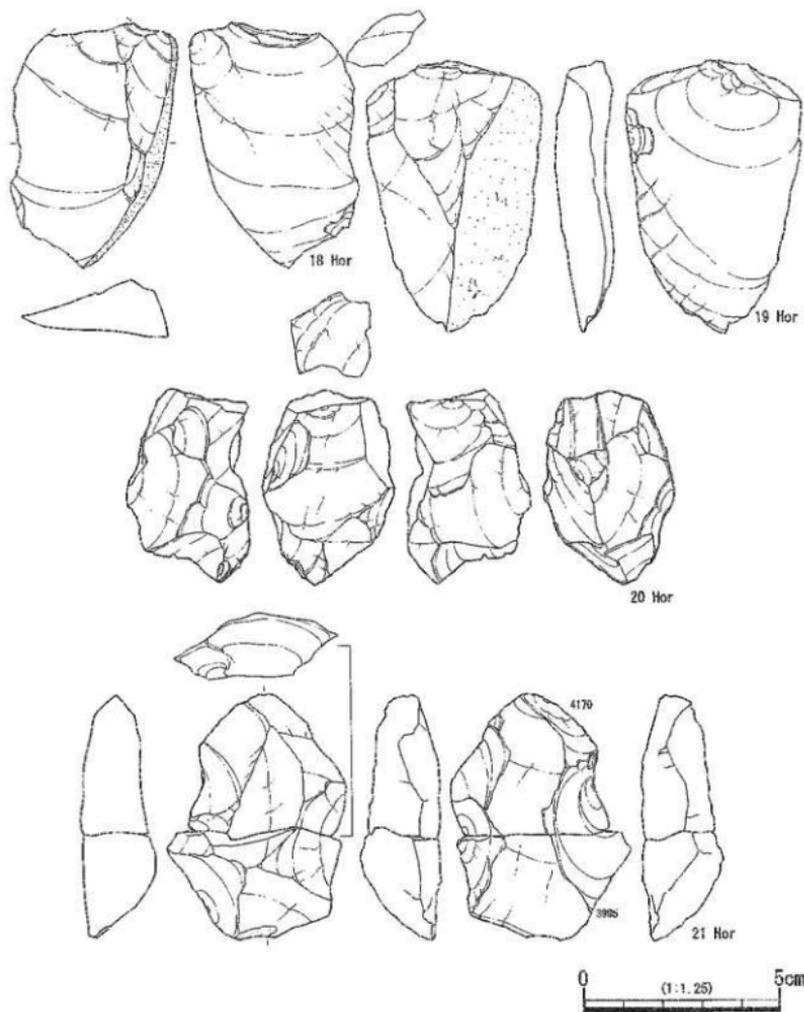
第34圖 第III文化層 石器(1)



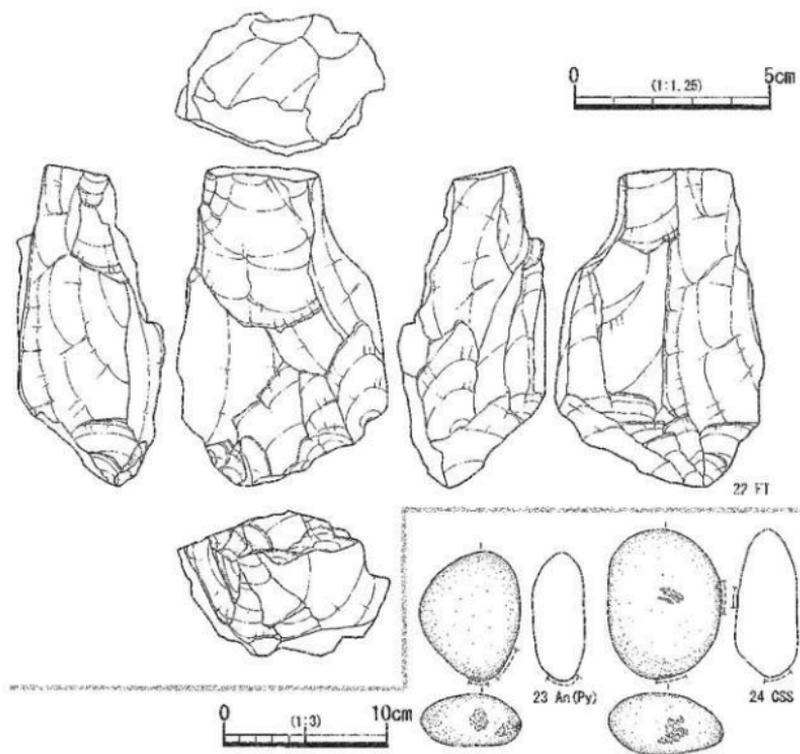
第35圖 第III文化層 石器(2)



第36圖 第Ⅲ文化層 石器(3)



第37圖 第III文化層 石器(4)



第38圖 第Ⅲ文化層 石圖(5)

5. 第Ⅳ文化層

第Ⅲ文化層はSC I 上面に位置づけられる。礫群 2 基とブロック 1 基を含む（第 39 図）。石器 72 点、礫 334 点が出土した。大部分の遺物が G-8 グリッド周辺に集中する。礫群 5 とブロック 14 は重複する。また、礫群 5 と重複して黄鉄鉱を用いた遺物が出土している。

①礫群

G-8 グリッドに大規模な礫群が、その北東に小規模な礫群が位置する。

礫群 5（第 40・41 図）

G-8 グリッドに位置する。野台南遺跡最大の礫群である。ブロック 14 と重複する。SC I 上面に位置づけられる。306 点の礫で構成される。ただし、第 V 文化層の礫群 9 と平面分布が重複しており、両者を明確に区分できていないため、その数は前後する可能性がある。

軽いものから重いものまで多様な礫で構成され、1,000g 以上の大型の礫も 30 点含まれる。約 36% の礫に赤化が認められ、赤化した礫の割合は旧石器時代の礫群中では比較的高い。礫群内に礫の粗密があることから、実際には複数の礫群が重なっている可能性がある。

礫群 6（第 40・42 図）

G-8 グリッドと H-8 グリッドの境界東部に位置する。ホルンフェルスのスクレイパーと黄鉄鉱を用いた遺物と重複する。SC I 上面に位置づけられる。14 点の礫で構成される。3,725g の玄武岩と 2,900g の輝石安山岩の 2 点を中心に、接合して 535g になる礫などを含むが、その他の礫は小さい。一部に赤化が認められるものも含むが、大きいものには赤化は認められない。

②ブロック（第 43・44 図）

G-8 グリッドに 1 基のブロックが位置する。その他にも少量の石器がまとまる部分があるが、ブロックとはしなかった。

ブロック 14（第 45・46 図）

この文化層で唯一のブロックである。礫群 5 と平面分布、垂直分布ともに重なり、SC I 上面に位置づけられる。G-8 グリッド東半に位置する。

ナイフ形石器・角錐状石器に加えて敲石を含む。石材はホルンフェルスが主体だが、ブロック南半には箱根畑宿産を主体とする黒曜石も認められる。石核がガラス質黒色安山岩、敲石が輝石安山岩であるのを除いて、製品はホルンフェルスを用いたものである。

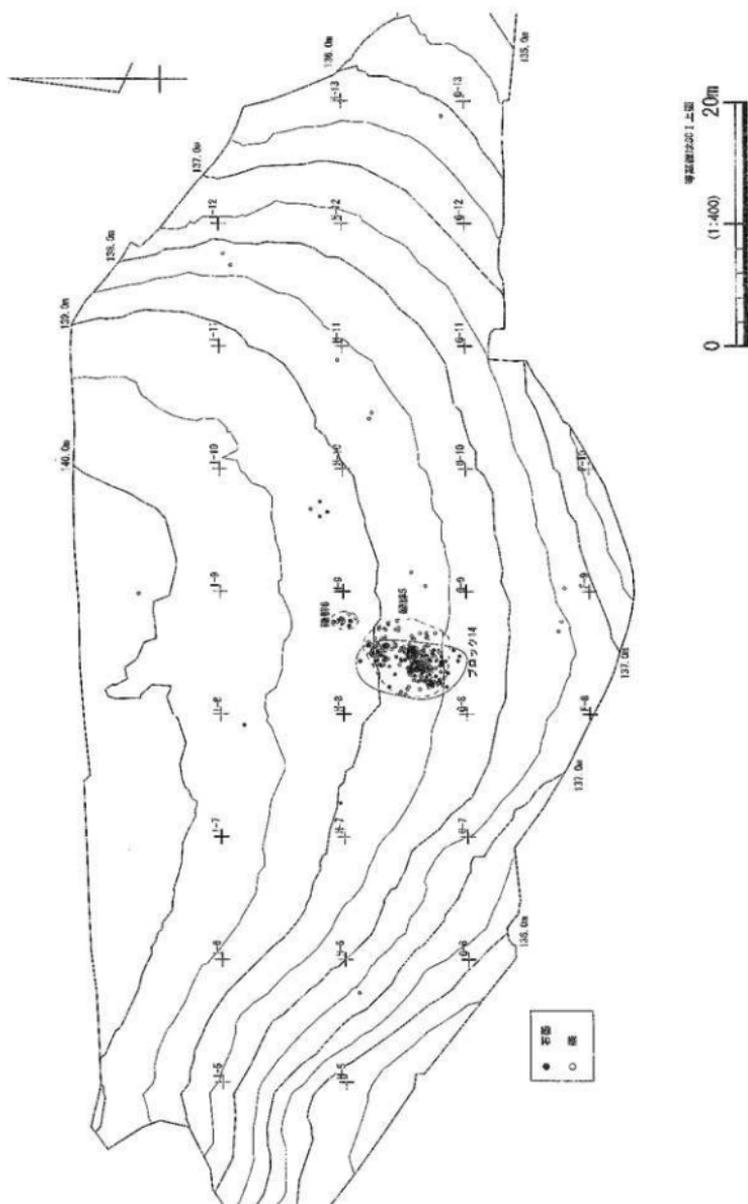
1 はナイフ形石器である。分厚い剥片を素材に腹面と背面に残された平坦面から形成別離が行われる。

第 7 表 第Ⅳ文化層 礫組成表

	ナイフ形石器	角錐状石器	スクレイパー	RF	UF	石核	剥片	砕片	敲石	計
ブロック 14	1	3		1		1	45	7	4	62
ブロック外			1	1	1		6	1		10
計	1	3	1	2	1	1	51	8	4	72

第 8 表 第Ⅳ文化層 石材組成表

	Ob				Hor	Gar	An(Py)	黄鉄鉱	計
	SWHD	HNHJ	推定不可	未分析					
ブロック 14	1	5	1	1	49	1	4		62
ブロック外	2				5			3	10
計	3	5	1	1	64	1	4	3	72



第39図 第IV文化層 遺跡分布



第41図 第IV文化層 跡群5

分類すれば一側縁への加工を中心としたナイフ形石器であるが、右側縁に残された素材縁辺も急角度であり、技術的にも形態的にも角錐状石器に類する。先端部は折れる。

2～4は角錐状石器である。2は腹面からの加撃によって形作られており、背面に残されている素材面はないか、あるいは極めて少しである。先端部を風化により失っている。3は先端部片と考えられる。腹面からの形成剥離が主体であるが、右側面には後上からも剥離が施される。4は上部を大きく欠損した基部片であり、詳細は不明だが、角錐状石器と考えた。

5はRFである。大型の縦長剥片を素材として部分的に二次加工を加えている。風化が激しく詳細は不明であるが、右側縁中央部の小さい剥離の他に大きい剥離もいくらか行われている可能性がある。

6はガラス質黒色安山岩の石核である。6面体状を呈し、正面以外の面には大きい剥離面が残されている。打面と作業面を頻りに転移しながら剥片剥離を行う。

7は剥片2点の接合資料である。同一の平坦な剥離面を打面に剥片を連続して剥離している。7-1は末端部割が折れている。剥片は両者とも厚みがある。

8・9は輝石安山岩を用いた敲石である。粗質な不定形の円礫を用いる。他の文化層出土の敲石に比べて大きい。西端部に敲打痕が認められる。8は加撃による衝撃で三分する。

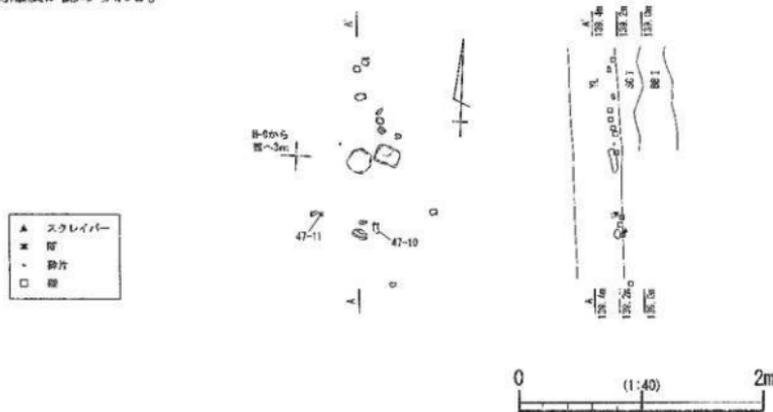
③ブロック外出土の石器（第47回）

ブロック14の北東でホルンフェルスのスクレイパーと黄鉄鉱の遺物が出土している。これらの遺物は、礫群6と平面分布、垂直分布ともに重複するため、SC1上面に位置づけられる。他はいずれも剥片であるが、H-9グリッド南東部では箱祝畑宿産黒曜石を用いたものがみられる。

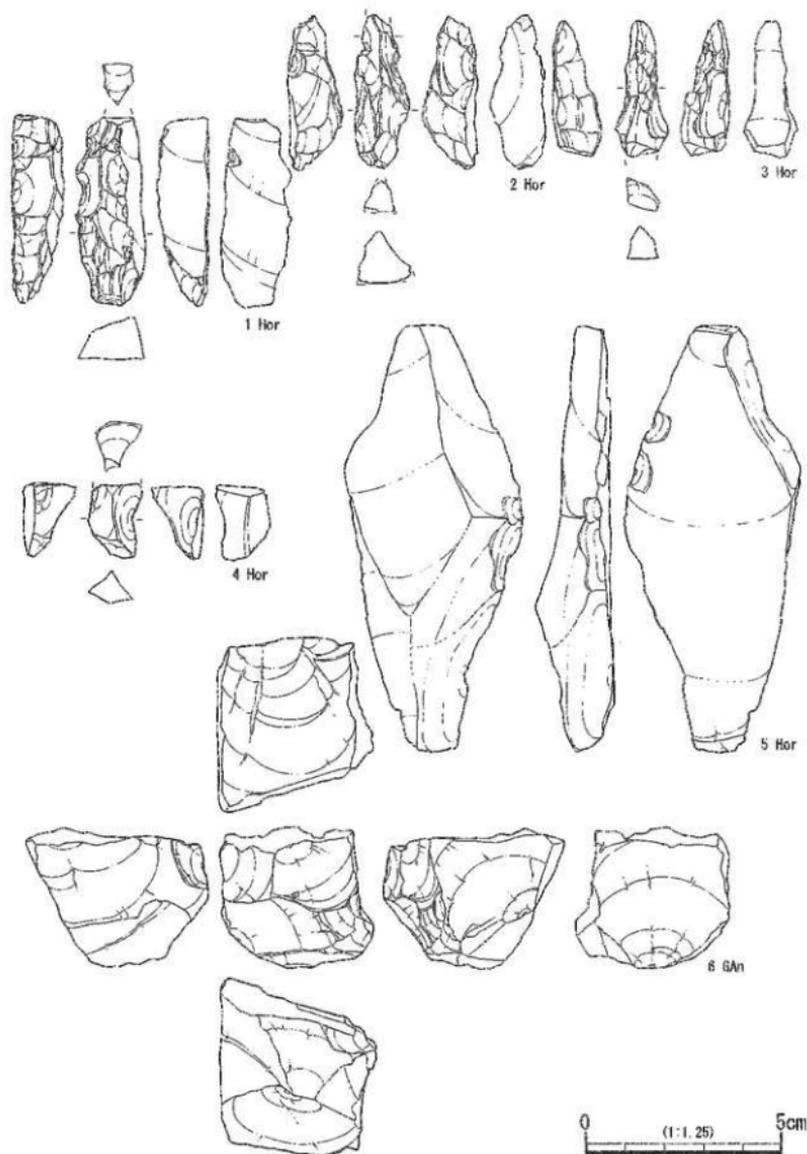
10はホルンフェルスのスクレイパーである。打点側が折れた石刃を素材とする。素材背面の剥離は主剥離の剥離方向と対向する。末端部には背面に残された主剥離に先行する剥離の打面が残される。石刃の右側縁に軽い二次加工を加えて刃部を作り出している。

11は黄鉄鉱のRFである。剥片を加撃して得られた小片を素材とする。細かい二次加工を加えて鎌状の突出部を作出する。

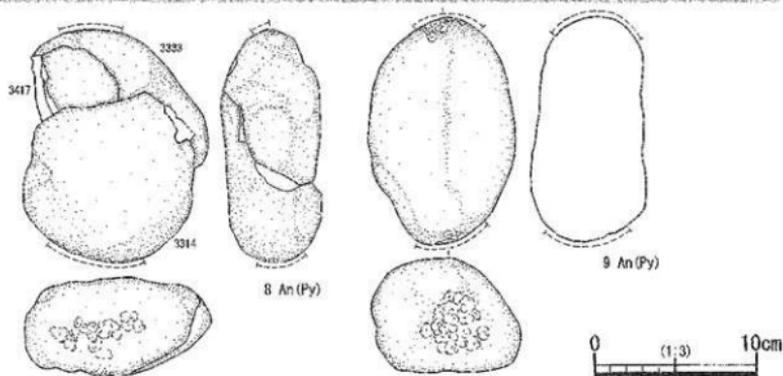
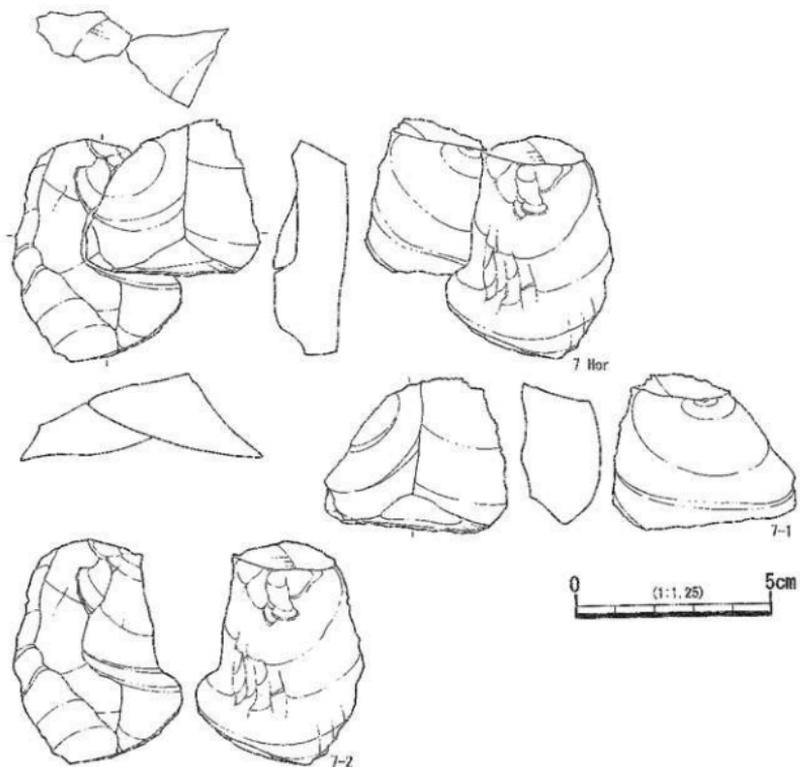
12は黄鉄鉱のUFである。打面に2枚の剥離が認められる扁平な不定形剥片を利用する。鋭い右側縁に剥離痕が認められる。



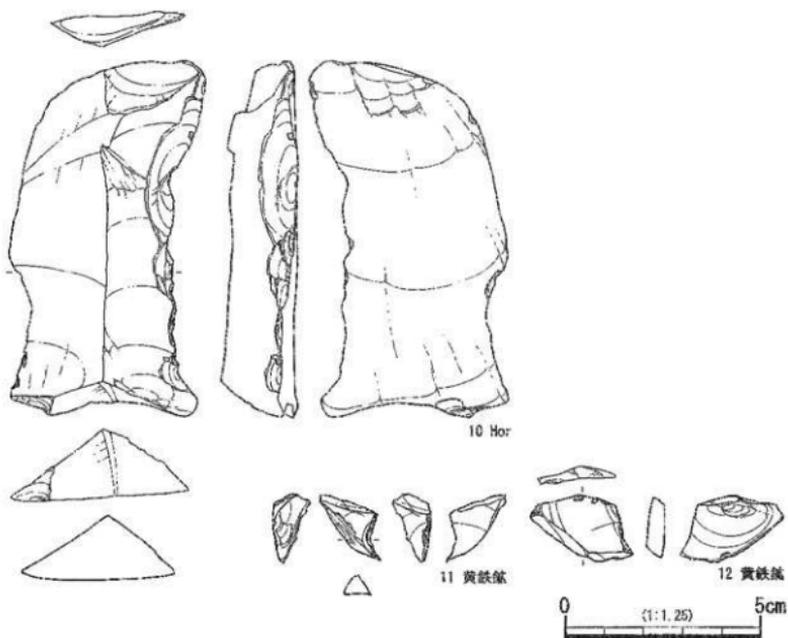
第42回 第Ⅳ文化層 礫群6



第45圖 第IV文化層 石器(1)



第46圖 第IV文化層 石標(2)



第47圖 第IV文化層 石器(3)

6. 第V文化層

第V文化層はYLに位置づけられる。土坑3基と礫群6基を含む（第48図）。石器については分布に偏りはあるものの、層位が安定していないこともあり、有為なものにはならないと考えブロックの設定は行わなかった。石器130点、礫174点が出土した。調査区中央部に遺物分布がまとまる傾向がある。

①土坑（第49図）

SC 1上面で検出されたもの2基とBB 1上面で検出されたもの1基が第V文化層に属すると判断された。第V文化層における石器の分布は散漫で、土坑がどういった石器と同時に残されたものであるかは明らかでない。

土坑1

G-11グリッド中央に位置する。浅い皿状で、不正形である。

土坑2

H-6グリッド南東隅に位置する。底面に広い平坦面を有する。YL中位に位置づけられる礫群7と近接するが、その関係は不明である。

土坑3

G-7グリッド東部に位置する。検出面はBB I上面であるが、より上層から掘り込まれた可能性が高く、覆土がYLであるため、第V文化層に属すると考えた。上面で検出できなかったため規模等は不明である。

②礫群

礫群6基が検出された。調査範囲に広く分布する。礫群11には礫群の範囲を超えた接合が認められ、礫群9の礫とも接合する（第50図）。全体として、旧石器時代の礫群の中では赤化が認められる割合が高い。

礫群7（第51図）

H-6グリッドの南東部に位置する。YL中位に位置づけられる。14点の礫で構成される。4,065gを重量に1,000g以上の大型の礫が4点含まれる。最も大きい礫に赤化が認められ、赤化して砕けた礫も存在する。土坑2と近接するがその関係は不明である。ホルンフェルスを主体とする剥片が比較的集中して分布しており、礫群と同時期に残された可能性が高い。

礫群8（第51図）

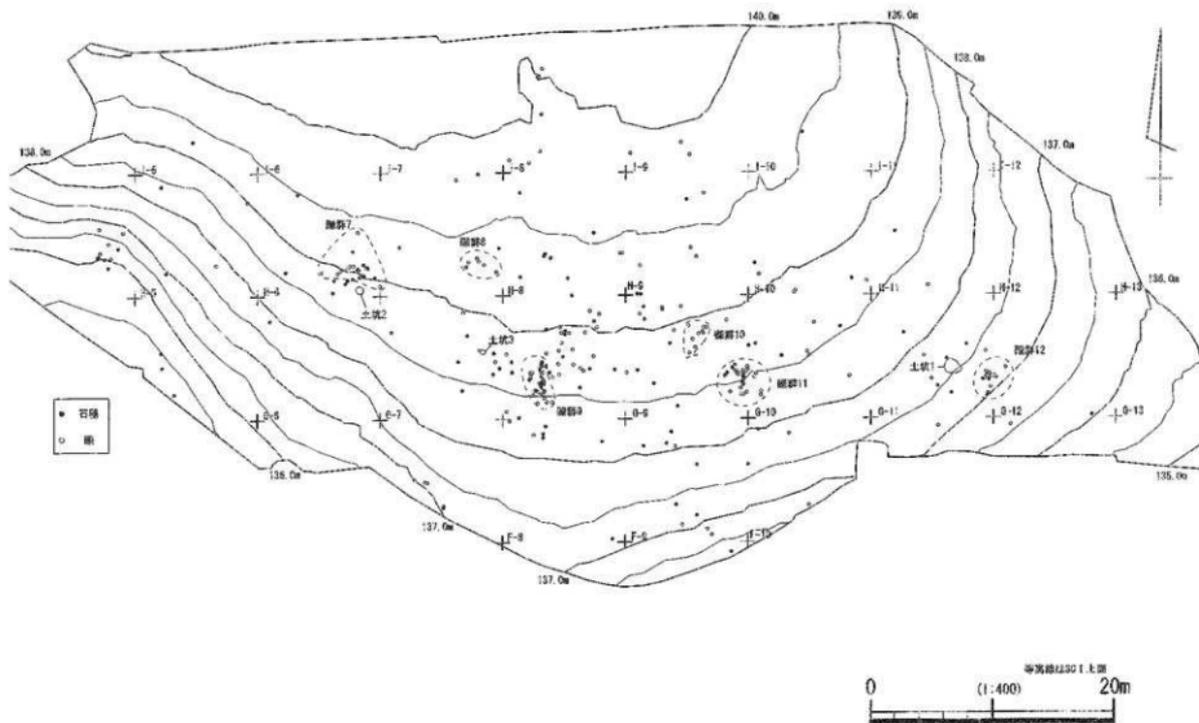
H-7グリッドの南東部に位置する。YL中位に位置づけられる。6点の礫で構成される。最も重いものでも520gであり、比較的小さい礫で構成されている。半数以上に赤化が認められる。

礫群9（第52図）

G-8グリッド南西部に位置する。YL中位に位置づけられる。26点の礫で構成される。5,500gの大型の礫が最も大きく、それに次ぐものは630gと200gである。赤化している礫は少数である。礫群11と接合関係を有する。箱根畑宿産黒曜石とホルンフェルスの石器と水平分布、垂直分布ともに重なる。ただし、箱根畑宿産黒曜石を用いたスクレイパー（第56図9）は出土位置が低いため、伴うものかどうかは不明である。また、第IV文化層の礫群5と平面分布が重複しており、垂直分布も近接するため、両者を完全には分離できていない。

礫群10（第52図）

G-9グリッド中央北東寄りに位置する。9点の礫で構成される。最も重いものでも540gであり、比



第48圖 第V文化層 遺構・遺物分布

較的小さい礫で構成されている。半数以上の礫に赤化が認められる。

礫群11 (第53図)

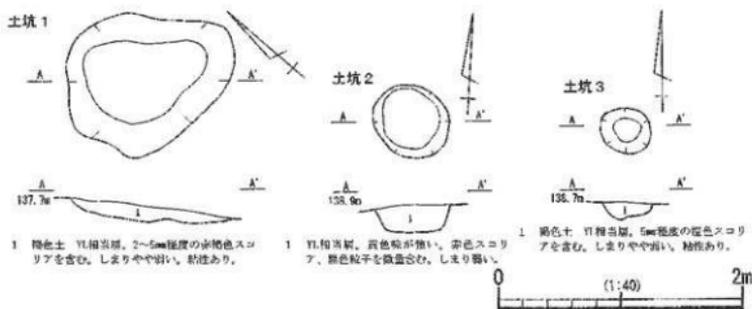
G-9グリッドとG-10グリッドの境界南半に位置する。YL中位に位置づけられる。21点の礫で構成される。2,765gの大型の礫が最も大きく、それに次ぐものは970gと355gで、100g前後のものも一定量含む。約半数の礫に赤化が認められるが、特に大きいものには赤化が認められない。礫群9と接合関係を有するほか、I-9グリッドとG-10グリッドの礫との接合がみられ、礫群外との接合が多い。ホルンフェルスの剥片や敏石と水平分布、垂直分布ともに重なる。浅黄褐色をした花崗岩の小円礫はわずかに低位からの出土であり、礫群に伴うものであるかは明らかでない。

礫群12 (第53図)

G-11グリッドとG-12グリッドの境界南半に位置する。YL中位から上位にかけて分布が認められる。12点の礫で構成される。4,330gと1,235gの大型の礫と440gの礫を含み、200g台の礫を多数含む。半数以上の礫に赤化が認められる。平面分布ではナイフ形石器2点と重複するが、1点(第56図4)はFB出土のため礫群に伴うものかは不明である。

③出土石器 (第54～57図)

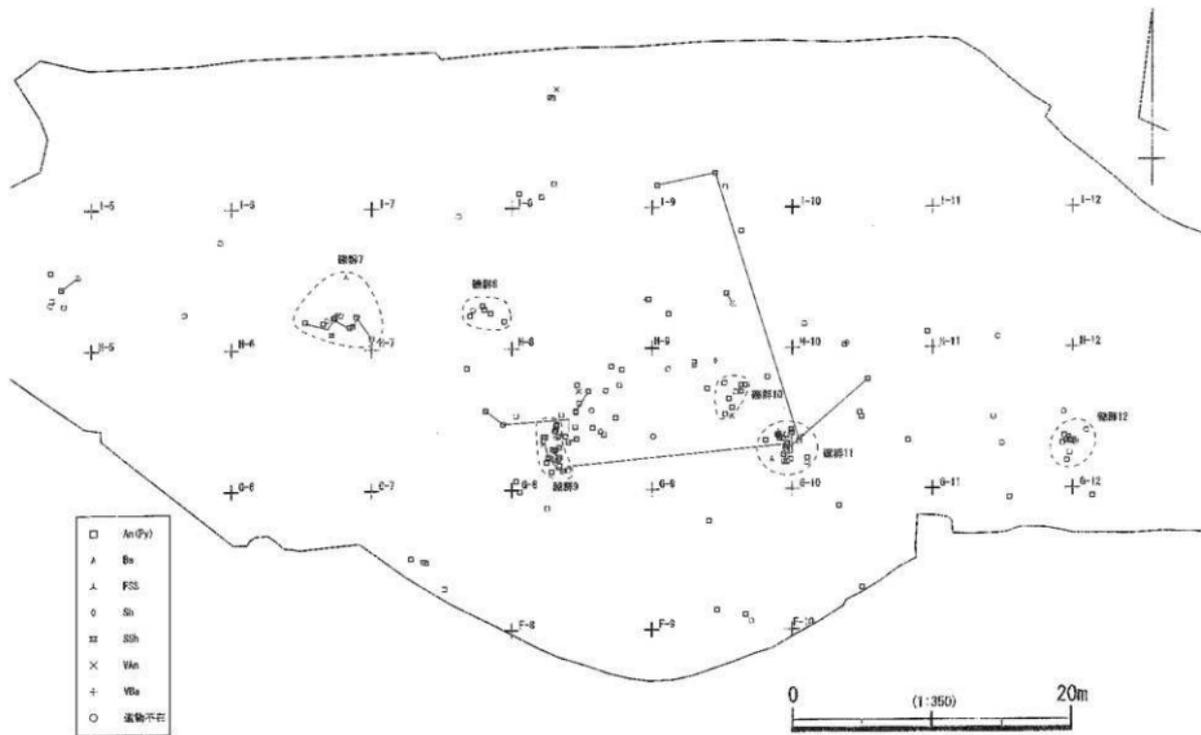
遺物の分布が散漫に調査区に広く認められるため、ブロックに分けることは行わなかった。ナイフ形石器を多く含むが、細石刃も含まれており、一時期に残されたものとは考えられない。石材では黒曜石の利用が最も多く、ホルンフェルスがそれに次ぐ。黒曜石の中では諏訪屋ヶ台産の利用が最も多く、神津島尾馳鳥産、霜根畑宿産も一定量含まれる。ホルンフェルスはその大部分が剥片・碎片であり、諏訪屋ヶ台産黒曜石についても剥片・碎片が一定量認められるものの、その他の石材では剥片・碎片の量は乏しい。その他の石材では石核も出土しておらず、明確な剥片剥離作業が行われたとは考えられない。また、諏訪屋ヶ台産黒曜石については、調査範囲中央に剥片が分布し、製品は中央部以外から出土する傾向がある。



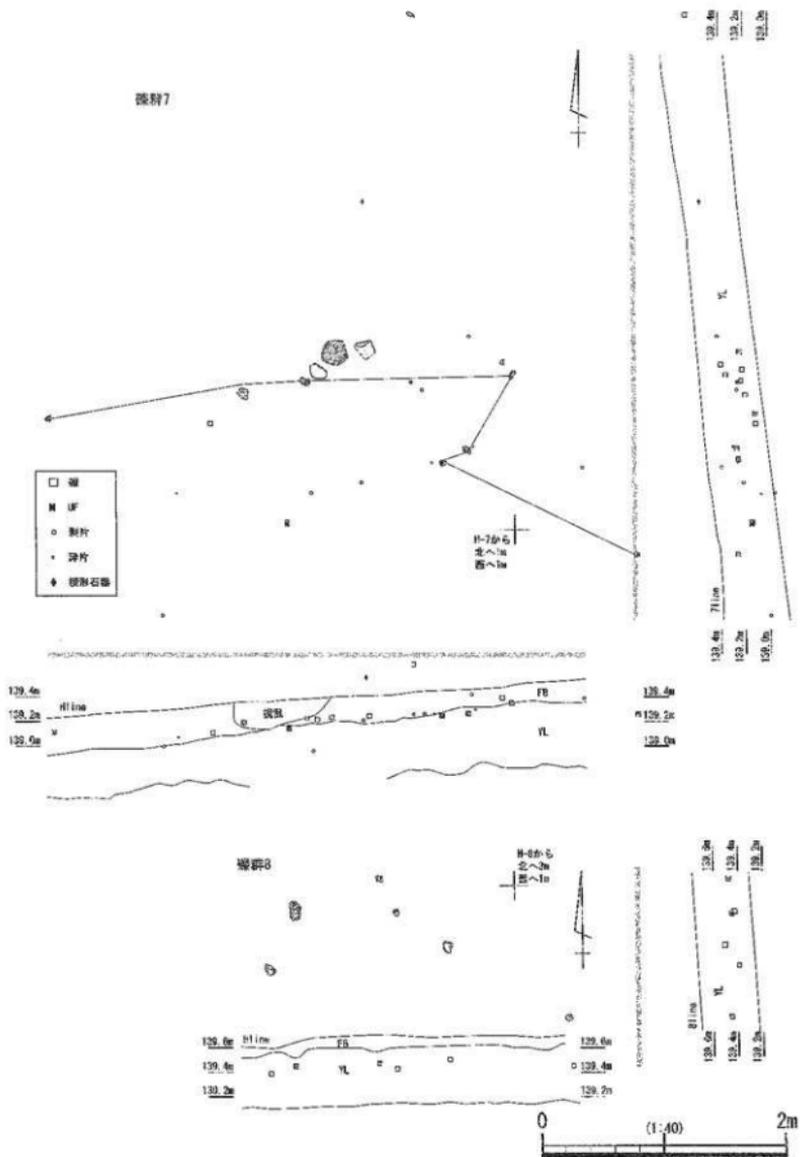
第49図 第Ⅴ文化層 土坑1～3

第9表 第Ⅴ文化層 土坑計測表

遺物名	深さ(m)	検出面		底部	
		長径(m)	短径(m)	長径(m)	短径(m)
土坑1	0.13	1.48	1.14	1.00	0.69
土坑2	0.21	0.65	0.59	0.50	0.47
土坑3	0.14	0.43	0.39	0.23	0.20

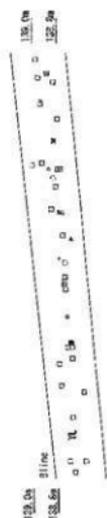
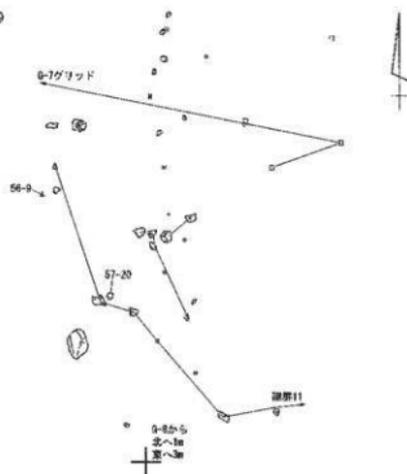


第50圖 第V文化層 礫石材別分布

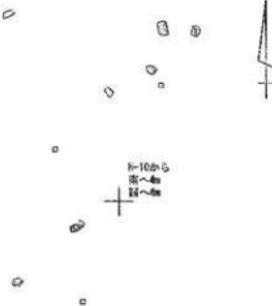


第51圖 第V文化層 圖群7・8

図群9



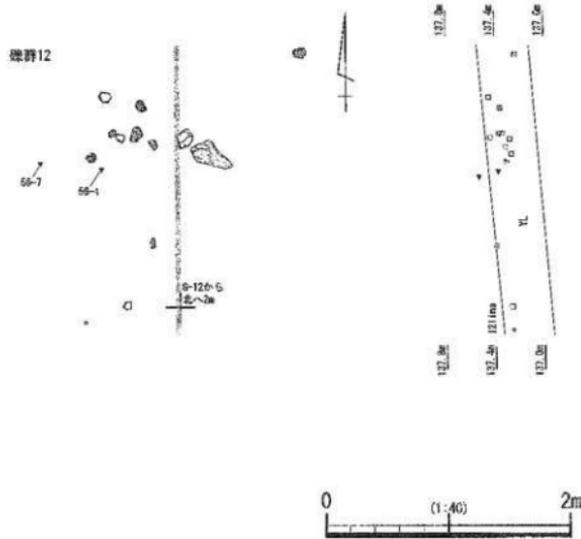
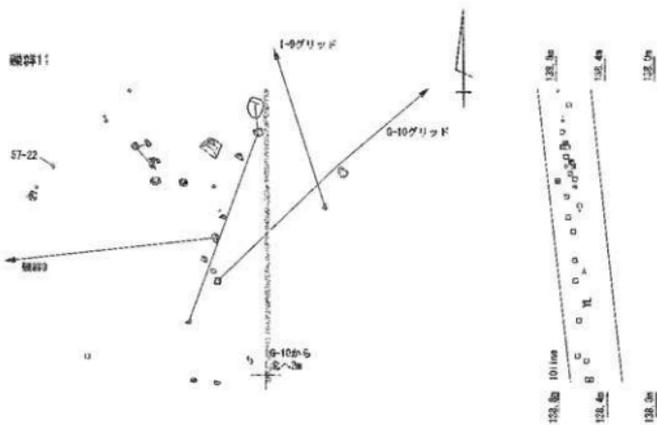
図群10



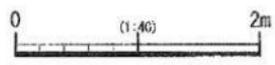
- | | |
|---|--------|
| ▲ | スクレイパー |
| ✱ | 石 |
| ■ | UF |
| ○ | 割片 |
| ◦ | 碎片 |
| ■ | 石核 |
| □ | 礎 |



第52図 第V文化層 礎群9・10



- 礎
- ▼ ナイフ形石器
- 燧片
- ・ 碎片
- A 小円鏡
- ◇ 磨石



第53図 第V文化層 図群11・12

ナイフ形石器は7点出土し、全点を図化した(第56図1~7)。1~5は黒曜石を、6・7はガラス質黒色安山岩を用いる。黒曜石の産地は1が諏訪屋ヶ台、2が和田土屋溝西、3~5が箱根畑宿である。1は左肩に刃部を有する二側縁加工ナイフ形石器である。素材剥片を横位に用い、背面には急斜度の、腹面には平坦な二次加工を加える。先端部には折面様の平坦面が認められるが、その後二次加工が行われている。刃部背面にも平坦な剥離が認められるが、使用に関わるものである可能性もある。2は石刃を素材とした大型の二側縁加工ナイフ形石器である。石刃の打点側を先端部に据える。左肩に刃部を有する。背面への急斜度剥離が二次加工の主体だが、基部端のみ腹面への加工が施される。刃部には使用痕と考えられる微細剥離痕が多数認められる。3は厚みのある剥片を横位に用い、一側縁に形成剥離を行う。右肩に刃部を有し、右側縁下半には素材の折面があてられているため、形態は二側縁加工ナイフ形石器に類する。左側縁の加工は中央部では大きい剥離でなされるが、先端部は細かく剥離が行われる。4は縦長剥片の打点側を先端部に据えた、二側縁加工ナイフ形石器である。右肩に刃部をもつ。腹面先端に認められる剥離は衝撃剥離の可能性がある。基部には平坦な素材面が残されている。5は厚みのある剥片を斜位に用いた二側縁加工ナイフ形石器である。刃部には微細剥離痕が認められる。6は素材剥片を斜位に用いた二側縁加工ナイフ形石器である。先端部は特に鋭く成形されている。7は石刃の打点側を先端部に据えて、打点側を除去するように二次加工を加えた部分加工ナイフ形石器である。基部側が折れており、詳細は不明である。左側縁の刃部は鋭いが形は整っていない。また、右側縁下端にも鋭い素材面が残存する。

スクレイパーは3点出土し、全点を図化した(第56図8~10)。8は諏訪屋ヶ台産黒曜石を用いる。背面に平坦な自然面を広く残した、薄く扁平な不定形剥片を素材とする。スクレイパーの刃部になっている素材剥片の右側縁は鋭い縁辺であった可能性がある。刃部は、背面に小さい二次加工が連続して認められ、腹面にも部分的に剥離痕がみられる。刃部とは反対側の側縁にも微細剥離痕が認められる。9は箱根畑宿産黒曜石を用いる。上部を除く全周に二次加工が行われている。素材は厚みのある剥片であったと想定されるが、腹面側にも加工が加えられ、かなり変形されている可能性が高く、詳細は不明である。刃部の作出は背面への急斜度剥離が主体である。右側縁の二次加工は粗い。10はガラス質黒色安山岩の板状の小礫を素材とする。裏表両面への剥離で刃部を作り出す。刃部右端は剥離角が急角度過ぎて有効な刃部とは考えにくい。加工は全体に粗い。

第10表 第V文化層 器種別数表

	ナイフ 形石器	スクレ イパー	石鏃	RF	UF	鋸石刃	剥片	砕片	微形 石器	石核	礫石	礫石?	台石?	小円礫	計
Ob	WDIN	1													1
	SWHD	1	1		3	4	15	2							26
	TSTY			1				2							3
	HNHL	3	1		2	2		5	1						14
	KZOB				2	2	3	5	2	1					15
	推定不可 未分析					1		2	1						4
Hor				1			38	7		3				49	
GAn	2	1					2							5	
Ch							3							3	
STu					2									2	
HPT							1				1			2	
An(Py)											1	1	2	4	
Gz														1	
計	7	3	1	8	11	3	75	13	2	3	2	1	2	1	130

錐は1点出土した(第57図11)。礫科冷山産黒曜石の不定形剥片を素材とし、末端部に鉋状の突出を作り出す。素材剥片打点側にも極めて急角度な二次加工が施される。二次加工は背面への急斜度剥離が主体であるが、部分的に腹面に平坦剥離が認められる。

RFは8点出土し、1点を図化した(第57図12)。12はホルンフェルスの小剥片を素材とする。ナイフ形石器の可能性があるが、加工が乏しいためRFとした。左側縁下半に背面に向けた二次加工が認められる。上端部は折れている。

UFは11点出土し、3点を図化した(第57図13～15)。13は諏訪星ヶ台産黒曜石の打点側が折れた石刃を素材とする。両側縁に多くの微細剥離痕が認められる。14は神津島恩馳島産黒曜石の小石刃を素材とする。上下両端が折れている。右側縁に微細剥離痕が認められる。細石刃の可能性はあるが、細石刃としたもの比べて大きいためUFとした。15は背面に自然面を残した硬質細粒凝灰岩の剥片を素材としている。素材剥片はツインバルブで両側縁に鋭い縁辺を有する。右側縁に部分的に微細剥離痕が認められる。

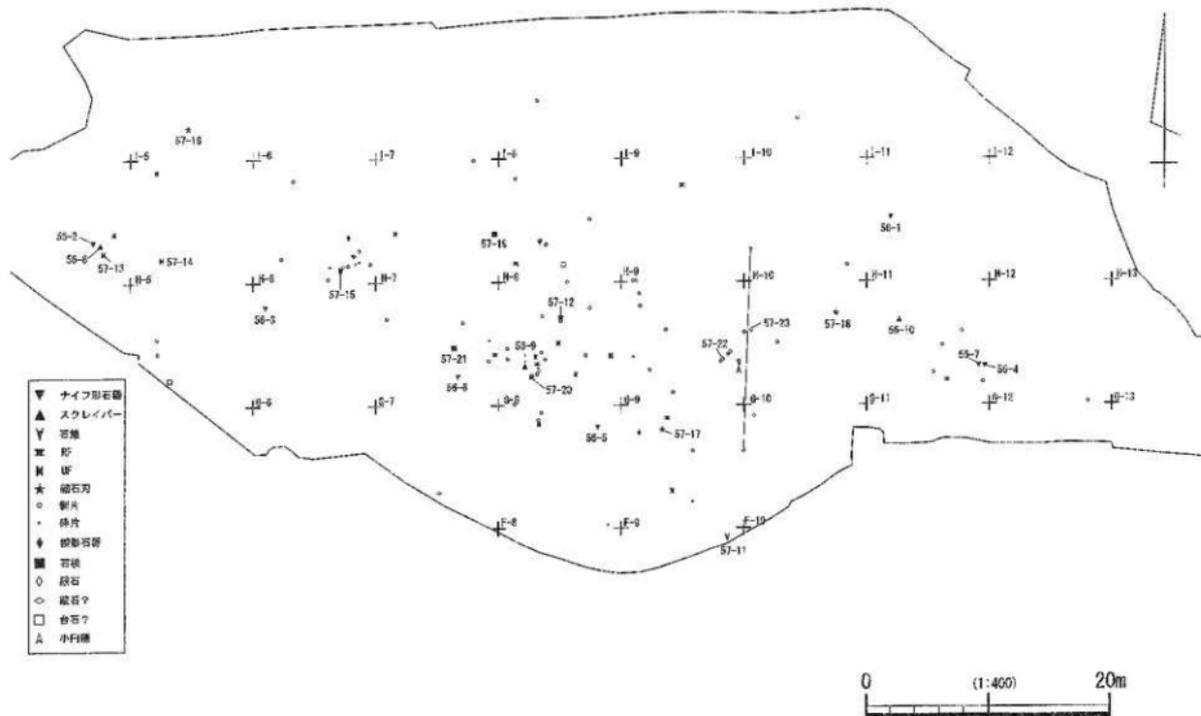
細石刃は3点出土し、全点を図化した(第57図16～18)。神津島恩馳島産黒曜石を用いる。打点側の破片で、末端部側は折れている。17は点状打面である。18は左側縁上端に微細剥離痕が認められる。

石核は3点出土し、全点を図化した(第57図19～21)。全てホルンフェルスの円礫を用いる。19は円礫を分割したものを素材とする。正面での剥片剥離が主体だが、上面でも2枚の剥片が剥離されている。正面での剥離は上面を打面にしたものがほとんどだが、それとは異なる面を打面にした剥離も認められる。20は自然面を1面に残しながら、打面と作業面を頻繁に転移して剥片剥離を進行させる。21は背面に自然面を残す剥片の腹面で剥片剥離を行う。

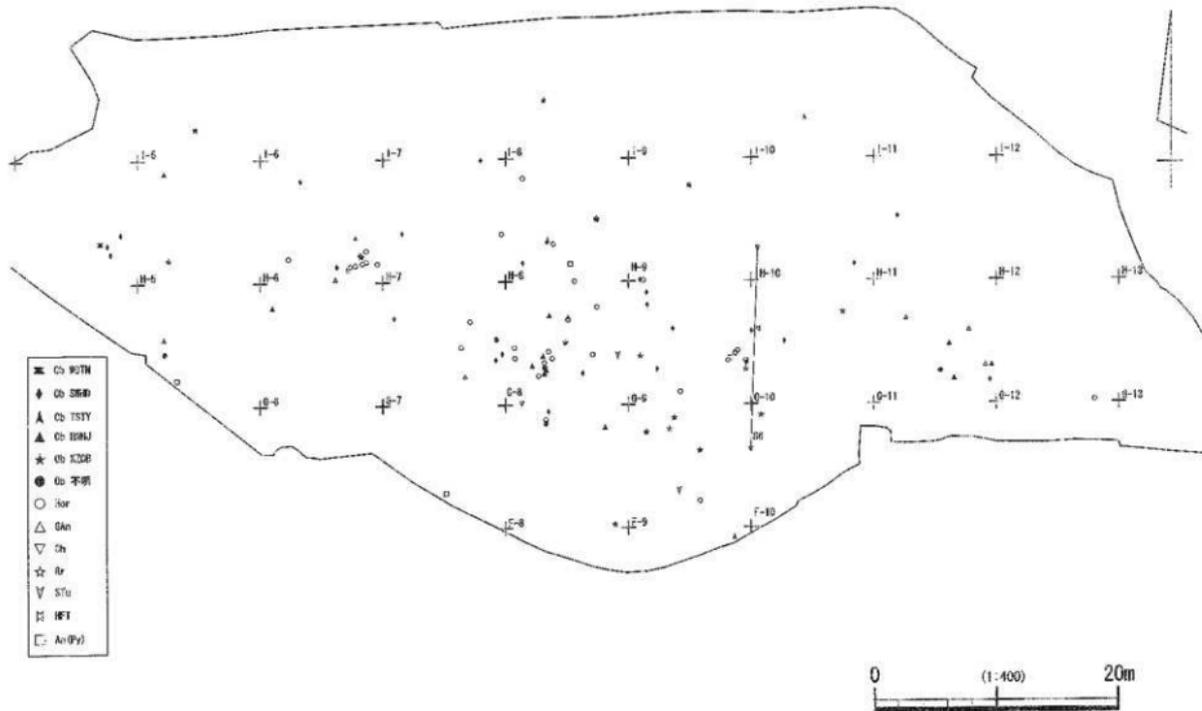
敲石は2点出土し、全点を図化した(第57図22・23)。22は輝石安山岩の円礫を利用する。端部に敲打痕が認められ、一部には剥離も生じている。被熱している可能性がある。23は硬質細粒凝灰岩の円礫を利用する。大部分に敲打痕が認められ、剥離もいたるところで生じている。度重なる使用があったものと考えられる。

石質のために人為による加工が加わったものであるか明確でないものを「敲石？」および「台石？」とした。敲石？は1点、台石？は2点出土した。

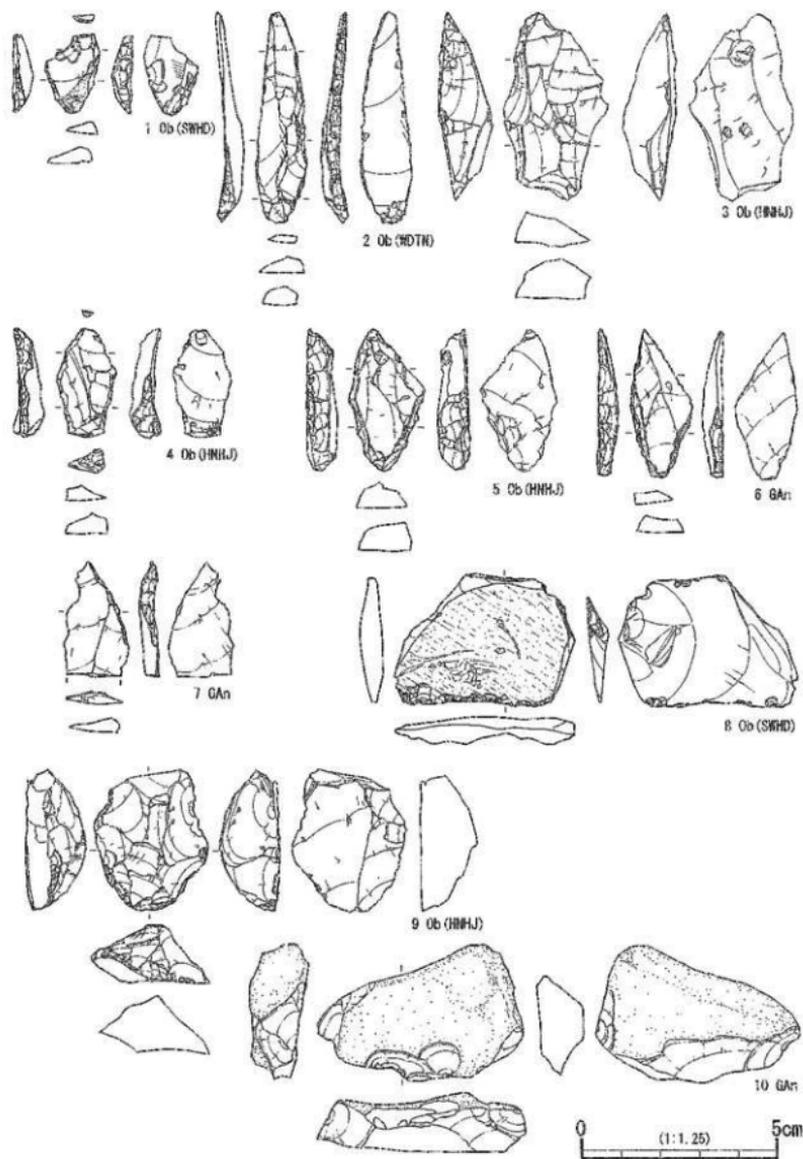
明確な加工の痕跡は認められないが、その他の礫とは明らかに性格が異なると考えられたものを小円礫とした。1点出土している。浅黄褐色をした花崗岩の30mm大の円礫で、わずかに三角形を呈する。



第54図 第V文化層 石器器種別分布

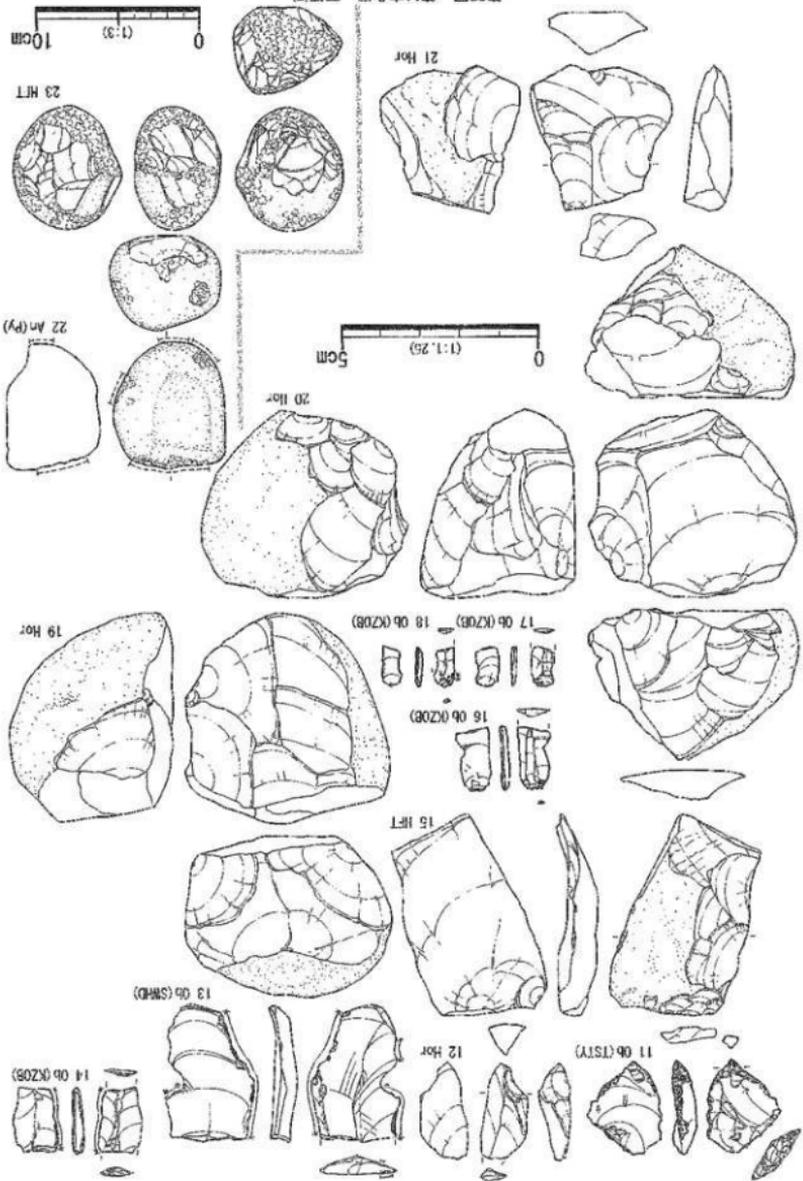


第55圖 第V文化層 石類石材別分布



第56圖 第V文化層 石器(1)

第57圖 第V文化層 石器(2)



第3節 縄文時代の遺構と遺物

1. 概要

縄文時代の遺構は住居跡2基、土坑8基、ピット3基、奠石9基がある。遺物は、土器が1314点、石器が534点である。ただし、土器の点数については、現地調査と整理作業の結果登録された遺物番号の数であり、破片数はより大きい値となる。

KU・FB出土のものに加えて、表面採集されたものや攪乱中から出土したもののうち縄文時代に属する可能性が高いものについては縄文時代の遺物に含めている。また、YL出土の遺物のうち縄文時代に属することが明らかな石鏃3点、打製石斧1点、土器1点を含む。また、YL出土の石器と接合した石器1点、および旧石器時代に属することが明らかなナイフ形石器5点、細石刃2点を旧石器時代第V文化層の遺物とした。

土器は早期前半から後期までの型式が出土している。特に数が多いのは早期後半から前期初頭にかけてと中期後半の土器である。

2. 遺構と遺構出土の遺物

ここでは遺構および遺構から出土した遺物について報告する。検出された遺構は住居跡2基、土坑8基、ピット3基、奠石9基である(第58図)。遺構出土の土器の記載に用いられている土器分類については、次項の遺構外出土の土器で述べる。

①住居跡

住居跡と考えられる遺構が2基検出された。両者の間は約4.1mで近接する。ともに南東にむかって下る緩斜面の標高139m強の地点に位置する。平面円形で、石囲炉、埋甕、柱穴をもつ点で同様の構造である。出土している遺物も土器分類12類：曾利Ⅲ式土器が主体で、同時期に並存したと考えられる。

a. 住居跡1(第59・60図)

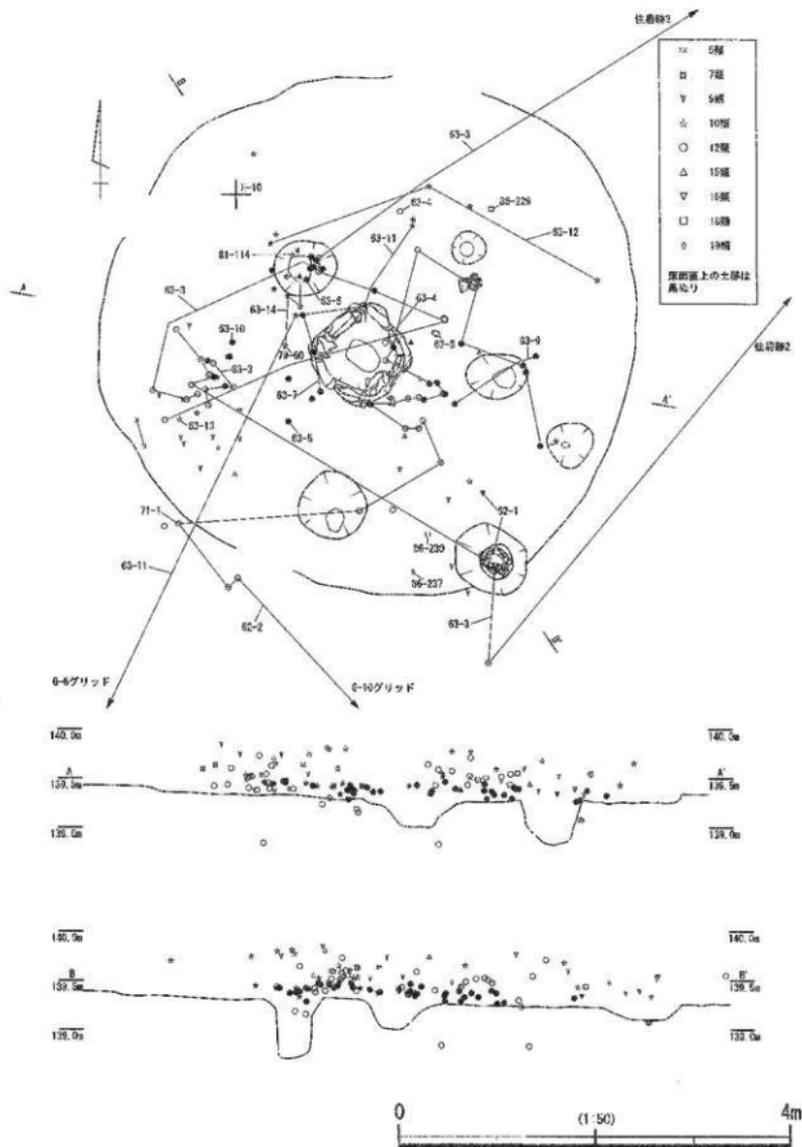
G-10グリッド北西に位置する。KUから掘込まれている。土坑11と重複し、土坑11を切る。長径約5.60m、短径約5.56mでほぼ正円形となる。住居跡2に比べて大きい。石囲炉を中心にもち、周囲に柱穴がめぐるが、検出された5基の柱穴は南東側に偏る。南東壁際に埋甕が配されており、埋甕に伴う土坑は住居跡の壁を切る。床面直上出土の土器と接合した土器の放射性炭素年代測定の結果、 4040 ± 30 yrBPの年代が得られている。

16類：加曾利EⅡ式の埴甕をもつことから中期後半のものと考えられる。床面直上からも同時期の12類：曾利Ⅲ式土器が多数出土している。また、10類：諸磯b式土器も床面直上から出土しているが、初期の流れ込みと考えていいたろう。10類土器は北東部に多く認められる。早期末の5・7・9類土器も認められるが多くは覆土からの出土で床面直上出土のものは乏しい。

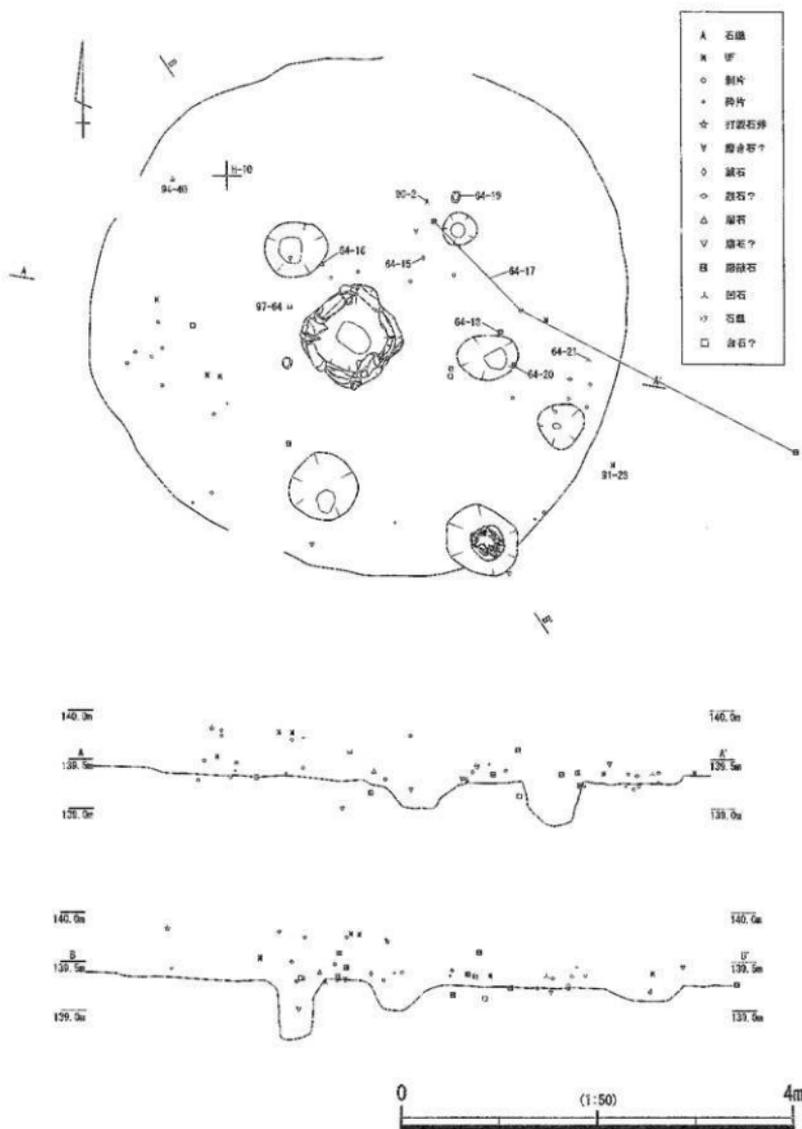
床面直上出土の石器は穀石、磨石などと黒曜石の割片が認められた。第90図2の有基石鏃は床面直下の垂直分布を示す。

石囲炉(第61図)

炉石の外形で長辺約0.94m、短辺約0.88mの方形に造られている。辺は細長い角礫を起こして並べ、角には比較的小さい礫が立てられている。礫を配置するためのものと考えられる比較的浅い掘込の中に、



第59図 住居跡1 土層分布



第60圖 住居跡1 石器種類別分布

急に深くなり底面が比較的先鋭な掘込が認められる。堆積土中には焼土粒を含み、部分的に赤黄色の焦土ブロックを含む。堀方の際近くに礫を配す。東半部の礫には、炉の中央に面していた部分を中心に赤化やススの付着が認められる。

埋甕 (第61図)

16類: 加曾利EⅡ式土器の埋甕である。底部が残存しておらず、埋甕として埋設された時点で底部は失われていた可能性が高い。土坑は埋甕よりかなり大きく掘り込まれた可能性があるが、覆土の識別が困難であったところがある。

住居跡1出土の土器 (第62図1・2・第63図3~14)

住居跡1出土の土器のうち、床面直上から出土したものはほとんどが12類: 曾利Ⅲ式土器と10類: 諸磯b式土器であった。

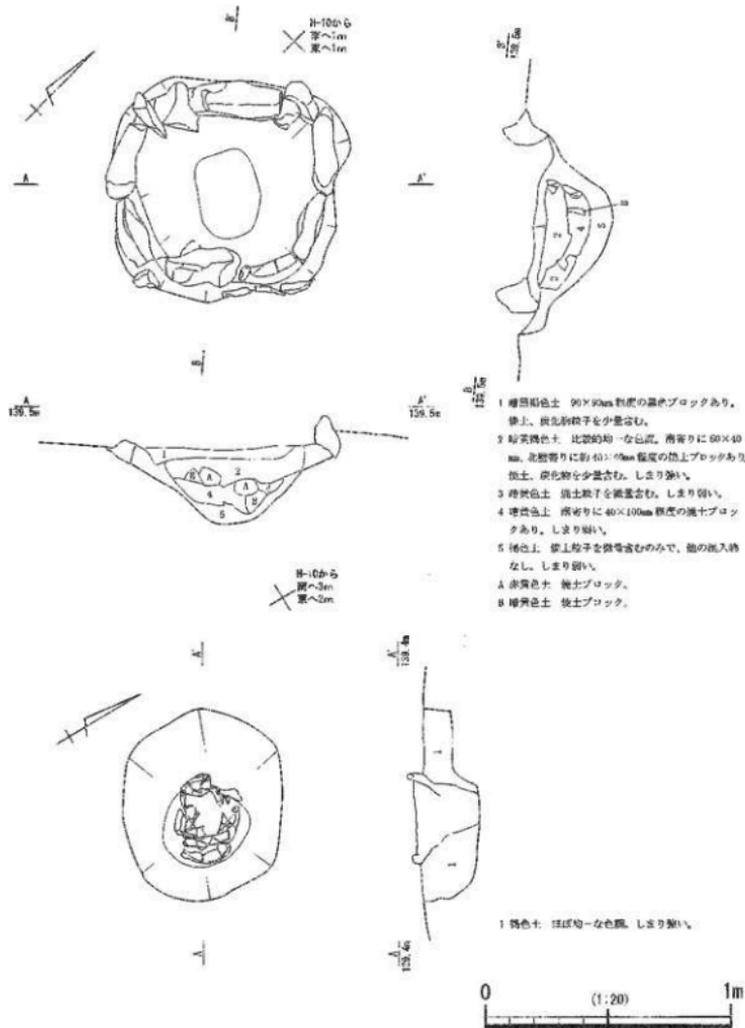
1は壺甕で、LRの縄文を地文にもつ16類: 加曾利EⅡ式土器である。胴部は縄文を施した後に沈線で文様を描く。沈線は、区画を行うもの、垂下して渦巻を描き、その下に更に垂下線を描くもの、屈曲部に平行した2条を描くものがあり、結果的に3本1組となっている。頸部は無文である。口縁部は陰帯で裝飾され、渦巻を配置し、その間を2条の陰帯が下方に弧を描いて結ぶ。渦巻は、基本的に右巻きのものと同巻き左巻きのものが交互に配される。右巻きと左巻きの渦巻が5対配置され、例外的に余った隙間を埋めるように左巻きの渦巻1つが置かれ、計11の渦巻が認められる。例外的に配された左巻きの渦巻のみが1条の陰帯で結ばれる。渦巻を結ぶ陰帯が下に下がった隙間には縦方向の条線が描かれる。その条線は1本1本個別に描かれている。底部は失われており不明である。

2~10は土器分類12類: 曾利Ⅲ式土器である。2は、胴部に縦方向の条線を施し、その上に蛇行沈線を描く。口縁部文様帯は下端部が若干肥厚する。渦巻あるいは、左巻きと右巻きの渦巻が組み合わさったものが沈線で描かれ、その間を沈線で結ぶ。渦巻と渦巻の間には棒状工具による押引文が縦に配される。形状から同一個体と考えたが、接合しないものには口縁部に沿って沈線が施されるものがある。この個体については、器形はきわめて類似するものの別個体である可能性が否定できない。3は胴部の文様は縦方向の条線のみである。屈曲部には陰帯を貼付け、弱い刺突で凹凸をつけている。その下には押引で波状の沈線を2条施す。口縁部は波状を呈し、3ないし4ヶ所の波頭を有したと考えられる。口縁部には2条の並行する陰帯が貼付けられ、口縁より細かく波打つが、口縁の波頭部に高まりが合わされている。また、放射性炭素年代測定の結果、4040±30yrBPの年代が得られている。4は胴部を沈線で飾文する。蛇行沈線および最下部に何らかの文様をもつと考えられる縦方向の4条の沈線をまず施し、その間を充填するように平行する沈線を施す。口縁部は内面に向かって突出する。口縁部外面には太い陰帯を貼付け、その中に棒状工具を用いて、沈線で文様を描く。5は口縁部片である。陰帯を貼付けて、渦巻あるいは区画を作り出している。6は陰帯を渦巻状に貼付けた把手である。7~10は胴部片である。いずれも縦位の条線が施文される。8と9は同一個体と考えられる。また、9と10は底部に近く、条線が途中で消失していく。

11~14は土器分類10類: 諸磯b式土器である。上述の12類土器とは時差があり、初期の流れ込みと考えられる。11は口縁部片で、口縁部突出部の外面にボタン状の突起が貼付けられている。13とともにキャリパー形の器形であることが分かる。12~14は胴部片である。12は残存部の端に補修孔があげられている。その隣では外面から補修孔の穿孔を試み途中で停止している。内面と外面から同時に穿孔していたが、ズレていたために、外面側の補修孔を移動したと考えられる。

住居跡1出土の石器 (第64図15~21)

黒曜石のUF、剥片、砕片や燧石、磨石類が出土した。黒曜石の石器が石囲炉より南西に多く分布するのに対して、磨石は北東に多く分布する。特に磨石の偏りは顕著であり、住居内での場の使い分け



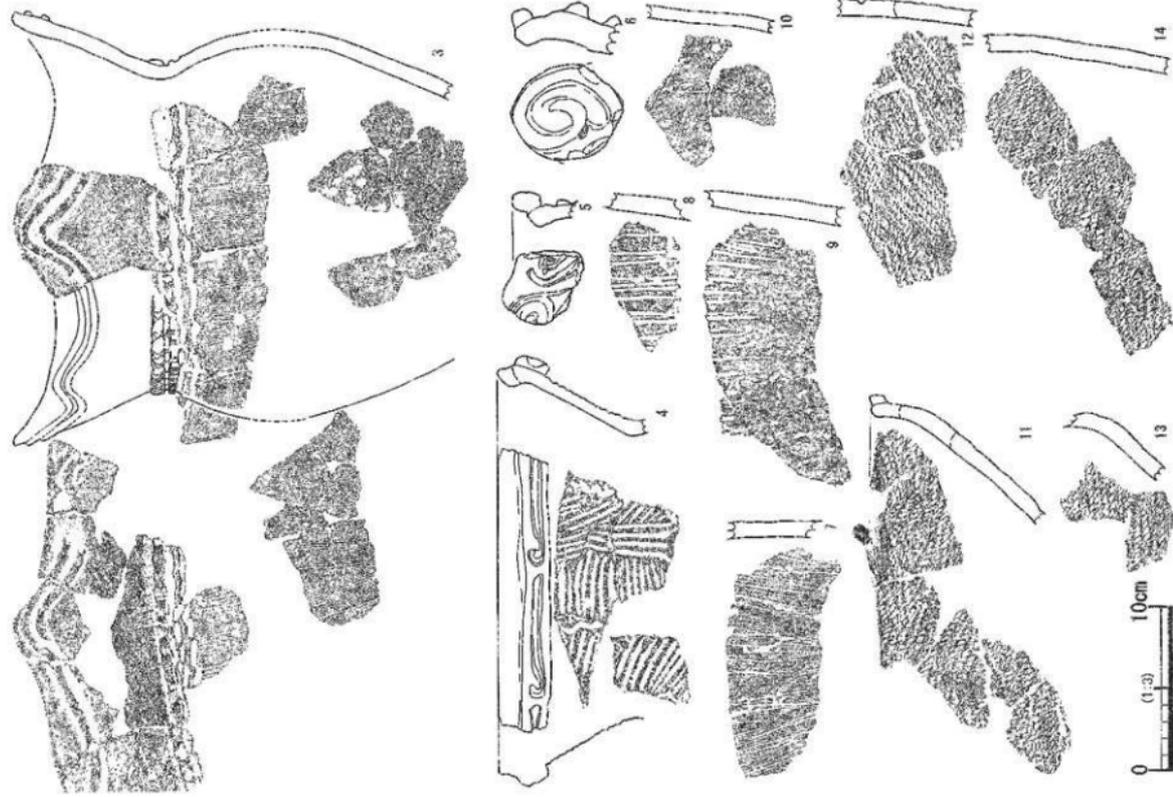
第61図 住居跡1 石囲炉・埋燼

第11表 住居跡1 石囲炉・埋燼土坑計測表

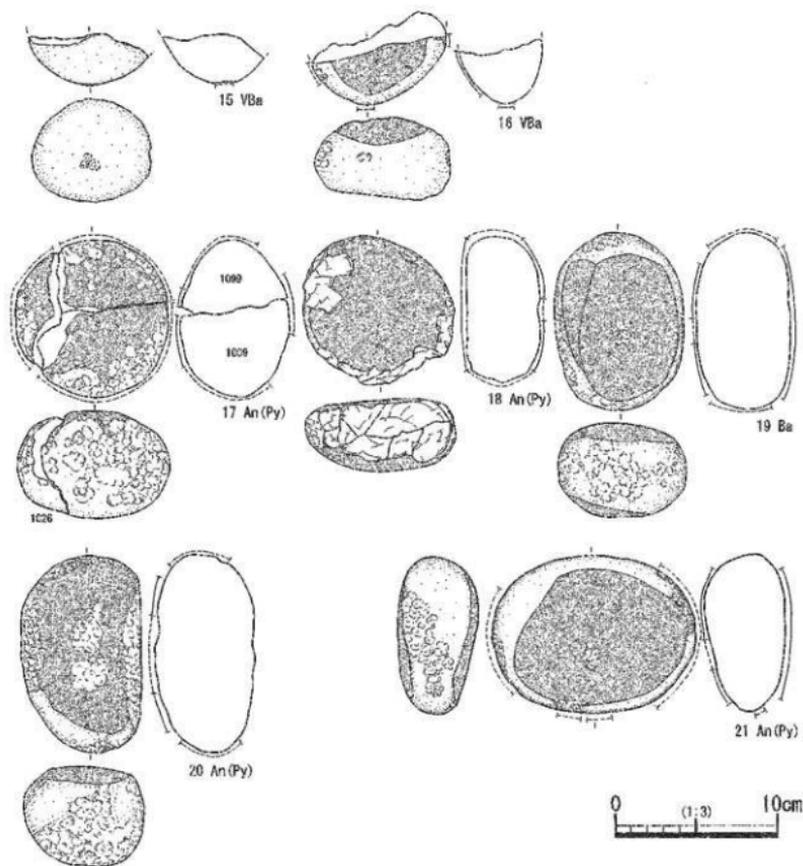
遺構名	深さ(m)	検出面		底部	
		長径(m)	短径(m)	長径(m)	短径(m)
石囲炉	0.63	1.07	1.02	0.37	0.30
埋燼	0.23	0.79	0.64	0.41	0.37

第62圖 住居跡1出土の土器(1)





第63図 住原遺跡1出土の土師器



第64図 住居跡1出土の石器

を示している可能性がある。

15は敲石である。端部に若干の敲打痕が認められる。破損しているが、比較的球形に近い礫を用いていたと考えられる。

16～20は磨敲石である。磨面と敲打痕の両方を有する。いずれも礫の比較的平坦な面に磨面をもち、16・20が片面に、17～19は両面に磨面をもつ。また、敲打痕については、16が部分的であり、17～20は周縁のほぼ全体に認められる。16は破損し、半分以上が失われている。17も破損して、三分しているが、住居およびその周辺から出土した3点が接合し、ほぼ完形に復元された。18は加撃に伴い剥離を生じている部分がある。19、20は磨面中に敲打痕が認められ、20は特に多くの敲打痕が残されている。20は右側縁を中心に、全面的に強い敲打痕が認められる。

21は凹石である。偏平な礫の両平坦面に磨面が、周縁端部には敲打痕が認められる。片面に敲打による凹みも認められる。

b. 住居跡2（第65・66図）

H-10グリッドとH-11グリッドの境界南半に位置する。KUから掘込まれている。長径約4.60m、短径約3.94mの不正楕円形で住居跡1に比べて小さい。石囲炉を中心にもち、周縁に柱穴がめぐるが、検出された6基の柱穴の位置は比較的バランスよく配される。だが、南東の上面を検出できなかった柱穴については、東に隣り合う柱穴と近接しており、バランスを欠く。南壁近くには埋壙が配される。埋壙の放射性炭素年代測定の結果、4200±30yrBPの年代が得られている。

12類：曾利Ⅲ式の埋壙をもつことから中期後半のものと考えられる。床面直上からも同じ12類土器が出土している。覆土からはその他の土器も出土しているが流れ込みと判断していいだろう。チャートの石礫が床面直上から、黒曜石のUF、裂片が覆土から出土している。住居跡1と比べて遺物量が少ない。石囲炉（第67図）

炉石の外形で長辺約0.84m、短辺約0.76mの方形に造られている。住居跡1のものより一回り小さい。細長い角礫を立て並べて築かれるが、小礫はあまり利用されない。東隅は礫が検出されていないが、炉内覆土中から礫が出土しており、転がり落ちた可能性もある。礫を配置するためのものと考えられる。立ち上がり急で比較的強い掘込の中に、楕形の底部形状となる掘込が認められる。堆積土中には炭化物がわずかに認められたが、赤化したブロックなどは認められなかった。掘方の際より内側に礫を配す。北半の礫には炉の中央に面していた部分を中心に赤化キヤスの付着が認められる。

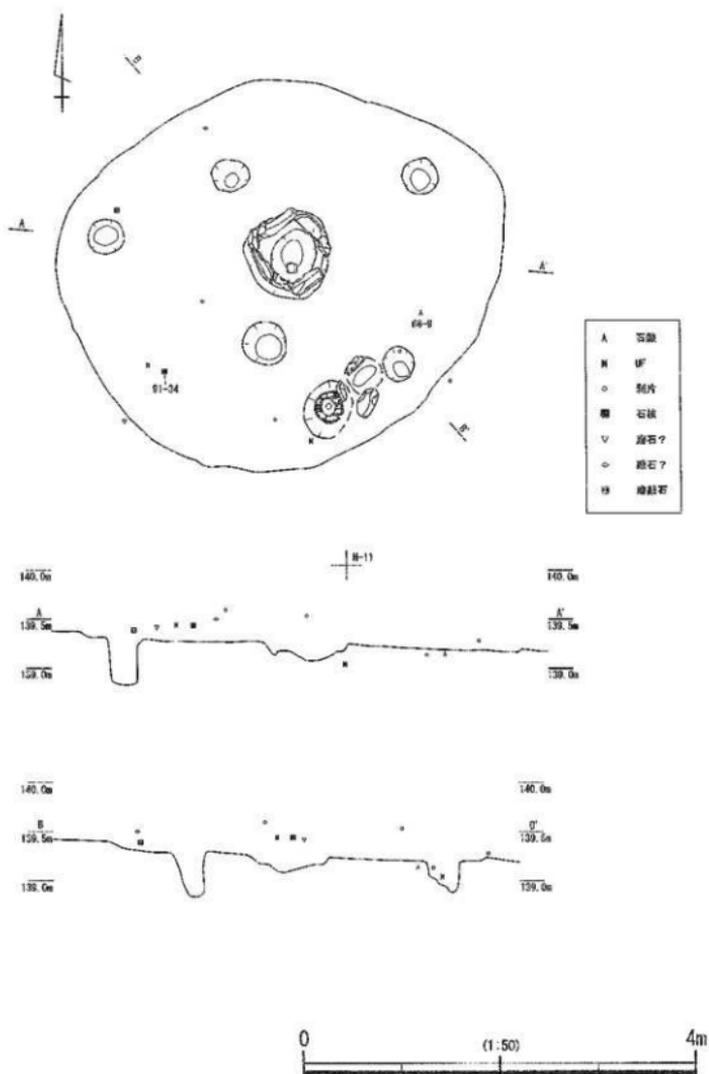
埋壙（第67図）

12類：曾利Ⅲ式土器の埋壙である。埋壙より100mm強大きい土坑に堀られている。周囲で3点の大型礫が出土した。

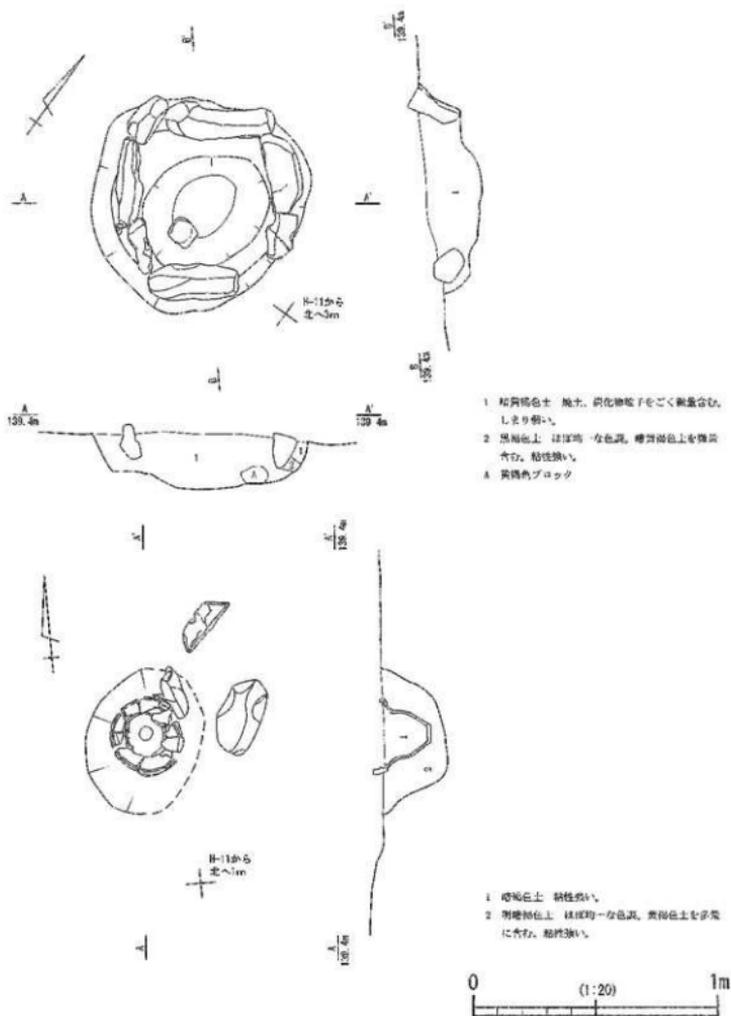
住居跡2出土の土器（第68図1～8）

1～7は土器分類12類：曾利Ⅲ式土器に位置づけられる。

1は埋壙である。胴部には沈線で文様が描かれる。胴当部に3条の平行沈線を描き、そこから垂下する蛇行沈線を描く。蛇行沈線は7ヶ所に描かれ、2条で1組となっているが、例外的に1ヶ所のみ1条のものがある。蛇行沈線の間は右下がりの平行沈線で埋められるが、蛇行沈線が1条の部分の左側のみ例外的に左下がりの平行沈線が施される。頸部は無文である。口縁部文線帯は大きく張り出す。口縁部は波状を呈し、大きな突出3つと小さな突出3つが交互に配置される。外面には沈線で窓枠状の区画が描かれ、その中を鋭い縦方向の平行沈線で埋める。口唇部には1条の沈線を施し、突出部で渦巻を描く。口縁部内面には水平に1条の縁帯を貼付ける。また、放射性炭素年代測定の結果、4040±30yrBPの年代が得られている。



第66圖 住居跡2 石器器種別分布

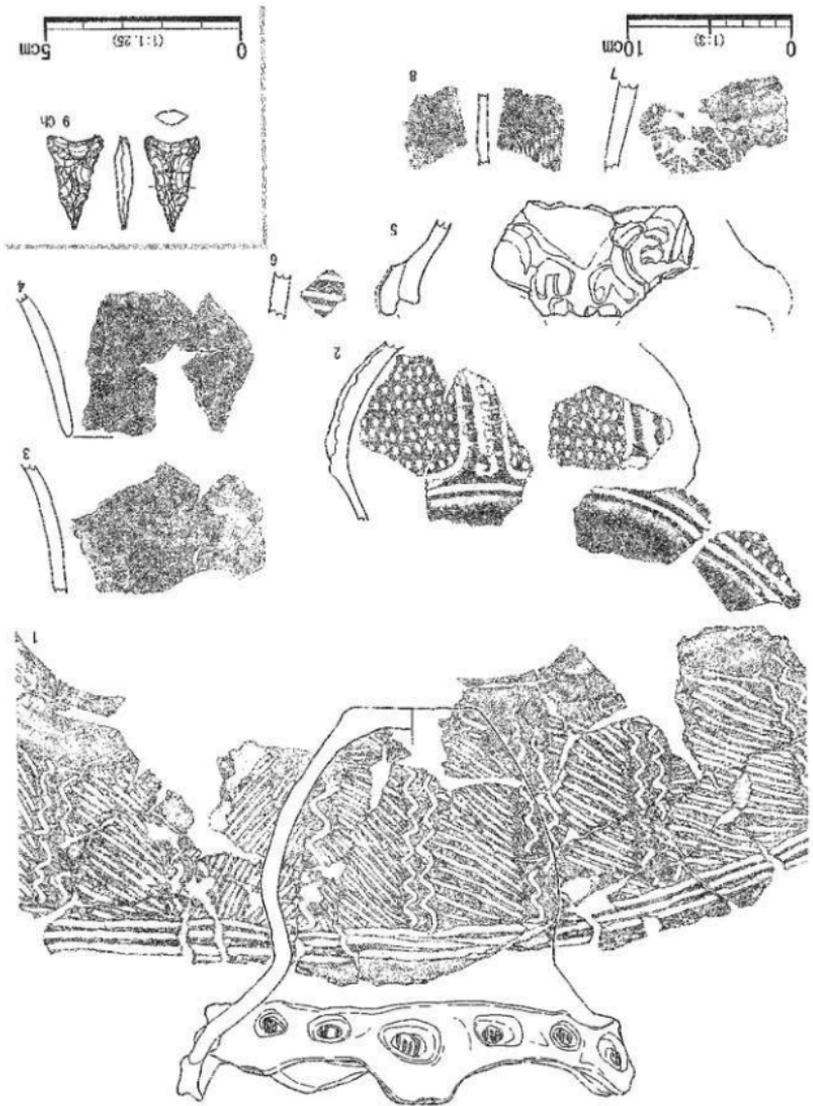


第67図 住居跡2 石囲炉・埋炭

第12表 住居跡2 石囲炉・埋炭土坑計測表

遺構名	深さ(m)	検出物		炭部	
		長径(m)	短径(m)	長径(m)	短径(m)
石囲炉	0.21	0.92	0.83	0.31	0.22
埋炭	0.26	0.59	0.43	0.30	0.13

鳥類の干土の遺物 図89



2～4は同一個体と考えられる。2は胴部片であり、沈線で区画を描きその中を棒状工具による下方からの刺突で埋める。区画の間には端部に渦巻文をもつ縦方向の沈線が認められる。その沈線の両脇の突出部には浅いキザミが施される。頸部は無文でミガキが施される。3は頸部、4は口縁部片である。いずれも無文で、内外面にミガキが施される。

5は口縁部片である。口縁部に肥厚文様帯を有し、波状口縁の突出部は把手状であった可能性もある。突出部を中心に左右対称の文様が作り出されており、太めの沈線で渦巻などを描く。

6は胴部片で外面に平行沈線が施される。

7は遺物出土の第83図135・136と同一個体と考えられる。上半に絞杉状の沈線が施されており底部に近い個体と考えられる。底部に近い個体の大部分が、南東の上面が捉えられなかった柱穴中で壁の下から出土したのに対して、口縁部である135・136は遺物外の出土である。

8は土器分類7類：入海Ⅱ式土器である。第79図69～71と同一個体と考えられる。2条のはっきりした爪形文の列の下に、3条目の爪形文の列が薄く施されている。覆土出土であり、本来住居に伴うものであった可能性は低い。

住居跡2出土の石器（第68図9）

9はチャート製の凹基石鏃である。両面調整で丁寧な作られている。脚部と身部の間に屈曲をもち、脚部が広がる。身部は緩やかに外湾し、先端部は細く鉤状に突出する。

②土坑（第69・70図）

長径が0.6m以上のものを土坑とした。土坑は8基検出された。土器が出土しているのは土坑11のみで、その他の土坑が作られた時期は明らかではない。いずれも調査区北半に分布する傾向があり、集石が南半に集中するのは対照的である。H-5グリッド周辺とH-10グリッド周辺の2ヶ所に特に密集する。

土坑4

H-10グリッド北西部に位置し、土坑長軸は地形の傾斜と直交する。楕円形で、比較的深い。覆土中に緩やかな弧を描いて堆積する複数の層が認められる。覆土からスクレイパー（第71図3）が出土している。

土坑5

H-4グリッド北東部に位置し、土坑長軸は地形の傾斜と平行する。不正円形で、浅く平坦である。

土坑6

H-5グリッド北端に位置し、土坑7と近接する。土坑長軸は地形の傾斜と斜交する。楕円形で、広い底面をもち、底面の中に他より窪む部分をもつ。

土坑7

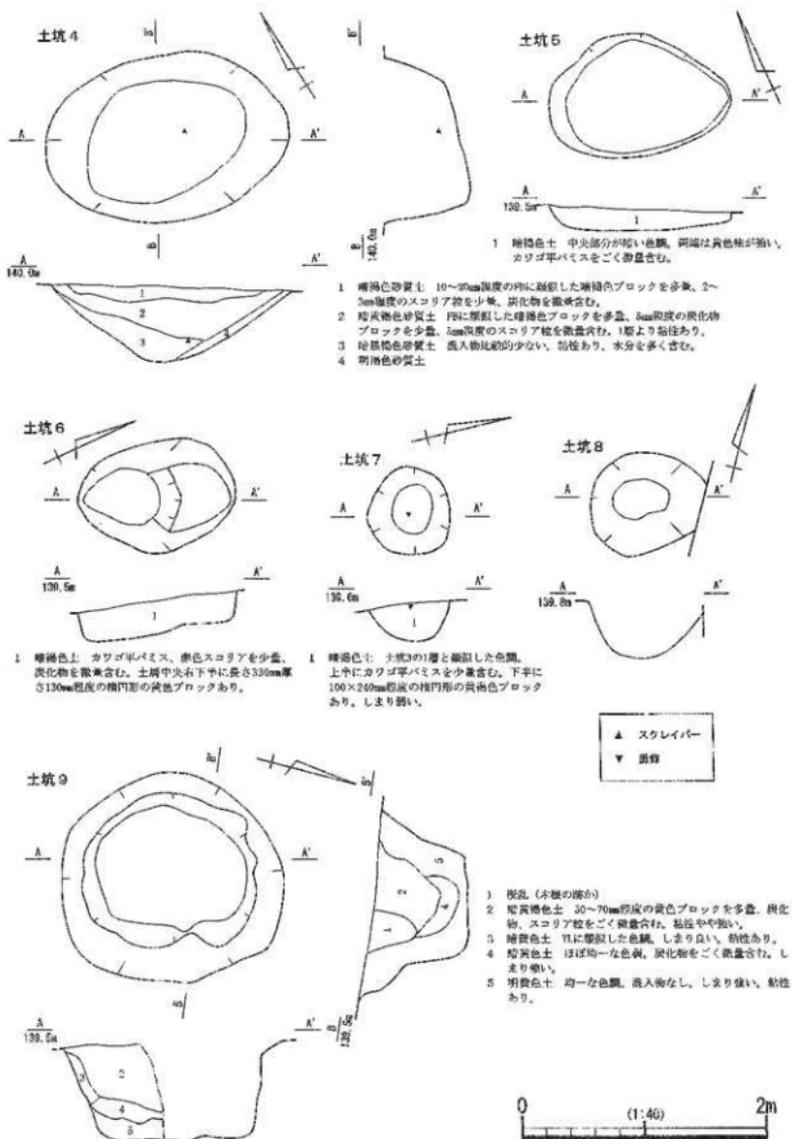
H-5グリッド北端に位置し、土坑6と近接する。円形で、楕円形である。覆土の最上部中央で垂飾（第71図2）が出土している。

土坑8

H-9グリッド南東、住居跡1の北東に位置する。土坑長軸は地形の傾斜と直交する。楕円形で、楕円形である。

土坑9

H-10グリッド中央南寄り、住居跡1と住居跡2の間に位置する。円形で、平坦な底面を有する。底面から急角度で立ち上がり、途中で屈曲して、若干緩やかに上面にいたる。



- 1 暗褐色砂質土 10~20mm程度の円に類似した暗褐色ブロックを少量、2~3mm程度のスコリア粒を少量、炭化物を微量含む。
 2 暗褐色砂質土 PBに類似した暗褐色ブロックを少量、5mm程度の炭化物ブロックを少量、5mm程度のスコリア粒を微量含む。1部より粘りあり。
 3 暗褐色砂質土 流入物見附印少ない。粘性あり。水分を多く含む。
 4 暗褐色砂質土

- 1 暗褐色土 カワゴ平バミス、赤色スコリアを少量、炭化物を微量含む。土層中央右下手に長さ330mm厚さ130mm程度の楕円形の黄色ブロックあり。

- 1 暗褐色土 土坑の1層を類似した色調。上半にカワゴ平バミスを少量含む。下半に100×240mm程度の楕円形の黄色ブロックあり。しまり強い。

- 1 砂流（本層の底か）
 2 暗褐色土 30~70mm程度の黄色ブロックを少量、炭化物、スコリア粒をごく微量含む。粘りや強い。
 3 暗褐色土 PBに類似した色調。しまり強い。粘性あり。
 4 暗褐色土 ほぼ均一な色調。炭化物をごく微量含む。しまり強い。
 5 暗褐色土 均一な色調。流入物なし。しまり強い。粘性あり。

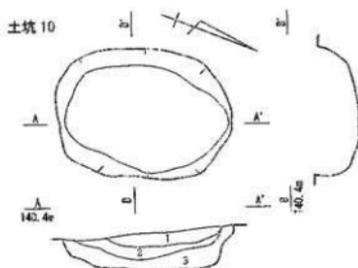
第69図 縄文時代 土坑4~9

土坑10

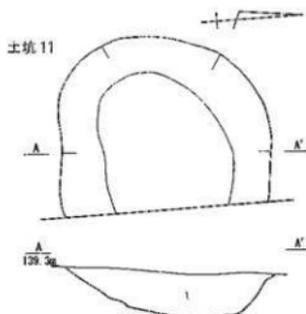
H-8グリッドとI-8グリッドの境界の中央西寄りに位置し、土坑長軸は地形の傾斜と直交する。楕円形で、広い底面をもち、急角度で立ち上がる。レンズ状に堆積する3層が認められる。

土坑11

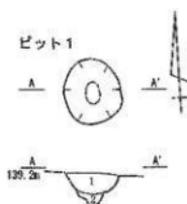
G-9グリッド東端中央北寄りに位置し、土坑長軸は地形の傾斜と斜交する。FB中から掘込まれている。住居跡1と重複し、住居跡1に切られる。試掘トレンチによって掘られ正確な形状は不明であるが、平面楕円形であったと考えられる。底部は不整形な皿状である。覆土からは10類：漆器b式土器、12類：首利Ⅲ式土器、15類：管刺式土器が出土した。12類土器には、第71図1に加え、住居跡1の土器と接合するものも含まれている（第62図2）。



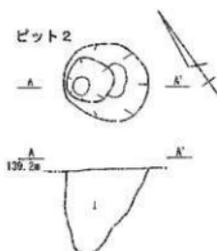
- 1 褐色土 VLに類似した小ブロックを少量、炭化物、スコリアをごく微量含む。しりり強い。粘性あり。
- 2 暗褐色土 90×100mm程度のVLブロックを含む。炭化物、スコリアをごく微量含む。
- 3 暗赤褐色土 はばばの色調。しりり強い。粘性あり。



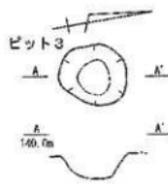
- 1 黄褐色土 炭化物をごく少量、スコリアをごく微量含む。しりりや強い。粘性強い。



- 1 暗褐色土 FBに類似した白泥。20×30mm～40×100mm程度の黄土ブロック3ヶ所あり。炭化物あり。しりり強い。
- 2 褐色土 FBに類似した暗い褐色で、均一な色調。炭化物ほとんどなし。



- 1 暗褐色土 VL主体。30～50mm程度の黄土ブロック3ヶ所あり。他の混入物なし。



- 1 暗褐色土 VL主体。30～50mm程度の黄土ブロック3ヶ所あり。他の混入物なし。

第70図 縄文時代 土坑10・11・ピット1～3

第13表 縄文時代 土坑・ピット計測表

遺構名	深さ (m)	検出箇		底部	
		長径 (m)	短径 (m)	長径 (m)	短径 (m)
土坑4	0.71	2.00	1.86	1.42	0.99
土坑5	0.20	1.48	1.00	1.33	0.93
土坑6	0.27	1.28	0.92	0.62	0.46
土坑7	0.30	0.72	0.88	0.41	0.33
土坑8	0.43	1.00	0.81	0.46	0.33
土坑9	0.82	1.80	1.71	1.22	1.01

遺構名	深さ (m)	検出箇		底部	
		長径 (m)	短径 (m)	長径 (m)	短径 (m)
土坑10	0.42	1.46	1.06	1.33	0.90
土坑11	0.37	(1.48)	1.85	(1.16)	1.05
ピット1	0.28	0.52	0.46	0.16	0.12
ピット2	0.67	0.69	0.64	0.14	0.13
ピット3	0.20	0.55	0.49	0.23	0.27

土坑出土の遺物 (第71図)

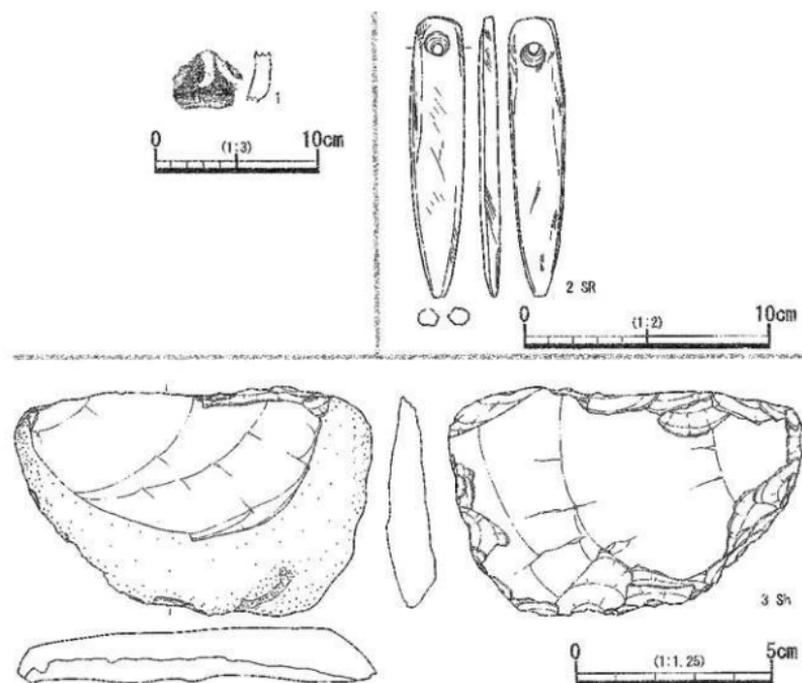
1 は土坑11の覆土から出土した。土器分類12類：曾III式土器に属する。口縁部文様帯の下端と考えられ、弧を描く沈線が認められる。

2 は土坑7の覆土最上部から出土した珧質岩の垂飾である。緑色みを帯びた灰色で、全面が丁寧に研磨されている。上半部は側縁が平行し、下半部ですぼまる外形で、上部部に穿孔がなされている。穿孔の際についた孔内の筋が明瞭に認められる。表面は斜め上方向から、裏面は斜め下方向から穿孔がなされ、貫通している。断面形は隅丸長方形になる。

3 は土坑4の覆土から出土した頁岩のスクレイパーである。背面に1枚の先行する剥離面と自然面を残す剥片を素材とする。調整は主に腹面側になされる。素材剥片腹面右側縁に比較的平坦な剥離によって調整が施される。その反対側の辺にも調整がなされるが、部分的に階段状剥離となっている。素材剥片末端部腹面側にも部分的に平坦剥離が施される。形状や調整剥離のあり方から、素材剥片末端部を刃部とした粗雑な打製石斧、あるいは打製石斧未製品の可能性もある。

③ピット (第70図)

長径が0.6m以下のもの、および柱穴状のものをピットとした。ピットは3基検出された。土坑と同じく調査区北半に分布する傾向があり、集石の配置とは対照的である。



第71図 土坑出土の遺物

ピット 1

H-10グリッド南東部に位置する。住居跡2の下で検出されたため、住居跡より古いと考えられる。上面円形で、椀形の掘込の中に小さい不整形な掘込が認められる。

ピット 2

H-5グリッド北東に位置する。2段に掘り込まれており、他のものに比べて深い。地面に対して傾斜している。

ピット 3

H-8グリッド北端中央東寄りに位置する。円形で、断面楕形である。

④集石（第72～74図）

比較的大きい礫のまとまりを集石とした。集石は9基検出された。調査区中央南寄りにまとまって分布する傾向があり、土坑・ピットの配置とは対照的である。また、集石中に含まれる「磨石?」、「石皿?」、「台石?」については石器である可能性があるが、礫である可能性も高い。

集石 1

G-8グリッド南東部に位置する。集石3と近接し、垂直分布が一致することから同時期のものと考えられる。24点の礫で構成される。遺物不在のため、礫は観察できていない。集石中に敷石の破片（第95図49）を含む。

第14表 遺構出土土器調査表

図記番号	遺構	分層	色調 (Hue)	胎土	形状・構造	文様・装飾等
第62図1	住居跡1	16層	砂黄緑 (5YR 3/6)	白色胎子、赤色胎子、白色胎子	煎 瓦	無文。口縁部に黄赤と2条の黒帯により肩を飾り、蓋の中に掘込方向の赤帯を施す。黒帯は直文。口縁部に2条の赤帯を施す。胴部には1本の黒文を施す。文様は直文とし、文様により区画と縁帯を飾る。
第62図2	住居跡1	12層	明黄 (7.5YR 5/6)	白色胎子、黒色胎子、白色胎子	煎 瓦	口縁部は黄赤文で区画を作る。区画内に帯状文様による肩文を縦方向に施す。胴部は縦方向の赤帯を施し、先行赤帯を並べ下らせる。
第63図3	住居跡1	13層	明赤黄 (5YR 5/6)	白色胎子、黒色胎子、輝石、白色胎子	煎 瓦	横状口縁。口縁部にある赤の赤帯を横状に施す。胴部は縦方向の赤帯を施す。区画部の縁帯上に黒帯を施し、その下に2条の輝石を横状に施す。
第64図4	住居跡1	12層	にょい青濁 (10YR 5/9)	白色胎子、赤色胎子、輝石、白色胎子	煎 瓦	口縁部は黄赤文で区画を作る。区画内に帯状文様による肩文を縦方向に施す。胴部は縦方向の赤帯を施す。胴部に横状赤帯と4条の黒帯の赤帯を施す。
第65図5	住居跡1	12層	にょい赤濁 (5YR 4/6)	白色胎子多、黒色胎子少、黄赤胎子	煎 瓦	口縁部片。胎子を斜行に施す。
第66図6	住居跡1	12層	黄濁 (10YR 5/8)	白色胎子、黒色胎子、輝石、白色胎子	煎 瓦	胎子多、胎子を横状に施す。
第67図7	住居跡1	12層	にょい黄 (7.5YR 5/6)	白色胎子	煎 瓦	外面に縦方向の赤帯を施す。内面に黒帯。
第68図8	住居跡1	12層	にょい黄 (7.5YR 5/6)	白色胎子、黒色胎子、白色胎子	煎 瓦	外面に縦方向の赤帯を施す。2と5同一個体。
第69図9	住居跡1	12層	にょい黄 (7.5YR 5/6)	白色胎子、黒色胎子、白色胎子	煎 瓦	外面に縦方向の赤帯を施す。8と9同一個体。
第70図10	住居跡1	12層	にょい黄 (7.5YR 5/6)	白色胎子、黒色胎子、白色胎子	煎 瓦	外面に縦方向の赤帯を施す。
第71図11	住居跡1	10層	梅 (7.5YR 4/6)	白色胎子、黒色胎子、輝石、白色胎子	煎 瓦	口縁部にボタンの突起を施す。外面に黒帯。
第72図12	住居跡1	10層	赤濁 (5YR 4/6)	白色胎子、黒色胎子、輝石、白色胎子	煎 瓦	外面に縦方向の黒帯を施す。黒帯は直文。
第73図13	住居跡1	10層	にょい赤濁 (5YR 4/6)	白色胎子、黒色胎子、輝石、白色胎子	煎 瓦	外面に縦方向の黒帯を施す。
第74図14	住居跡1	10層	にょい赤濁 (5YR 4/6)	白色胎子、黒色胎子、輝石、白色胎子	煎 瓦	外面に縦方向の黒帯を施す。
第60図1	住居跡2	12層	赤濁 (5YR 4/6)	白色胎子多、輝石、輝石、白色胎子、赤色胎子多	煎 瓦	横状口縁。大小の突起を交互に施す。口縁部に1条の黒帯。胴部で横帯になる。口縁部内面には横帯による区画の区画内に縦方向の先行赤帯を施す。胴部は直文。胴部部に3条の赤帯を並べ下らせる。胴部には7本の横状赤帯を並べ下らせる。その間に縦方向の赤帯を施す。
第68図2	住居跡2	12層	にょい黄濁 (10YR 5/6)	白色胎子、黒色胎子、輝石、白色胎子、黒色胎子	煎 瓦	胴部には区画による区画。区画内に帯状文様で内訳。V字文と横下りさせた黒帯の間に黒帯を施す。2と4同一個体。
第69図3	住居跡2	13層	にょい黄 (7.5YR 5/6)	白色胎子、黒色胎子、輝石、白色胎子	煎 瓦	無文。2と6。2の縦帯。2と4同一個体。
第70図4	住居跡2	12層	にょい黄 (7.5YR 5/6)	白色胎子、黒色胎子、輝石、白色胎子	煎 瓦	無文。2と6。2の縦帯。2と4同一個体。
第62図5	住居跡2	12層	赤濁 (2.5YR 4/6)	白色胎子多、黒色胎子、赤色胎子、黄赤胎子	煎 瓦	口縁部。更厚い文様帯に丸みの赤帯で横帯と帯を作る。
第63図6	住居跡2	12層	にょい赤濁 (5YR 4/6)	白色胎子、輝石	煎 瓦	外面に黒帯。
第64図7	住居跡2	12層	赤濁 (5YR 4/6)	白色胎子、輝石、白色胎子	煎 瓦	外面に横状の赤帯。
第65図8	住居跡2	7層	にょい赤濁 (10YR 5/9)	白色胎子、黒色胎子	煎 瓦	外面に黒帯。
第71図9	住居跡 8	13層	梅 (7.5YR 4/6)	白色胎子、輝石	煎 瓦	外面に黒帯。

集石 2

G-9グリッド中央に位置する。15点の礫で構成される。遺物不在のため、礫は観察できていない。北に近接して焼土を伴う18類：堀ノ内式土器の集石が認められるが、近くに早期末の土器も分布しておりその時期は明らかでない。

集石 3

G-8グリッド中央南東寄りに位置する。集石1と近接し、垂直分布が一致することから同時期のものと考えられる。15点の礫で構成される。1,000g以下の礫で構成され、その大部分に赤化が認められる。集石中に砥石の破片（第95図50）と神津島恩馳島産黒曜石の小石核を含む。西側に5類：下吉井式土器と8類：木島式土器の集中部が近接していることから、前期初頭に位置づけられる可能性がある。

集石 4

F-8グリッド南部に位置する。礫群6と近接する。13点の礫で構成される。半数以上が1,000g以上の大型の礫で、礫の大部分に赤化が認められる。

集石 5

F-8グリッド北端に位置する。18点の礫で構成される。輝石安山岩の大型の石皿？の周辺に500g以下の礫が散在する。礫の大部分に赤化が認められる。集石中に赤玉石（碧玉）のRFを含む。洞窟に4類：茅山下層併行の土器や9類：早期末～前期初頭の条痕文土器が分布することから早期末に位置づけられる可能性がある。

集石 6

F-8グリッド中央南寄りに位置する。礫群4と近接する。掘込を伴い、その上面に礫が集中する。8点の礫で構成される。1,000g以上の礫2点をはじめ、比較的大きい礫が多く含まれる。礫は全点に赤化が認められる。集石中に輝石安山岩の大型の礫器が含まれる。

集石 7

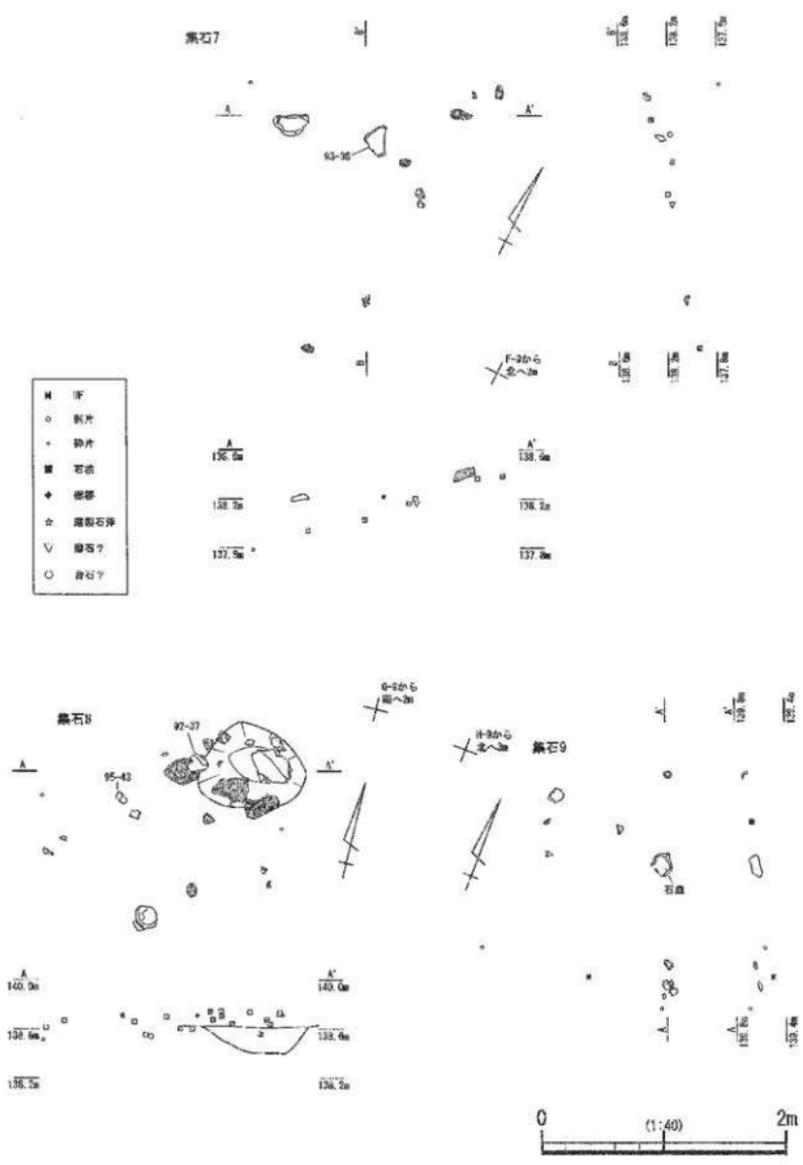
F-8グリッド南東端に位置する。7点の礫で構成される。輝石安山岩の大型の礫器（第93図38）と石皿？を中心に比較的小さい礫が散在する。礫は920gが最も大きく、その他は300g以下である。礫の多くが赤化している。2類：押型文系土器や7類：入海Ⅱ式土器が周辺に分布しており、早期に位置づけられる可能性がある。

集石 8

F-8グリッド東端北寄りに位置する。掘込を伴い、その上面に礫が集中する。19点の礫で構成される。接合して15,500gになる大型礫をはじめ、大型の礫が含まれる。多くの礫に赤化が認められる。集石中には礫器（第92図37）と磨製石斧（第95図43）が含まれる。2類：押型文系土器や7類：入海Ⅱ式土器が周辺に分布しており、早期に位置づけられる可能性がある。

集石 9

H-9グリッド南西部に位置する。検出された集石の中で最も北に位置し、他の集石と隔たった位置にある。7点の礫で構成される。遺物不在のため、礫は観察できていない。また、礫の座標値も残されていない。ホルンフェルスの裂片と石核が近接して出土している。周囲の土器の分布はまばらだが、9類：早期末～前期初頭の条痕文土器が認められる。



第74図 縄文時代 集石7～9

3. 遺構外出土の土器

出土した縄文土器について1～20類に分類を行った。型式不明のものについては、条痕が認められるものを「9類：早期末～前期初頭の条痕文土器」、条痕が認められないものを「19類：型式不明の土器」とした。なお、「20類：土器片加工円盤」は土製品であるが、併せてここで報告する。

また、特徴的な分布を示すものについては土器分類ごとの分布図を示した（第75・76図）。

1類：燃糸文系土器（第77図1～5）

縄文時代早期前半に位置づけられる。調査範囲北西端およびG-7グリッドとG-8グリッドの境界に分布が認められる（第75図）。

胴部片5点が出土しており、それぞれ別個体と考えられる。いずれも外面にRの燃糸を縦位に施文する。内面は調整が粗雑である。3は外面が屈曲し、部分的に燃糸文が施されている。

2類：押型文系土器（第77図6～9）

縄文時代早期前半に位置づけられる。調査範囲南端のF-8グリッドとF-9グリッドの境界に分布が集中する。山形文の土器（6）は調査範囲北西端で単独で出土しており、棒円文のものと同うものではない（第75図）。

13点出土し、1点が山形文、12点が棒円文を施文する。いずれも胴部片である。6は山形文を横位に施文しており、器壁は薄い。7～9は棒円文を施文しており、7と9には補修孔が認められる。7は外面からの穿孔途中で終わっており、貫通していない。

3類：野鳥式土器（第77図10・11）

縄文時代早期後半に位置づけられる。3点出土し、丸頭状工具による沈線が認められる。内面には条痕調整がなされる。11には多量の繊維が混入している。

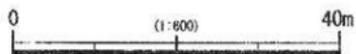
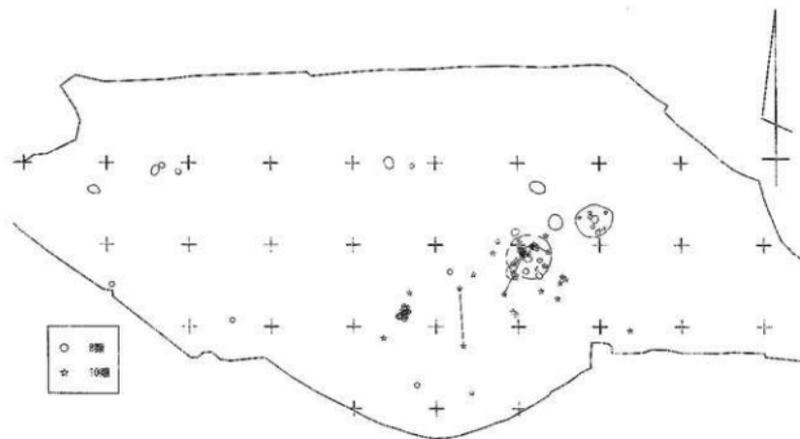
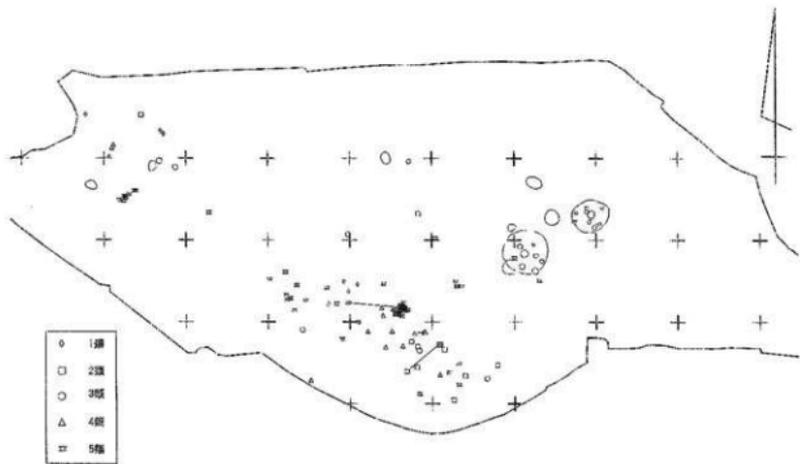
4類：茅山下層式併行の土器（第77図12～21）

縄文時代早期後半に位置づけられる。文様のあるものは全て調査範囲南側に集中する。調査範囲北西端のI-5グリッドで出土している胴部片は胎土が類似するため4類としたが、別型式の土器である可能性もある（第75図）。

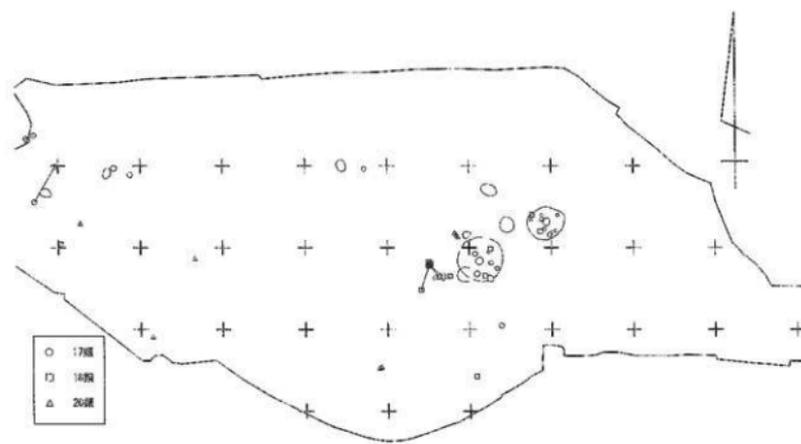
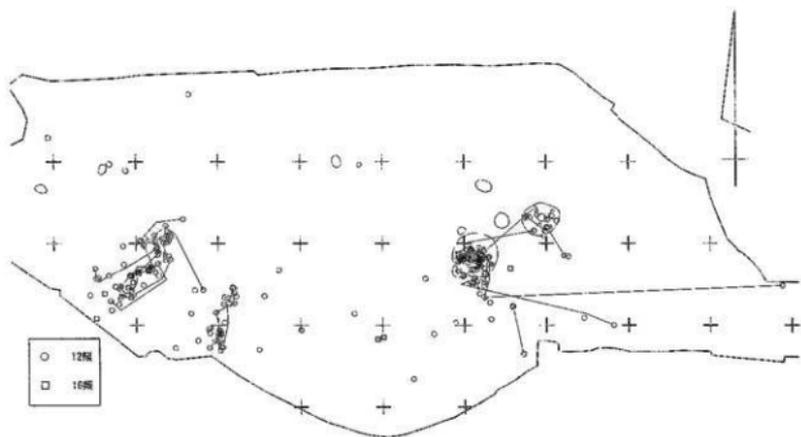
極細竹管あるいは巻貝殻頂を傾けて行った、連続した列状の刺突を施す土器で、茅山下層式に併行する可能性がある。清水樺太遺跡の10群b（関野ほか1989）、権返遺跡のC類2種の一部（壬生ほか2008）に類似する資料がある。類例を検討することで今後正式な位置づけがなされる必要がある。12は、数列を並行させた刺突列を弧状、直線状に配している。刺突はいずれも右方向からなされる。13～21は同一個体と考えられる。13・14は口縁部片である。口唇部には左に傾いたキザミが施されている。胴部の文様は下方向からなされた刺突列と、沈線で構成される。直線的な沈線を縦方向に何条か並行させ、その間に、弧状の筋の刺突列および弧状の沈線を施している。いずれも胎土に少量の繊維を含む。

5類：下吉井式土器（第77図22～32・第78図93～44）

縄文時代早期後半から前期初頭に位置づけられる。極めて大きい32が調査範囲西端のH-5グリッド出土である以外は調査範囲南側に分布が集中する。特にG-8グリッド南端には集中が認められる。この集中は8類：木鳥式土器の集中と重複しており、両者は同時に残されたものと考えられる（第75図）。

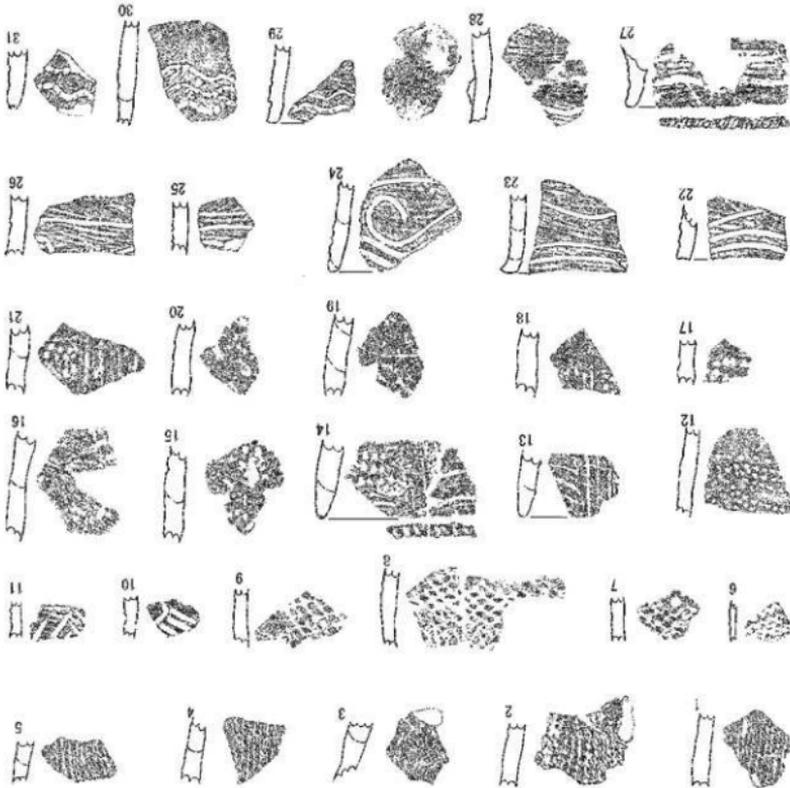
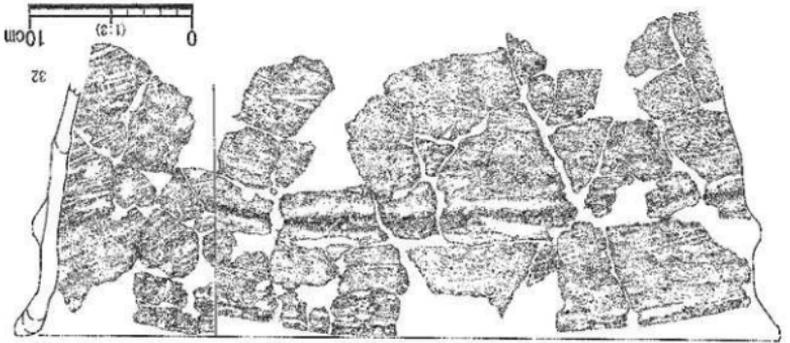


第75圖 土器分類別分布(1)



第76圖 土層分類分布(2)

第77圖 遺跡外出土の土器(1)



集中から出土したのは、27、28、34、39、44である。

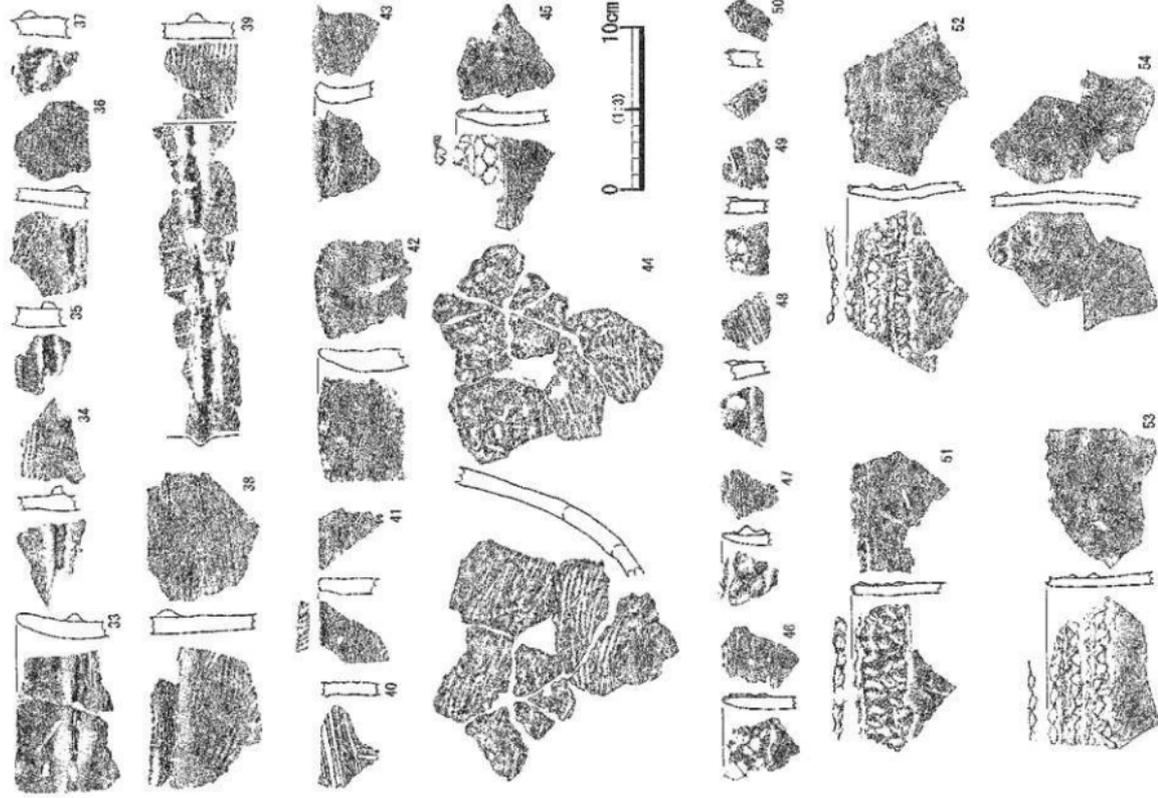
口縁部周辺の外面に波状の沈線が施したものや隆帯を有するものがある。22～26は同一個体と考えられる。口縁部に沿って2条の沈線を施す。口縁は波状であったと考えられ、突出部に近い24では沈線で渦巻を描く。26はその渦巻の下部が右上隅に認められる。27～29は胎土が白みを帯び、沈線の中に微細な線状痕が認められ、同一の工具により沈線が施された可能性が高い。27・28は胴部のみが接合した44とともに、焼成がやや不良であり、同一個体と考えられる。27は口縁部に2条の波状の沈線が、口唇部にはキザミが施される。28は水平な隆帯の上位に波状の沈線を施す。29は2条の波状の沈線を施す。30・31は押し引きによって比較的幅が狭い波状の沈線を施しており、同一個体と考えられる。波状の沈線に先行して、口縁部に斜めの条痕を施す。32は口径約46.5cmと大型で、1条の隆帯が貼付けられる。内外面は条痕で調整される。口縁部は外に向かって広がる。33は隆帯が貼付けられている口縁部片である。34～39は胴部に水平な隆帯が貼付けられている。39は隆帯の上位から縦方向の沈線を一定間隔をあけて施している。放射性炭素年代測定の結果6120±40yrBPの年代が得られている。40は胴部片であるが、下端に縦方向の沈線が施されており、39と類似した文様構成であった可能性がある。上部には横方向の沈線が認められる。41～43は口縁部片であるが、胎土が33等に似るため、5類に分類した。41は口唇部にキザミを施す。44は27・28と同一個体と考えられる。内外面に条痕調整が施される。

6類：上ノ山Ⅰ式土器（第78図45～54）

縄文時代早期後半に位置づけられる。隆帯が1条の上ノ山Ⅰ式（45～50）と複数条の上ノ山Ⅱ式（51～54）に分けることができる。46と47、48と49、52と53はそれぞれ同一個体と考えられる。45・51・52は口唇部に内外面から交互に刺突を加えるが、46・47・53は外面からのみ刺突を行う。隆帯への上下からの刺突は46・47・48・49・50については幅が広く粗いものであり、指頭による可能性がある。51は太い隆帯を貼付け、概ね3列の刺突を加える。53の最下の隆帯は残存部の左下で下方向に曲がる。54の最下の隆帯は途中で途切れる。また、52は放射性炭素年代測定の結果6780±40yrBPの年代が得られている。

7類：入海Ⅱ式土器（第79図55～77・第80図78～85）

隆帯への加工は円筒状の工具を押しあてるもの（55～59・63）と他の方法でキザミを入れるもの（60～62・64～69）とがある。55～62は口縁部片である。55～57は円筒状工具の側面を押しあてて隆帯に半円の窪みを施している。口唇部も同様の方法で加工する。55・56は胴部のみが接合した73・74と同一個体と考えられる。58も55・56と同様の加工を行うが短い。59は円筒状の工具を隆帯に下方から突きつけて加工を行う。口縁部は工具側面を押しあてている。放射性炭素年代測定の結果6460±40yrBPの年代が得られている。60は3条の隆帯に対してヘラ状工具を右上から押しあててキザミを施す。口唇部には内外面からキザミを入れ、上面観は縹杉状になる。隆帯下位には爪形文を2列波状に配する。主に外面側から穿孔された補修孔が認められる。放射性炭素年代測定の結果6520±40yrBPの年代が得られている。61・62は口唇部に沿って隆帯が貼付けられている。隆帯のキザミは指先による可能性がある。61は口唇部に口縁に併行する縹杉痕が認められる。63は波状の隆帯に円筒状工具の側面を押しあてる。64には2条の低隆帯が認められ、ヘラ状工具で鋭いキザミを施す。65は隆帯下位に右上方向から爪形文を施している。66は極めて低い隆帯上に爪によるキザミを施していると考えられる。67は波状の、68は水平の隆帯をもち、隆帯上にはキザミが施されている。69～71および住居跡2出土の土器（第68図8）は同一個体と考えられる。69は先の丸まったヘラ状工具を隆帯に右上から押しあて、その下位には爪形文が認められることから文様構成は60と同様であった可能性が高い。70と71は爪形文のみが残されている。72は



第78図 達磨外出土の土層(2)

3条の爪形文が認められる。73～84は胴部のみで接合であるが、口縁部片と胎土が類似するものや、胎土が硬質で焼きしまったものについて、入海Ⅱ式に位置づけられる可能性が高いと考え、ここに分類した。いずれも内外面に条痕が認められる。73と74、75と76、77と78は同一個体と考えられる。85は2ヶ所に補修孔が認められる。また、76は放射性炭素年代測定の結果6350±40yrBPの年代が得られている。この年代は、上記の59と60の年代に比べると若干新しい。胎土の特徴から7類としたが、入海Ⅱ式とは異なる可能性がある。

8類：木島式土器（第80図86～91）

縄文時代前期初頭に位置づけられる。G-8グリッド南端に集中的な出土が認められる。この集中は5類：下吉弁式土器の集中と重複しており、両者は同時に残されたものと考えられる（第75図）。集中から出土したのは、87、88、89、90である。

木島Ⅳ式に位置づけられるものが多く、器厚は3.5～5mm程度である。薄手で指頭圧痕が顕著である。特に89には規則的に並ぶ指頭圧痕が認められ、製作時の粘土の接合に伴うものと考えられる。86・87は口縁部、88～91は胴部片である。86は口唇部に連続して深いキザミを入れていたと考えられる。87は口唇部に沿って外面に陰帯を貼付け、その下に若干蛇行する陰帯を2条貼付ける。更に下に大きく蛇行する陰帯を貼付け、その上に櫛歯状工具で縦方向の沈線を施す。また口唇部の内側には櫛歯状工具で横方向の沈線を施す。89・90にも櫛歯状工具による縦方向の沈線が認められる。90・91には外面から補修孔があげられている。89は放射性炭素年代測定の結果6220±40yrBPの年代が得られている。

9類：早期末～前期初頭の条痕文土器（第80図92～98・第81図99～111）

条痕文系土器のうち、型式が不明のものを9類とした。92～96は口縁部片である。92～94は器壁が比較的厚く、96は比較的薄い。92～94には口唇部に不規則で浅いキザミが施されている。95は口唇部に貝殻線によると考えられる刺突が一定間隔を開けて施されている。96は口唇部にヘラ状工具によると考えられる鋭いキザミが認められる。97～101は底部片である。97は尖底、98・99は小さい倒杯状、100は若干膨らみをもつ乳頭状、101は平底である。101～103は同一個体と考えられ、器壁が厚く、胎土がもろい。102～111は胴部である。104～108は器壁が比較的厚く、109～111は比較的薄い。92・106には補修孔があげられている。

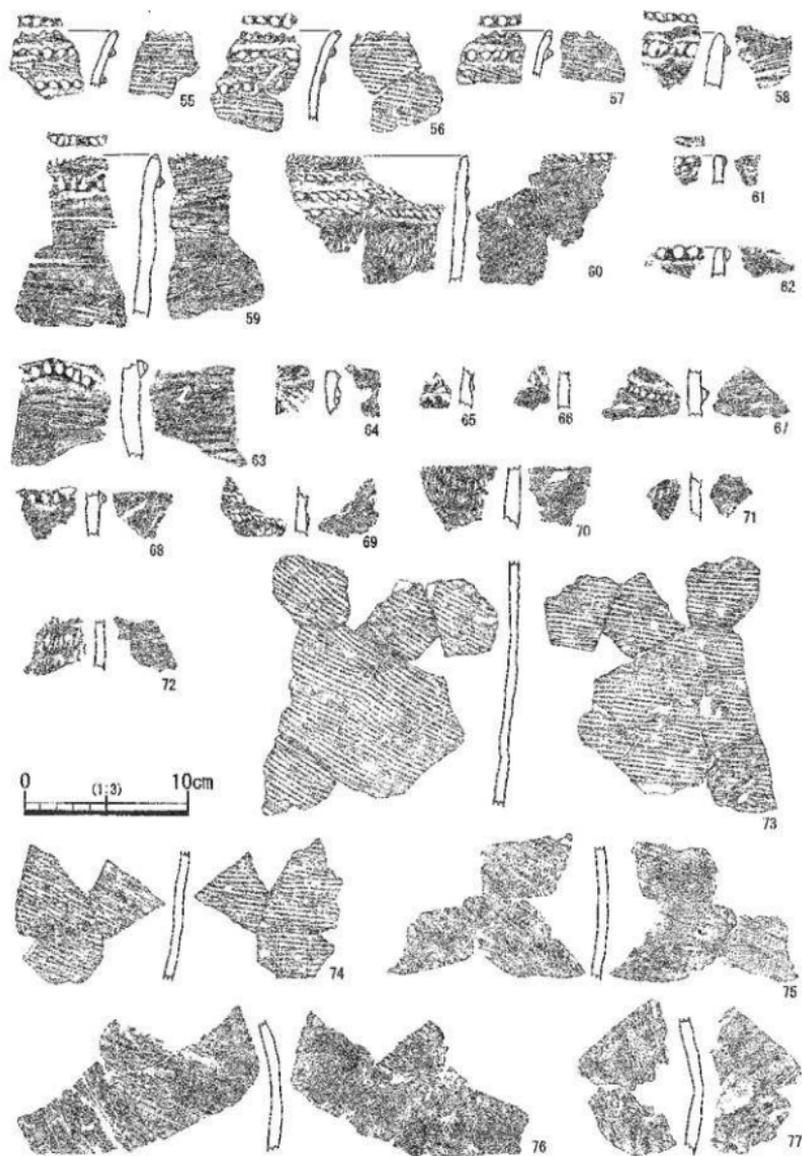
10類：踏踏b式土器（第81図112～116）

縄文時代前期後半に位置づけられる。住居跡1の周辺に分布するが、住居跡1に伴うものではないと考えられる（第75図）。

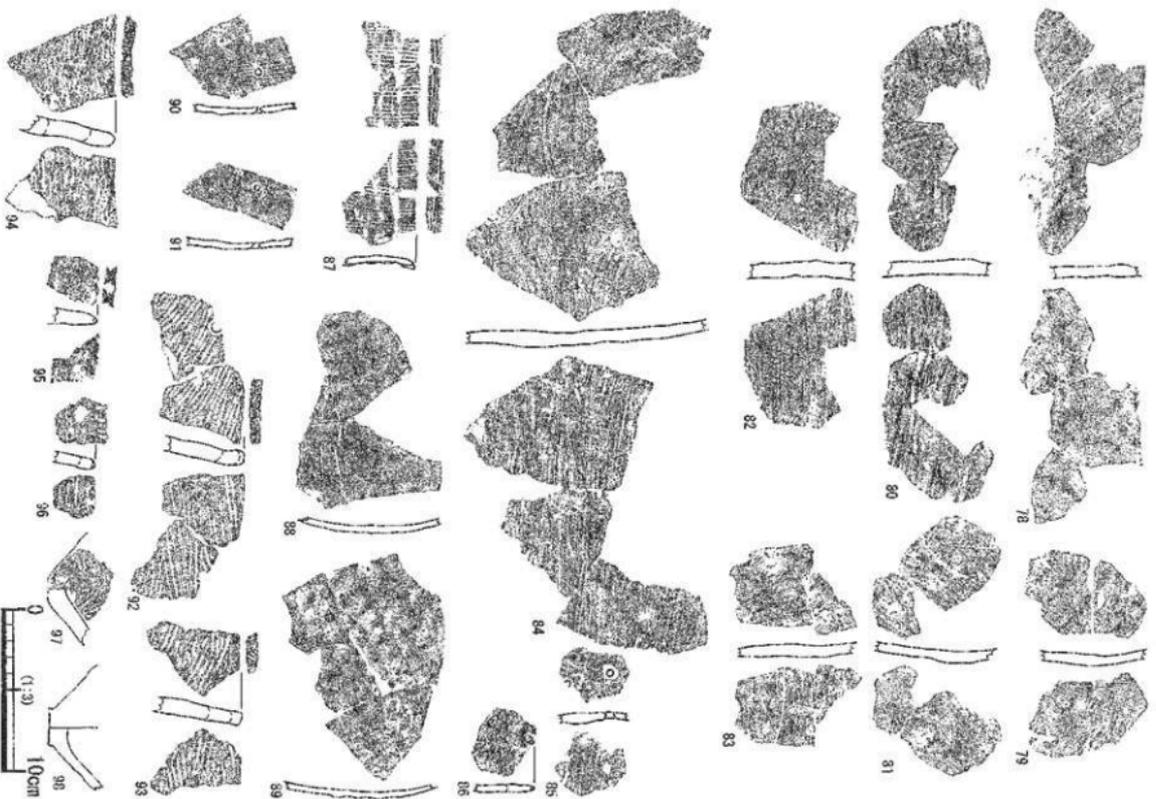
112～114は外面にRLの縄文を様々な方向に施文する。115、116については縄文を施さず、型式の厳密な比定はできていないが、踏踏b式である可能性が高いと考えた。112は口縁部片である。キャリパー形の器形で、口唇部にも縄文を施す。113～115は胴部片である。113には直行する方向の縄文施文が認められる。115は上端に2本の沈線が認められる。116は口縁部片で、口縁部に右下がりの連続する沈線を描き、その後でいびつな波状の沈線を施している。また、図化していないが、外面に縄文が施された小片には、赤色顔料が付着するものが認められた。

11類：勝坂式土器（第81図117）

縄文時代中期前半に位置づけられる。藤内式期のものである。口縁部を陰帯で三角形に区画する。口縁に並行する陰帯に比べ、その他2辺を構成するものは幅が広く陰帯中央に押し引文を施し、その両側に



第70図 遠藤外出土の土器(3)

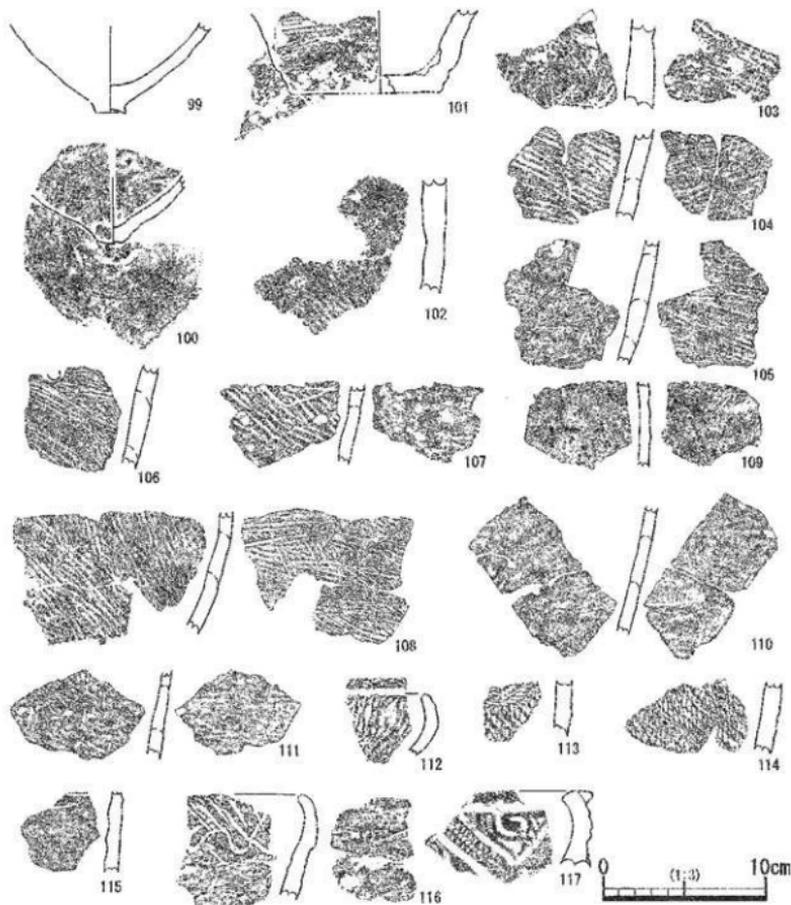


第80圖 遠橋外出土の土器(4)

キザミを施す。三角形区画内は中央に垂下する渦巻を沈線で描き、その右下にヘラ状工具による3つの深い刺突を施す。渦巻の左側には3条の押引文を縦に施す。渦巻の右側および下には三叉文が刻まれる。口縁部が強く内湾する。11類に属する土器は1点のみの出土で、勝版式土器が用いられた時期にこの遺跡で居住が行われていたとは考えにくい。何らかの理由で口縁部の文様部分が持ち込まれたと考えることができる。

12類：曾利Ⅲ式土器（第82図118～第84図143）

縄文時代中期後半に位置づけられる。2基の住居跡と同時期のもので、16類：加曾利EⅡ式と併行す



第81図 遠隔外出土の土器(5)

る。遺物分布では4ヶ所の集積が認められる。西から、G-5・G-6グリッド周辺、F-7・G-7グリッド周辺、住居跡1周辺、住居跡2周辺である。西の2ヶ所の集積からは斜行文の土器（118～134）が出土するのに対して、東半からはそれ以外のものが出土しており、出土状況は拮据的である。また、西端の集積からは16類：加曾利EⅡ式土器（第86図218）も出土しており、併うものと考えられる（第76図）。

118～137は斜行文の深鉢である。いずれも地文は深い条線である。形態に個体差が大きい。118～124は口縁部を有する。いずれも口縁部を内面に向けて折り返した部分まで斜行文を施し、その下に隆帯を貼付けている。斜行文と隆帯の境には細い棒状工具で溝を作り出すもの（119～123）が主体であるが、太い棒状工具によるもの（124）やナデによるもの（118）もある。121のように溝が途中で途切れてしまうものもある。隆帯の大きさは118のような極めて低いものから122のように高く、途中で沈線を施すものまで多様である。口縁部から肩部へ至る傾斜もさまざまで、118などは垂直に近い角度で立ち上がる。118・119・125～128は肩部を有する。肩部には、波状の隆線を貼付けるもの（118）や上下に波状の隆線を貼付けて交わせ、部分的に突出した縦位の隆線を施すもの（125）、屈曲部に高まりをもたせるだけのもの（119・125～127）がある。119・125～127は肩部の屈曲が極めて弱い。118・125・126・128～137は胴部の文様が残存する。縦位で蛇行する隆線のみを貼付ける（118・125・126・135～134）ものとそれに加えて渦巻を描くもの（128～131）とがある。128と129にはまっすぐ垂下する隆線も認められる。129は渦巻の隆線の末端部が波状の隆線へと移行する。

135・136および住居跡2出土の土器（第68図7）は同一個体と考えられる。135・136は口縁部内面に小さい隆帯を有する。外面には口縁部周辺に弧を描く2条の併行する隆帯を貼付け、その間を縦方向の隆帯で区画する。その下には縦位の沈線を1、2条施し、その間を縦形状の沈線で埋めているが全体の文様構成は不明である。第68図7は上半のみに縦形状の沈線が施されているため底部に近いと考えられる。また、135の口縁部左端には若干の上昇がみられることから、弧状の隆帯が合わさる部分は突出していたものと考えられる。

137と138は同一個体の可能性がある。内面に口縁部に併行する隆帯をもち、隆帯には上から太めの棒状工具を用いて窪みが作られている。沈線で区画と渦巻を交互に描き、区画内を縄文で埋める。縄文はLRで、区画内のほかに口唇部にも施されている。各所に連続した刺突列が認められるが、先端が鋭い工具によるもので、穴の大きさのばらつきが大きい。他のものに比べて著しく口径が小さい。138は渦巻部分のみの破片である。137は放射性炭素年代測定の結果4140±30yrBPの年代が得られている。

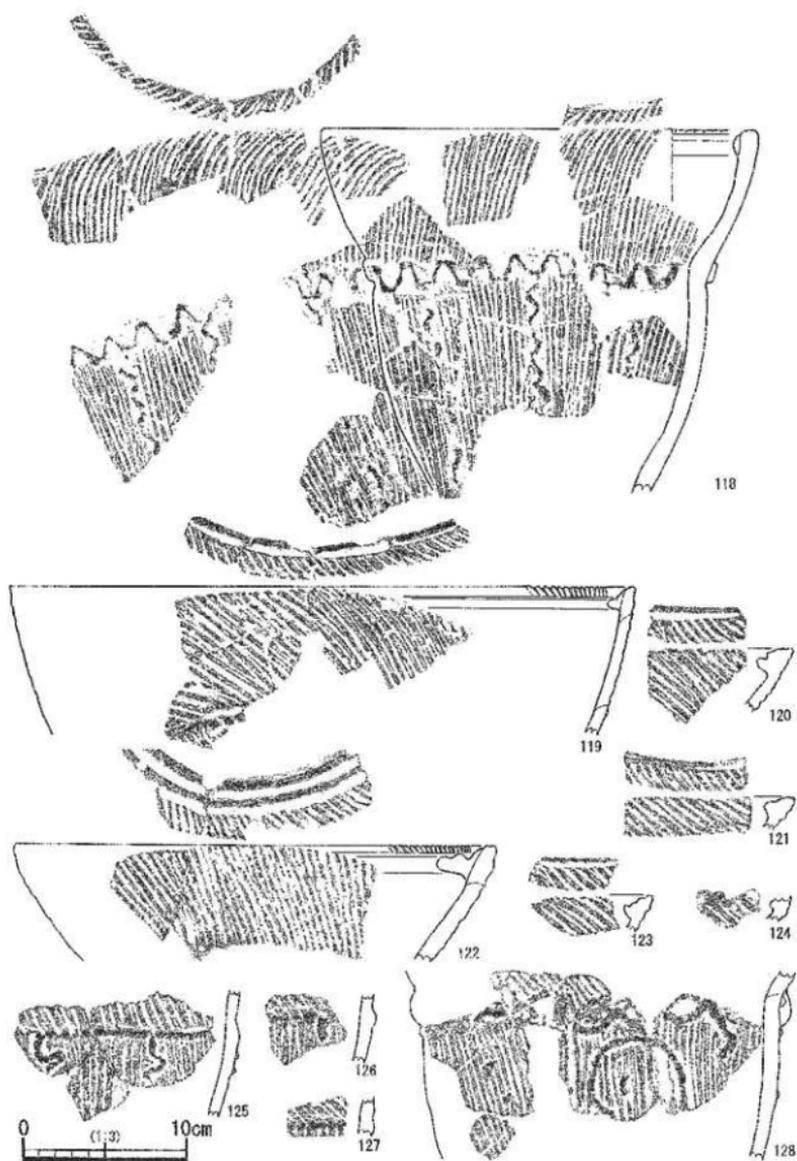
139は棒状工具を用いた3条の沈線で隆帯状の2条の垂下線を作り出し、途中で渦巻状に描くようであるが、詳細は不明である。それと間隔をあけて蛇行沈線文を施し、その間を縦形状の条線で埋める。

140は肩部と考えられるが詳細は不明である。肩部に隆帯を貼付け、その下の区画内を条線で埋める。

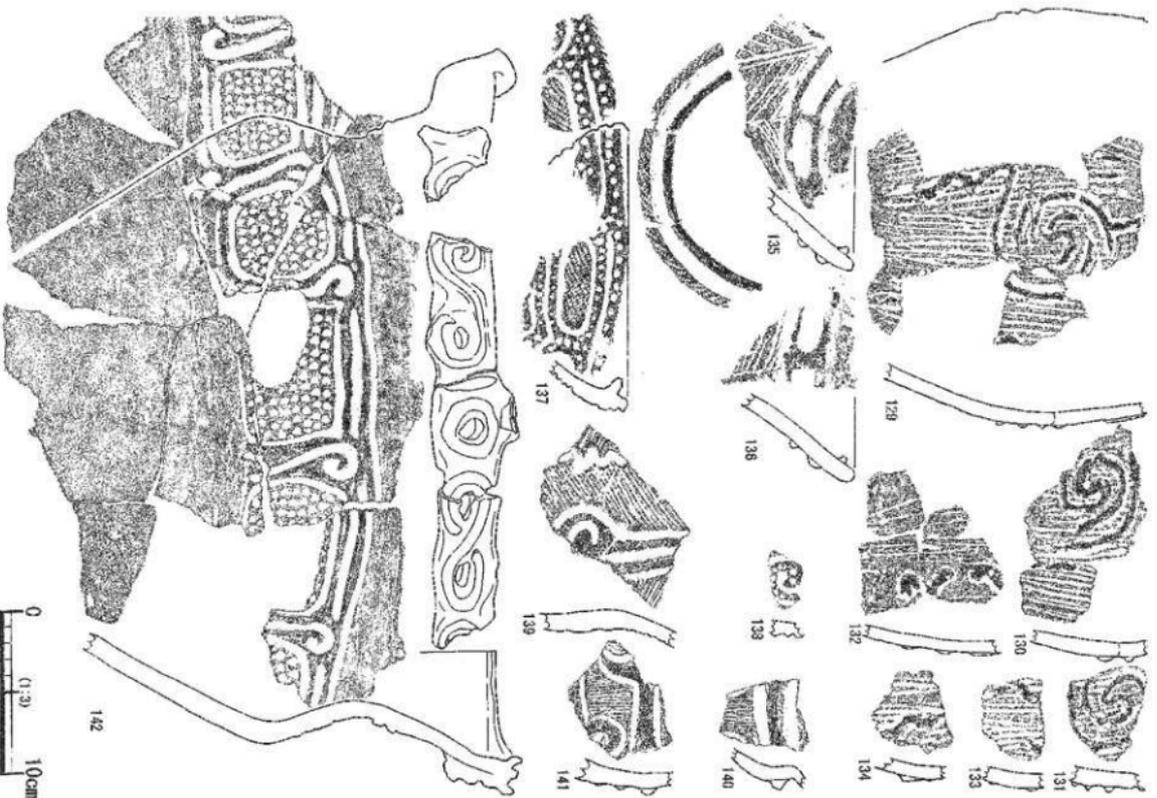
141は胴部片と考えられる。渦巻状の部分がある隆帯で区画を作り、その間を条線で埋める。

142は肥厚をもつ土器であるが、ほかの深鉢に比べて浅く作られている。施文は全て太めの棒状工具によってなされたと考えられる。口縁部文様帯は沈線で円形を描いた中を深く掘りくぼめたり、横S字を沈線で描き、囲まれた2ヶ所を掘りくぼめたりするが、部分的に渦巻を描く部分もある。口唇部には1条の沈線を施し、口縁の突出部では渦巻状に描く。肩部にも文様を施し、沈線による区画内を右下方向からの刺突で埋める。区画の大きさもばらつきが大きく、沈線による文様も全てが同じではない。文様構成は2号住居跡出土の第68図2と類似する。

143は渦巻部分が分厚く作られている胴部片である。



第82圖 透櫛外出土の土甕(6)



第83図 漆棺外出土の土器片

13類：曾利Ⅳ式土器（第84図144～第85図184）

縄文時代中期後半に位置づけられる。144～170は区画文の深鉢である。144～149は口縁部片でいずれも平らな口縁部をもつ。144～148には口縁部に沿って1～2条の浅い沈線が廻らされている。144・149には蛇行沈線が認められる。149は工具を用いた鋭い沈線を口縁部に沿って廻らせるようであるが、途中で途切れている。工具は蛇行沈線文を描くのと同様のものと考えられる。147・148については胴部に施される綾杉条線が残されていないため、14類：曾利Ⅴ式である可能性がある。144と145、149と150はそれぞれ同一個体の可能性がある。150～169は胴部片である。いずれも綾杉条線が廻される。151と152、161～166はそれぞれ綾杉条線と胎土が類するため同一個体と考えられる。151・152には内面にヘラ状工具による縦方向の擦痕が認められる。区画文は鋭い工具で沈線を描くもの（150）や隆帯を貼付けるもの（151・152）、両側縁をナデて隆帯状に突出させるもの（153～158）、両側縁をナデるのみのもの（160～165）など様々である。綾杉条線にも深い条線と浅い条線が併走するもの（160～166・169）などがある。151・152・154・155・157・158・167には蛇行沈線が認められる。170は底部で、両側縁をナデて隆帯状に突出させた区画文の間を縦位条線で埋める。また、放射線炭素年代測定の結果、161は4150±30yrBP、170は4120±30yrBPの年代が得られている。

171～178はX字把手甕である。171～174は同一個体の可能性がある。171は把手が欠落しているもので、把手が割れた痕跡が2ヶ所に認められた。両脇をナデてわずかにくぼめた低隆帯で、渦巻などの文様を描き出している。把手は隆帯による文様の一部として構成され、その隆帯は隣り合う把手や胴部の文様帯へと接続している。胴部では隆帯の空白部分に条線が施されるが、条線の諸文は大部分で周距のナデに先行する。172は把手の基部片である。173は把手が貼付けられていた痕跡が残る。174には2条の隆帯が認められる。175は低隆帯で渦巻を描く。177は低隆帯で文様を描くが内容は不明である。178は高さがある隆帯を貼付けナデつけている。

179～184は形式不明の胴部片である。179～183は比較的高い隆帯を貼付け、それ以外の部分には条線を施す。184はなだらかな隆帯で渦巻を描く。

14類：曾利Ⅴ式土器（第85図185～201）

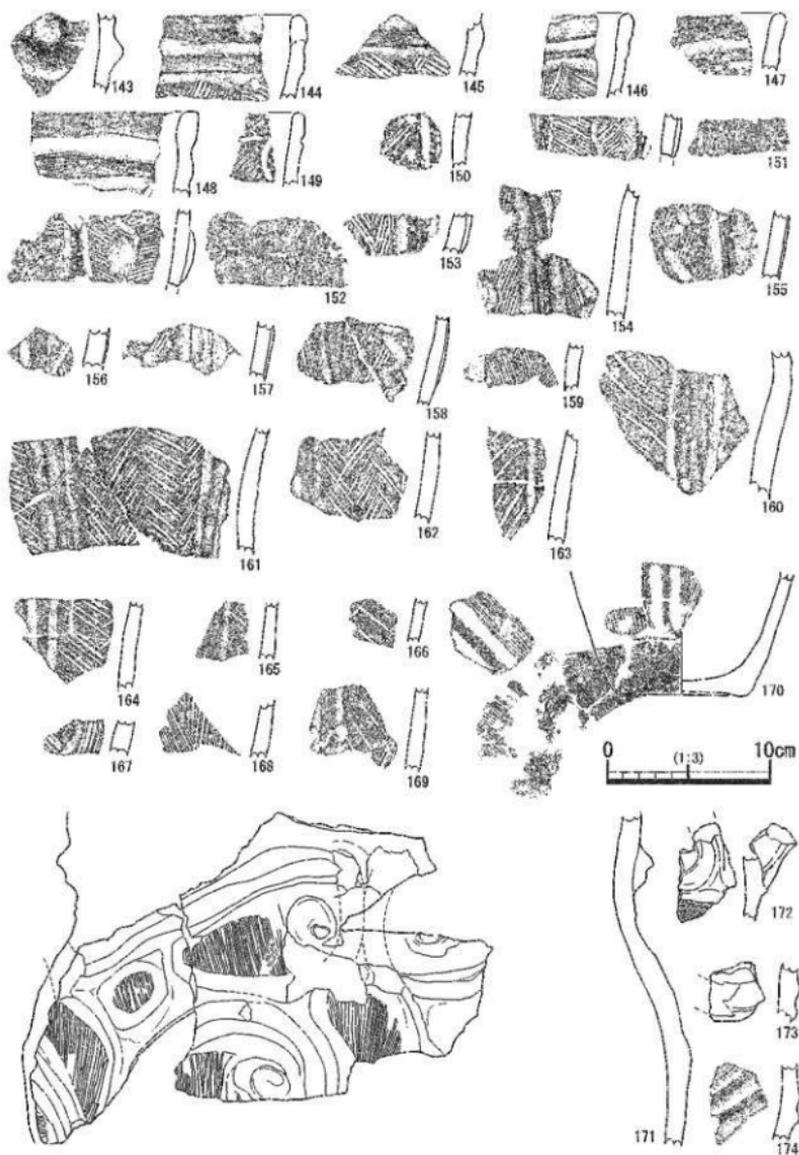
縄文時代中期後半に位置づけられる。185～193は区画文の深鉢である。185・186は口縁部片で、185は口縁部に沿って太い沈線を施し、186は2条の浅い沈線を施す。187も区画文の上部で、口縁部に近い。胴部はいずれもハの字地文が施され、ヘラ状工具による幅広のもの（185・190）、幅が狭いもの（186～189）、櫛歯状工具による刺突のもの（191～193）がある。蛇行沈線は185にのみ認められる。191と192は同一個体と考えられる。

194は把手甕の可能性がある。把手は欠落しているが、環状把手の孔の下端が残存する。把手の左右に残された小さい隆帯が把手部へと続く。把手下部には弱いナデで渦巻が描かれている。

195～201は形式不明の土器である。195～197は同一個体と考えられる。弱いナデで区画文を作り出し、区画内をまばらな条線で埋める。198・199は同一個体と考えられる。198は口縁部であると考えられる。極めて弱いナデで渦巻を描く。200は棒状工具で区画を描き、区画内をヘラ状工具による刺突で埋める。201には棒状工具による2条の沈線とまばらな条線が認められる。

15類：曾利式土器（第85図202～213）

縄文時代中期後半に位置づけられる。明確な時期は不明であるが曾利式の可能性が高いと考えられるものを15類とした。202～207は口縁部片である。204には棒状工具による横線が外面に施される。205～207には外面に縦位の条線が施される。205には加えて、縦位の粗雑な隆帯が貼付けられる。208・209は



第84図 遺構外出土の土器(8)

把手である。208は環状把手で、前面、後面、上面に棒状工具による沈線が施される。環状部内側の作りは粗雑で、貼付けられた粘土が接合されずひび割れが残されている。209には外面にナデによる円弧、もしくは滴垂が描かれる。210～213は胴部片である。210は、屈曲部に棒状工具による波状沈線が施される。211～213は沈線とそれに沿った刺突列が施される。211と212は同一個体と考えられる。

16類：加曾利EⅡ式土器（第85図214～第86図218）

縄文時代中期後半に位置づけられる。2基の住居跡と同時期のもので、12類：曾利Ⅲ式と併行する。地文が縄文のものを16類とした。遺物分布はG-5・G-6グリッド周辺と住居跡1周辺に集中し、その他の場所にも散在する。西の集中は12類：曾利Ⅲ式土器の斜行文土器の集束と重複している。西の集中から出土している218は胎土も12類の斜行文土器に類似しており、両者は共伴すると考えられる。

216のみがLRの縄文であり、その他はRLの縄文を施す。214～217は胴部片である。214～216には区画の沈線が、214・215には蛇行沈線が施される。217には縄の筋節部の蛇行する圧痕が施される。218にも胴部に縄の筋節部の蛇行する圧痕が施される。口縁部には文線帯があり、口縁と併行する2条の線をもち隆帯の間を、弧を描く線をもち隆帯で埋める。内面には口縁に沿った突出が作り出される。また、214は放射性炭素年代測定の結果4090±30yrBPの年代が得られている。

17類：加曾利EⅣ式土器（第86図219・220）

縄文時代中期後半に位置づけられる。調査範囲西端に分布が集中する（第76図）。

219と220はともに胴部片である。棒状工具で区画を行った後に区画内にLRの縄文を施す充填縄文が施される。219と220は同一個体と考えられる。

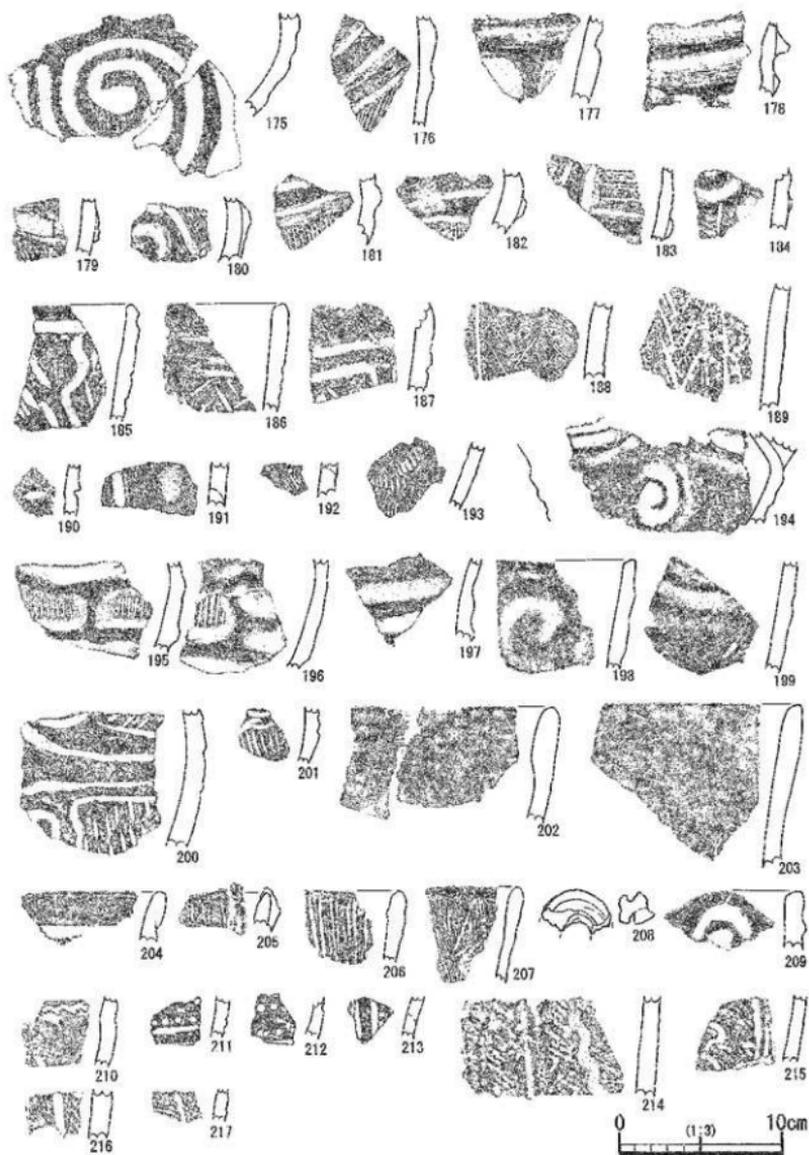
18類：堀之内式土器（第86図221～230）

縄文時代後期前半に位置づけられる。G-9グリッドに集中が認められ、特に分布が集中する部分には焼土跡が認められた（第76図）。

221～227は同一個体と考えられる。胎土に多くの砂礫を含む。棒状工具で区画を行った後に区画内にRLの縄文を施す充填縄文が施される。矩形の区画と曲線が組み合わさって文様が構成される。221は口縁部片で、口唇部には太い沈線が2条認められる。口唇部に沿った区画に縄文を施すが、区画内にも縄文の施されない部分が多く残る。228は充填縄文が施されると考えられるが、磨滅しており、詳細は不明である。2量の円弧を描く沈線が棒状工具により施される。229と230は同一個体と考えられる。棒状工具により両端を密めて強調された隆帯上に無節のLの縄文を施す。

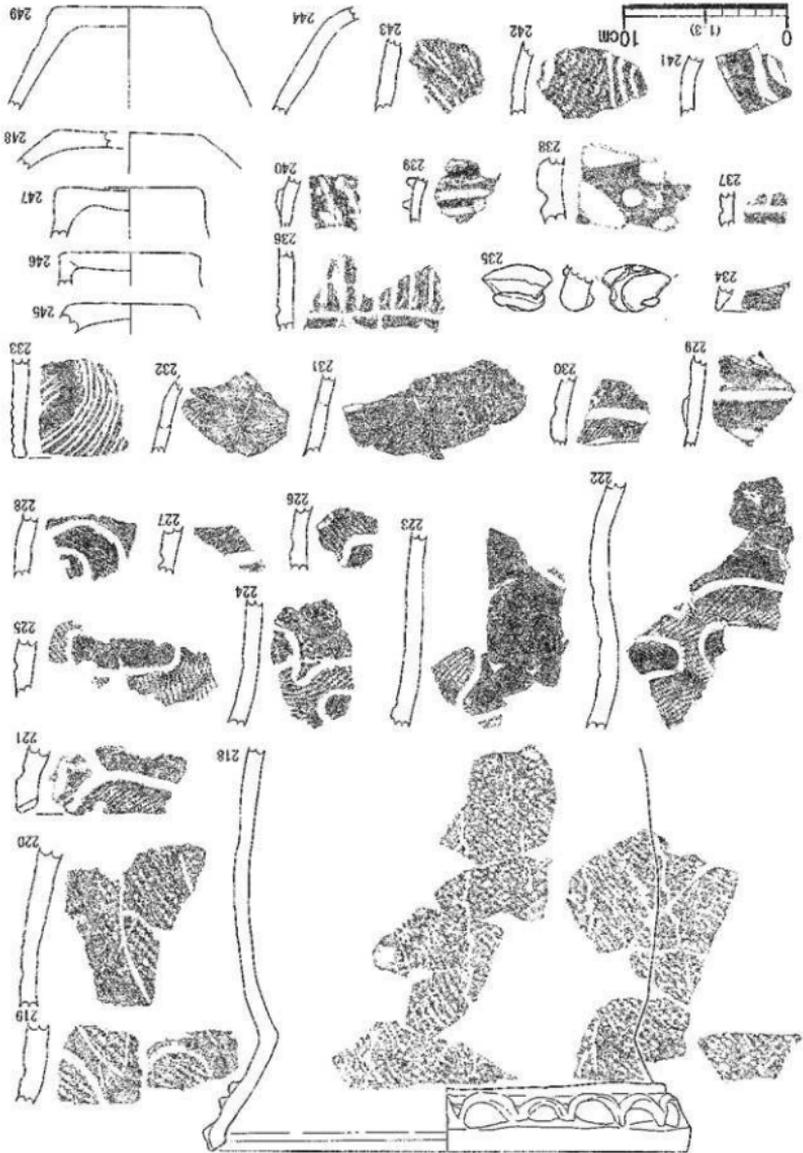
19類：型式不明の土器（第86図231～249）

特徴的ではあるが、型式の決定ができなかった土器を19類とした。231は外面に列に並ぶ極小さい粒状の圧痕が間隔をあけて施される。極小の撚糸文が異方向に何度も施されたものである可能性はあるが、定かではない。内面は磨かれてはいないが比較的平滑である。232は背面に貝殻背圧痕文が施される。233は口縁部片である。平行沈線で弧状の文線を描く。口唇部は平坦面をもつ。234は口縁部片である。口唇部は比較的鋭く、外面には口縁部に斜行する平行沈線が認められる。235は口縁部に行く突出部と考えられる。三角形の突出に貼付隆線が螺旋状に取り付く。236と237は同一個体と考えられる。横方向の2条の沈線の下に一定間隔をあけて平行する沈線が施される。施文は棒状工具による。238は外面に沈線と刺突が施されるが、施文が大きく、起伏も激しい。人指による施文の可能性はある。内面にはミガキを行う。239は高く線をもち隆帯が2条貼付けられている。240は外面に隆線を貼付ける。内面にはミ



第85図 遺構外出土の土器(9)

第98圖 遠藤外出土の土器(Ⅱ)



ガキを行う。241は浅い沈線が3条施される。内面は丁寧に磨かれ、明赤褐色を呈する。242は平行する沈線で文様を描いた中に充填縄文を施す。RLの縄文を何度かに分けて施文する。内面にはミガキを行う。243は外面に連続する条線が認められるが詳細は不明である。内面にはミガキを行う。244～249は底部及び底部に近い破片である。いずれも平底であるが、244・248が緩やかに立ち上がるのに対して、245～247・249は外面に底部と胴部との間に明確な屈曲を有する。

20類：土器片加工円盤（第87図250～257）

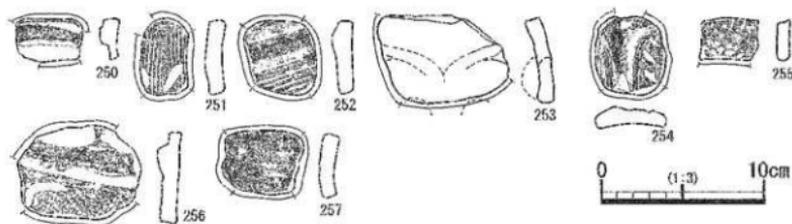
破壊した土器の欠片を研磨に用い、縁辺が摩滅したものを20類とした。住居跡1の北西で3点が集中する以外は調査範囲中央から西側にかけて散在する（第76図）。

ここでは素材となった土器について記載する。250は棒状工具で施された2条の沈線が残されており、12類：曾利Ⅲ式の可能性がある。251～253は13類：曾利Ⅳ式と考えられる。254は条線を地文とし、蛇行沈線の可能性がある沈線も認められる。252は両脇を指でナゲた胎帯とそれに平行する条線が認められる。253はX字把手嚢で把手部は欠損している。254と255は14類：曾利Ⅴ式に位置づけられる。254は区画文の深鉢でヘラ状工具による幅広のハの字文が施される。255は同じくハの字文と考えられるが、細く浅い。256は16類：加曾利EⅡ式に位置づけられる可能性が高い。浅い沈線で区画を作り出し、RLの縄文を充填している。また、胎帯も認められるが、破片のため全体としての形状は不明である。257は表面が摩滅しており、型式は分からない。内面にはミガキが行われる。

参考文献

関野哲夫・関本光孝・一杉高徳・鈴木裕寛1989『沼津市文化財調査報告47 清水柳北遺跡発掘調査報告書その1』沼津市教育委員会

三生亮輔・佐々木富士子・及川司2008『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告191 瀬返遺跡・今里遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所



第87図 遺構外出土の土器(11)

第15表 遺構外出土土器類家竈

図版番号	分類	部位	色調 (Hue)	胎土	産地	構成	文相調査等
1	1B	FB	にじみ黄 (7.5YR 5/4)	白色胎子、赤色胎子、黄母	青	良	外側に磁方向のRの磁文。
2	1B	FB	柄唐揚 (5YR 5/6)	白色胎子、黒母、緑石、白色胎子	青	良	外側に磁方向のRの磁文。
2	1B	FD	柄唐揚 (5YR 5/6)	白色胎子、黄母、緑石、白色胎子	青	良	外側に磁方向のRの磁文。
4	1B	FB	柄唐揚 (5YR 5/6)	白色胎子、赤色胎子、黄母、緑石、赤色胎子	青	良	外側に磁方向のRの磁文。
5	1B	FB	柄唐揚 (5YR 5/6)	白色胎子、赤色胎子、黄母、緑石、白色胎子	青	良	外側に磁方向のRの磁文。
6	2B	FB	にじみ黄 (10YR 6/4)	白色胎子	黒	良	外側に磁方向のRの磁文。
7	2B	FB	柄 (7.5YR 6/6)	白色胎子	黒	良	外側に磁方向のRの磁文。柄唐揚。
8	2B	FD	柄 (7.5YR 6/6)	白色胎子	黒	良	外側に磁方向のRの磁文。
9	2B	FB	にじみ黄 (7.5YR 6/4)	白色胎子	黒	良	外側に磁方向のRの磁文。柄唐揚。
10	3B	FD	にじみ黄 (10YR 4/2)	白色胎子少	青	良	外側に磁文。
11	3B	FB	にじみ黄 (7.5YR 5/4)	白色胎子	青	良	外側に磁文。
12	4B	FB	柄唐揚 (5YR 5/4)	白色胎子、赤色胎子、黒母、緑石	青	良	外側に磁文を施行させた製法。内面に赤線による縦文。
13	5B	FB	柄唐揚 (5YR 5/5)	白色胎子少、赤色胎子、黄母、白色胎子	青	良	口唇部にキズ。外側に磁文。12から21同一個体。
14	4B	FD	柄唐揚 (5YR 5/4)	白色胎子少、赤色胎子、黒母、白色胎子	青	良	口唇部にキズ。外側に磁文。製法。13から21同一個体。
15	4B	KU	柄唐揚 (5YR 5/4)	白色胎子少、赤色胎子、黒母、白色胎子	青	良	外側に磁文。製法。13から21同一個体。
16	4B	FB	柄唐揚 (5YR 5/4)	白色胎子少、赤色胎子、黄母、白色胎子	青	良	外側に磁文。製法。13から21同一個体。
17	4B	FB	柄唐揚 (5YR 5/5)	白色胎子少、赤色胎子、黄母、白色胎子	青	良	外側に磁文。製法。13から21同一個体。
18	4B	FD	柄唐揚 (5YR 5/4)	白色胎子少、赤色胎子、黄母、白色胎子	青	良	外側に磁文。製法。13から21同一個体。
19	4B	FB	柄唐揚 (5YR 5/5)	白色胎子少、赤色胎子、黄母、白色胎子	青	良	外側に磁文。製法。13から21同一個体。
20	4B	FD	柄唐揚 (5YR 5/6)	白色胎子少、赤色胎子、黒母、白色胎子	青	良	外側に磁文。製法。12から21同一個体。
21	5B	KU	柄唐揚 (5YR 5/4)	白色胎子、赤色胎子、黒母、白色胎子	青	良	破口部。外側にRの磁文。内面に赤線。22から24同一個体。
22	5B	KU	柄唐揚 (5YR 5/4)	白色胎子、赤色胎子、黒母、白色胎子	青	良	破口部。外側にRの磁文。内面に赤線。22から24同一個体。
24	5B	KU	柄唐揚 (5YR 5/4)	白色胎子、赤色胎子、黒母、白色胎子	青	良	破口部。外側にRの磁文。内面に赤線。22から24同一個体。
25	5B	KU	柄唐揚 (5YR 5/4)	白色胎子、赤色胎子、黒母、白色胎子	青	良	破口部。外側にRの磁文。内面に赤線。22から24同一個体。
26	5B	KU	柄唐揚 (5YR 5/4)	白色胎子、赤色胎子、黒母、白色胎子	青	良	破口部。外側にRの磁文。内面に赤線。22から24同一個体。
27	5B	FB	にじみ黄 (10YR 6/4)	白色胎子、赤色胎子少	黒	中々不良	口唇部にキズ。外側に磁の磁文。27・28・44同一個体。
28	5B	FD	にじみ黄 (10YR 6/4)	白色胎子、赤色胎子少	黒	中々不良	外側に磁文を施行。磁文。27・28・44同一個体。
29	5B	FB	にじみ黄 (10YR 6/4)	白色胎子、赤色胎子少	黒	良	口唇部。外側に磁文を施行。
30	5B	KU	柄唐揚 (5YR 5/6)	白色胎子、赤色胎子、黒母	青	良	外側に磁文を施行。赤線。内面に赤線。30・31同一個体。
31	5B	FB	柄唐揚 (5YR 5/6)	白色胎子、赤色胎子、黒母	青	良	外側に磁文を施行。赤線。内面に赤線。30・31同一個体。
32	5B	FB	柄 (7.5YR 5/5)	白色胎子、赤色胎子、黄母、緑石、白色胎子	青	良	口唇部。外側にRの磁文を施行。外内面に赤線による縦文。
33	5B	FB	にじみ黄 (7.5YR 5/4)	白色胎子、赤色胎子少	黒	良	口唇部。外側に磁文を施行。
34	5B	FB	柄 (7.5YR 6/6)	白色胎子、赤色胎子少	黒	良	外側に磁文を施行。赤線。内面に赤線。
35	5B	FD	にじみ黄 (7.5YR 5/4)	白色胎子、赤色胎子少	黒	良	外側に磁文を施行。
36	5B	KU	にじみ黄 (10YR 4/3)	白色胎子、赤色胎子少、黒母	黒	良	外側に磁文を施行。赤線。内面に赤線。
37	5B	FB	にじみ黄 (5YR 5/4)	白色胎子、赤色胎子少	黒	良	外側に磁文を施行。赤線。内面に赤線。
38	5B	FB	柄唐揚 (5YR 5/6)	白色胎子、赤色胎子	黒	良	外側に磁文を施行。赤線。内面に赤線。
39	5B	FB	柄 (7.5YR 5/6)	白色胎子、赤色胎子少	黒	良	外側に磁文を施行。磁文。内面に赤線。
40	5B	FD	にじみ黄 (10YR 7/4)	白色胎子、赤色胎子少	黒	良	外側に磁文。
41	5B	FD	にじみ黄 (10YR 6/4)	白色胎子、赤色胎子、黄母	黒	良	口唇部にキズ。外内面に赤線。
42	5B	KU	柄 (7.5YR 6/6)	白色胎子、赤色胎子	黒	良	口唇部。
43	5B	FB	にじみ黄 (7.5YR 5/4)	白色胎子	黒	良	口唇部。内面に赤線。
44	5B	FB	にじみ黄 (10YR 7/4)	白色胎子、赤色胎子、赤色胎子、黒母、白色胎子	青	中々不良	口唇部。外内面に赤線。27・28・44同一個体。
45	6B	FD	柄 (7.5YR 4/2)	白色胎子	黒	良	口唇部の内面より交互に製法。外側に磁文を施行。上下より製法。内面に赤線。
46	6B	FB	にじみ黄 (5YR 4/2)	白色胎子	青	良	口唇部の外側から交互に製法。外側に磁文を施行。内面。内面に赤線。46・47同一個体。
47	6B	FB	にじみ黄 (5YR 4/2)	白色胎子	青	良	口唇部の外側から交互に製法。外側に磁文を施行。内面。内面に赤線。46・47同一個体。
48	6B	FD	にじみ黄 (7.5YR 5/4)	白色胎子少	青	良	外側に磁文を施行。製法。内面に赤線。48・49同一個体。
49	6B	FB	にじみ黄 (7.5YR 5/4)	白色胎子少	青	良	外側に磁文を施行。製法。内面に赤線。48・49同一個体。
50	6B	FD	柄 (7.5YR 4/2)	白色胎子少	青	良	外側に磁文を施行。内面に赤線。
51	6B	KU	柄 (7.5YR 4/2)	白色胎子、赤色胎子	青	良	口唇部の内面から交互に製法。外側に磁文を施行。黄母製の製法。内面に赤線。51・52同一個体。
52	6B	FB	にじみ黄 (10YR 5/2)	白色胎子	青	良	口唇部の内面から交互に製法。外側に磁文を施行。上下より製法。内面に赤線。51・52同一個体。

図説 番号	分組	層位	色説 (No)	胎土	造形	特徴	文様解説等
111	9組	FB	にょい丸 (7.5YR 5/4)	白色胎子、黄褐色、輝石、白色岩片、赤色岩片	有 点	内外面に赤褐色。	
112	10組	FB	丸 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、輝石、白色岩片	無 点	口縁部と外面に紅の斑文。	
113	10組	FB	にょい赤丸 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、輝石、白色岩片	無 点	外側に、縦方向の赤文。	
114	10組	KU	にょい赤丸 (7.5YR 5/4)	白色胎子、褐色胎子、輝石、輝石、白色岩片	無 点	外側に縦方向の紅の斑文を施す。	
115	10組	KU	丸 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、黄褐色、輝石、白色岩片	細 点	外面に模様。	
116	10組	FB	丸 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、輝石、褐色岩片、赤色岩片	無 点	口縁部、外側に斜めの斑状の模様。	
117	11組	FB	にょい丸 (7.5YR 6/4)	白色胎子多、褐色胎子、黄褐色	無 点	内面が白磁質。中央部底面に胎土に伸文とキギリを施す。三角彫刻面が口縁部を越える基準と5本の伸文、縦刻、凹文を施す。	
118	12組	KU/FB	赤帯筒 (5YR 5/6)	白色胎子、輝石、白色岩片多	無 点	口縁部に斜行文を施し、胎土面に縦刻の胎土を施す。胎土に縦方向の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
119	12組	KU/FB	赤帯筒 (7.5YR 5/6)	白色胎子、褐色胎子、黄褐色	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
120	12組	FB	にょい赤丸 (7.5YR 5/4)	白色胎子、輝石	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
121	12組	赤帯	にょい赤丸 (7.5YR 5/6)	白色胎子、輝石	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
122	12組	FB	赤帯筒 (7.5YR 5/6)	白色胎子、輝石	細 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
123	12組	KU	にょい赤丸 (7.5YR 5/4)	白色胎子、褐色胎子、輝石、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
124	12組	FB	丸 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、輝石	無 点	口縁部、胎土、胎土。	
125	12組	FB	にょい丸 (7.5YR 5/4)	白色胎子、褐色胎子、黄褐色	無 点	外側に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
126	12組	FB	にょい赤丸 (7.5YR 5/4)	白色胎子、褐色胎子、黄褐色	無 点	外側に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
127	12組	FB	にょい丸 (7.5YR 5/4)	白色胎子、褐色胎子、黄褐色	無 点	外面に模様。	
128	12組	FB	にょい赤丸 (7.5YR 5/4)	白色胎子、褐色胎子	細 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
129	12組	FB	丸 (7.5YR 4/4)	白色胎子、黄褐色、白色岩片	無 点	外側に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
130	12組	FB	にょい赤丸 (7.5YR 5/4)	白色胎子、褐色胎子、黄褐色	無 点	外側に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
131	12組	FB	高 (7.5YR 4/5)	白色胎子、褐色胎子、黄褐色	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
132	12組	KU/FB	にょい赤丸 (7.5YR 5/4)	白色胎子、褐色胎子、黄褐色、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
133	12組	FB	高 (7.5YR 4/5)	白色胎子、褐色胎子、黄褐色	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
134	12組	FB	高 (7.5YR 4/5)	白色胎子、褐色胎子、黄褐色	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
135	12組	KU	にょい丸 (7.5YR 6/4)	白色胎子多、褐色胎子、赤色胎子、黄褐色	無 点	口縁部内面に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
136	12組	KU	にょい丸 (7.5YR 6/4)	白色胎子多、褐色胎子、赤色胎子、黄褐色	無 点	口縁部内面に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
137	12組	KU/FB	高 (7.5YR 4/5)	白色胎子、褐色胎子	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
138	12組	FB	にょい赤丸 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、輝石、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
139	12組	KU	にょい赤丸 (7.5YR 5/4)	白色胎子、褐色胎子、輝石、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
140	12組	FB	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、白色岩片	無 点	外側に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
141	12組	FB	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、白色岩片	無 点	外側に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
142	12組	KU/FB	にょい赤丸 (7.5YR 6/4)	白色胎子多、褐色胎子、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
143	12組	FB	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、輝石	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
144	12組	KU	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、輝石	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
145	12組	KU	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、輝石	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
146	12組	FB	にょい赤丸 (7.5YR 4/4)	白色胎子	無 点	口縁部、胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
147	12組	KU	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
148	12組	FB	にょい丸 (7.5YR 5/4)	白色胎子、褐色胎子、黄褐色	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
149	12組	FB	にょい赤丸 (7.5YR 5/4)	白色胎子、褐色胎子、黄褐色	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
150	12組	FB	にょい赤丸 (7.5YR 5/4)	白色胎子、褐色胎子	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
151	12組	KU	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
152	12組	KU	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
153	12組	FB	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
154	12組	FB	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
155	12組	FB	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
156	12組	FB	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
157	12組	FB	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
158	12組	FB	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
159	12組	FB	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
160	12組	FB	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
161	12組	KU/FB	にょい赤丸 (7.5YR 5/4)	白色胎子、褐色胎子、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	
162	12組	FB	高 (7.5YR 4/4)	白色胎子、褐色胎子、白色岩片	無 点	胎土に胎土の赤線を施すとし、胎土に伸文を施す。	

図版番号	分限	肩位	色調 (Rac)	粘土	用途	加減	文庫別番号
221	18段	FB	にょい高 (7.5YR 6/4)	褐色粘土、黒色粘土片	葬	良	口部部、付付工具による区別内にR.Lの焼文を施文。221から227同一個体。
222	18段	KU/P	高 (7.5YR 4/4)	褐色粘土、白色粘土片、褐色粘土片、赤色粘土片	加	良	外面に付付工具による区別、R.Lの焼文を施文。221から227同一個体。
223	18段	KU/P	溝 (7.5YR 6/4)	褐色粘土、白色粘土片、褐色粘土片	加	良	外面に付付工具による区別、R.Lの焼文を施文。221から227同一個体。
224	18段	KU/P	壺 (7.5YR 5/4)	褐色粘土、白色粘土片、褐色粘土片	加	良	外面に付付工具による区別、R.Lの焼文を施文。221から227同一個体。
225	18段	KU/P	溝 (7.5YR 4/4)	褐色粘土、褐色粘土片	加	良	外面に付付工具による区別、R.Lの焼文を施文。221から227同一個体。
226	18段	FB	高 (7.5YR 4/4)	褐色粘土、白色粘土片、褐色粘土片	加	良	外面に付付工具による区別、R.Lの焼文を施文。221から227同一個体。
227	18段	KU	にょい溝 (7.5YR 6/4)	白色粘土、褐色粘土	加	良	外面に付付工具による区別、R.Lの焼文を施文。221から227同一個体。
228	18段	表見	にょい壺溝 (10YR 5/4)	褐色粘土、褐色粘土片	加	良	外面に付付工具による区別、R.Lの焼文を施文。
229	18段	FB	にょい高 (7.5YR 6/4)	白色粘土、褐色粘土、輝石	加	良	外面に飾帯を付付けたの焼文を施文。229・230同一個体。
230	18段	FB	溝 (7.5YR 6/4)	白色粘土、褐色粘土、輝石	加	良	外面に飾帯を付付けたの焼文を施文。229・230同一個体。
231	18段	FB	壺 (7.5YR 6/4)	褐色粘土、黄褐色、輝石、白色粘土片、褐色粘土片	加	良	外面に飾小い紋状の焼文、施文ナシ
232	19段	FB	にょい溝 (7.5YR 6/4)	白色粘土、輝石、輝石少、白色粘土片	加	良	外面に飾帯の焼文を施文。
233	19段	表見	にょい溝 (7.5YR 6/4)	白色粘土	加	良	口部部、表帯の平行紋。
234	19段	FB	溝 (7.5YR 4/4)	白色粘土	加	良	口部部、飾帯の平行紋。
235	19段	FB	壺 (5YR 2/2)	白色粘土少、褐色粘土、輝石	加	良	口部部に行く箇所。
236	19段	KU 表見	にょい溝 (7.5YR 4/4)	白色粘土少、輝石	加	良	外面に付付工具による区別の2本の紋、縦方向の平行紋。236・237同一個体。
237	19段	FB	にょい溝 (7.5YR 4/4)	白色粘土少、黄褐色	加	良	外面に付付工具による区別の2本の紋、縦方向の平行紋。236・237同一個体。
238	19段	FB	黄褐色 (10YR 5/6)	白色粘土、輝石多、白色粘土片	加	良	外面に紋、施文、内面ナシ。
239	19段	FB	にょい壺溝 (10YR 6/4)	白色粘土、褐色粘土、黄褐色	加	良	外面に飾帯の帯状付付。
240	19段	FB	壺溝 (7.5YR 6/4)	白色粘土、褐色粘土	加	良	外面に飾帯付付。内面ナシ。
241	19段	FB	壺溝 (7.5YR 5/4)	白色粘土、褐色粘土	加	良	外面に紋。
242	19段	FB	にょい壺溝 (10YR 6/4)	白色粘土、黄褐色	加	良	外面に紋、R.Lの焼文を施文。
243	19段	FB	壺溝 (7.5YR 5/4)	白色粘土、褐色粘土、輝石	加	良	外面に紋、内面ナシ。
244	19段	FB	にょい壺溝 (5YR 4/4)	褐色粘土、褐色粘土片、輝石、白色粘土片	加	良	施帯、施文。
245	19段	KU/2B	赤褐色 (5YR 4/6)	白色粘土、褐色粘土、輝石少	加	良	施帯、施文。
246	19段	KU	高 (7.5YR 4/3)	白色粘土多、輝石多、白色粘土片	加	良	施帯、施文。内面ナシ。
247	19段	FB	壺壺溝 (10YR 6/4)	白色粘土、褐色粘土、輝石、白色粘土片	加	良	施帯、施文。内面飾ナシ。
248	19段	FB	壺溝 (2.5YR 4/3)	白色粘土少、褐色粘土、輝石	加	良	施帯、施文。内面ナシ。
249	19段	KU/P	にょい壺溝 (5YR 4/4)	褐色粘土少、褐色粘土、黄褐色、輝石	加	良	施帯、施文。内面ナシ。
250	20段	FB	赤褐色 (5YR 4/6)	褐色粘土、褐色粘土、黄褐色少、輝石少、白色粘土片	加	良	土器片加付。外面に紋。
251	20段	FB	赤褐色 (5YR 5/6)	褐色粘土、黄褐色少、輝石、白色粘土片	加	良	土器片加付。外面に紋および施帯。
252	20段	FB	にょい壺溝 (10YR 5/4)	白色粘土、褐色粘土、輝石少、輝石、白色粘土片	加	良	土器片加付。外面に紋および施帯。
253	20段	FB	溝 (7.5YR 5/6)	褐色粘土少、黄褐色、輝石少	加	良	土器片加付。施帯の帯状付付。
254	20段	FB	にょい溝 (7.5YR 5/4)	白色粘土、輝石、輝石少、白色粘土片	加	良	土器片加付。外面に紋、ハの字文。
255	20段	FB	壺 (7.5YR 6/4)	褐色粘土、褐色粘土、黄褐色	加	良	土器片加付。外面に紋、ハの字文。
256	20段	FB	壺 (7.5YR 6/4)	褐色粘土、褐色粘土、輝石少、白色粘土片	加	良	土器片加付。外面に飾い紋状の紋、R.Lの焼文。
257	20段	FB	赤褐色 (5YR 4/6)	褐色粘土、褐色粘土、黄褐色少、輝石、白色粘土片	加	良	土器片加付。施文、内面ナシ。

4. 遺構外出土の石器

遺構外から出土した石器を器種別に記載する。出土状況からは、その帰属時期は明らかでない。土器では縄文時代早期、および中期の土器が大多数を占めるため、これらの時期に属するものが多いと考えられる。剥片石器では黒曜石が大多数を占める。諏訪星ヶ台産と神津島恩馳島産のものがほとんどで、数は拮抗する。礫石器では輝石安山岩を用いたものが極めて多い。

有茎尖頭器（第90図1）

有茎尖頭器は1点出土した。縄文時代草創期の遺物である。ガラス質黒色安山岩で先端部、基部をわずかに折損する。身部はわずかに外湾する。かえしは明確に作り出され、ほぼ水平である。基部は折れたため詳細は不明であるが、鋭く突出した可能性がある。

石鏃（第90図2～20）

石鏃は31点出土した。多くが黒曜石製で特に神津島恩馳島産のものがその半数を占める。住居跡2からチャート製のものが1点出土している。

19点を図化した。図化していないものについても写真撮影を行っている（図版30）。図化していないものは欠損品である。

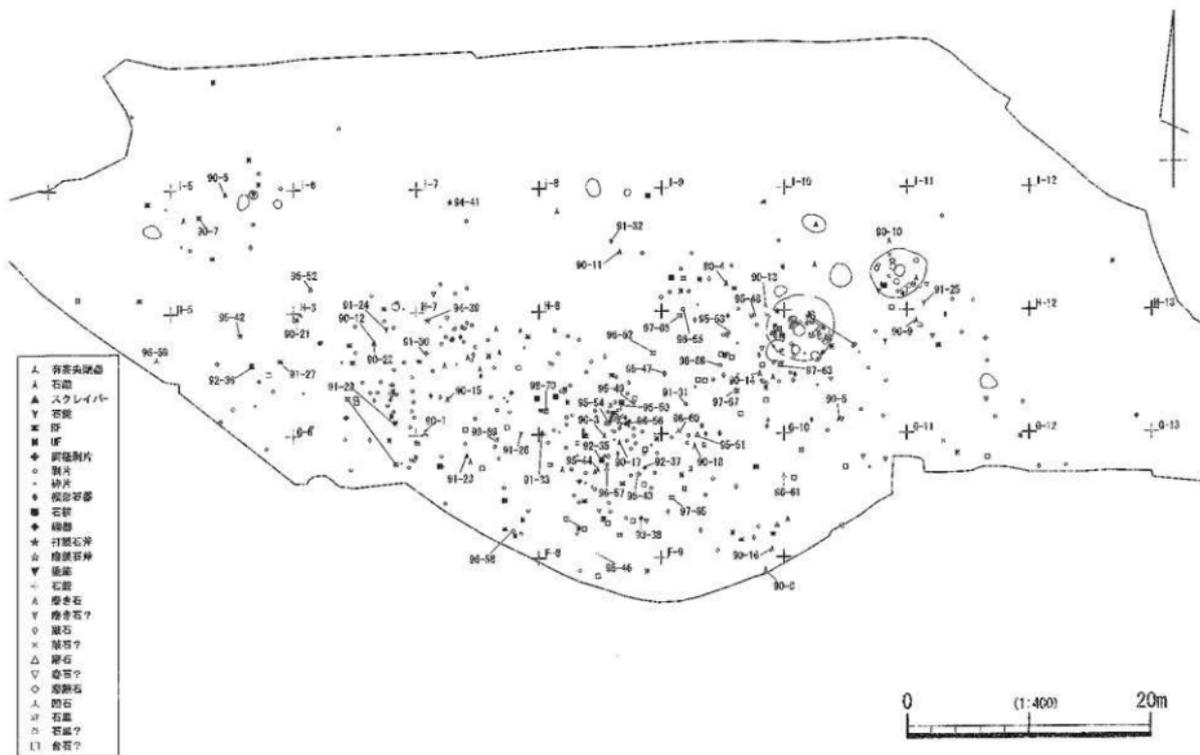
2～7はほぼ完形のもの、8～10は折れているもの、11～19は素材面が残存するものや製作途中のものである。また、石材については3が和田島山産黒曜石、8・12・13が諏訪星ヶ台産黒曜石、5・11・14～18が神津島恩馳島産黒曜石、2・4・19・20が天城柏峠産黒曜石、9がホルンフェルス、6がガラス質黒色安山岩、7がチャート、10が珪質粘板岩を用いる。

2は有茎石鏃である。素材剥片の形状が影響して、表面が厚みをもつ。基部は鋭く突出する。住居跡1の床面直下で出土している。東海地方における有茎石鏃は縄文時代後期に現れるとされており、中期後半の住居跡より下位から出土する点で矛盾する。縄文時代草創期に特有の有茎石鏃と考えれば層的な矛盾は解消するが、形態に違和感があり、位置づけについては慎重であるべきである。3は凹基で、鋭いかえしをもつ。4は平基であるが、中央部でわずかにくぼむ。片側のかえしをわずかに折損する。5は凹基で、左のかえしが丸みを帯び、非対称である。6は凹基で、身部上半に緩やかな屈曲をもち、五角形状を呈する。7は凹基であるが、基部はかえしでわずかに内側に入り、中央部で急激に狭りこむ。薄く丁寧に仕上げられている。

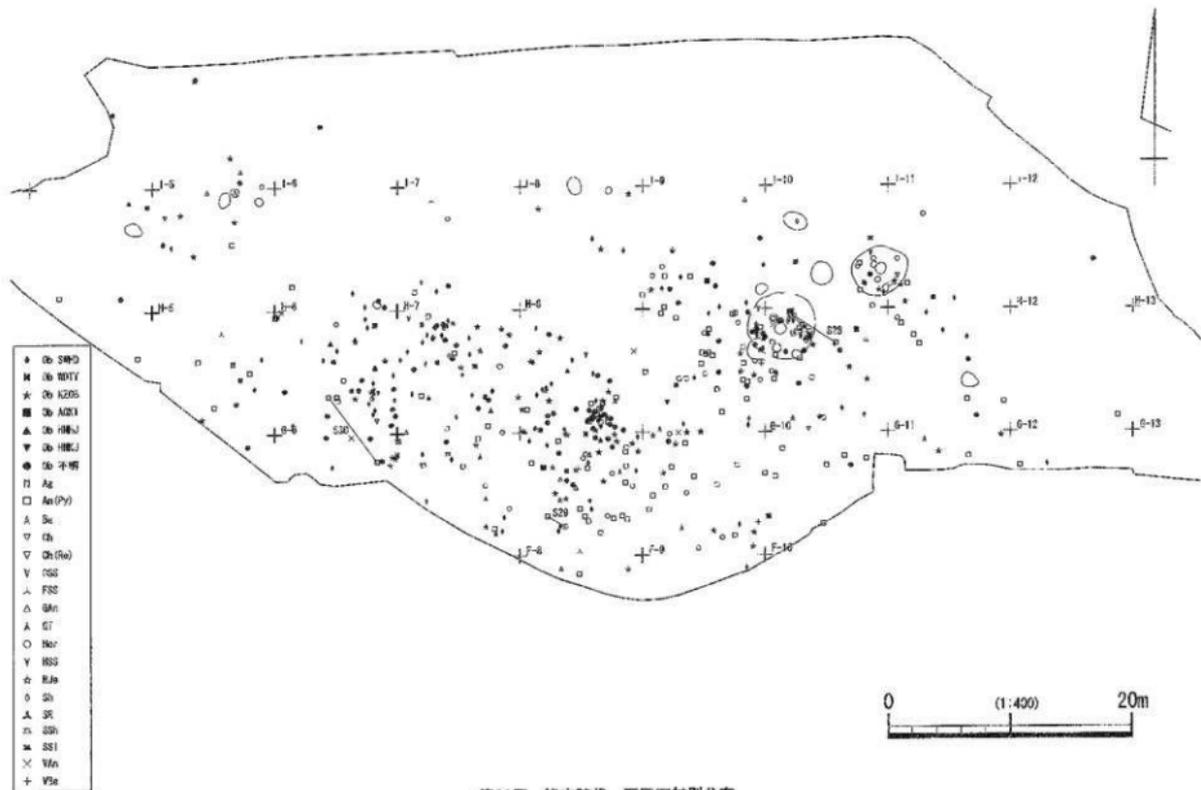
8はかえしから先端部近くまで、大きく欠損する。先端が尖らない長いかえしを有する長脚鏃である。9は筋理に沿って先端部を折損する。10は両面に稜面を残し、周縁を鋸歯状に加工する。身部中程で大きく張り出し、基部はわずかに内湾する。右下部を折損する。

11は凹基で、全面に調整を施す。基部の狭りは深く長いかえしを有したと考えられるが、両方折れている。先端部は急斜度剥離によって潰されており、その意図は不明である。

12～20は黒曜石を用いた、素材面が残存する石鏃である。そのうち12・17～19には錐状の突出部が認められる。石鏃として完成したものとも捉えにくいこれらについては、石鏃製作途中の未製品を、鏃として転用したものと理解しておきたい。12は凹基で、両面に素材面が残存する。薄い剥片の打点側を先端部に据える。背面は急斜度剥離、腹面は平坦剥離が主体である。右下のかえし先端、およびその3mmほど上の2ヶ所に錐状の突出が作出される。13は両面下部に素材面が残存する。先端部は両面調整で丁寧に尖らされているが、基部側には調整が乏しい。14は凹基で右脚部を折損する。背面中央部右よりと腹面中央部に素材面が残存する。腹面に残されているのは素材の主要剥離面である。15は両面に素材面



第88図 縄文時代 石器器種別分布



第89圖 縄文時代 石器石材別分布

第16表 縄文時代 壺蓋組成表

	有蓋 尖原體	石鏢	スクレ イバー	石鏃	RF	UF	両面 剥片	剥片	碎片	楔形 石鏢	石核	鏃頭	打痕 石斧	磨製 石斧	垂飾	石鏢	磨き 石	磨き 石?	敲石	敲石 ?	磨石	磨石 ?	磨製 石	凹石	石皿	石皿 ?	台石 ?	計	
Ob	WDTV		1	1		1																						3	
	SWHD		6		1	5	16	5	57	1	16	4																165	
	HNHL					2			4			1																7	
	HNKJ								1																			1	
	AGXT		6						4	1																		11	
	KZOB		13	1	1	8	15	2	44	3	10	3																	100
	推定不可					2	2		5																				9
	未分析					1	2		53	38																			94
Hor		1		1							2																		25
GAn	1	1			1		1	3																					7
Ch		2						1																					3
Ch(Re)						1																							1
SSf			1	1																									2
SSl		1																											1
RJa					1		1	2																					4
Ag											1																		1
GT								1						1															2
Sü			1														1												2
FSS													2			2	1	1											6
CSS													2					1	1										4
An(Py)								2			5								17	1	3	22	16	3	12	10	91	124	
Ba																			3	1			1	1				6	
VAE																			1	3	1		1		2			8	
V3e																			1		2		2		1			5	
HSS																				1								1	
SR														1														1	
計	1	31	4	4	21	37	9	197	43	20	11	5	4	1	1	2	2	2	23	6	6	22	22	4	15	10	81	534	

が残存し、特に腹面側における調整は主に基部に限定される。平基に分類される。16は両面とも中央部から先端部にかけて自然面が残されている。素材が比較的厚み剥片であり、断面形は背面側に大きくふくらむ。凹基で、先端部を折損する。17は未製品の可能性が高い。背面側では左右側縁から調整剥離が認められるが、腹面側の加工は基部周辺に限定される。左側縁下端に2ヶ所の鎌状の突出を有しており、石鏃製作の初期段階で雑に転用された可能性が高い。18は、背面の調整は左側縁および基部に限定され、腹面も先端部に素材の主要剥離面が残存する。右側縁下部に折面と調整剥離で鎌状の突出が作り出される。19は背面中央に自然面が、腹面に主要剥離面が残存する。先端部は鋭くなく、むしろ右脚部が鋭く突出しており、右脚部が鉋として利用された可能性がある。20は両面に広く素材面を残し、特に腹面はバルブに数回の剥離を行っているのみである。

スクレイパー（第90図21・22、第91図23）

スクレイパーは4点出土した。1点は土坑4の覆土から出土している。

21は和田山産黒曜石を用いたエンドスクレイパーである。縦長の剥片を素材とし、打点側を刃部としている。調整剥離は左側縁全体から右側縁下半に及ぶ。背面への急斜度剥離が主体であるが、腹面下端部には平坦剥離も施される。上部は折損しており不明である。22は神津島恩馳島産黒曜石を用いる。素材剥片末端に刃部を作出するが、左半については、剥離が主要剥離面を切っており、それらの加工が素材剥片剥離前に行われた可能性もある。右半は背腹両面に調整剥離が施される。23は珪質頁岩の比較的扁平な剥片を素材とする。背腹両面への調整で若干内湾する刃部を作り出す。左側縁には節理面があり、右側縁には微細剥離度が認められる。

石鏃（第91図24～26）

鏃は4点出土した。24は諏訪屋ヶ台産黒曜石を用いる。小さい縦長剥片を素材とし、その先端部に鋭く尖る突出部を作出する。右側縁は腹面にのみ調整が行われている。25は神津島恩馳島産黒曜石の折れた剥片を素材とする。両面への調整によりわずかな突出を作り出しており、石鏃の未製品を鉋として転用したもの（第90図12・17～19）と同様の用途に用いられた可能性がある。26はホルンフェルスの不定形剥片を素材とする。素材打面右端に背腹両面への剥離によって突出部を作り出す。

RF（第91図27）

RFは21点出土した。剥片の一部に二次加工を加えるものがほとんどである。

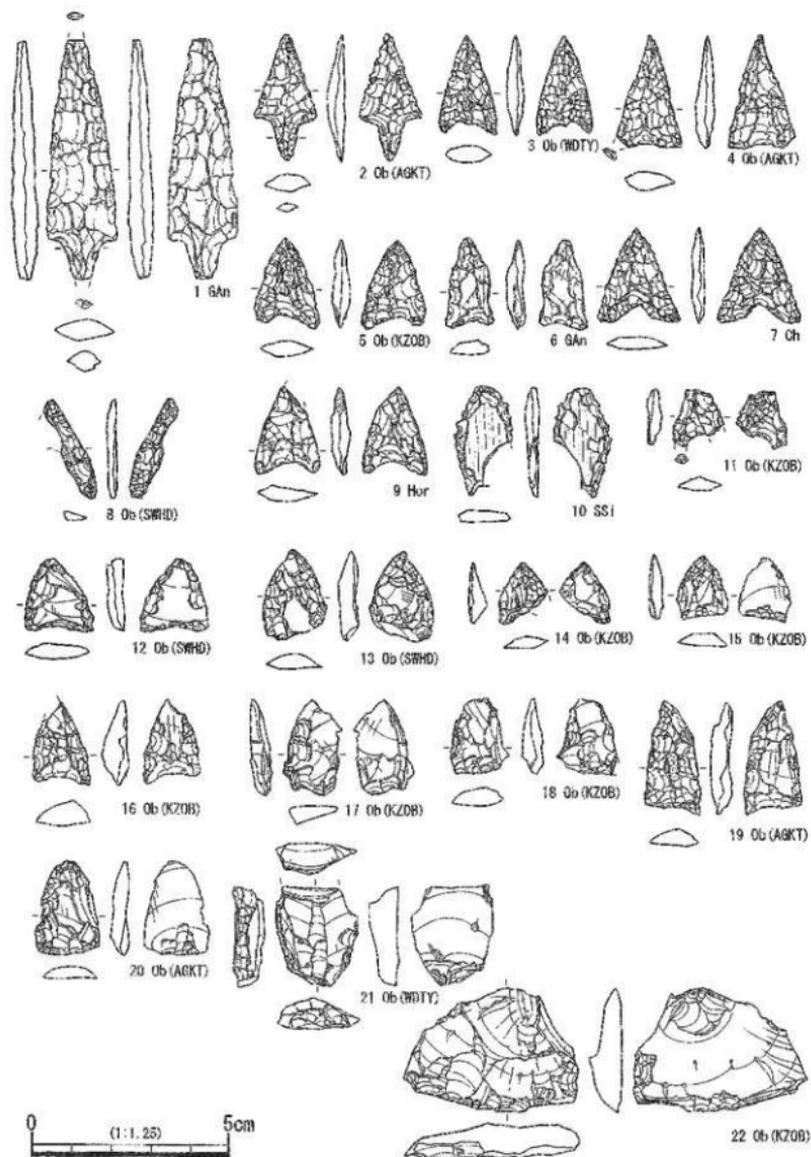
27は諏訪屋ヶ台産黒曜石の極めて小さい縦長剥片を素材とする。両側縁から背腹両面に平坦剥離を施す。用途は不明である。

UF（第91図28・29）

UFは37点出土した。2点が住居跡1から、2点が住居跡2から出土している。黒曜石を用いたものがほとんどで、鋭い縁に連続する微細剥離度が認められる。

28は神津島恩馳島産黒曜石を用いる。下部が複雑に折れた厚みのある剥片を使用する。素材剥片は多方向からの剥片剥離の中で得られたものである。右側縁は厚みがあるが、左側縁には鋭い刃縁があり微細剥離痕が認められる。

29はチャート（赤色）の石刃を使用する。両側縁に剥離痕が断続的に認められる。素材打面には打面調整が施される。



第90図 遺構外出土の石器(1)

両極剥片 (第91図30)

上下に打点を有する、両極打法によって剥離されたと考えられる剥片を両極剥片とした。両極剥片は9点出土した。黒曜石の中でも諏訪星ヶ台産のものが多い。30は、諏訪星ヶ台産黒曜石のもので、背面にも上下からの剥離痕が残されている。

剥片 (第91図31)

箱根鍛冶屋産黒曜石の剥片が1点のみ出土したので図化した。野台南遺跡出土の剥片の中でもっとも大きい。背面は自然面で覆われる。夾雑物がきわめて多い。両側縁に折面が認められる。他に同一産地のものがないことから、他の遺跡で剥離され、持ち込まれたことが明らかである。

楔形石器 (第91図32・33)

楔形石器は20点出土した。すべて黒曜石で諏訪星ヶ台産と神津島黒曜石産が相半ばする。32は諏訪星ヶ台産黒曜石を用いる。上下両端に潰れを伴う剥離痕が認められるが、主な剥離は表面に限定される。右側縁には截断面が認められるが、左側縁は鋭い素材面が残存している。33は神津島黒曜石産黒曜石を用いる。右側縁には上からの加撃により生じた截断面が認められる。左側縁には潰れを伴う剥離が残されており、長軸に直行する方向を縦位にした両極打法も行われたと考えられる。

石核 (第91図34、第92図35・36)

石核は11点出土した。黒曜石を用いたもののうち、図化されていないものは平坦な剥離面を打面にして、極めて小さい剥片の剥離を行った小石核がほとんどである。

図化した3点については、いずれも裏面に自然面を残し、表面において多方向からの剥離が行われるという点で共通する。34は諏訪星ヶ台産黒曜石を用いる。裏面と下面には平滑な自然面が残存する。表面を中心に剥片剥離が行われ、上および左右からの剥離痕が残されている。裏面には比較的早い段階に行われた剥離の痕が右半に残される。35はホルンフェルスで、裏面には円礫の自然面が残されている。表面でさまざまな方向から剥離が行われている。裏面にもより早い段階に残されたさまざまな方向からの剥離痕が認められる。36は被熱した可能性があるメノウを用いる。裏面に残された自然面は複雑な凹凸を残しており、河床礫ではないと考えられる。表面には、主に上および左方向からの剥離痕が残されている。裏面には比較的初期の剥離痕が残されている。

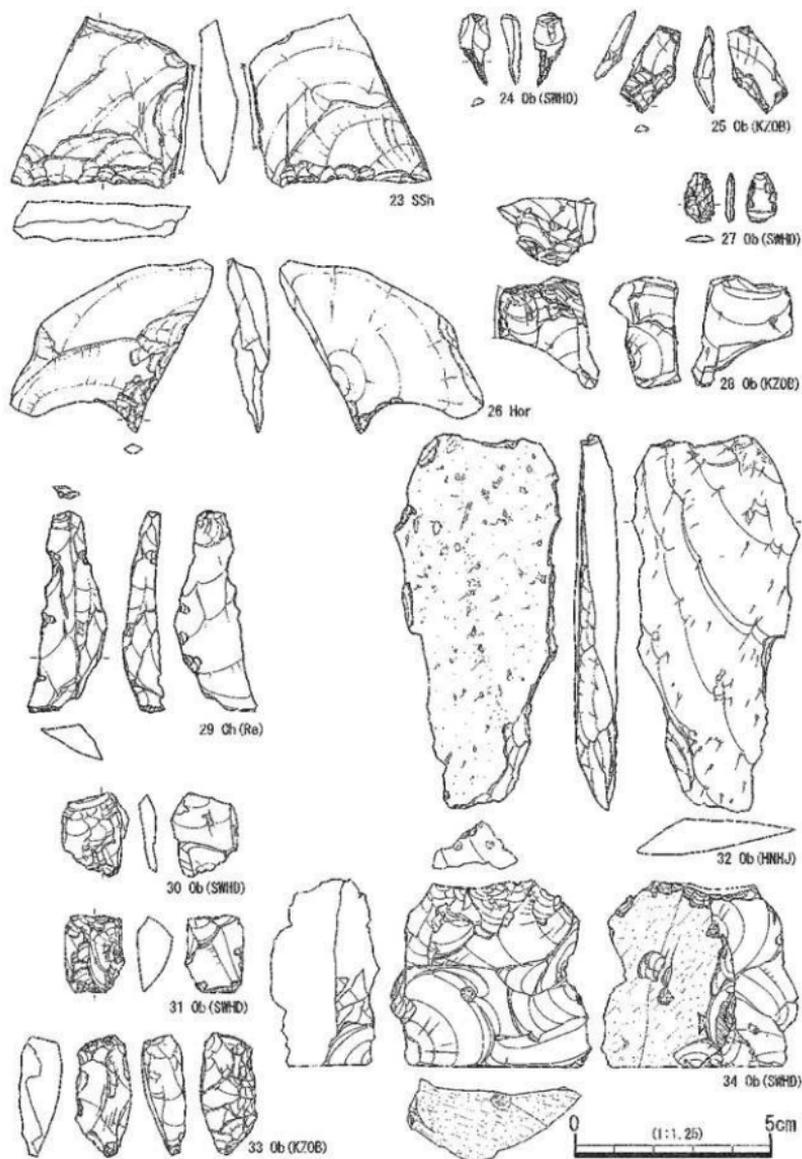
礫器 (第92図37、第93図38)

礫器は5点出土した。いずれも輝石安山岩を用いたものである。垂円礫を用いた片刃のもの2点、角礫を用いた片刃のもの2点、角礫を用いた両刃のもの1点で構成される。そのうち、角礫を用いた片刃のもの2点と角礫を用いた両刃のものそれぞれ1点ずつ図化した。

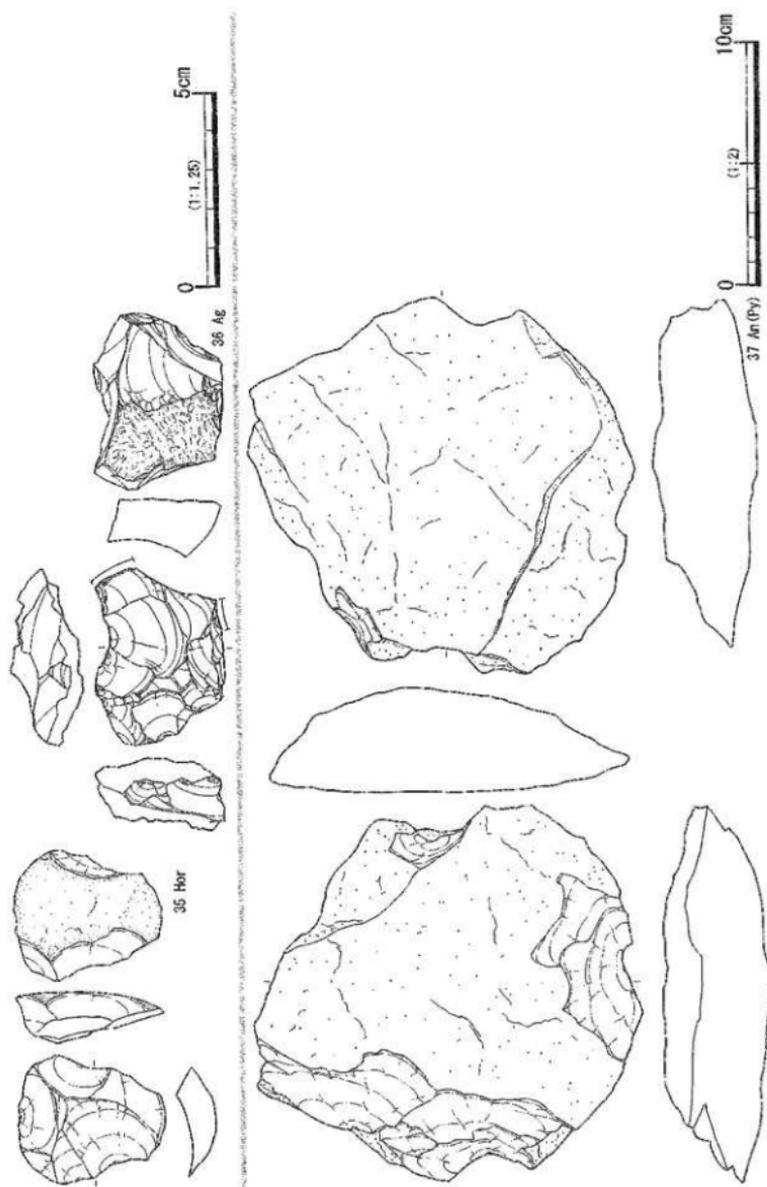
37は正面からみて不整形を呈する角礫を素材とする。左上を除く全周が鋭い刃部となっている。調整は乏しい。38は板状の角礫を素材とし、素材が薄くなる部分に両面調整が行われる。表面の調整は粗く、裏面の調整は細かい。裏面を中心に被熱痕跡が認められ、被熱の後に調整剥離が行われている。

打製石斧 (第94図39～41、第95図42)

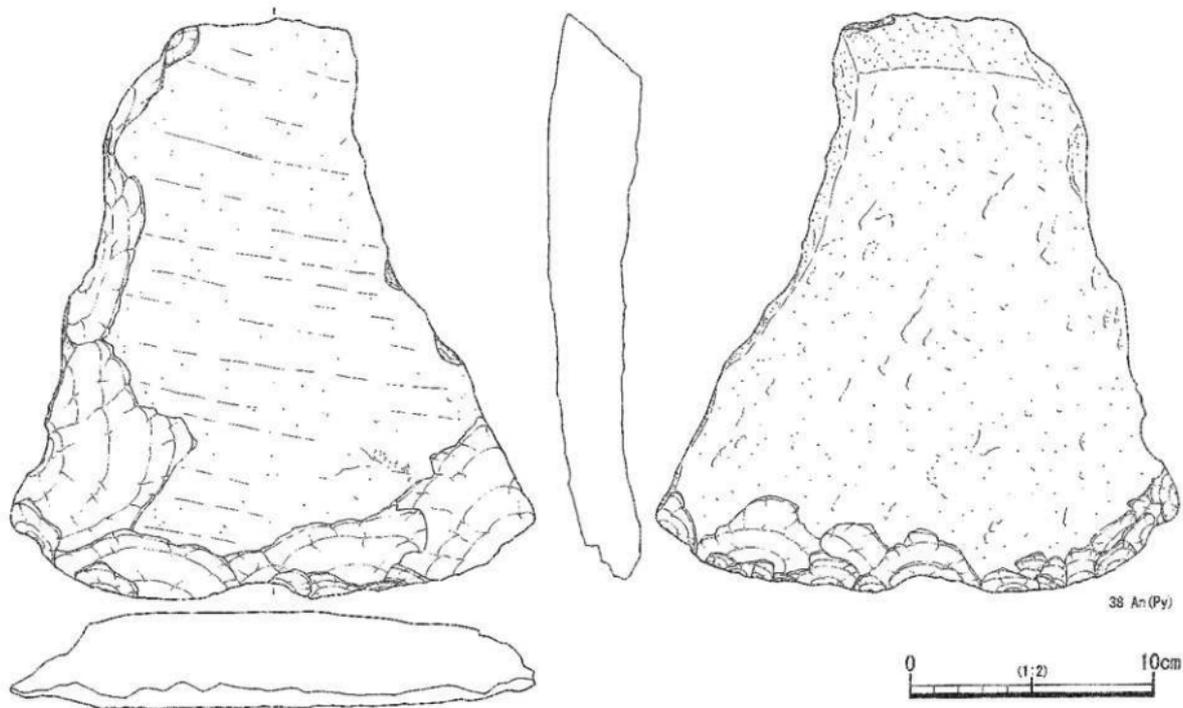
打製石斧は4点出土した。いずれも剥片を素材とすると考えられる。39～41は表面に円礫の自然面を広く残すことで共通する。形態は異なるが、技術的に共通しており同時期の所産と考えられる。39は楕円形である。両側縁は、両面に剥離が施され、敲打痕も認められることから、両極打法によって成形され



第91圖 濠橋外出土の石器(2)



第92図 遺跡外出土の石器(3)



第93圖 遼東外出土の石器(4)

たとえられる。一方、刃部は裏面にのみ調整が施され、右半では刃部が波状を呈する。40は分銅形で、厚みがある。調整が行われるのは裏面が主体だが、くびれ部を中心に表面にも調整が認められる。くびれ部には敲打痕が認められることから、両極打法によって成形されたと考えられる。41は分銅形である。表面だけでなく、裏面左下にも自然面が残されることから、もともとは扁平な円盤であったことが分かる。表面への調整は乏しく、基部と右下部分にのみ剥離痕が認められる。くびれ部の作出も表面側からの加撃による。42は短冊形で、表面下端に自然面を残す以外は、剥離面で覆われている。平行する両側縁は、明確な敲打痕は認められないものの、両極打法によって成形された可能性がある。側面縁は表面に向かって張り出す弧状を呈する。

崩裂石斧（第95図43）

崩裂石斧は1点出土した。基部は折れている。両面が研磨されているが、裏面には研磨されていない素材面も一部に残存する。側面には敲打痕が残されている。刃部には部分的に微細な剥離が認められる。

磨き石（第95図44）

小円礫を主に用い、土器のみがきなど何らかの研削作業に用いられたものを磨き石とした。また、磨き石の可能性があるが、痕跡が明確でないものについて「磨き石？」とした。磨き石は2点、磨き石？は2点出土した。磨き石？は、1点が住居跡1から、1点が住居跡2から出土している。

44は磨き石に分類されたものの中で最も大きい。屈曲をもつ扁平で細長い形状である。端部には敲打痕が認められ、敲石としても使用されたと考えられる。

石錘（第95図45・46）

石錘は2点あり、46は出土し、45は表面採集されている。2点とも円礫の端部に剥離を施した打欠石錘である。46は表面への剥離が加工の主体である。

敲石（第95図47～50）

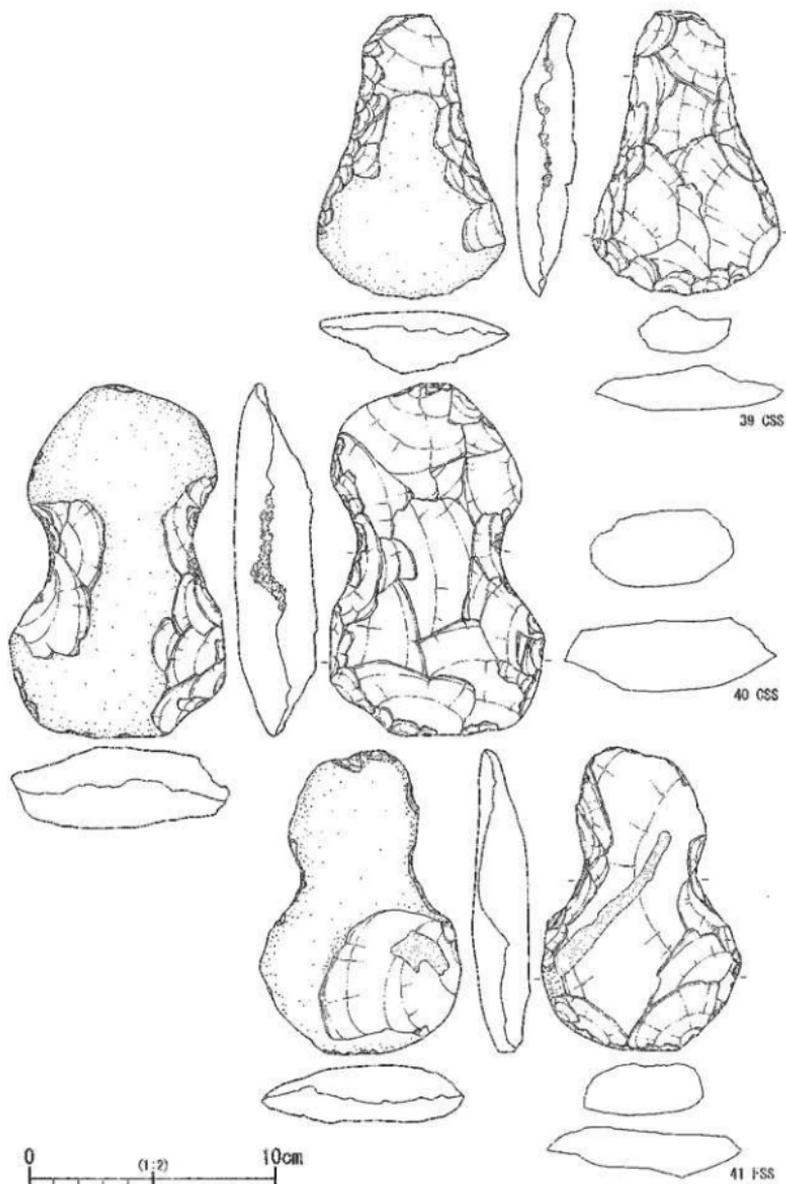
円礫の端部および周縁に敲打痕が認められる、1,500g以下で、手に持ったの使用を想定できるものを敲石とした。敲石の可能性があるが、痕跡が明確でないものについて「敲石？」とした。敲石は23点、敲石？は6点出土した。敲石のうち1点、敲石？のうち1点が住居跡1から出土している。

47～49は端部に敲打痕が認められる。49は使用にともない破損している。50は周縁に敲打痕が認められ、特に下端部は潰れが激しい。使用に伴い破損している。

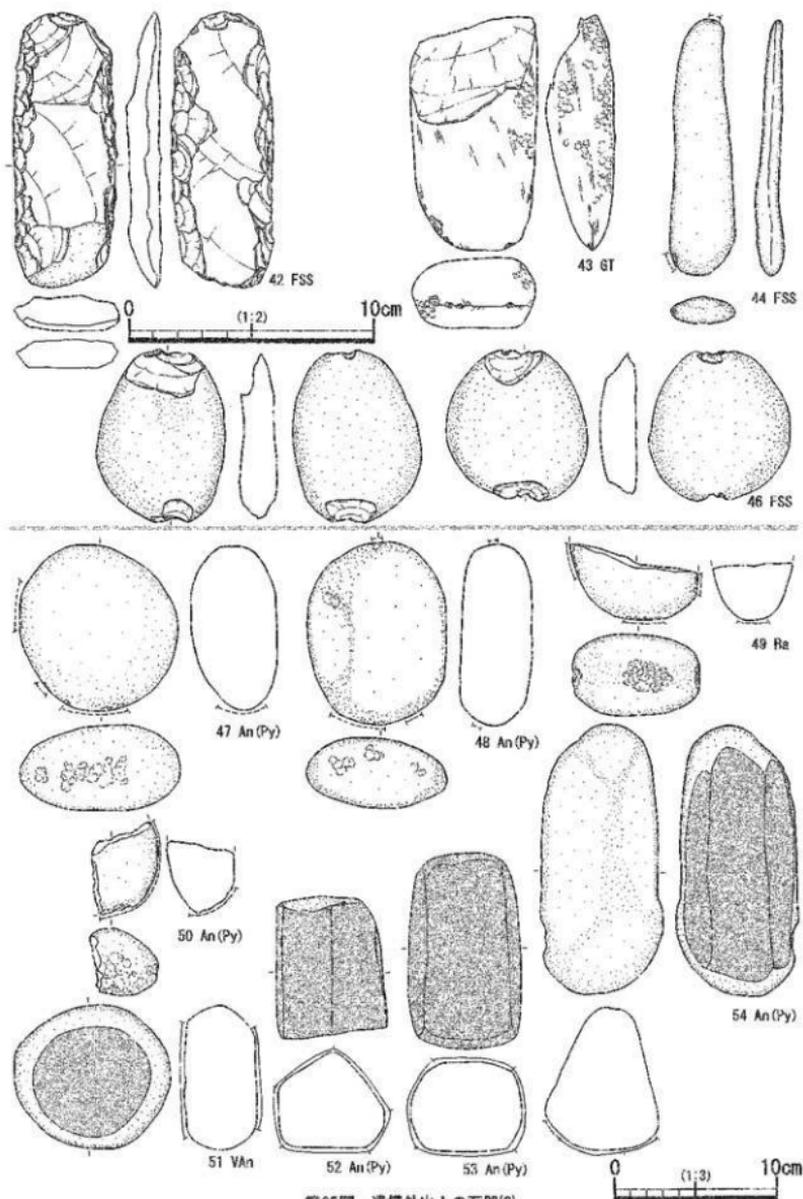
磨石（第95図51～54）

磨面が認められる礫のうち、手にもって使用可能な1,500g以下のものを磨石とした。また、磨石の可能性があるが、痕跡が明確でないものについて「磨石？」とした。磨石は6点、磨石？は22点出土した。磨石のうち1点、磨石？のうち2点が住居跡1から出土している。遺標外出土の磨石5点のうち4点を図化した。図化していない1点の磨石は円礫の一面に平坦な磨面をもつものである。

51は円礫の両平坦面に磨面をもつ。52は、磨面を5面もち、断面形が不整五角形となる。上端に残された自然面から、角礫を素材としていることが分かる。下部を折損する。53は膨らみをもつ直方体状で、6面全面が磨面で構成される。54は他のものに比べ大型である。断面が三角形になる礫を素材とし、その1辺を使用する。使用された面には3面の磨面が認められる。



第94図 遺構外出土の石器(5)



第95図 遺構外出土の石器(6)

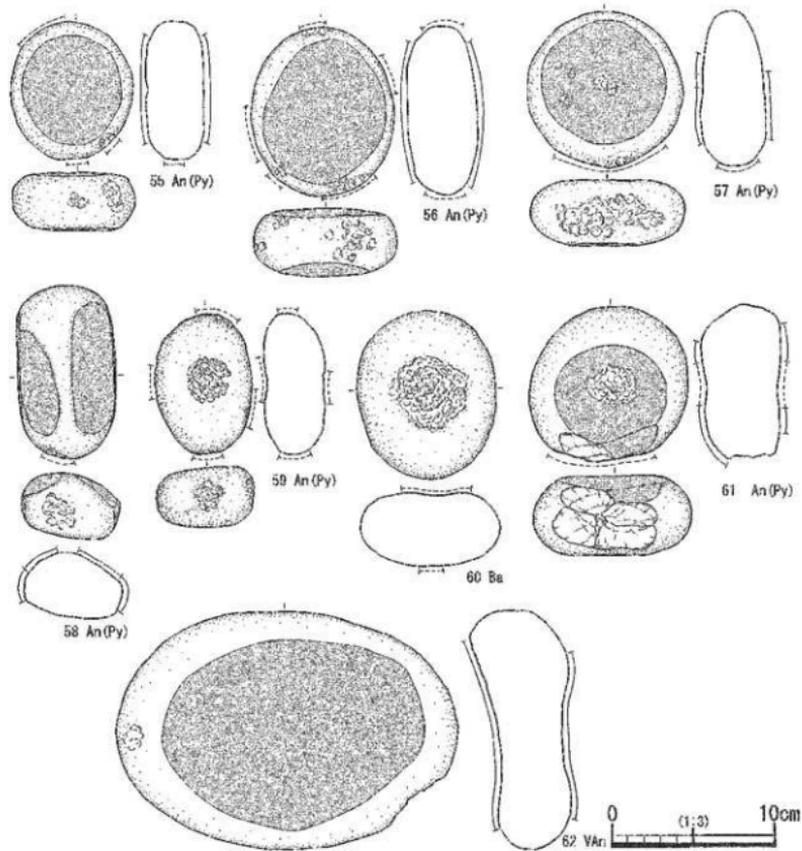
磨敲石 (第96図55~58)

敲打痕と磨面の両方をもち、手にもって使用可能な1,500g以下のものを磨敲石とした。磨敲石は22点出土した。5点は住居跡1から出土している。

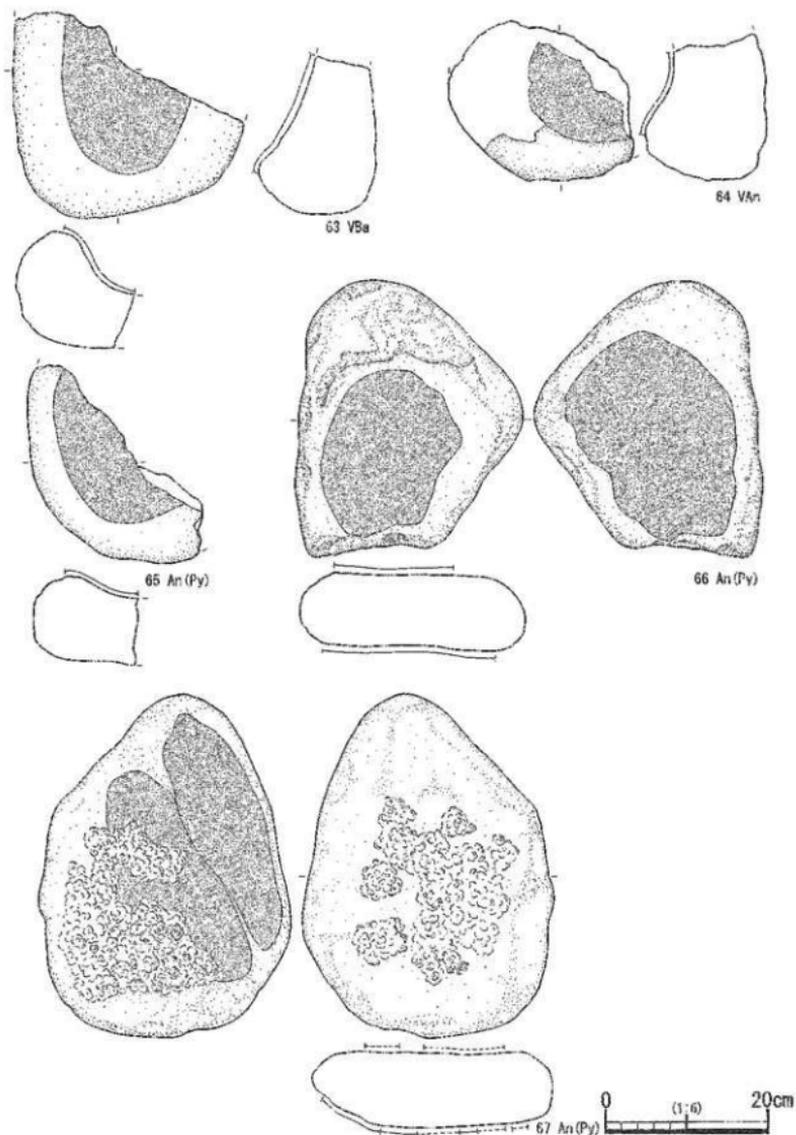
55~57は円礫の両面に磨面をもち、周縁部に部分的に敲打痕が認められる。57は磨面の中にも敲打痕が認められる。58は扁平で縦に長い円礫を素材とし、比較的平坦な面に2面、両側縁にそれぞれ1面ずつの4面の磨面をもつ。1端には敲打痕が認められる。

凹石 (第96図59~61)

円礫の平坦な面に敲打による凹みを有するものを凹石とした。凹石は4点出土した。1点が住居跡1から出土している。



第96図 遺構外出土の石器(7)



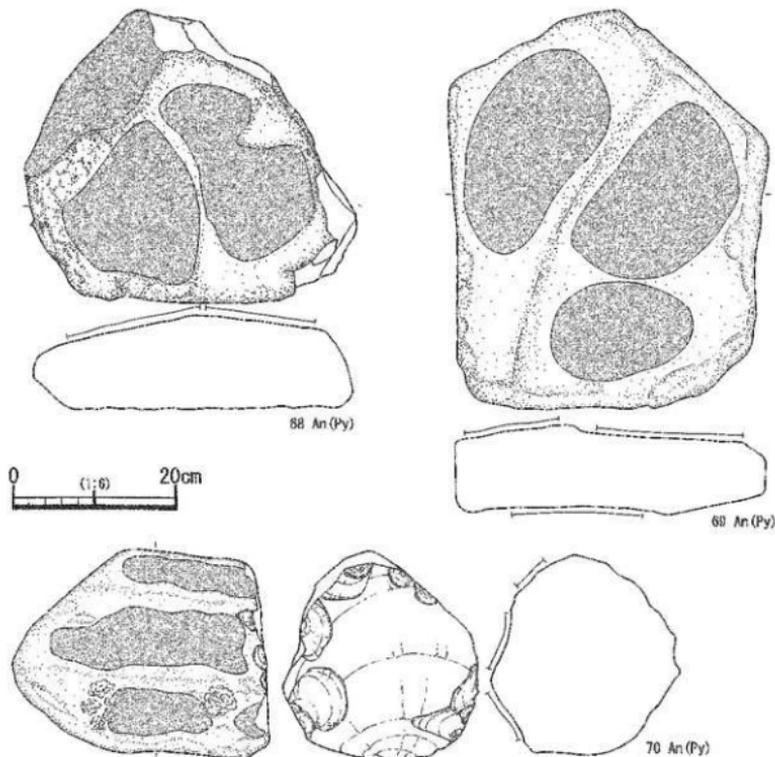
第97図 遺構外出土の石器(8)

59～61はいずれも両面に凹みをもつ。59は両端部および周縁の一部にも敲打痕が認められる。61は両面に磨面が認められ、その中に敲打による凹みがある。また、周縁の一部には加撃によって剝離が生じている。

石皿（第96図62～第98図70）

大型の礫に磨面が認められ、手にもつての使用が想定しにくい1,500g以上のものを石皿とした。磨面と敲打痕の両方を有するものについても石皿に含めた。また、石皿の可能性があるが、痕跡が明確でないものについて「石皿？」とした。石皿は15点、石皿？は10点出土した。

62～68は石皿である。62は比較的小型で、両面を皿状に張り凹める。敲打による凹みも一部にみられる。一端が打ち欠かれている以外は完形の状態である。63～65は大型の円礫を皿状に深く掘り凹める。いずれも破損している。66～68は明確な凹みは作られていないが、扁平な礫の広い面に磨面が残されている。66裏面に磨面が認められる。67は片面に磨面が認められ、両面に敲打痕が残されている。68は片面に磨面が残されている。



第98図 遺構外出土の石皿(9)

69・70は石皿？である。特に大きいものを図化した。69は偏平な、70は角柱型の皿角礫を用いる。磨面の可能性がある面が認められるが、石質により人為的なものであるか明確ではない。

台石？

大型の礫に敲打痕が認められ、手にもっての使用が想定しにくい1,500g以上のものを台石とした。また、台石の可能性はあるが、痕跡が明確でないものについて「台石？」とした。台石は遺跡内で確認されていない。台石？は31点出土した。2点が住居跡1から出土している。

第4節 古代以降の遺物

縄文時代以降の遺物として調査範囲内で須恵器3点が確認されている。表面採集されたもの（第99図）は底部の破片である。輪高台が貼付けられており、外側は丁寧にナデつけられている。底部と胴部との屈曲が強い。器壁は62mm程度である。攪乱からは胴部片が出土している。外面に自然粘が付着している。FB出土のものは20mm程度の小片である。褐色の釉薬の付着がみとめられ、より新しい時期のものと考えられる。



第99図 古代の須恵器

第17表 須恵器観察表

図版番号	層位	色調 (Hue)	胎土	焼成	焼成	文様調飾等
99図	表層	灰黄色 (2.5Y6/2)	白色粒子	煎	良	茶色。輪高台。

第IV章 柏窪A遺跡

第1節 調査の概要

1. 調査に至る経過

柏窪A遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されており、平成16年度に研究所によって確認調査が行われた。その結果、工事箇所には遺物・遺構の広がりの確認できなかつたため、工事に際しては文化課より「慎重工事」の指示が出ていた。

平成18年度（主）大岡元長宮線新東京名アクセス道路整備事業に伴う発掘調査は、平成19年1月から現地調査が野台南遺跡で開始されていた。2月、柏窪A遺跡において遺構らしいものが発見されたという工事担当会社による通報があり、文化課が確認したところ、土坑が複数基存在することが明らかになった。この取り扱いについて文化課は、2月7日に沼津土木事務所と現地協議を行った。結果、柏窪A遺跡も野台南遺跡と同一事業であることから、新たに発掘調査の委託事業とせず、野台南遺跡の調査に組み込むことで協議が成立し、研究所の事業として調査することとなった。この方針を受けて、2月8日に文化課と工事担当会社、研究所が現地で3者打合せを行った。

現地はすでに道路工事が施工中で、農道を切断し通行止め状態となっていた。近隣の農地の耕作者から早急な農道使用の要望があったことから、調査を至急開始すること、2月16日までに終了することを、沼津土木事務所・文化課・工事担当会社・研究所の4者で確認し、2月8日より調査に着手した。現地は広い丘濠を横断する形で、幅7m、深さ1.5m、長さ300mにわたり道路工事による掘削を受け、南壘付近に6基の列状に並ぶ土坑が確認された。

2. 調査の経過

現地調査は極めて短期間に行われたため、調査経過は日を追って説明する。

2月8日(木)

現地調査開始。文化課・工事担当会社・研究所の現地打合せ。土坑発見の場所は、平成16年度確認調査対象から外れた西側で、当時の用地関係で調査不能の地区であることが確認された。

調査着手後の精査により、南壘付近の土坑（1～6）の他に、新たに東側の斜面部から土坑（7～9）を検出。これらのうち南壘際の土坑2～5は直線に並ぶ。さらに北壘にも土坑断面が確認されたため精査。土坑3・8を半載。

2月9日(金)

新たに北壘でほぼ直線に並ぶ4基の土坑（10～13）断面を確認。滑槽、写真、土層線引き。土坑3・5・8・11・12を半載。

2月12日(月) 建国記念の日振り替え休日

2月13日(火)

新たに北壘で土坑14を検出。合計で14基となる。土坑1・2・8・9半載。土坑2～7土層検討、土坑10～13土層実測。

2月14日(水) 低気圧通過、大雨のため作業中止

2月15日(水)

土坑1～9土層実測。土坑14土層断面写真。土層実測・写真が終了した土坑から完備に入る。

2月16日(木)

土坑4～6完備。土坑2～3完備写真。トータルステーションによる全体平面実測。全体写真準備。

2月17日(金)

調査区遺構全体の写真撮影。土坑の個別写真撮影。

2月19日(日)

実測補正作業。土坑を人力により埋め戻す。本日をもって現地調査を終了する。

検出された土坑は、覆土の状態から縄文時代と推定されたが、土坑以外の遺構の発見はなく、さらに土器等の遺物は全く出土しなかった。

3. 調査の方法

前項で述べたように、遺構は道路工事の掘削により発見されたもので、工事担当会社や周辺の農地耕作者との関係から、大至急の着工と短期間の調査が求められた。そのため、調査区の遺構全体図や個々の平面図作成にあたっては、工事設計図の基準杭座標値を使用してX・Yを、標高値は工事丁張りの杭から求めた。

工事の掘削が遺構発見時の面以下には及ばないことを前提に、遺構精査作業から開始した。これは通常の調査における表土除去・遺構検出作業を省き、その作業以降を行ったことになる。土坑は半截掘削し、土層実測・写真撮影の後、完測を行った。

実測図面については、1/20の大きさに、土層図を手書きで、平面図はトータルステーションを使用して作図した。

写真撮影は、35mmカラーネガ、リバーサルを主体として、適宜6×7判モノクロを使用して撮影した。高所撮影にはローリングタワーを使用し、東と西方向から高所撮影を行った。

4. 基本土層

柏竈A遺跡の層序を上層から順に記載する。土層断面図に示されているローマ数字はそれぞれ以下の層を示す。

- I 表土
- II 黒色土(黒ボク) 3mm程度のスコリア粒を微量含む。しまり強い。
- III 黒褐色土 FB。スコリアを微量含む。しまり強い。
- IV 暗黄褐色土 休場漸移層。暗褐色土が混入する。しまりやや弱い。
- V 黄褐色土 YL。黄色味強い。粘性強い。均一な色調。
- VI 第一スコリア (SCI)
- VII 第一黒色帯 (BBI)

5. 整理作業

平成20年8月から平成21年6月まで整理作業を行った。遺物が出土していないため図面と写真のみを整理した。遺構図面については現地で作成された図面の矛盾を修正した。

第2節 縄文時代の遺構

柘窪A遺跡では、遺物は出土しなかったが、土坑14基が検出された(第100図)。多くの土坑がⅡ層中の掘削停止面での検出であったため、掘込面や正確な規模については不明である。一部の調査区壁面に断面がかかった土坑のみ掘込面が判断できる。

調査範囲の地形は、土坑14付近に標高のピークをもち、南西にむかってはごく緩やかに、北東にむけては比較的急激に下がっていく。土坑1～6・10～14は比較的平坦で緩やかに西に向かって傾斜していく面に作られているのに対して、土坑7～9は斜面に作られている。

土坑14基はその配列と規模から、3つのグループに分けて捉えることができる。南壁グループと北壁グループについてはその規模と規則的な配列から縄文時代の落とし穴としての機能が推定できる。東斜面グループについてはその用途は明らかでない。

①南壁グループ(第101図)

土坑1～6。南西から北東方向に土坑6基が並ぶ。土坑2～5は比較的接近しており、約1.2～1.7m間隔で配列されるのに対して、両端の土坑1・6は隣の土坑からそれぞれ約28.6mと36.4m離れる。

土坑1については、土層断面からは掘込面がⅢ層：FB上面にあると判断できる。一方で、後述する北壁グループの掘込面はⅣ層：休場漸移層上面である。これらの土坑が時期を異にする可能性もなくはないが、平面形や規模、配列のあり方などが類似する点を併せて考えると近い時期に残されたものと考えられることができるだろう。土坑1の最上層にあたる1層はⅢ層：FBに類似する土層である点を考慮すると、北壁グループと同じⅣ層：休場漸移層上面から掘り込まれたものであると考えることもできる。土坑1と堆積状況が類似する土坑2～6についても同時期に掘り込まれたと考えていいたいだろう。

全ての土坑が、概ね正円形に作られている。底部形状は一定ではないが、平坦面をもつものが多い。規模については不明な点が多いが、比較的深い土坑2では1.7m以上の深さがあった可能性がある。掘込面が失われているため、平面規模については残存している大きさよりも大きかったといえる。

②東斜面グループ(第103図)

土坑7～9。他のグループの東側に位置し、3基がL字形に配列される。土坑7と8の間が約2.5m、8と9の間が約1.2mである。

掘込面については完全に失われており、不明である。旧石器時代に属する可能性もなくはないが、縄文時代のものである可能性が高い。規模についても不明である。

③北壁グループ(第102・103図)

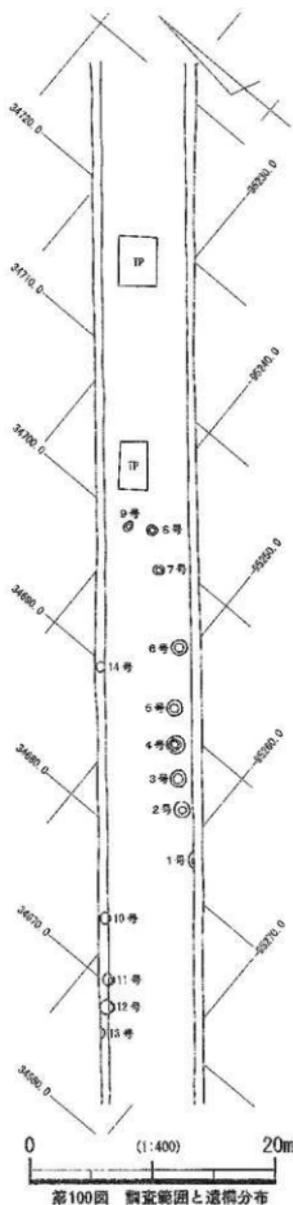
土坑10～14。南西から北東方向に土坑5基が並ぶ。ただし、土坑14については隣の土坑14から約14.0m離れており、同時に造られたものであるか不明であるが、このグループに入れておく。土坑10も堆積が明らかでなく土坑11～13と離れるためその同時性は明らかでない。土坑11～13は約1.1m間隔で配列されており、土坑10と11の間は3.9mである。

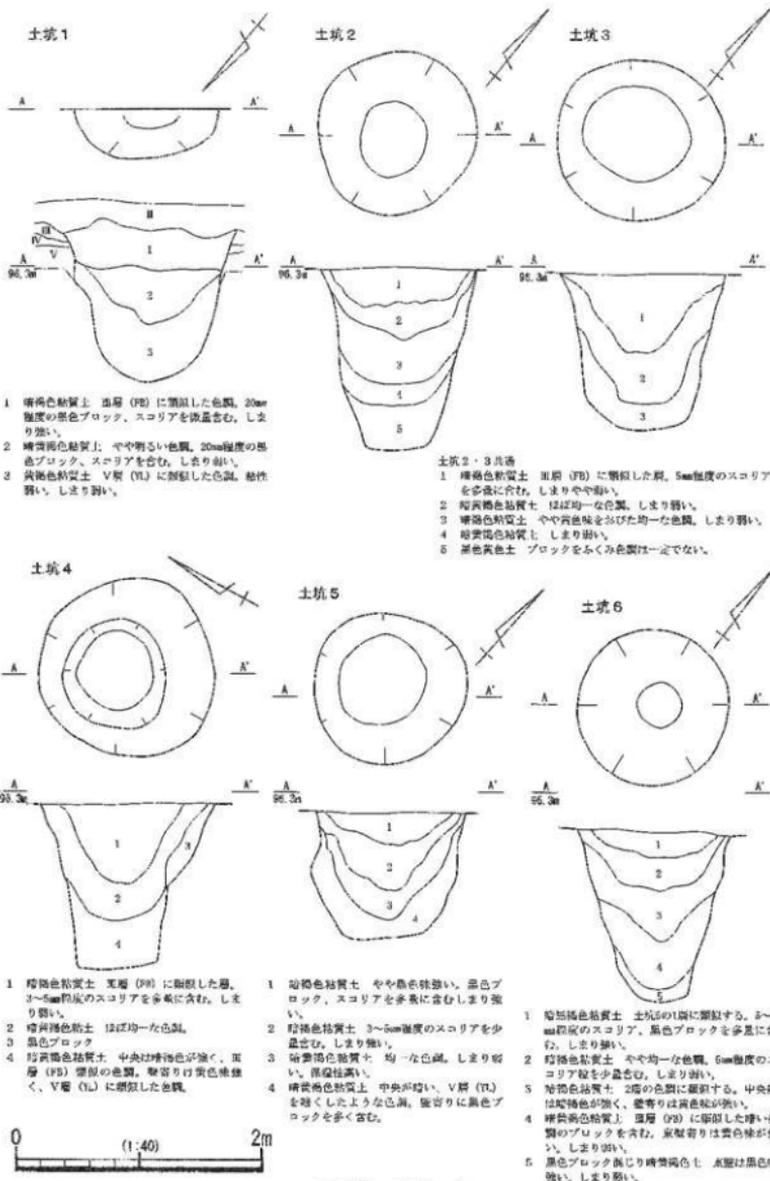
土坑11～13については、断面から掘込面がⅣ層：休場漸移層上面にある可能性が高いといえる。堆積状況も類似しており、同時期に掘り込まれたと考えられる。

すべての土坑が、上面概正円形に作られている。底部形状については土坑11・12が広い平坦面をもっており、土坑13も同様と考えられる。規模については不明な点が多いが、比較的深い土坑12では約1.8m

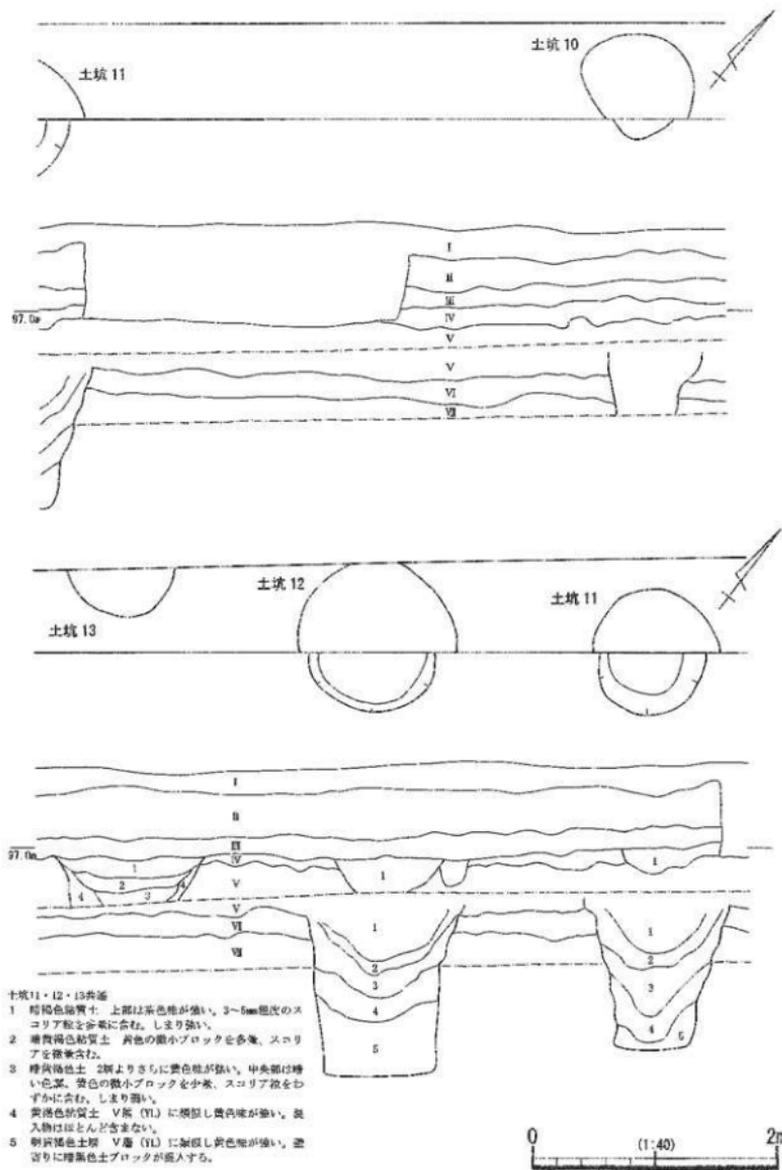
の深さがあった可能性がある。掘込面が失われているため、平面形については残存している大きさよりも大きかったといえる。

以上、3つのグループに分けて記載した。土坑の掘込面およびその平面形や深さ、底部形態から、南壁グループと北壁グループは類似し、作られた時期も近かったと考えられる。列状に並んだ大型の土坑であることから落とし穴としての機能が想定される。南壁グループと北壁グループがそれぞれ補充しあったものであったか、独立したものであったかは不明であるが、縄文時代に行われた狩猟法を示すものとして注目される。





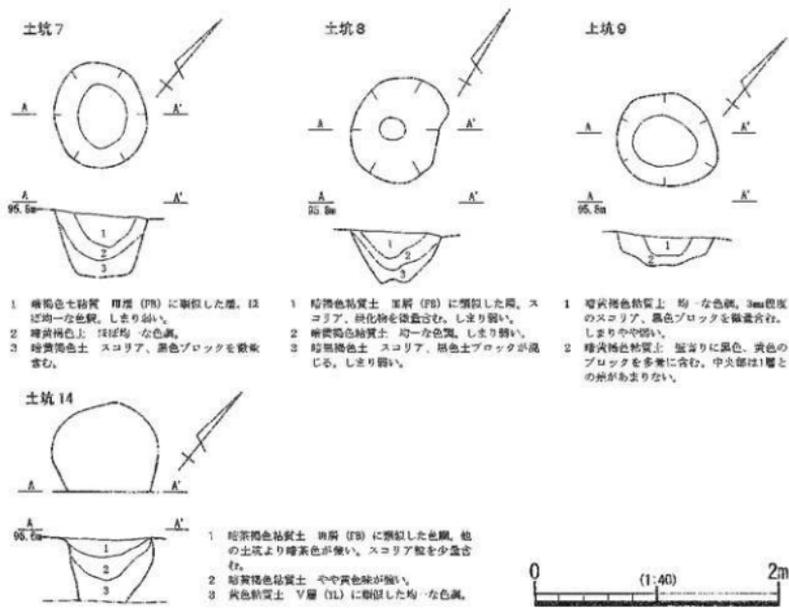
第101図 土坑1~6



土坑11・12・13共通

- 1 暗褐色粘質土 上部は赤色が強い。3~5mm程度のスコリア粒と赤土を含む。しりり強い。
- 2 黄褐色粘質土 褐色の微小ブロックを少量、スコリアを散見含む。
- 3 暗褐色粘土 2層よりさらに赤色が強い。中央部は暗い色泥、黄色の微小ブロックを少量、スコリア粒をわずかに含む。しりり強い。
- 4 黄褐色粘質土 V層(VI)に類似し黄味が強い。投入物はほとんど含まない。
- 5 明褐色土層 V層(VI)に類似し黄味が強い。密着りに暗褐色土ブロックが散入する。

第102図 土坑10~13



- 1 暗褐色粘質 珪層 (F8) に類似した層、ほぼ均一な色調、しまり弱い。
 2 暗黄褐色土 ほぼ均一な色調。
 3 暗黄褐色土 スコリア、黒色ブロックを散在含む。

- 1 暗褐色粘質土 珪層 (F8) に類似した層、スコリア、鉄化物を散在含む、しまり弱い。
 2 暗黄褐色粘質土 均一な色調、しまり弱い。
 3 暗黄褐色土 スコリア、黒色土ブロックが散在する、しまり弱い。

- 1 暗黄褐色粘質土 均一な色調、3mm程度のスコリア、黒色ブロックを散在含む、しまりやや弱い。
 2 暗黄褐色粘質土 散在りに黒色、黄色のブロックを多量に含む、中央部は1層との別があまりない。

- 1 暗赤褐色粘質土 珪層 (F8) に類似した色調、他の土坑より暗赤色が強い、スコリア散を少量含む。
 2 暗黄褐色粘質土 やや黄色味が強い。
 3 黄褐色粘質土 V層 (L1) に類似した均一な色調。

第103図 土坑7～9・14

第10表 土坑計測表

遺構名	深さ (m)	横断面		底部	
		長さ (m)	短径 (m)	長さ (m)	短径 (m)
土坑1	1.46	1.18	(0.40)	(0.45)	(0.10)
土坑2	1.50	1.36	1.31	0.61	0.59
土坑3	1.27	1.38	1.33	0.81	0.76
土坑4	1.34	1.46	1.46	0.65	0.61
土坑5	1.04	1.28	1.24	0.78	0.69
土坑6	1.38	1.28	1.24	0.36	0.36
土坑7	0.50	0.86	0.74	0.62	0.40

遺構名	深さ (m)	横断面		底部	
		長さ (m)	短径 (m)	長さ (m)	短径 (m)
土坑8	0.43	0.88	0.62	0.21	0.18
土坑9	0.25	0.86	0.77	0.54	0.42
土坑10	(0.42)	0.98	(0.79)		
土坑11	(1.55)	1.03	(0.42)	(3.80)	(0.34)
土坑12	(1.78)	1.29	(0.73)	(0.88)	(0.45)
土坑13	(0.40)	(0.87)	(0.39)		
土坑14	(0.63)	0.86	(0.73)		

第V章 自然科学分析

第1節 野台南遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

陽加速器分析研究所

1. 測定対象試料

野台南遺跡は、静岡県駿東郡長泉町元長窪字野台523他（北緯35° 09′ 04″、東経138° 52′ 06″）に所在する。

測定対象試料は、FBから出土した土器付着炭化物（1（遺物番号81）：IAAA-80961、2（遺物番号440）：IAAA-80962）、KUから出土した土器付着炭化物（3（遺物番号280）：IAAA-80963）、FBから出土した土器付着炭化物（4（遺物番号2517）：IAAA-80964、5（遺物番号2160）：IAAA-80965、6（遺物番号2361）：IAAA-80966）、住居跡1の覆土から出土した土器付着炭化物（7（遺物番号2384）：IAAA-80967）、住居跡2の埋壺の土器付着炭化物（8（遺物番号2767）：IAAA-80968）、KUから出土した土器付着炭化物（9（遺物番号1264）：IAAA-80969、10（遺物番号1320）：IAAA-80970）、FBから出土した土器付着炭化物（11（遺物番号1636）：IAAA-80971）、撈乱から出土した土器付着炭化物（12（遺物番号カクラン）：IAAA-80972）、BBⅢの糞群1から出土した木炭（13（遺物番号3612）：IAAA-80973、14（遺物番号3785）：IAAA-80974）、SCⅢb2のブロック5から出土した木炭（15（遺物番号4296）：IAAA-80975、16（遺物番号4297）：IAAA-4297）、合計16点である。

土器付着炭化物では、1・9・10・12が土器の内側から、そのほかは外側から採取された。

2. 測定の意義

土器と住居跡の年代を明らかにする。また、糞群・ブロックの年代から他地域との石器群の対比、ルーム層の対比を行う。

3. 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2)酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3)試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- (4)液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製す

る。

(6) グラフアイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4. 測定方法

測定機器は、3 MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polash 1977)。
- (2) ¹⁴C年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0 yrBP) として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰) で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により¹³C/¹²Cを測定した場合には表中に (AMS) と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。
- (5) 暦年校正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた校正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年校正年代は、¹⁴C年代に対応する校正曲線上の暦年範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。暦年校正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない¹⁴C年代値である。なお、校正曲線および校正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年校正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.0校正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

6. 測定結果

¹⁴C年代は、FB出土の土器付着炭化物が6350 \pm 40yrBP (1: 遺物番号81)、6780 \pm 40yrBP (2: 遺物番号440)、KU出土の土器付着炭化物が6520 \pm 40yrBP (3: 遺物番号290)、FB出土の土器付着炭化物が6220 \pm 40yrBP (4: 遺物番号2517)、6120 \pm 40yrBP (5: 遺物番号2160)、6460 \pm 40yrBP (6: 遺物番号2361) である。

住居跡1出土の土器付着炭化物は4040 \pm 40yrBP (7: 遺物番号2384)、住居跡2埋甕の土器付着炭化物が4200 \pm 30yrBP (8: 遺物番号2767) である。

KU出土の土器付着炭化物が4090 \pm 30yrBP (9: 遺物番号1264)、4140 \pm 30yrBP (10: 遺物番号1320)、FB出土の土器付着炭化物が4150 \pm 30yrBP (11: 遺物番号1636)、攪乱出土の土器付着炭化物が4120 \pm 30yrBP (12: 遺物番号カクラン) である。

BBⅢの群1出土の木炭が28500±170yrBP (13:遺物番号3612)、28380±150yrBP (14:遺物番号3785)、SCⅢb2のブロック5出土の木炭が29000±150yrBP (15:遺物番号4296)、28860±160yrBP (16:遺物番号4297)である。

試料の炭素含有率は、3が42.3%、6が36.8%、9が41.8%、11が48.8%であり、そのほかは全て50%以上であった。通常の木炭や土器外面付着炭化物に比べると、炭素含有率がやや低い試料がみとめられるが、化学処理および測定内容に問題は無い。土器型式から1~3・5・6が縄文時代早期後半、4が縄文時代前期初頭、7~12が縄文時代中期後半と判断され、測定結果にはば整合的である。また、BBⅢの同一遺構の¹⁴C年代は、誤差範囲内で一致し、妥当な年代と判断される。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	焼成方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-80961	1 (遺物番号51)	層位:FB	炭化物	AaA	-22.84±0.69	6,350±40	45.38±0.22
IAAA-80962	2 (遺物番号440)	層位:FB	炭化物	AaA	-19.94±0.73	6,780±40	43.00±0.22
IAAA-80963	3 (遺物番号280)	層位:KU	炭化物	AaA	-25.91±0.51	6,520±40	44.41±0.22
IAAA-80964	4 (遺物番号2517)	層位:FB	炭化物	AaA	-24.79±0.46	6,220±40	46.08±0.23
IAAA-80965	5 (遺物番号2160)	層位:FB	炭化物	AaA	-22.95±0.43	6,120±40	46.63±0.23
IAAA-80966	6 (遺物番号2361)	層位:FB	炭化物	AaA	-25.69±0.58	6,460±40	44.72±0.21
IAAA-80967	7 (遺物番号2384)	柱状跡1 覆土	炭化物	AaA	-19.94±0.92	4,040±40	60.48±0.51
IAAA-80968	8 (遺物番号2767)	柱状跡2 埋版	炭化物	AaA	-23.40±0.60	4,200±30	63.31±0.25
IAAA-80969	9 (遺物番号1264)	層位:KU	炭化物	AaA	-25.94±0.44	4,090±30	60.12±0.25
IAAA-80970	10 (遺物番号1820)	層位:KU	炭化物	AaA	-23.60±0.37	4,140±30	59.71±0.25
IAAA-80971	11 (遺物番号1636)	層位:FB	炭化物	AaA	-26.28±0.43	4,160±30	63.63±0.25
IAAA-80972	12 (遺物番号カケラン)	層位:覆土	炭化物	AaA	-24.38±0.59	4,120±30	59.91±0.25
IAAA-80973	13 (遺物番号2612)	群1 BBⅢ	木炭	AAA	-23.74±0.70	28,500±170	2.88±0.06
IAAA-80974	14 (遺物番号3785)	群1 BBⅢ	木炭	AAA	-23.84±0.47	28,390±150	2.92±0.05
IAAA-80975	15 (遺物番号4296)	ブロック5 SCⅢb2	木炭	AAA	-23.84±0.44	29,000±150	2.70±0.05
IAAA-80976	16 (遺物番号4297)	ブロック5 SCⅢb2	木炭	AAA	-21.45±0.30	28,880±160	2.75±0.05

[#2390]

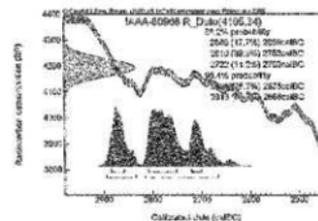
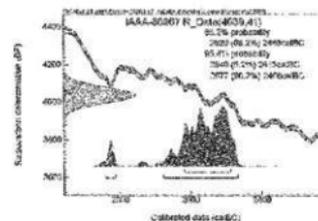
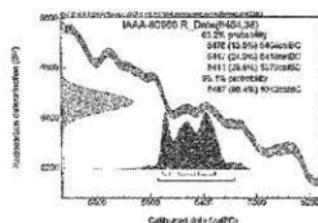
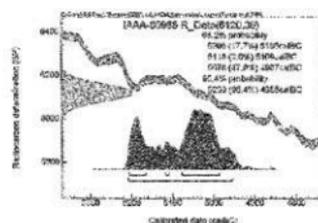
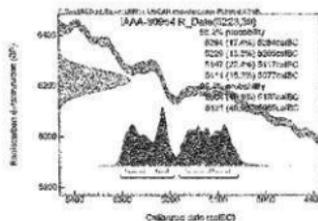
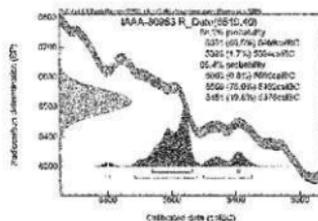
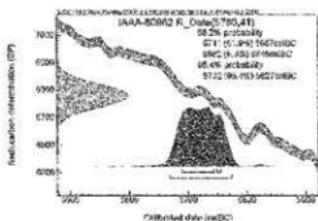
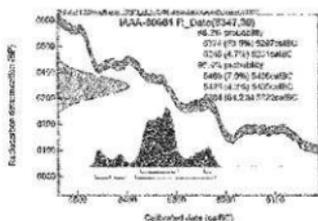
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-80961	6,310±40	45.58±0.22	6,347±39	53749C-6297BC (63.5%) 5245BC-5231BC (4.7%)	5459BC-5436BC (7.0%) 5426BC-5405BC (4.2%) 5384BC-5222BC (24.2%)
IAAA-80962	6,700±40	43.45±0.22	6,780±41	5711BC-5657BC (61.3%) 56529C-5346BC (6.3%)	57329C-5627BC (55.4%)
IAAA-80963	6,540±40	44.33±0.22	6,519±40	5531BC-5469BC (66.5%) 5398BC-5394BC (1.7%)	5603C-5598BC (0.5%) 5639BC-5462C (75.9%) 5451BC-5376BC (19.8%)
IAAA-80964	6,220±40	46.10±0.22	6,223±33	5294BC-5254BC (17.4%) 5229BC-5205BC (13.3%) 5167BC-5117BC (22.4%) 5112BC-5077BC (15.2%)	5304BC-5192BC (45.8%) 5181BC-5069BC (49.6%)

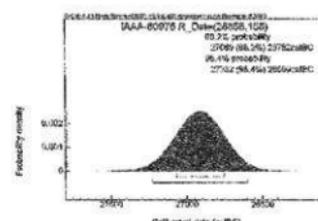
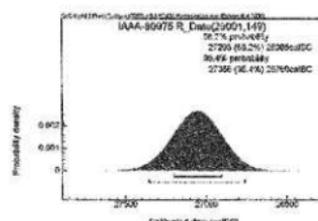
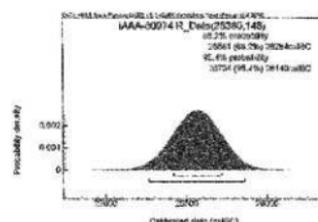
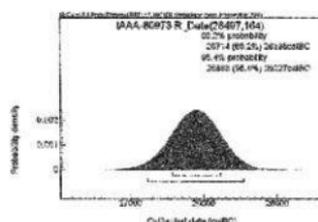
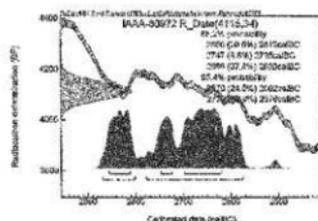
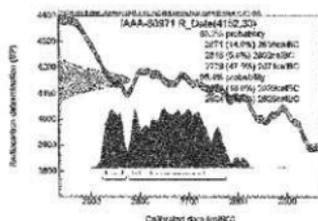
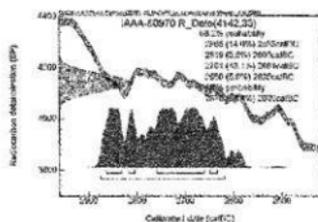
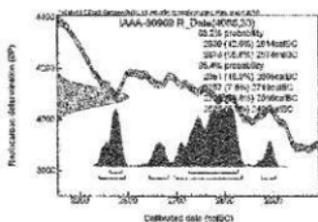
測定番号	δ13C補正なし		暦年較正用 (y:BP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-80966	6,090 ± 40	45.58 ± 0.23	6,120 ± 39	5206BC - 5166BC (17.7%) 5118BC - 5109BC (2.6%) 5078BC - 4887BC (47.9%)	5209BC - 4965BC (96.4%)
IAAA-80966	6,480 ± 40	44.66 ± 0.20	6,464 ± 38	5478BC - 5464BC (13.5%) 5447BC - 5418BC (24.3%) 5411BC - 5379BC (29.8%)	5487BC - 5342BC (95.4%)
IAAA-80967	3,960 ± 40	51.11 ± 0.23	4,039 ± 41	2620BC - 2489BC (68.2%)	2645BC - 2513BC (5.2%) 2677BC - 2465BC (90.2%)
IAAA-80968	4,170 ± 30	59.51 ± 0.24	4,195 ± 34	2866BC - 2859BC (17.7%) 2810BC - 2752BC (35.3%) 2722BC - 2709BC (11.2%)	2895BC - 2835BC (25.7%) 2816BC - 2688BC (63.7%)
IAAA-80969	4,100 ± 30	60.90 ± 0.24	4,068 ± 33	2638BC - 2514BC (12.6%) 2676BC - 2574BC (55.6%)	2618BC - 2808BC (18.9%) 2757BC - 2719BC (7.5%) 2705BC - 2566BC (65.8%) 2625BC - 2496BC (5.3%)
IAAA-80970	4,120 ± 30	55.90 ± 0.25	4,142 ± 33	2655BC - 2533BC (14.0%) 2519BC - 2435BC (5.5%) 2761BC - 2651BC (43.1%) 2656BC - 2625BC (5.6%)	2676BC - 2620BC (96.4%)
IAAA-80971	4,170 ± 30	59.48 ± 0.24	4,152 ± 33	2871BC - 2836BC (14.9%) 2816BC - 2802BC (5.8%) 2779BC - 2671BC (47.5%)	2878BC - 2829BC (18.9%) 2824BC - 2625BC (76.5%)
IAAA-80972	4,100 ± 30	59.99 ± 0.25	4,115 ± 34	2856BC - 2812BC (20.6%) 2747BC - 2725BC (9.8%) 2698BC - 2620BC (37.3%)	2870BC - 2802BC (24.5%) 2779BC - 2676BC (70.9%)
IAAA-80973	28,480 ± 170	2.89 ± 0.05	28,497 ± 164	26714BC - 26386BC (68.2%) *	26883BC - 26227BC (95.4%) *
IAAA-80974	28,350 ± 150	2.93 ± 0.05	26,390 ± 148	26581BC - 26284BC (68.2%) *	25734BC - 26140BC (95.4%) *
IAAA-80975	28,950 ± 150	2.71 ± 0.05	29,001 ± 149	27202BC - 26904BC (68.2%) *	27355BC - 26759BC (95.4%) *
IAAA-80975	28,800 ± 160	2.77 ± 0.05	28,858 ± 158	27069BC - 26752BC (68.2%) *	27232BC - 26599BC (95.4%) *

[参考値] *Warning! Date out of range

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggie Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr: BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058





[参考] 暦年較正年代グラフ

第2節 野台南遺跡出土炭化材の樹種

パリーノ・サーヴェイ隊

はじめに

野台南遺跡は、愛鷹山南東麓の丘状上に立地する。今回の発掘調査により、縄文時代の石囲炉や竈穴住居跡、旧石器時代の礫群等が検出されている。

本報告では、旧石器時代の古植生や木材利用に関する資料を得るため、SCIIIb2のブロックおよびBBIIIの礫群から出土した炭化材の樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、SCIIIb2のブロック5から出土した炭化材3点(資料番号15、16、27)と、BBIIIの礫群1から出土した炭化材12点(資料番号13、14、17~26)の合計15点である。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の剖断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の形態や名称については、高地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、各分類群の木材組織については、林(1991)や伊東(1995、1996、1997、1998、1999)を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材のうち、資料番号14には2種類が認められた。一方、資料番号22、24の2点は、道管が認められることから広葉樹であるが、微細片で組織配列等の特徴が観察できないため、種類同定には至らない。また、資料番号18は保存状態が極めて悪く、木材組織の観察ができないため種類は不明である。その他の炭化材は、針葉樹1分類群(マツ属単管束型属)と広葉樹5分類群(コナラ属コナラ近属コナラ節・モクレン属・ウツギ属・イヌエンジュ・タニウツギ属)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

表1. 樹種同定結果

資料番号	遺物番号	遺構	層位	樹種
13	3612	礫群1	BBIII	マツ属単管束型属
14	3785	礫群1	BBIII	マツ属単管束型属
				ウツギ属
15	4296	ブロック5	SCIIIb2	モクレン属
16	4297	ブロック5	SCIIIb2	モクレン属
17	3607	礫群1	BBIII	マツ属単管束型属
18	3608	礫群1	BBIII	不明
19	3609	礫群1	BBIII	イヌエンジュ
20	3610	礫群1	BBIII	タニウツギ属
21	3614	礫群1	BBIII	マツ属単管束型属
22	3615	礫群1	BBIII	広葉樹
23	3616	礫群1	BBIII	イヌエンジュ
24	3617	礫群1	BBIII	広葉樹
25	3784	礫群1	BBIII	コナラ属コナラ近属コナラ節
26	3786	礫群1	BBIII	タニウツギ属
27	4298	ブロック5	SCIIIb2	モクレン属

- ・マツ属単維管束亜属 (*Pinus subgen. Haploxylois*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。垂直樹脂道は晩材部付近に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁は滑らかで、鋸歯等は認められない。放射組織は単列、1~15細胞高。

- ・コナラ属コナラ頭属コナラ節 (*Quercus subgen. Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1~2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火災状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと同様放射組織とがある。

- ・モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸~薄く、横断面では角張った楕円形~多角形、単独または2~4個が放射方向に複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状~対列状に配列する。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~40細胞高。

- ・ウツギ属 (*Deutzia*) ユキノシタ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1~4細胞幅、20-60細胞高以上。放射組織には鞘細胞が認められる。

- ・イヌエンジュ (*Maackia amurensis* Rupr. et Maxim. subsp. *buergeri* (Maxim.) Kitamura)

マメ科イヌエンジュ属

試料はいずれも年輪界で割れているが、道管径の変化から環孔材である。孔圈部は1~4列、孔圈外での道管径の変化は緩やかで、晩材部では多数の道管が複合して帯状の模様をなし、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。小道管は階層状に配列し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性~同性、1~8細胞幅、1~50細胞高。

- ・タニウツギ属 (*Weigela*) スイカズラ科

散孔材で、道管はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~20細胞高。

4. 考察

炭化材は、第Ⅲ黒色帯 (BBⅢ) と第Ⅲスコリアb2層 (SCⅢb2) の礫群から出土しており、合計6分類群が認められた。

SCⅢb2の15号礫群から出土した炭化材は、3点とも落葉広葉樹のモクレン属であった。出土位置を検討する必要があるが、いずれも小片であることを考慮すると、同一個体が複数に割れた可能性もある。モクレン属は、山地や谷沿い等に普遍にみられる落葉高木であり、当該期の遺跡周辺にも生育していたことが推定される。愛鷹山麓では、澁水柳北遺跡(沼津市)のSCⅢb2の礫群から出土した炭化材2点が広葉樹に同定された例がある(バリノ・サーヴェイ株式会社、1989)。また、箱根山麓に位置する下原遺跡(三島市)では、SCⅢB層下位から出土した炭化材6点が落葉広葉樹のブナ属に同定されている(バリノ・サーヴェイ株式会社、1996)。これらの結果から、SCⅢb2の頃には落葉広葉樹を主とした植生が見られ、そこから木材を利用したと考えられる。当該期については、資料が少ないことから、今後も継続した資料蓄積を行い、より詳細な植生を明らかにすることが望まれる。

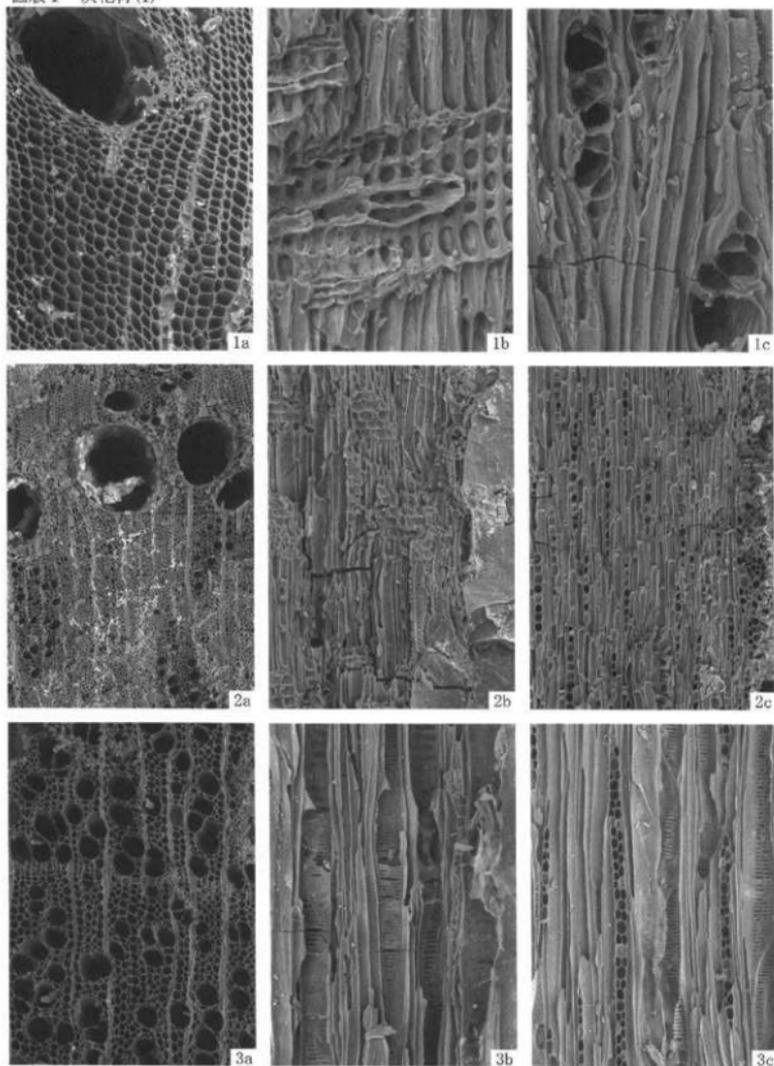
BBⅢの11号礫群から出土した炭化材は、針葉樹の単維管束亜属、落葉広葉樹のコナラ節、イヌエンジュ、タニウツギ属、ウツギ属に同定され、少なくとも5種類が利用されていたことが推定される。本遺跡周辺では、梅ノ木沢遺跡において、BBⅢの炭化物集从中から出土した炭化材が種類不明の広葉樹に同

定されている(未公表資料)。また、愛鷹山麓では、漕水柳北遺跡(沼津市)でBBⅢの台石周辺から出土した炭化材がコナラ節、石器ブロックから出土した炭化材がクワ属と広葉樹に同定されている(バリノ・サーヴェイ株式会社, 1989)。一方、筆根山麓では、初音ヶ原B遺跡第1地点(三島市)の土坑出土資料が広葉樹に同定されている(千野, 1997)。これまでの調査では広葉樹が中心であり、針葉樹類は確認されていなかった。今回の結果から、BBⅢの時期には、コナラ節、クワ属、イヌエンジュなどの落葉広葉樹や針葉樹の単維管束亞属が森林を形成し、林縁部等にはタニウツギ属やウツギ属などの低木が生育しており、そこから木材を利用したことが考えられる。

引用文献

- 千野裕暉, 1997, 初音ヶ原B遺跡土坑出土の炭化材について, 「三島市埋蔵文化財発掘調査報告VI」、三島市教育委員会, 110.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1989, 炭化材同定, 「漕水柳北遺跡発掘調査報告書 その1」、沼津市文化財調査報告書第47集, 沼津市教育委員会, 419-420.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1996, 出土炭化材樹種同定, 「下原遺跡Ⅱ」、静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第72集, 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所, 169-175.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

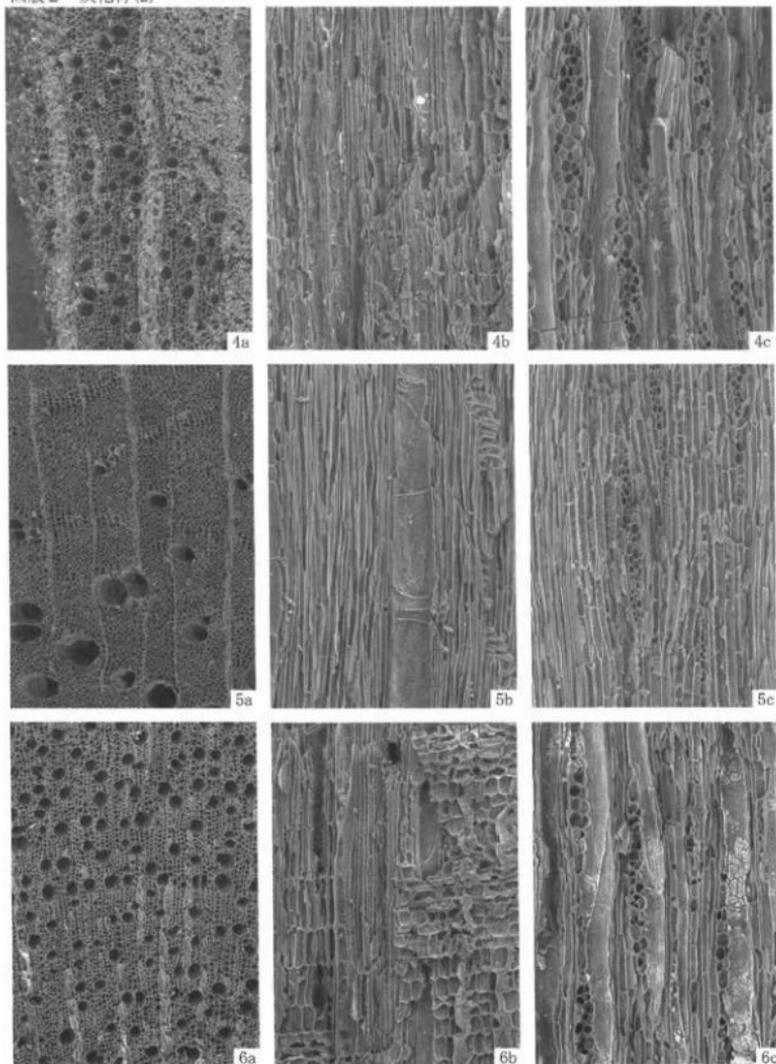
図版1 炭化材(1)



1. マツ属単維管束亜属(資料番号14)
 2. コナラ属コナラ亜属コナラ節(資料番号25)
 3. モクレン属(資料番号15)
- a: 木口, b: 径目, c: 板目

200 μ m: 2-3a
 200 μ m: 1a, 2-3b, c
 100 μ m: 1b, c

図版2 炭化材(2)



4. ウツギ属(資料番号14)
 5. イヌエンジュ(資料番号19)
 6. タニウツギ属(資料番号20)
 a:木口, b:柾目, c:板目

200 μ m: a
 200 μ m: b, c

第VI章 まとめ

1. 野台南遺跡

野台南遺跡では、旧石器時代ではSC III b2からYLまでの間に5枚の文化層が設定され、縄文時代では早期から後期までの土器が出土した。長期にわたる断続的な居住が行われたと想定される。以下、礫、石器、土器を中心にまとめておく。

①礫群・集石について

第I文化層では礫群は設定していないが、比較的大型の礫が散在する状況が認められた。被熱が認められるものも乏しく、火処としての役割は想定できない。ブロックと重複して数個の礫が認められることから、台石のような役割を担った可能性があるが、石核、剥片、敲石に分類したものと石質は類似しており、機能を断定することはできない。

第II文化層では2基の礫群が検出された。少数の大きい礫に多数の小さい礫が伴う。被熱した礫は少数である。

第III文化層では2基の礫群が検出された。両者とも少数の礫で構成され、数点の大型礫を含む。被熱した礫は少数である。

第IV文化層では2基の礫群が検出された。そのうち1基は大規模で大きいものから小さいものまでさまざまな大きさの礫を含む。第I～III文化層の礫と比べて被熱した礫の割合が高い。もう1基は少数の大きい礫に小さい礫が伴う。被熱した礫は少数である。

第V文化層では6基の礫群が検出された。多くは数個の大きい礫に小さい礫が伴うものであるが、特に大きい礫を含まないものや、小さい礫が少ないものなど多様である。旧石器時代の他の文化層に比べて、被熱しているものの割合が高い。

縄文時代では集石9基が検出された。極めて大きい礫が含まれるものや大型の礫が大部分を占めるもの、比較的小さい礫だけで構成されるものなど礫の大きさは多様である。一方で、赤化の認められる礫の割合は概して極めて高い。火を受けている程度が旧石器時代よりもかなり増加していると考えられ、居住期間の長期化が影響しているとも考えられる。また、住居跡の炉石にも強い赤化が認められる。

②石器について

第I文化層ではホルンフェルスを中心に、輝石安山岩を用いた剥片剥離も認められた。輝石安山岩は礫とされたものと石質に大きな違いがないものが利用されており、これまで礫として取り扱われてきたものについても改めて評価し直さなくてはならない可能性がある。不定形な剥片の剥離を行い、その一部をRPやUFとして利用するが定形石器を欠いている。

第II文化層では箱根燧岩産黒曜石を利用した剥片剥離が行われている。通常のフリーレイキングに加えて、両極打法による剥離が認められた。ナイフ形石器の先端部がブロック外から出土した以外は製品を欠いている。

第III文化層ではホルンフェルスを主体に、ガラス質黒色安山岩も用いた剥片剥離が認められた。ガラス質黒色安山岩の剥片はホルンフェルスより小さく消費の最終段階に近い様相がみて取れる。スクレイパーやノッチといった加工具は認められるが、狩猟具は残されていない。

第IV文化層ではホルンフェルスを主体とした石器制作が認められた。角錐状石器や技術的に角錐状石

器に類するナイフ形石器が含まれ、後期旧石器時代後半期の初期の石器群と捉えられる。ブロックに近接して黄鉄鉱を用いた遺物が出土した。

第V文化層は複数の時期の遺物が混在していると考えられる。石材は黒曜石とホルンフェルスが主体であるが、黒曜石もさまざまな産地のものが認められる。ホルンフェルスはそのほとんどが薄片・破片であるのに対して、黒曜石は比較的多くの製品を含む。ナイフ形石器は二側縁加工で大型のものを含む。

縄文時代にはさまざまな器種が認められた。狩猟具としては、葦創期の有茎尖頭器や後期のものである可能性がある有茎石鏃のほか、多数の石鏃が出土した。石鏃には未製品を鏃として転用した可能性もあるものが含まれる。また、打製石斧は4点出土しているが、そのうち3点は円礫の自然面を広く残しており、形態は異なっているが、技術的に共通しており、同時期のものと考えられる。また、土坑7の覆土最上部からは珪質岩の垂飾が出土した。土坑7が長径0.72mの小さいものであるため、大人の墓とは考えられないが、幼児の墓の可能性はある。

③縄文土器とその年代について

縄文土器は早期から後期までのものが出土した。特に早期後半と中期後半は多数の土器が出土した。中期後半に属する住居跡も検出された。まず、注目される土器について述べておく。

4類：茅山下層式併行の土器は早期後半に位置づけられる。種細竹筥あるいは巻貝殻頂を傾けて行った刺突を、連続して列状に施した土器である。2個体が存在しており、うち1個体は破片数も多い。特徴的であるが明確な時期など不明な点が多い。

5類：下吉井式土器は早期後半から前期初頭に位置づけられる。その内容は多様で、器蓋も比較的薄いものから分厚いものまであり、胎土も焼きしまったものからろいものまである。口縁部の文様の描出も、利用する工具、手の動かし方などさまざまである。口径約46.5cmの極めて大きい土器も存在する。

12類：曾利Ⅲ式土器は中期後半に位置づけられる。同じ分類となっているが、斜行文の深鉢が調査区西半に集中域を形成するのに対して、その他のものは主に住居跡を中心とした東半に分布する。同一型式の土器ではあるが全く異なる集団によって残された可能性が高い。

16類：加曾利EⅡ式土器は中期後半に位置づけられる。12類：曾利Ⅲ式土器と併行すると考えられる。地文が縄文であるものを16類としているが、胎土や口縁部文様帯は12類に類する。上述のように12類が2集団に分けられるとすると、同じく16類も2つに分けることができる。住居跡2の埋壙（第68図1）と12類の斜行文の深鉢と分布が重複するもの（第86図218）とは別集団によるものということになる。それぞれに曾利Ⅲ式を母体とし、加曾利E式の縄文地文を取り込んだものとして評価できる。

ここでは、更に年代測定を行った縄文土器について検討する。

早期後半から前期初頭にかけての土器6点について年代測定を行った。2σの較正年代でみたところ、大きく3時期に分けて捉えることができた。1つ目は、約7680～7580calBPの6類：上ノ山式土器、2つ目は約7550～7290calBPの7類：入海Ⅱ式土器、3つ目は約7250～6900calBPの5類：下吉井式土器と8類：木島式土器である。この3つの時期は従来の編年とも整合している。下吉井式と木島式については分布からも同時期に残されたと考えられ、年代値も同様の結果を示している。

中期後半では6点の土器の年代測定を行った。12類：曾利Ⅲ式土器、13類：曾利Ⅳ式土器、16類：加曾利EⅡ式土器の年代を測定しているが、それぞれ年代値が前後しており、土器編年とも整合していない。特に問題となるのは2基の住居跡の年代である。住居跡1は床面直上の土器から4040±40yrBPの年代が得られており、住居跡2は埋壙から4200±30yrBPの年代が得られている。2つの年代は1σによる年代較正では重複せず、2σで年代較正を行ってわずかに重複する。短い期間の前後関係であるため測定値に何らかの問題がある可能性はあるが、無視できない年代差である。また、住居跡1の床面直上で

出土した4040±40yrBPの年代が得られた土器（第63図3）の一部が、住居跡2の覆土から出土しており、年代値と遺物の出土状況は整合している。この報告では、土器型式を重視して2基の住居を併存と考えたが、住居跡2から住居跡1へと時期差をもっていた可能性がある点を指摘しておく。

2. 栢窪A遺跡

栢窪A遺跡では、遺物は出土しなかったが、2列の土坑列が検出された。製作時期は縄文時代のいずれかの時期であるが明らかでない。その規模から落とし穴として用いられた可能性が高いと考えた。落とし穴といえば、箱根・愛鷹山麓では旧石器時代のBBⅢからも落とし穴の列が検出される。それらと栢窪A遺跡で検出された縄文時代の土坑列を比べると規模の上では類似する。一方、旧石器時代の土坑が上部に細尚をもち、掘込面近くで広がるものが特徴的にみられるのに対して、栢窪A遺跡の土坑にはそうした特徴は認められない。規模は類似しており、その機能が近いものであった可能性を示唆するが、細部の形状は異なる。両時代に生きた人々はそれぞれに有利な形状を求めたが、そうして作り出された形は異なるものであったと考えることもできる。

附録 1 石器観察表

第 1 文化層

年代層	層位	発見	種別	用途	形状	72群	石種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	出土層	13層 (m)	備考
第11層	4127	14	104	SC-011	フロッパ	1IF	SCs	30.52	24.75	7.64	5.6	SC114.286	35544.541	137.180
	4129			SC-014	フロッパ	側片	Hor	14.76	13.87	5.77	6.64	SC114.298	35545.255	137.180
	4130			SC-014	フロッパ	側片	Hor	45.71	18.74	6.28	7.7	SC114.622	35548.176	137.220
	4131			SC-014	フロッパ	側片	Hor	55.74	26.84	5.21	5.25	SC114.785	35545.464	137.220
	4132			SC-014	フロッパ	側片	Hor	17.00	11.73	5.15	5.15	SC114.292	35544.714	137.210
	4133			SC-014	フロッパ	側片	Hor	28.09	20.95	7.02	6.18	SC114.721	35545.152	137.110
	4134			SC-014	フロッパ	側片	Hor	23.07	27.64	5.07	15.47	SC114.509	35546.794	137.102
	4135			SC-014	フロッパ	側片	Hor	13.95	6.14	5.28	5.2	SC115.716	35543.543	137.047
	4136			SC-014	フロッパ	側片	Hor	17.85	4.52	5.9	5.52	SC115.115	35546.643	137.019
	4137			SC-014	フロッパ	側片	Hor	35.6	29.4	7.08	7.03	SC114.708	35544.221	137.161
第12層	4209	14	104	SC-014	フロッパ	側片	Hor	35.37	26.90	7.19	5.39	SC115.714	35544.712	137.071
	4207			SC-015	フロッパ	側片	Hor	37.08	29.06	6.61	7.5	SC115.694	35545.322	137.036
	4188			SC-014	フロッパ	側片	Hor	6.95	17.04	4.34	3.38	SC115.078	35545.900	137.291
	4237			SC-014	フロッパ	側片	Hor	25.49	35.31	12.51	13.19	SC114.775	35551.715	137.241
	4236			SC-014	フロッパ	側片	Hor	25.09	25.51	11.87	14.7	SC114.566	35523.307	137.302
	4235			SC-014	フロッパ	側片	Hor	34.5	44.53	20.35	25.24	SC114.762	35543.082	137.219
	4234			SC-014	フロッパ	側片	Hor	43.31	17.14	6.04	7.4	SC115.572	35542.513	137.259
	4233			SC-014	フロッパ	側片	Hor	33.7	13.85	4.22	4.44	SC114.132	35552.425	137.495
	4245			SC-014	フロッパ	側片	Hor	21.41	22.17	12.42	12.42	SC115.324	35552.518	137.274
	4244			SC-014	フロッパ	側片	Hor	10.5	23.28	11.77	5.24	SC114.504	35562.311	137.274
第13層	4244	14	104	SC-014	フロッパ	側片	Hor	55.05	25.48	15.13	6.19	SC114.354	35551.993	137.247
	4243			SC-014	フロッパ	側片	Hor	14.29	18.39	8.01	6.23	SC114.790	35551.511	137.263
	4242			SC-014	フロッパ	側片	Hor	55.28	29.70	13.03	7.9	SC114.216	35552.272	137.186
	4241			SC-014	フロッパ	側片	Hor	16.9	31.29	15.27	7.7	SC114.756	35552.544	137.234
	4240			SC-014	フロッパ	側片	Hor	25.21	18.57	6.91	2.1	SC114.282	35552.566	137.256
	4239			SC-014	フロッパ	側片	Hor	23.94	19.71	4.87	2.27	SC114.712	35552.739	137.269
	4238			SC-014	フロッパ	側片	Hor	35.25	35.29	9.96	9.82	SC115.856	35552.295	137.265
	4237			SC-014	フロッパ	側片	Hor	16.9	31.29	15.27	7.7	SC114.756	35552.544	137.234
	4236			SC-014	フロッパ	側片	Hor	25.21	18.57	6.91	2.1	SC114.282	35552.566	137.256
	4235			SC-014	フロッパ	側片	Hor	23.94	19.71	4.87	2.27	SC114.712	35552.739	137.269
第14層	4234	14	104	SC-014	フロッパ	側片	Hor	11.43	8.53	6.82	1.37	SC115.551	35552.461	137.212
	4233			SC-014	フロッパ	側片	Hor	42.56	45.36	11.31	25.51	SC114.226	35546.674	137.127
	4232			SC-014	フロッパ	側片	Hor	47.07	24.61	15.80	34.50	SC114.187	35551.746	137.203
	4231			SC-014	フロッパ	側片	Hor	42.28	26.72	7.25	12.62	SC114.804	35554.497	137.211
	4230			SC-014	フロッパ	側片	Hor	15.89	18.39	9.16	2.57	SC115.412	35553.174	137.258
	4229			SC-014	フロッパ	側片	Hor	68.07	117.55	31.50	50.0	SC114.613	35543.710	137.179
	4228			SC-014	フロッパ	側片	Hor	85.83	148.28	33.67	215	SC114.255	35552.513	137.274
	4227			SC-014	フロッパ	側片	Hor	44.32	83.81	17.5	24.8	SC114.624	35552.503	137.161
	4226			SC-014	フロッパ	側片	Hor	133.34	196.61	22.04	402	SC114.302	35523.093	137.274
	4225			SC-014	フロッパ	側片	Hor	151.47	92.89	37.80	790	SC115.201	35552.441	137.200
第15層	4224	14	104	SC-014	フロッパ	側片	Hor	38.73	26.8	18.31	14.58	SC115.580	35542.540	137.198
	4223			SC-014	フロッパ	側片	Hor	30.32	18.61	19.64	25.1	SC115.254	35543.500	137.203
	4222			SC-014	フロッパ	側片	Hor	44.32	83.81	17.5	24.8	SC114.624	35552.503	137.161
	4221			SC-014	フロッパ	側片	Hor	19.62	11.26	7.32	4.42	SC116.022	35553.390	137.159
	4220			SC-014	フロッパ	側片	Hor	41.2	22.17	11.51	10.32	SC115.711	35552.770	137.167
	4219			SC-014	フロッパ	側片	Hor	15.25	7.29	2.62	2.30	SC115.101	35562.262	137.172
	4218			SC-014	フロッパ	側片	Hor	35.64	21.81	12.32	7.14	SC114.714	35552.624	137.213
	4217			SC-014	フロッパ	側片	Hor	38.73	26.8	18.31	14.58	SC115.580	35542.540	137.198
	4216			SC-014	フロッパ	側片	Hor	44.32	83.81	17.5	24.8	SC114.624	35552.503	137.161
	4215			SC-014	フロッパ	側片	Hor	35.64	21.81	12.32	7.14	SC114.714	35552.624	137.213
第16層	4214	14	104	SC-014	フロッパ	側片	Hor	19.62	11.26	7.32	4.42	SC116.022	35553.390	137.159
	4213			SC-014	フロッパ	側片	Hor	41.2	22.17	11.51	10.32	SC115.711	35552.770	137.167
	4212			SC-014	フロッパ	側片	Hor	15.25	7.29	2.62	2.30	SC115.101	35562.262	137.172
	4211			SC-014	フロッパ	側片	Hor	35.64	21.81	12.32	7.14	SC114.714	35552.624	137.213
	4210			SC-014	フロッパ	側片	Hor	38.73	26.8	18.31	14.58	SC115.580	35542.540	137.198
	4209			SC-014	フロッパ	側片	Hor	44.32	83.81	17.5	24.8	SC114.624	35552.503	137.161
	4208			SC-014	フロッパ	側片	Hor	35.64	21.81	12.32	7.14	SC114.714	35552.624	137.213
	4207			SC-014	フロッパ	側片	Hor	38.73	26.8	18.31	14.58	SC115.580	35542.540	137.198
	4206			SC-014	フロッパ	側片	Hor	44.32	83.81	17.5	24.8	SC114.624	35552.503	137.161
	4205			SC-014	フロッパ	側片	Hor	35.64	21.81	12.32	7.14	SC114.714	35552.624	137.213
第17層	4204	14	104	SC-014	フロッパ	側片	Hor	19.62	11.26	7.32	4.42	SC116.022	35553.390	137.159
	4203			SC-014	フロッパ	側片	Hor	41.2	22.17	11.51	10.32	SC115.711	35552.770	137.167
	4202			SC-014	フロッパ	側片	Hor	15.25	7.29	2.62	2.30	SC115.101	35562.262	137.172
	4201			SC-014	フロッパ	側片	Hor	35.64	21.81	12.32	7.14	SC114.714	35552.624	137.213
	4200			SC-014	フロッパ	側片	Hor	38.73	26.8	18.31	14.58	SC115.580	35542.540	137.198
	4199			SC-014	フロッパ	側片	Hor	44.32	83.81	17.5	24.8	SC114.624	35552.503	137.161
	4198			SC-014	フロッパ	側片	Hor	35.64	21.81	12.32	7.14	SC114.714	35552.624	137.213
	4197			SC-014	フロッパ	側片	Hor	38.73	26.8	18.31	14.58	SC115.580	35542.540	137.198
	4196			SC-014	フロッパ	側片	Hor	44.32	83.81	17.5	24.8	SC114.624	35552.503	137.161
	4195			SC-014	フロッパ	側片	Hor	35.64	21.81	12.32	7.14	SC114.714	35552.624	137.213
第18層	4194	14	104	SC-014	フロッパ	側片	Hor	19.62	11.26	7.32	4.42	SC116.022	35553.390	137.159
	4193			SC-014	フロッパ	側片	Hor	41.2	22.17	11.51	10.32	SC115.711	35552.770	137.167
	4192			SC-014	フロッパ	側片	Hor	15.25	7.29	2.62	2.30	SC115.101	35562.262	137.172
	4191			SC-014	フロッパ	側片	Hor	35.64	21.81	12.32	7.14	SC114.714	35552.624	137.213
	4190			SC-014	フロッパ	側片	Hor	38.73	26.8	18.31	14.58	SC115.580	35542.540	137.198
	4189			SC-014	フロッパ	側片	Hor	44.32	83.81	17.5	24.8	SC114.624	35552.503	137.161
	4188			SC-014	フロッパ	側片	Hor	35.64	21.81	12.32	7.14	SC114.714	35552.624	137.213
	4187			SC-014	フロッパ	側片	Hor	38.73	26.8	18.31	14.58	SC115.580	35542.540	137.198
	4186			SC-014	フロッパ	側片	Hor	44.32	83.81	17.5	24.8	SC114.624	35552.503	137.161
	4185			SC-014	フロッパ	側片	Hor	35.64	21.81	12.32	7.14	SC114.714	35552.624	137.213

第III文化層

層位	器名	器類	出土地	數量	重量	備註	圖號	頁碼
3001	陶豆	陶豆	10.1	青灰	40125.12	3500.0	134.96	3001
3002	陶豆	陶豆	29.10	青灰	40125.11	3400.0	144.34	3002
3003	陶豆	陶豆	36.05	青灰	40125.13	3500.0	139.49	3003
3004	陶豆	陶豆	48.05	青灰	40125.14	3500.0	141.85	3004
3005	陶豆	陶豆	5.05	青灰	40125.09	3600.0	170.15	3005
3006	陶豆	陶豆	0.11	青灰	40125.02	3600.0	161.08	3006
3007	陶豆	陶豆	33.05	青灰	40125.04	3500.0	134.54	3007
3008	陶豆	陶豆	2.0	青灰	40125.00	3500.0	134.01	3008
3009	陶豆	陶豆	1.60	青灰	40125.06	3500.0	135.12	3009
3010	陶豆	陶豆	4.0	青灰	40125.03	3500.0	135.44	3010
3011	陶豆	陶豆	0.41	青灰	40125.07	3500.0	134.43	3011
3012	陶豆	陶豆	15.04	青灰	40125.01	3500.0	134.94	3012
3013	陶豆	陶豆	2.0	青灰	40125.10	3500.0	134.90	3013
3014	陶豆	陶豆	30.0	青灰	40125.05	3500.0	134.94	3014
3015	陶豆	陶豆	8.1	青灰	40125.08	3500.0	134.63	3015
3016	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.09	3500.0	134.79	3016
3017	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.02	3500.0	134.77	3017
3018	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.04	3500.0	134.77	3018
3019	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.05	3500.0	134.94	3019
3020	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.06	3500.0	134.94	3020
3021	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.07	3500.0	134.94	3021
3022	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.08	3500.0	134.94	3022
3023	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.09	3500.0	134.94	3023
3024	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.10	3500.0	134.94	3024
3025	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.11	3500.0	134.94	3025
3026	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.12	3500.0	134.94	3026
3027	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.13	3500.0	134.94	3027
3028	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.14	3500.0	134.94	3028
3029	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.15	3500.0	134.94	3029
3030	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.16	3500.0	134.94	3030
3031	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.17	3500.0	134.94	3031
3032	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.18	3500.0	134.94	3032
3033	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.19	3500.0	134.94	3033
3034	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.20	3500.0	134.94	3034
3035	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.21	3500.0	134.94	3035
3036	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.22	3500.0	134.94	3036
3037	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.23	3500.0	134.94	3037
3038	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.24	3500.0	134.94	3038
3039	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.25	3500.0	134.94	3039
3040	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.26	3500.0	134.94	3040
3041	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.27	3500.0	134.94	3041
3042	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.28	3500.0	134.94	3042
3043	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.29	3500.0	134.94	3043
3044	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.30	3500.0	134.94	3044
3045	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.31	3500.0	134.94	3045
3046	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.32	3500.0	134.94	3046
3047	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.33	3500.0	134.94	3047
3048	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.34	3500.0	134.94	3048
3049	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.35	3500.0	134.94	3049
3050	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.36	3500.0	134.94	3050
3051	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.37	3500.0	134.94	3051
3052	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.38	3500.0	134.94	3052
3053	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.39	3500.0	134.94	3053
3054	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.40	3500.0	134.94	3054
3055	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.41	3500.0	134.94	3055
3056	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.42	3500.0	134.94	3056
3057	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.43	3500.0	134.94	3057
3058	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.44	3500.0	134.94	3058
3059	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.45	3500.0	134.94	3059
3060	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.46	3500.0	134.94	3060
3061	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.47	3500.0	134.94	3061
3062	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.48	3500.0	134.94	3062
3063	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.49	3500.0	134.94	3063
3064	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.50	3500.0	134.94	3064
3065	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.51	3500.0	134.94	3065
3066	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.52	3500.0	134.94	3066
3067	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.53	3500.0	134.94	3067
3068	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.54	3500.0	134.94	3068
3069	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.55	3500.0	134.94	3069
3070	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.56	3500.0	134.94	3070
3071	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.57	3500.0	134.94	3071
3072	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.58	3500.0	134.94	3072
3073	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.59	3500.0	134.94	3073
3074	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.60	3500.0	134.94	3074
3075	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.61	3500.0	134.94	3075
3076	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.62	3500.0	134.94	3076
3077	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.63	3500.0	134.94	3077
3078	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.64	3500.0	134.94	3078
3079	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.65	3500.0	134.94	3079
3080	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.66	3500.0	134.94	3080
3081	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.67	3500.0	134.94	3081
3082	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.68	3500.0	134.94	3082
3083	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.69	3500.0	134.94	3083
3084	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.70	3500.0	134.94	3084
3085	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.71	3500.0	134.94	3085
3086	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.72	3500.0	134.94	3086
3087	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.73	3500.0	134.94	3087
3088	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.74	3500.0	134.94	3088
3089	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.75	3500.0	134.94	3089
3090	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.76	3500.0	134.94	3090
3091	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.77	3500.0	134.94	3091
3092	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.78	3500.0	134.94	3092
3093	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.79	3500.0	134.94	3093
3094	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.80	3500.0	134.94	3094
3095	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.81	3500.0	134.94	3095
3096	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.82	3500.0	134.94	3096
3097	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.83	3500.0	134.94	3097
3098	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.84	3500.0	134.94	3098
3099	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.85	3500.0	134.94	3099
3100	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.86	3500.0	134.94	3100
3101	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.87	3500.0	134.94	3101
3102	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.88	3500.0	134.94	3102
3103	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.89	3500.0	134.94	3103
3104	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.90	3500.0	134.94	3104
3105	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.91	3500.0	134.94	3105
3106	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.92	3500.0	134.94	3106
3107	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.93	3500.0	134.94	3107
3108	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.94	3500.0	134.94	3108
3109	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.95	3500.0	134.94	3109
3110	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.96	3500.0	134.94	3110
3111	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.97	3500.0	134.94	3111
3112	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.98	3500.0	134.94	3112
3113	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40125.99	3500.0	134.94	3113
3114	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40126.00	3500.0	134.94	3114
3115	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40126.01	3500.0	134.94	3115
3116	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40126.02	3500.0	134.94	3116
3117	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40126.03	3500.0	134.94	3117
3118	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40126.04	3500.0	134.94	3118
3119	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40126.05	3500.0	134.94	3119
3120	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40126.06	3500.0	134.94	3120
3121	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40126.07	3500.0	134.94	3121
3122	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40126.08	3500.0	134.94	3122
3123	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40126.09	3500.0	134.94	3123
3124	陶豆	陶豆	1.0	青灰	40126.10	3500.0	134.94	3124
3125	陶豆	陶豆</						

附表3 黑曜石產地推定結果表

研究区 分析番号	分析番号	遺物 番号	産出地	分析 結果	物質分析					
					第1 磁石成分			第2 磁石成分		
					Fe	Ca	Si	Fe	Ca	Si
MK06-4445	NDM-1	3621	定住野原群	H2SiO4	H2SiO4	5.79	1	H2SiO4	85.35	0
MK06-4445	NDM-2	3623	定住野原群	H2SiO4	H2SiO4	13.31	1	H2SiO4	98.8	0
MK06-4446	NDM-3	3655	定住野原群	H2SiO4	H2SiO4	2.14	1	H2SiO4	116.89	0
MK06-4448	NDM-4	3640	定住野原群	H2SiO4	H2SiO4	4.76	1	H2SiO4	145.69	0
MK06-4449	NDM-5	3642	定住野原群	H2SiO4	H2SiO4	2.47	1	H2SiO4	84.99	0
MK06-4477	NDM-6	3608	新田山(西)ノ群	W2H7Y	W2H7Y	9.5	1	W2Y7Y	46.99	0
MK06-4448	NDM-7	3710	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	7.62	1	H2SiO4	152.15	0
MK06-4449	NDM-8	3711	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	8.59	1	H2SiO4	62.65	0
MK06-4460	NDM-9	3712	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	7.03	1	H2SiO4	118.13	0
MK06-4451	NDM-10	3714	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	3.45	1	H2SiO4	86.46	0
MK06-4462	NDM-11	3715	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	6.93	1	H2SiO4	106.27	0
MK06-4463	NDM-12	3716	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	14.97	1	H2SiO4	86.28	0
MK06-4464	NDM-13	3719	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	2.06	1	H2SiO4	99.47	0
MK06-4465	NDM-14	3725	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可
MK06-4466	NDM-15	3727	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	17.48	1	H2SiO4	122.91	0
MK06-4467	NDM-16	3728	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	6.49	1	H2SiO4	76.95	0
MK06-4468	NDM-17	3733	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	10.21	1	H2SiO4	116.73	0
MK06-4469	NDM-18	3734	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	7.58	1	H2SiO4	76.6	0
MK06-4490	NDM-19	3737	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	3.55	1	H2SiO4	95.13	0
MK06-4491	NDM-20	3738	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	14.83	1	H2SiO4	84.95	0
MK06-4492	NDM-21	3739	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	2.93	1	H2SiO4	92.49	0
MK06-4493	NDM-22	3742	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	5.57	1	H2SiO4	147.55	0
MK06-4494	NDM-23	3743	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	37.58	1	H2SiO4	71.46	0
MK06-4495	NDM-24	3748	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	17.58	1	H2SiO4	111.87	0
MK06-4496	NDM-25	3750	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	6.09	1	H2SiO4	74.52	0
MK06-4497	NDM-26	3751	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	6.59	1	H2SiO4	126.66	0
MK06-4498	NDM-27	3754	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	6.59	1	H2SiO4	126.66	0
MK06-4499	NDM-28	3756	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	38.84	1	H2SiO4	74.43	0
MK06-4500	NDM-29	3759	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	1.54	1	H2SiO4	20.0	0
MK06-4501	NDM-30	3760	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	5.1	1	H2SiO4	78.10	0
MK06-4497	NDM-31	3787	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	4.31	1	H2SiO4	106.14	0
MK06-4498	NDM-32	3789	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	11.11	1	H2SiO4	121.34	0
MK06-4499	NDM-33	3810	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	5.4	1	H2SiO4	126.66	0
MK06-4475	NDM-34	3815	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	1.45	1	H2SiO4	106.89	0
MK06-4476	NDM-35	3823	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	4.06	1	H2SiO4	143.08	0
MK06-4477	NDM-36	3824	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	5.52	1	H2SiO4	83.87	0
MK06-4478	NDM-37	3825	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	2.82	1	H2SiO4	66.4	0
MK06-4480	NDM-38	3826	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	33.89	1	H2SiO4	75.09	0
MK06-4481	NDM-39	3828	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	5.09	1	H2SiO4	183.70	0
MK06-4482	NDM-40	3830	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	4.07	1	H2SiO4	106.25	0
MK06-4483	NDM-41	3838	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	10.01	1	H2SiO4	65.72	0
MK06-4484	NDM-42	3839	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	6.87	1	H2SiO4	86.95	0
MK06-4485	NDM-43	3842	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	2.92	1	H2SiO4	116.69	0
MK06-4486	NDM-44	3849	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	4.25	1	H2SiO4	88.26	0
MK06-4487	NDM-45	3717	新田山(西)ノ群	W2Y7Y	W2Y7Y	9.15	0.9966	W2Y7Y	51.94	0.0008
MK06-4488	NDM-46	3722	新田山(西)ノ群	W2Y7Y	W2Y7Y	8.43	1	W2Y7Y	113.98	0
MK06-4489	NDM-47	3732	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	36.96	1	H2SiO4	240.28	0

研究区 分析番号	分析番号	遺物 番号	産出地	分析 結果	物質分析					
					第1 磁石成分			第2 磁石成分		
					Fe	Ca	Si	Fe	Ca	Si
MK06-4430	NDM-48	3600	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	12.51	1	H2SiO4	66.54	0
MK06-4431	NDM-49	3601	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	4.32	1	H2SiO4	141.6	0
MK06-4432	NDM-51	3602	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可
MK06-4433	NDM-52	3990	新田山(西)ノ群	W2Y7Y	W2Y7Y	6.33	0.9664	W2Y7Y	10.7	0.0016
MK06-4434	NDM-53	3145	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	18.70	1	H2SiO4	211.14	0
MK06-4435	NDM-54	3146	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	18.43	1	H2SiO4	295.87	0
MK06-4436	NDM-55	3147	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	2.36	1	H2SiO4	116.01	0
MK06-4437	NDM-56	3148	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	22.85	1	H2SiO4	232.51	0
MK06-4438	NDM-57	3150	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可
MK06-4439	NDM-58	3248	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	7.11	1	H2SiO4	117.73	0
MK06-4440	NDM-59	3340	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	4.15	1	W2Y7Y	82.97	0
MK06-4441	NDM-60	3378	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	7.66	1	H2SiO4	54.85	0
MK06-4442	NDM-61	3611	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	21.83	1	H2SiO4	225.2	0
MK06-4443	NDM-62	1538	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	1.24	1	H2SiO4	100.06	0
MK06-4444	NDM-63	2015	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	13.59	1	H2SiO4	94.57	0
MK06-4445	NDM-64	2817	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	16.16	1	H2SiO4	102.3	0
MK06-4446	NDM-65	2848	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	16.93	1	H2SiO4	118.09	0
MK06-4447	NDM-66	2848	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	9.24	1	H2SiO4	51.06	0
MK06-4448	NDM-67	2850	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	5.91	1	H2SiO4	101.04	0
MK06-4449	NDM-68	2851	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	9.86	1	H2SiO4	51.97	0
MK06-4450	NDM-69	2978	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	4.37	1	H2SiO4	51.1	0
MK06-4451	NDM-70	2979	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可
MK06-4452	NDM-71	2980	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	18.3	1	H2SiO4	199.07	0
MK06-4453	NDM-72	2928	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	8.57	1	H2SiO4	196.07	0
MK06-4454	NDM-75	2529	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	14.86	1	H2SiO4	106.26	0
MK06-4455	NDM-76	2941	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	10.13	1	H2SiO4	100.61	0
MK06-4456	NDM-78	2941	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	6.82	1	H2SiO4	80.48	0
MK06-4457	NDM-76	2942	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	14.24	1	H2SiO4	77.45	0
MK06-4458	NDM-77	2943	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	9.3	1	H2SiO4	186.7	0
MK06-4459	NDM-78	2994	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	12.74	1	H2SiO4	153.87	0
MK06-4500	NDM-79	2945	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可
MK06-4501	NDM-80	2946	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	3.82	1	W2Y7Y	100.95	0
MK06-4502	NDM-81	2948	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	8.94	1	H2SiO4	39.37	0
MK06-4503	NDM-82	2949	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	9.77	1	H2SiO4	41.43	0
MK06-4504	NDM-83	2950	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	4.15	0.9996	H2SiO4	16.79	0.0004
MK06-4505	NDM-84	2953	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	4.37	1	W2Y7Y	116.92	0
MK06-4506	NDM-85	2954	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	1.81	1	H2SiO4	109.99	0
MK06-4507	NDM-86	2955	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	1.94	1	H2SiO4	79.06	0
MK06-4508	NDM-87	2992	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	2.82	1	H2SiO4	117.76	0
MK06-4509	NDM-88	2993	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可	定住不可
MK06-4510	NDM-89	2994	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	27.02	1	H2SiO4	235.90	0
MK06-4511	NDM-90	2996	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	7.26	1	H2SiO4	106.94	0
MK06-4512	NDM-91	3011	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	8.44	1	H2SiO4	77.83	0
MK06-4513	NDM-92	3043	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	2.42	1	H2SiO4	118.12	0
MK06-4514	NDM-93	3068	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	2.54	1	H2SiO4	113.37	0
MK06-4515	NDM-94	3068	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	15.43	1	H2SiO4	71.27	0
MK06-4516	NDM-95	3092	新田山(西)ノ群	H2SiO4	H2SiO4	1.80	1	H2SiO4	88.25	0

研究年度 研究種別	分科番号	送付 番号	採集地	採集国 種別	寄附品名					
					第1種品名			第2種品名		
					種類	担数	内容	担数	内容	単位
M308-4333	NDM-197	1754	神奈川島根島群	FZOB	KZOB	7.84	1	KZSN	43.63	0
M308-4339	NDM-198	2792	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	13.02	1	KZSN	51.99	0
M308-4340	MGM-192	6	神奈川島根島群	KZOB	FZOB	6.15	1	KZSN	75.87	0
M308-4341	NDM-200	300	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	9.02	1	SBY	33.48	0
M308-4342	NDM-201	269	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	5.22	1	SBY	56.02	0
M308-4343	NDM-202	1382	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	13.36	1	KZSN	46.19	0
M308-4344	NDM-203	1407	神奈川島根島群	SWHD	SWHD	16.75	1	SBY	129.64	0
M308-4345	NM-204	1360	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	14.57	1	SBY	132.5	0
M308-4346	NDM-205	1485	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	15.71	1	SBY	186.13	0
M308-4347	NDM-206	2246	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	13.06	1	KZSN	96.88	0
M308-4348	NDM-207	3709	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	15.54	1	KZSN	45.26	0
M308-4349	NDM-208	50	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	12.21	1	KZSN	45.26	0
M308-4350	NDM-209	41	神奈川島根島群	AGKT	AGKT	0.08	1	HNKT	102.74	0
M308-4351	NDM-210	417	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	4.94	1	KZSN	55.37	0
M308-4352	NDM-211	570	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	3.51	1	FZSN	77.40	0
M308-4353	NDM-212	701	神奈川島根島群	SWHD	SWHD	5.36	1	SBY	101.03	0
M308-4354	NDM-213	940	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	3.54	1	KZSN	40.32	0
M308-4355	NDM-214	1365	天祥島根島群	AGKT	AGKT	0.56	1	HNKT	147.09	0
M308-4356	NDM-215	1380	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	7.89	1	KZSN	65.61	0
M308-4357	NDM-216	1481	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	10.8	1	KZSN	32.92	0
M308-4358	NDM-217	1385	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	3.27	1	SBY	86.02	0
M308-4359	NDM-218	2098	神奈川島根島群	SWHD	SWHD	9.56	1	SBY	75.7	0
M308-4360	NDM-219	2255	神奈川島根島群	KZOB	FZOB	6.24	1	KZSN	95.09	0
M308-4361	NDM-220	2448	和歌山内海	WDTY	WDTY	4.91	0.9999	WDTG	20.33	0.0001
M308-4362	NDM-221	2183	天祥島根島群	AGKT	AGKT	3.28	1	HNKT	102.58	0
M308-4363	NDM-222	2613	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	15.18	1	SBY	87.37	0
M308-4364	NDM-223	2014	神奈川島根島群	KZOB	FZOB	4.33	1	KZSN	45.04	0
M308-4365	NDM-224	2091	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	12.04	1	KZSN	48.08	0
M308-4366	NDM-225	2724	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	18.85	0.9999	FZSN	54.28	0.0001
M308-4367	NDM-226	2724	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	15.54	1	SBY	106.27	0
M308-4368	NDM-227	2384	天祥島根島群	AGKT	AGKT	8.82	1	FZSN	156.37	0
M308-4369	NDM-228	2561	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	8.36	1	KZSN	32.94	0
M308-4370	NDM-229	3100	神奈川島根島群	FZOB	KZOB	9.8	1	HNKT	95.12	0
M308-4371	NDM-230	2259	天祥島根島群	AGKT	AGKT	2.26	1	HNKT	154.02	0
M308-4372	NDM-231	3020	天祥島根島群	AGKT	AGKT	5.47	1	HNKT	88.16	0
M308-4373	NDM-232	3603	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	1.26	1	KZSN	36.37	0
M308-4374	NDM-233	2467	神奈川島根島群	FZOB	KZOB	9.77	1	KZSN	36.08	0
M308-4375	NDM-234	2465	和歌山内海	WDTY	WDTY	19.08	1	WDTG	104.00	0
M308-4376	NDM-235	1366	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	3.95	1	SBY	104.00	0
M308-4377	NDM-236	1065	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	10.95	0.9999	KZSN	24.82	0.0001
M308-4378	NDM-237	1600	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	7.22	1	KZSN	45.5	0
M308-4379	NDM-238	2403	神奈川島根島群	KZOB	FZOB	12.02	0.9999	KZSN	39.23	0.0001
M308-4380	NDM-239	2201	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	17.44	1	SBY	111.35	0
M308-4381	NDM-240	2251	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	11.58	1	SBY	75.56	0
M308-4382	NDM-241	2295	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	5.21	1	KZSN	23.6	0
M308-4383	NDM-242	2264	神奈川島根島群	KZOB	FZOB	4.04	1	KZSN	47.72	0
M308-4384	NDM-243	2267	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	13.34	1	HNKT	152.19	0
M308-4385	NDM-244	2751	神奈川島根島群	FZOB	KZOB	11.82	0.9999	KZSN	22.13	0.0001
M308-4386	NDM-245	2751	神奈川島根島群	KZOB	SWHD	2.46	1	SBY	86.06	0
M308-4387	NDM-246	2753	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	1.67	1	SBY	95.78	0

研究年度 研究種別	分科番号	送付 番号	採集地	採集国 種別	寄附品名					
					第1種品名			第2種品名		
					種類	担数	内容	担数	内容	単位
M308-4388	NDM-247	3754	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	5.63	1	KZSN	46.09	0
M308-4389	NDM-248	3765	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	2.14	1	KZSN	65.11	0
M308-4390	NDM-249	2758	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	0.31	1	KZSN	47.15	0
M308-4391	NDM-250	1846	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	14.64	1	KZSN	50.43	0
M308-4392	NDM-251	1297	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	15.97	0.9999	KZSN	17.94	0.0001
M308-4393	NDM-252	2782	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	3.15	1	KZSN	36.72	0
M308-4394	NDM-253	2601	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	4.03	1	KZSN	36.72	0
M308-4395	NDM-254	2602	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	6.22	1	SBY	106.32	0
M308-4396	NDM-255	2603	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	15.46	1	KZSN	35.75	0
M308-4397	NDM-256	2604	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	14.04	1	KZSN	40.79	0
M308-4398	NDM-257	2605	天祥島根島群	AGKT	AGKT	1.87	1	HNKT	131.13	0
M308-4399	NDM-258	2606	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	1.03	1	SBY	81.93	0
M308-4400	NDM-259	2607	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	5.07	1	SBY	49.88	0
M308-4401	NDM-260	5006	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	16.06	1	WDTG	119.97	0
M308-4402	NDM-261	1349	神奈川島根島群	FZOB	KZOB	17.91	1	FZSN	77.64	0
M308-4403	NDM-262	3759	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	13.2	1	KZSN	134.40	0
M308-4404	NDM-263	2060	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	6.28	1	KZSN	44.07	0
M308-4405	NDM-264	87	鹿児島	FZOB	FZOB	5.02	1	KZSN	44.07	0
M308-4406	NDM-265	207	鹿児島	SWHD	SWHD	1.58	1	SBY	81.47	0
M308-4407	NDM-266	228	鹿児島	HNKT	HNKT	3.35	1	HNKT	79.79	0
M308-4408	NDM-267	435	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	7.92	1	KZSN	27.87	0
M308-4409	NDM-268	489	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	7.42	1	WDTG	116	0
M308-4410	NDM-269	577	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	24.43	1	SBY	53.96	0
M308-4411	NDM-270	583	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	6.70	1	FZSN	66.46	0
M308-4412	NDM-271	635	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	7.2	1	SBY	37.62	0
M308-4413	NDM-272	718	天祥島根島群	AGKT	AGKT	1.55	1	HNKT	139.55	0
M308-4414	NDM-273	718	神奈川島根島群	FZOB	KZOB	7.19	1	KZSN	75.41	0
M308-4415	NDM-274	719	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	1.59	1	KZSN	36.80	0
M308-4416	NDM-275	720	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	5.28	1	SBY	34.57	0
M308-4417	NDM-276	721	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	13.02	1	SBY	153.48	0
M308-4418	NDM-277	773	天祥島根島群	AGKT	AGKT	5.83	1	HNKT	102.5	0
M308-4419	NDM-278	785	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	14.1	1	SBY	132.14	0
M308-4420	NDM-279	807	神奈川島根島群	FZOB	KZOB	6.50	1	KZSN	42.01	0
M308-4421	NDM-280	865	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	8.49	1	SBY	114.71	0
M308-4422	NDM-281	851	神奈川島根島群	FZOB	KZOB	16.46	1	FZSN	46.99	0
M308-4423	NDM-282	960	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	15.15	1	SBY	61.37	0
M308-4424	NDM-283	968	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	15.46	1	SBY	106.54	0
M308-4425	NDM-284	1056	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	25.35	1	SBY	114.07	0
M308-4426	NDM-285	1327	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	21.05	1	SBY	87.25	0
M308-4427	NDM-286	1363	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	9.5	1	SBY	38.03	0
M308-4428	NDM-287	1534	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	13.14	1	WDTG	102.09	0
M308-4429	NDM-288	1539	天祥島根島群	AGKT	AGKT	4.94	1	HNKT	125.96	0
M308-4430	NDM-289	1581	天祥島根島群	SWHD	SWHD	2.39	1	SBY	65.78	0
M308-4431	NDM-290	1582	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	10.53	1	SBY	90.55	0
M308-4432	NDM-291	1594	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	8.01	1	SBY	106.25	0
M308-4433	NDM-292	1646	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	17.73	1	SBY	109	0
M308-4434	NDM-293	1547	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	11.82	1	SBY	44.36	0
M308-4435	NDM-294	1661	諏訪湖の沖	SWHD	SWHD	6.23	1	SBY	101.87	0
M308-4436	NDM-295	1652	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	10.9	0.9999	FZSN	27.90	0.0001
M308-4437	NDM-296	1653	神奈川島根島群	KZOB	KZOB	1.90	1	FZSN	56.63	0

研究年 研究号	分析号	观测 点号	测定地点	观测 时区	观测分析						
					第1观测站			第2观测站			
					观测 时间	磁差	磁偏角	观测 时间	磁差	磁偏角	
M208-4728	NDM-297	1655	测定不可	测定不可	测定不可						
M208-4730	NDM-298	1656	丹那摩拉吉	HNHJ	HNHJ	8.75	1	HNHJ	101.04	0	
M208-4740	NDM-299	1656	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	7.84	1	SBY	116.45	0	
M208-4741	NDM-300	1721	野那巴 + 内海	SWND	SWHD	15.3	1	SBY	46.94	0	
M208-4742	NDM-301	1752	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	14.2	1	SBY	84.94	0	
M208-4746	NDM-302	1754	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	31.22	0.9897	KZSN	35.0	0.0026	
M208-4744	NDM-303	1884	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	15.49	1	SBY	103.45	0	
M208-4745	NDM-304	1891	野那巴 + 内海	SWND	SWHD	14.75	1	SBY	75.96	0	
M208-4746	NDM-305	1884	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	6.74	1	SBY	106.55	0	
M208-4747	NDM-306	1900	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	7.84	1	SBY	94.58	0	
M208-4748	NDM-307	1900	野那巴 + 内海	SWND	SWHD	9.02	1	SBY	90.83	0	
M208-4749	NDM-308	1909	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	32.82	1	SBY	89.07	0	
M208-4750	NDM-309	1937	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	11.11	1	KZSN	43.72	0	
M208-4751	NDM-310	1943	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	6.86	1	KZSN	27.52	0	
M208-4752	NDM-311	1945	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	16.36	1	SBY	38.54	0	
M208-4753	NDM-312	1954	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	6.86	1	KZSN	33.31	0	
M208-4754	NDM-313	1965	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	1.87	1	KZSN	44.03	0	
M208-4755	NDM-314	2007	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	17.3	1	SBY	124.6	0	
M208-4756	NDM-315	2033	测定不可	测定不可	测定不可						
M208-4757	NDM-316	2033	野那巴 + 内海	SWND	SWHD	8.6	1	SBY	66.29	0	
M208-4758	NDM-317	2040	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	13.74	1	KZSN	41.94	0	
M208-4759	NDM-318	2108	野那巴 + 内海	SWND	SWHD	12.25	1	SBY	111.59	0	
M208-4760	NDM-319	2202	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	17.16	1	SBY	131.61	0	
M208-4761	NDM-320	2238	野那巴 + 内海	SWND	SWHD	10.96	1	SBY	105.29	0	
M208-4762	NDM-321	2242	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	2.22	1	SBY	91.64	0	
M208-4763	NDM-322	2293	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	3.17	1	KZSN	50.74	0	
M208-4764	NDM-323	2284	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	10.33	1	KZSN	75.98	0	
M208-4765	NDM-324	2277	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	16.05	1	KZSN	37.49	0	
M208-4766	NDM-325	2259	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	20.09	1	KZSN	72	0	
M208-4767	NDM-326	2300	野那巴 + 内海	SWND	SWHD	1.54	1	KZSN	49.03	0	
M208-4768	NDM-327	2302	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	5.19	1	SBY	75.25	0	
M208-4769	NDM-328	2371	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	6.82	3	KZSN	29.39	0	
M208-4770	NDM-329	2450	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	9.86	1	SBY	101.97	0	
M208-4771	NDM-330	2453	野那巴 + 内海	SWND	SWHD	13.72	1	SBY	67.41	0	
M208-4772	NDM-331	2454	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	3.97	1	SBY	77.16	0	
M208-4773	NDM-332	2459	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	15.08	1	KZSN	105.07	0	
M208-4774	NDM-333	2461	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	11.65	1	KZSN	29.69	0	
M208-4775	NDM-334	2504	野那巴 + 内海	SWND	SWHD	3.51	1	WDTN	87.95	0	
M208-4776	NDM-335	2600	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	6.84	1	SBY	63.3	0	
M208-4777	NDM-336	2603	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	7.53	1	KZSN	32.66	0	
M208-4778	NDM-337	2604	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	0.16	1	SBY	77.99	0	
M208-4779	NDM-338	2597	测定不可	测定不可	测定不可						
M208-4780	NDM-339	2600	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	4.11	1	KZSN	54.46	0	
M208-4781	NDM-340	2520	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	11.58	0.8872	KZSN	18.34	0.0128	
M208-4782	NDM-341	2601	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	15.27	1	KZSN	87.73	0	
M208-4783	NDM-342	2624	野那巴 + 内海	SWND	SWHD	7.59	1	SBY	105.27	0	
M208-4784	NDM-343	2630	野那巴 + 内海	SWND	SWHD	2.86	1	SBY	83.4	0	
M208-4785	NDM-344	2632	测定不可	测定不可	测定不可						
M208-4786	NDM-345	2664	野那巴 + 内海	SWND	SWHD	3.07	1	SBY	121.73	0	
M208-4787	NDM-346	2610	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	2.86	1	WDTN	93.62	0	

研究年 研究号	分析号	观测 点号	测定地点	观测 时区	观测分析						
					第1观测站			第2观测站			
					观测 时间	磁差	磁偏角	观测 时间	磁差	磁偏角	
M208-4788	NDM-347	2705	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	7.75	1	KZSN	76.21	0	
M208-4789	NDM-348	2713	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	3.09	1	KZSN	46.31	0	
M208-4790	NDM-349	2725	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	14	1	SBY	104.73	0	
M208-4791	NDM-350	2760	野那巴 + 内海	HNHJ	HNHJ	6.11	1	HNHJ	105.31	0	
M208-4792	NDM-351	2795	加那巴 + 内海	SWND	SWHD	7	1	SBY	95.14	0	
M208-4793	NDM-352	2791	神奈地地蔵堂	AGLT	AGLT	17.05	1	KZSN	113.86	0	
M208-4794	NDM-353	2224	野那巴 + 内海	SWND	SWHD	11.56	1	SBY	116.85	0	
M208-4795	NDM-354	2382	野那巴 + 内海	SWND	SWHD	10.44	1	SBY	68.55	0	
M208-4796	NDM-355	2283	神奈地地蔵堂	HNHJ	HNHJ	8.12	1	HNHJ	136.95	0	
M208-4797	NDM-356	2030	野那巴 + 内海	SWND	SWHD	16.74	1	WDTN	133.92	0	
M208-4798	NDM-357	2503	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	16	1	KZSN	32.39	0	
M208-4799	NDM-358	2904	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	6.29	1	KZSN	20.25	0	
M208-4800	NDM-359	2306	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	3.14	1	KZSN	33.51	0	
M208-4801	NDM-360	2307	神奈地地蔵堂	KZOB	KZOB	14.4	1	KZSN	62.47	0	

写真図版



調査区遠景



TP11南壁の土層



住居跡1・2 出土遺物



第IV文化層 接合した礫

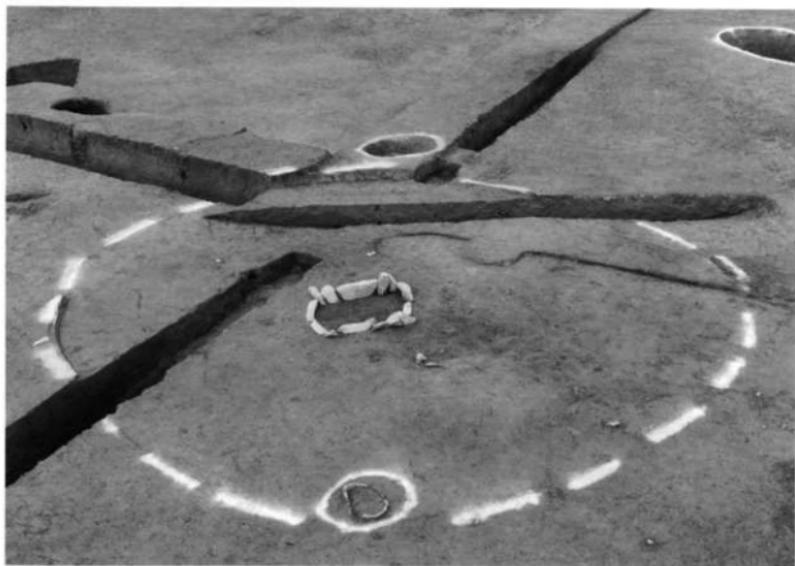


第IV文化層 黄鉄鉢の遺物

図版4 野台南遺跡



住居跡1・2 (左:住居跡2 右:住居跡1)



住居跡1



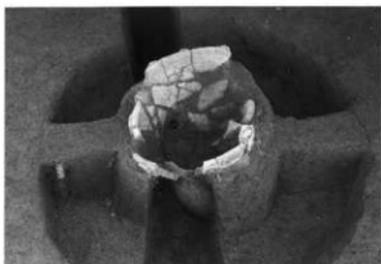
住居跡2



住居跡1 柱穴



住居跡2 柱穴



住居跡1 埋裏出土状況



住居跡2 埋裏出土状況

図版6 野台南遺跡



住居跡1 石囲炉



住居跡2 石囲炉



住居跡1 石囲炉の土層



住居跡2 石囲炉の土層



住居跡1 柱穴と土器



住居跡2 柱穴と土器・礫



住居跡1 土器出土状況



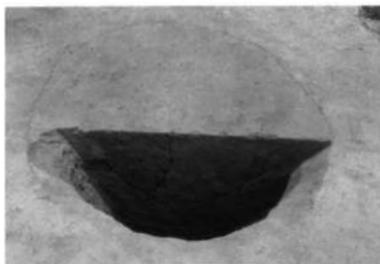
土坑4



土坑6・7



土坑8



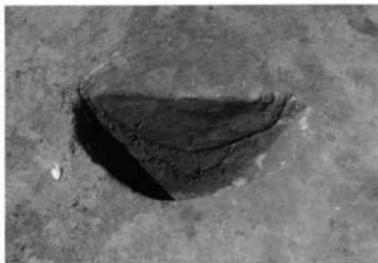
土坑9



土坑10



土坑11



ピット1

図版8 野台南遺跡



ピット3



集石1



集石2



集石3



集石4



集石5



集石6



集石7



集石8



集石9



石皿出土状況



第V文化層 深群8

図版10 野台南遺跡



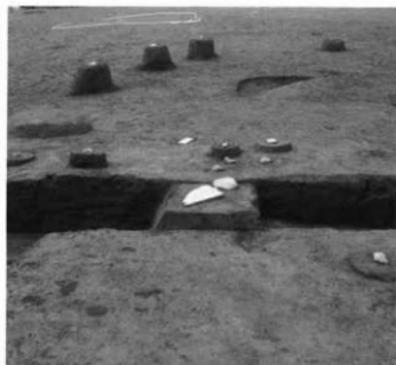
第V文化層 磔群9



第V文化層 磔群10



第V文化層 磔群11



第V文化層 磔群12



第IV文化層 磔群5・6



第IV文化層 磔群5(1)



第IV文化層 礫群5(2)



第IV文化層 礫群5(3)



第III文化層 礫群3・ブロック9・10・11



第III文化層 礫群3・ブロック11



第III文化層 ブロック9・10

図版12 野台南遺跡



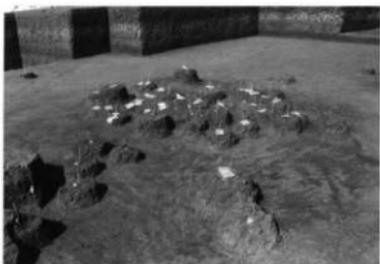
第II文化層 礫群1・2・ブロック8



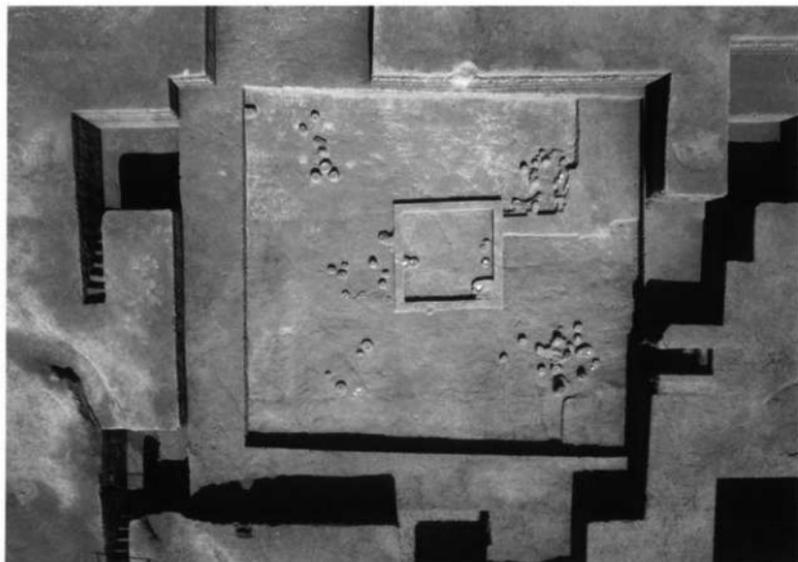
第II文化層 礫群1



第II文化層 礫群2



第II文化層 ブロック8



第I文化層 全景



第1文化層 ブロック1・3



第1文化層 ブロック2



第1文化層 ブロック3



第1文化層 ブロック4



第1文化層 ブロック5



第1文化層 ブロック4と配石



第1文化層 剥片石器



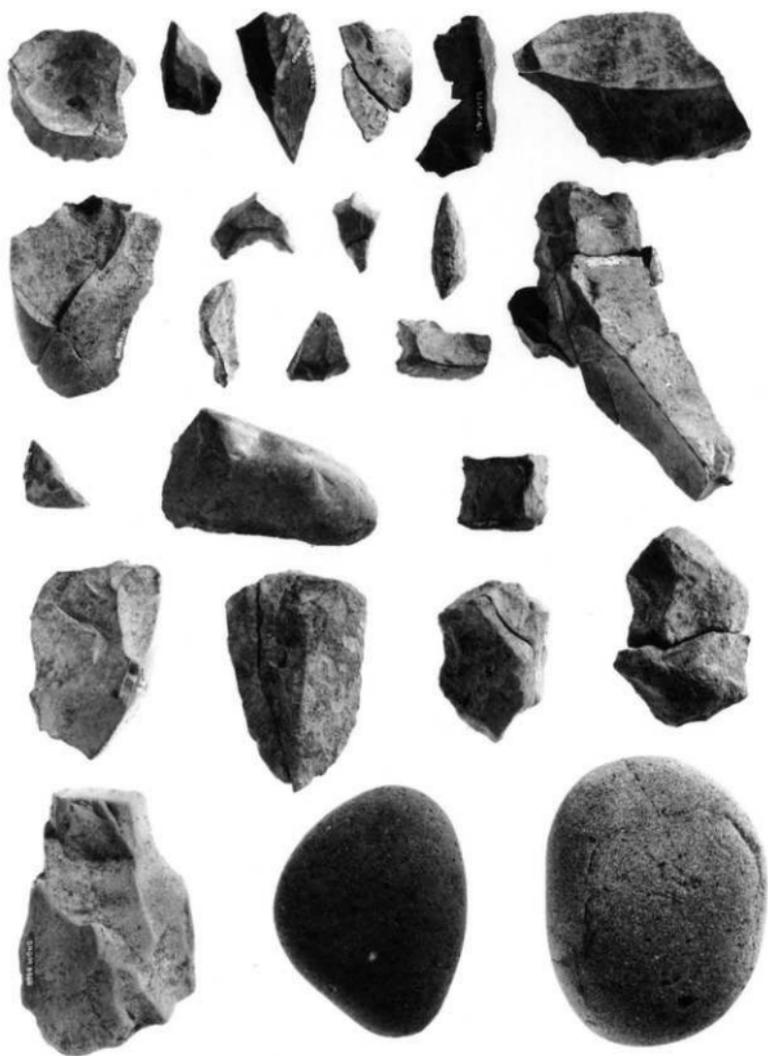
第1文化層 輝石安山岩の接合資料



第Ⅰ文化層 敲石



第Ⅱ文化層 石器



第Ⅲ文化層 石器



第IV文化層 石器



第IV・V文化層 敲石



第V文化層 石器



住居跡1 埋甕



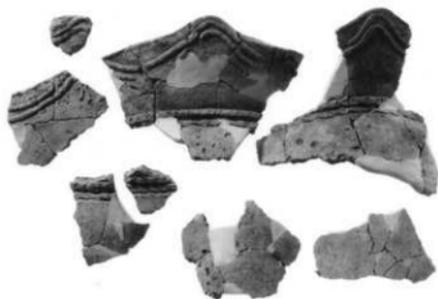
住居跡2 埋甕



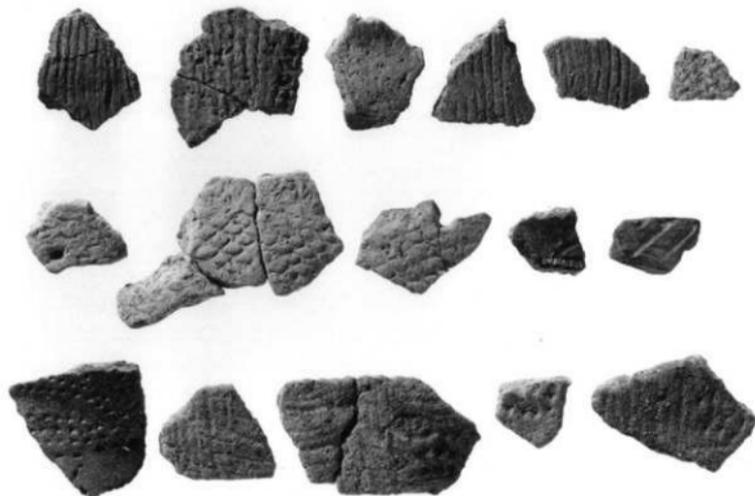
住居跡1・2 土器



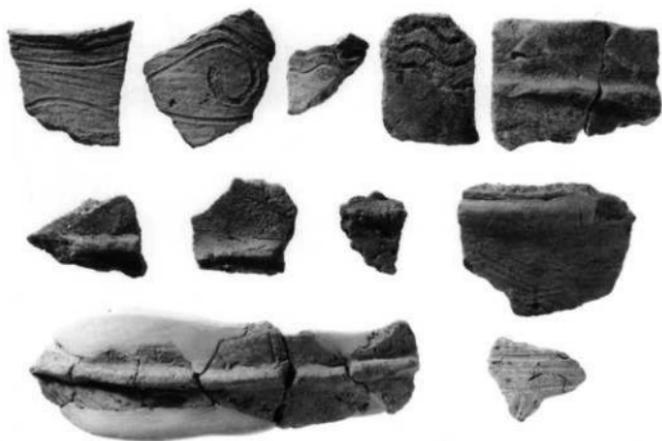
住居跡1 土器(1)



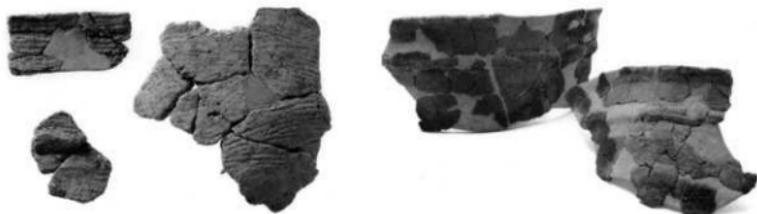
住居跡1 土器(2)



1・2・3・4類土器



5類土器(1)

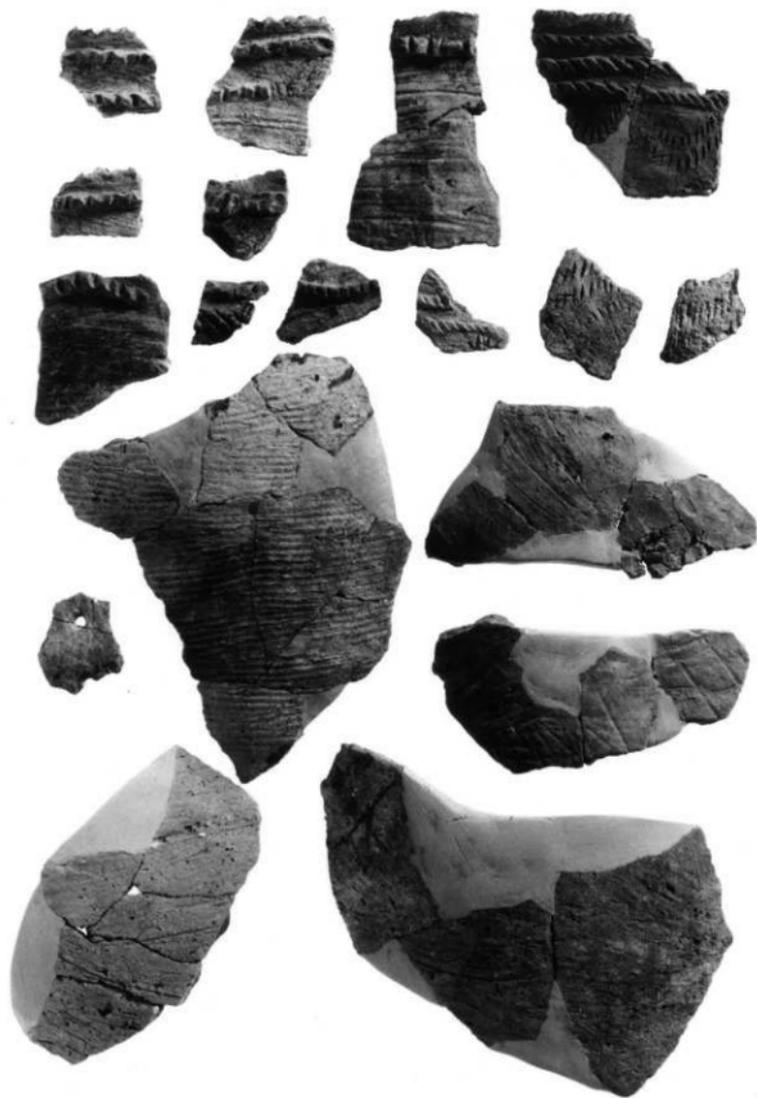


5類土器(2)

5類土器(3)



6類土器



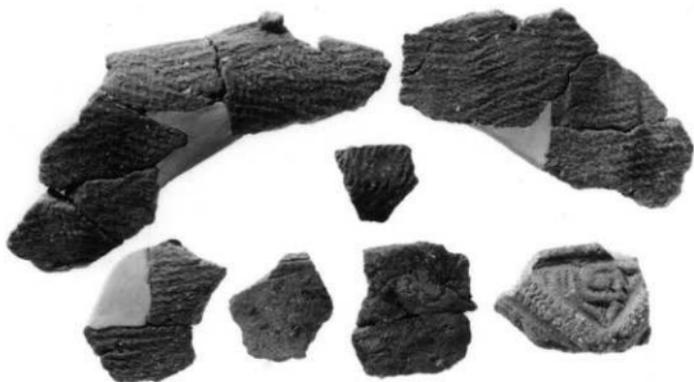
7類土器



8類土器



9類土器



10・11類土器



12類土器(1)

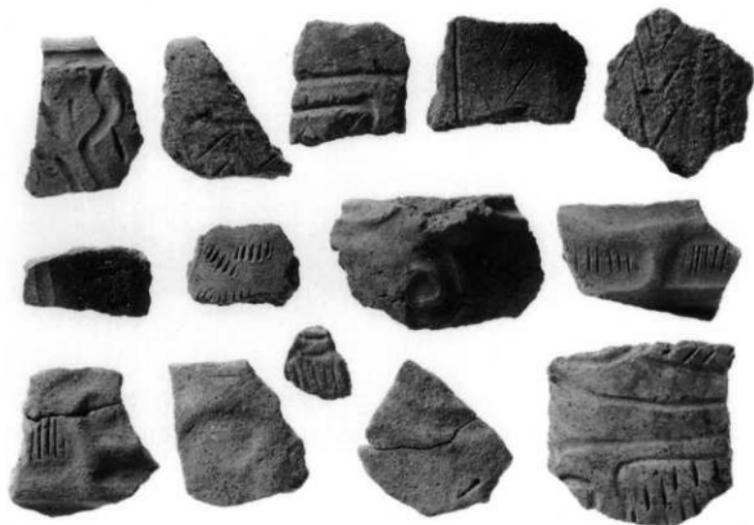
12類土器(2)



12類土器(3)



12類土器(4)



14類土器



13類土器(1)



15類土器



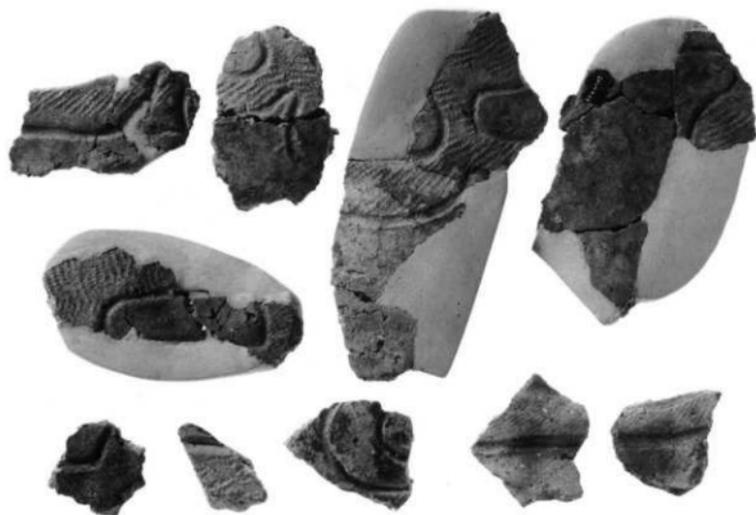
13類土器(2)



16類土器



16・17類土器



18類土器



19類土器



20類土器



縄文時代 石器(1)





縄文時代 石器(3)



縄文時代 礫器

縄文時代 石皿(1)



縄文時代 石皿(2)



調査区全景



土坑1～6

圖版34 柏窟A遺跡



土坑2



土坑5



土坑6



土坑7~9



土坑7



土坑8



土坑9



土坑14



土坑10~13



土坑11~13

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第205集

大岡元長窪線関連遺跡Ⅲ

平成18～20年度（主）大岡元長窪線新東名アクセス道路
整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成21年6月30日

編集発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261(内)

印刷所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL 055-921-1839(内)

